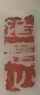




新井石禪全集


LIBRARY
JAN 4 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

29



心は大山の如く八風を受けて動せず
量は大海の如く衆流を容れて厭はず
人生を夢と観ずれば悲しみもなく苦しみも
なし萬事を空と悟りては花もあれ實も何ぞ

大正庚申秋

最乗石禅叟





佛教講演篇

目次

佛教講演篇

佛教講演篇

思想問題と佛教

一

今を去る十七八年以前、即ち明治四十年頃と記憶致します。青森市に參りました際、偶然にも高崎正風男にお目にかゝりました。當時、男爵からお話を承り、非常に感激したのでありますが、その大要は、斯うであります。

日露戰爭以後、一般の人心が何となく殺伐になつて、日々の新聞紙にも殺傷事件といふやうなことがらが頻々として現はれる、男爵は非常にそれを憂へて居られた。或る日のこと、男爵は先帝(明治天皇)陛下の御前に出仕して、和歌のお話などなされてをつたが、ふと陛下の御机の上を拜すると新聞紙が載つて居る。それは陛下が御覽あそばされてゐる新聞紙であつた。男爵は常に憂へてをつたことが自ら胸中に浮んだあまり、陛下に『近頃は新聞を眺めましても憂ふべき、悲しむべき社會の出來事が多く記載されて居り

ます。斯ることがらが御目に留るといふことは實に恐懼に堪へませぬ。恐れながら斯かる社會相を御覽あそばされました際には如何に御感じあそばされまするや』といふことを御尋ね申上げたのである。すると只今まで非常に御機嫌よくお話をなされて居つた陛下には、何等のお答もなく、默々としてしまひなされた。男爵は恐る〳〵頭を擧げて、陛下の御氣色を拜し奉ると、勿體なくも龍顔には、御涙を垂れさせたまひ、稍々あつて、たつた一言『遺憾であるぞ』と斯樣に仰せられたのである。男爵は申上る言葉も無く、唯だ恐懼つて御前を退出したのであつたが、是れではならぬと氣を取直し、當時、創立した一德會の擴張を圖らうとして、暑中、老體を提げ、東北六縣を巡回して、今し青森市に滯留してゐるところであつた。

男爵のお話や其の態度には私も非常に感じたのである。既に十有八年以前に於てすら斯の如くであります。その後、社會の狀態は益々複雜になり、各種の問題が現はれて參りました。その爲めに、國民思想の上に於ても種々の混雜を來すといふことは、免るべからざる結果とは申しながら、國民としては餘程注意しなければならぬ事と思ふのであります。

二

そも〳〵人類の思想は時の流れと共に變遷して休まないものであります。私共一人の上からいつて

も、少年時代には少年の思想があり、壯年期には壯年の思想、老年期には老年に準じた思想があつて、思想の系統には多少の聯絡はあるにしても、形からいふと變遷して止まぬものであります。そればかりでなく私共の思想は環境に從ひ、事情に應じて動き易いのであります。

　ともすればあらぬ方にとふみ迷ひ敎へがたきは人の道なり

先帝の御製を拜しましても、實に油斷の出來ぬのはお互人類の思想である。これを導くにその宜しきを得ざれば、實に國家の盛衰、民族の消長に關するのであります。

德川幕府の治世三百年、その鎖國主義の下に於て日本の國民思想は訓練され、顯はれては忠孝の倫常となり、發しては武士道の精華となり。又、自然に日本全國が一家族の狀態になつてゐたのであります。然るに明治の御代になつて、國家の門戶は開放され、國運は世界的に發展をするといふことになつた。明治天皇の御威德により、家族的に養はれて居つた我が國民の思想は更に國家的に訓練され、今日では世界的に修養すべき時代になつて居るのであります。恰も今まで自分の鄕里にばかり居つた者が、大都會に踏み込んだやうなものである。鄕里に居つた時代には向ふ三軒兩隣、親戚故舊の間に交つてるのであるから、その親みも深いし、情誼も厚いのである。然しながら一たび大都會に出づるに及んでは、動もすれば方向に迷ひ易い。

或る地方から一人の娘が東京へ出て來まして、旅館に泊りました。買物に外へ出ましたが、歸りに自分の

旅館を忘れてはならぬからといふので目標を作つて置いた。さて用事を濟まして歸らうとしたが一向わからぬ。たうとう迷つて交番の厄介になり、辛うじて自分の旅館に歸ることが出來た。何を目標としたかと聞けば、屋根の上に二羽の鳩がおつたので、それを目標にしたといふ。鳩は始終動くものである。動き易いものを目標にして居つてはその針路を誤るのは當然であります。

今日では亞米利加の風も吹いて來れば、露西亞の風も吹いて來る。革命の火も襲うて來ます。世界各國の思潮が流れ込みまする爲めに自ら浮足となり、方針を誤るやうな者も出來るのであります。かゝる場合には何ものか堅實健全なる目標がなければならぬ。先帝に於かせられては、第一に教育に關する勅語を賜り、日露戰爭の後には、かの戊申の詔書を賜りました。然し遺憾ながらその教育の勅語、戊申の詔書といふものが國民に眞に徹底して居らぬ。日蓮聖人は法華經を以て宗旨を立て『古より法華經を口で讀むものは多いけれども心で讀むものは少い、日蓮は心で讀んだ、心で讀むものは多くとも身で讀むものは少い、日蓮は身で讀む』といふことを云はれてゐるが、面白い言葉だと思ふのであります。教育の御勅語、戊申の御詔書を流暢に朗讀し奉ることは出來るけれども、身を以て日々夜々拜讀し奉つてゐるや否や、どうも覺つかないのである。

それで昨年（大正十二年）の十一月には國民精神作興の御詔勅が下されたのであります。教育勅語、戊申の詔書を基礎として、それを更に現代の事情に當てはめ、痛切に御紹述あそばされたのが、この國民精

神作興に關する御大詔であらうと思ひます。我々が常に冀うてをつたところの健全なる目標をお與へ下さつたことになります。

三

今日の思想界の狀態を抽象的に申しますれば、『進むに急にして守ることを忘れてゐる』弊がありはしないかと思ひます。進むことは大事であるが、進むと同時に守ることを忘れてはならない。『之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らず』といふ正道眞理は嚴肅に守らなければならぬ。守るところなくして徒に進まば、終に蹉跌は免れないのである。私どもが道を歩きますにも一方の足が進めば、一方の足は守る、一は進んで一は守るといふ進退の宜しきを得て始めて目的の地に達することが出來るので、左右の足が同時に進んだならば轉んでしまひます。又、同時に守つて居つたならば進むことが出來ません。然るに世の人は、動もすれば進むに急にして守るを忘れる傾向があるのであります。

次には『權利の主張を重んじて義務の遂行を輕んずる』弊があります。權利を主張するといふことは、我々の自覺から起るものでありませう、普選問題の如き、勞働問題の如き、小作問題の如き、やはり一言にして之を云はゞ權利の主張であります。權利は力強く主張されてゐるが、それに伴ふ義務が果されてゐようか。義務といふ觀念はどうも薄いやうである。よしんば義務觀念はあつても、一尺の權利を主張して

僅に一寸二寸の義務を行ふといふやうな有り様では、不具の進歩しか見ることが出來ないのであります。

次には『本能の滿足を求めて、献身犧牲の精神を閑却してゐる』やうな傾向があります。献身的犧牲的の精神を失ひ、唯だ本能の滿足を以て是れ足れりとするならば、人類は悉く野生の動物と化するでありませう。

さういふ缺陥の爲めに國民生活の上に於ては浮華放縱の弊を醸し、華美に流れ、虚榮を誇とし、徒らに性慾の滿足を求め、安逸なる生活を貪り、不規則な行動を誤つて自由なりとし、秩序の破壊を以て平等と認めるといふやうな惡風潮が滔々と漲り、また、思想の上に於ては、非常な輕佻詭激を事とする現實主義、刹那主義、享樂主義などゝいふものが唱へられ、動もすれば斯ういふ主義に憧憬する人が多いのであります。で畏れ多くも、今上（大正天皇）陛下に於かせられては特にこの度の詔の上にこの弊風をお擧げあそばされ、

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レドモ浮華放縱ノ習漸ク萠シ輕佻詭激ノ風モ亦生ズ今ニ及ビテ時弊ヲ革メズムバ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル

と仰せられました。實に恐懼に堪へない次第であります。玆に於て私共は國民的大信念を涵養することの愈々急務なるを深く感ずるのであります。

佛教は一面から云ふと道徳中心の宗教であります。佛教が即ち道徳だといふのではありませんが、佛教の中に於て道徳と信仰とは渾然と融和し一致してゐるのであります。それで釋尊は成道の最初に華嚴經をお說きになり、それと殆んど同時に梵網戒經を說かれてゐます。內容は戒律、即ち道徳律であつて、その梵網戒經の初めに『孝順』といふ二字が擧示されてをります。

『父母師僧三寶に孝順すべし、孝順は至道の法なり』

『孝』はやしなふことであり、『順』はしたがふことであります。父母は兩親、師僧は師匠、三寶は佛・法・僧、即ち宗教である。この三者に對して孝順せよ、孝順は至道(無上大道)を行ふ最良の方法であるからである。至れるの道といふことになる。ところが、或る學者は『孝順は至道の法なり』を『至道の法に孝順すべし』と解釋してゐる。これは少し文字の上からいふと無理な解釋でありませうが、意味から云ふと面白い。道に孝行して行けといふ、斯ういふ佛教の說を綜合して、佛教の孝道を說きます、私は七親七孝といふ事を立てゝ說明をして見たいと思ふ。即ち七つの親があつて、七種の道徳を守らなければならないのであります。

第一の親は形體の親、即ちからだの親であります。父母は形體の親であつて、先祖代々といふものもこ

の中に含有されます。これに報いるには『孝』を以てします。

第二は君主であつて、是れは國民の親である。天皇陛下は萬民の親であらせられるから、これに報いるに『忠』を以てします。

第三は師長であつて、是は知識の親である。師長といふのは師匠先輩であつて、私共は師長の力に依り知識の向上が圖られるのであります。

福島大將が印度へ行かれたその土産話に、印度のある動物園に行つて見たら、そこに『狼の子』といふ看板を掛けた建物があつた。覗いてみると、身體一面眞黑な印度人の不人相な男が一人這入つて居る。然るに看板には『狼の子』とあるので、不思議に思つて説明を聽いてみると、今から二十有餘年以前に、一人の印度の婦人が二歳ほどになる自分の子を伴うて山へ木の實を採りに行つた。ところが突然、狼が現れて、その子をくはへて走り去つた。婦人は狂つたやうに其の跡を追つたが、終に行方を見失つた。かくと村民に訴へたので、一同は山深く捜索したけれども終に子供の行方はわからない。婦人は泣く泣くその日を命日として追善を行つて居つた。それから二十有餘年の後に一人の獵師があつて、山深く這入り狼の巣窟を發見した。で、撃ち殺し巣窟の中に入らうとすると、突然奥から飛び出して來たのがこの裸體の男である。獵師は之を生擒にして伴れて來たが、第一、言葉を少しも知らぬ。立つて歩くが、四つ這に歩くことに妙を得てゐる。食物はといふと生肉である。この頃では漸く火を加へた肉を食べるやうにな

つたといふことであつたが、この男はだん〳〵調べてみると、二十何年、前に母の手から狼にさらはれた子供であつた。物好きな狼であつたと見え、子供をさらつて狼の巣へ伴れてゆき狼の敎育をした。言葉も知らず、禮も知らず、食べ物すらも人間の食べるものを食べることが出來ぬ、といふまでに禽獸化してしまつたのである。人にして敎育なければ斯の如しといふ實例を示さうといふ敎訓的意味で、この者を觀せてゐるので、自分も實際非常に感じたと福島大將は言はれて居りました。

一事一藝の敎を受けた師長に對しても相當に感謝の意を持たねばならぬ。師長は知識の親である。然るに最近に於ては師長に對する道德觀念、情誼といふものが頗る衰へて來たやうであります。師長は知識の親であるから、之に報いるには『順』を以てしなければならぬ、順ふといつても謂はれなく服從するといふ意味ではありませぬ。その敎をよく守り、受けた知識を十分に蓄へて知識を開發すること、是れが師に報いるの道であつて、これを『順』といふのであります。

第四は社會であつて、是は生活の親である。ひとり下に在る人が上に向つて恩をうけてゐるばかりでなく、上の人が下に向つて恩を受けてゐる。これを『衆生恩』と說いてゐます。

日本の『おかげさま』といふ語は非常に溫か味のある言葉であつて、時とすると無關係の人にまで『おかげさま』を用ふるのである。『御病氣はどうですか』『おかげさまで助りました』『地震はどうでしたか』『おかげさまで潰れませんでした』といふやうに、やはりこれは衆生恩といふ意味から出た溫かい情愛の發露

であらうと思ひます。

とにかく私共は社會のお蔭を受けてゐるのである。この社會相互の間にある恩惠的關係を認識して行くのが卽ち社會生活の親を認める事なので、これに報いるには『義』を以てします。義務を盡すのであります。

第五は天地であつて、是は萬物の親である。これに報いるには『誠』を以てする、誠を以て天地の親に報いるのであります。支那の學者は『誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり』といつてゐるが、天地はまことの相であるから、私共は誠を以て天地の恩に報いなければならぬ。所謂、天物を暴殄しないことであつて、一草一木の微と雖も綿密に取扱ひ、人生々活の上にそれ等の價値を現はしてゆくこと、是れ天地の恩に報いる所以の道であります。

第六は眞理であつて、是は人道の親である。忠といひ、孝といひ、仁といひ、義といふも、眞理の根本は一である。眞理に對して私どもは忠實でなければならぬ。眞理は人道の親である。故にこれに報いるには『敬』を以てする。如何なる場合に於ても眞理、卽ち道を輕んじてはならぬ。孔子が『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』と云はれたのは、道に對する極度の尊敬を表せられた言葉でありませう。如何なる富貴もその道を以てせざれば居らぬ、その道にあらざる時は萬兩の金を見ること恰も瓦礫土塊の如く棄てゝ顧ない。斯の如く眞理を尊敬する、所謂『道德的信念』があつたならば、必ずや其の人の品性も高尙になり、人格も向上して行くに違ないと思ひます。

第七は佛陀であつて、是は安心の親である。即ち宗教上の親であります。これに報いるには『信』を以てする。即ち大信仰で進まねばなりません。

これが佛教に於ける報恩道德といふもの〻根柢であつて、佛教の報恩道德は決して徒に恩を強ふるものでもなく、又、現在から過去に遡るのみの道德でもないのであります。

五

先づ自己を中心とするのが、すべて人類の通有性であります。然しながら、その自己を中心として他に對する態度如何によつて、君子と小人、即ち人格者と非人格者との相違が生ずるのでありますから、吾々はお互に我儘に流れぬように注意せねばなりません。

明治天皇の御製にも

　われと我が心をり〱かへりみよしらず〱も迷ふことあり

とありますやうに、いかに立派な方でも或る場合に於ては、自ら心が動き易い。それで本當に自分といふものを確りと固めて行くには、第一に動きやすい心を落ちつけて、所謂『克己』の修養をすることが大事なのであります。

鎌倉の圓覺寺の開山に祖元禪師といふ有名な人があります。北條時宗の師匠であつたが、彼の時宗の心

膽を養つたのは全く祖元禪師の力だといふことであります。といふのは、時宗公は幼年の時代から青年期にかけて非常に臆病であつた。『智いよ／＼進み才いよ／＼明かなるも、その怯弱なること處女の如し』時宗自身がさう書いてゐる。『これではどうも天下の政務を執るに不都合である。自ら己を強くして行かなければいかぬ』といふ決心から、一種の自彊術として禪に參ぜられた。その時に時宗公の師として支那から來られたのが祖元禪師であります。

祖元禪師は御承知の如く宋末の人である。元の爲に宋が亡ぼされ、禪師の寺にも元の兵が侵入した。寺中の者はみな逃れ去つたが、禪師は泰然として安坐し、將に兵の爲めに頭を斬られんとするに際して筆を執つて遺偈を書いた。

乾坤無ㇾ地ㇾ卓二孤筇一　喜得人空法亦空
珍重大元三尺劍　電光影裏斬二春風一

お前達は俺を殺す氣か知らんが、俺の生命は決して死なゝいぞ。刀の爲めに、斬られるやうな生命ではない。お前が俺を斬つても、それは春の風を斬るやうなもので、俺の方にはちつとも感じはない――といふのだから面白い。元の兵は驚いて斬るのを止めた。

この祖元禪師が時宗公の招聘に應じて日本へ來たのであります。（日本に歸化し、初め建長寺に入り、後に圓覺寺を建て開山になつた）、時宗公は前のやうな意味で喚んだのだから、最初の面會の時、『人生の憂患

は怯弱を以て最なりとす、什麼か脱すべけん』と、から質問したのである。臆病は、一番人間の苦痛である。御詔書に『國家興隆の本は國民精神の剛健にあり』と仰せられてあるが、その剛健性を缺いてゐるのが怯弱であります。すると祖元の答は『脱すること最も易し、須く怯弱の來所を閉づべし』といふのであつた。奇妙な挨拶です。で、時宗公もちよつと解りかねて『怯弱何れの處より來る』と尋ねかへした。すると祖元は『時宗より來る、來日より須く時宗を抛擲せよ』と言下に答へた。なか〳〵痛快な言葉です。時宗それ自身から臆病といふ奴が來る、明日から時宗を捨てゝしまへ。換言すれば自己を捨てる稽古をしなさいといふ意味であります。

自己を捨てる稽古をすれば信仰の門に入り、禪の門に入る、信禪は一如であつて、禪を離れた佛教なく、信を離れた佛教もない。而してその根本義は己を捨てよといふことであります。ところが私共は動やともすれば自己に使はれる。その結果、守ることを忘れたり、或は義務を忘れ、又は性慾の奴隷となつたりすることが多いのであります。

六

扨て一個人の向上はやがて國家の向上であります。そこで、個人としても、國家としても、お互が養ふべき七つの力があります。これが『人間の七寶』であつて、無形の寶貨であります。

第一には體力、即ち身體の力である。日本國民の體力が世界の各國民に對して見劣りがするといふことは誠に遺憾なことで、特に婦人の方は一層身體を强健にして、第二の國民、即ち兒童を教養するにも常にこのことを念頭に置いていたゞきたいと思ふ。

第二には富力である。御大詔に『入りては恭儉勤敏業に服し産を治め、出でゝは一己の利害に偏せずして力を公益世務に竭し』と仰せられてゐるが、斯の如くにして個人生活の安定を圖ると同時に、國家の富力を增進して行かねばならぬ。然しながら、その間注意すべきは道德的觀念や倫理的訓練であつて、これを缺くならば、この富が復た社會を毒することゝなるのであります。

第三には智力である。御大詔にも『教育の淵源を崇びて智德の竝進を努めよ』と仰せられた通り、私共は飽くまでも智力の開發を圖らなければならぬ。概して日本國民は智力に乏しい、初等教育だけでは不十分だから、成人の後には成人教育を盛にしなければならないのであるが、この成人教育の機關といふものが日本には殆ど有りません。一般に智識程度が低い爲め讀書に由つて知識を求めるといふやうな考も薄いのであります。

第四には德力、即ち道德の力であります。『忠孝義勇の美を揚げ博愛共存の誼を篤くし』と御大詔にもありますが、退いては忠孝義勇の美をあらはし、進んでは博愛共存の誼を篤くして、家庭としても、社會としても、國家としても、はたまた國際間に於ても恥づることなきやう、德の力を養つて行かなければなり

ません。

第五には武力――武力といふ言葉はちと穩かでないかも知れませんが、武力は卽ち勇武の力であります。勇武の力といふのは强健性であつて『浮華放縱を斥けて質實剛健に趨き、輕佻詭激を矯めて醇厚中正に歸し』と仰せられたのが、卽ち眞の武力をつくる所以であります。日本の武は決して血氣の勇ではない、軍人の勅諭を拜しましても『眞の武勇を尙ぶものは溫和を第一となす、諸人の愛敬を得んと心懸けよ』と仰せられて居る。溫和の德を現して愛敬のあるのが眞の武勇である。

坂田の公時といふ人は非常な勇士であつたけれども、大變にやさしかつた。渡邊綱といふ同僚が『貴殿は何によつて武勇を養はれたか』と尋ねたところが『拙者は臆病の稽古より始めました』と答へた。臆病の稽古といふのは戰々兢々として一擧一動に注意を怠らず、細心の注意を拂つて自ら警め自ら愼み、やつとの事で武勇を養つた。これはよい武勇であります。

先年の地震の際などでも想像が想像を生み虛報が虛報をつくつて、國民の一部分では非常な醜體を演じたといふやうなことは、眞の武力がない結果である。又、信仰の上に於ても强健性を帶びないものは迷信に墮ちやすいのであります。私共は、如何なる艱難を凌いでも進んでゆくといふほどの强健性を有つてゆかなければ、世界の舞臺に立つて國民の本當の力を發揮することは出來まいと思ひます。

第六には和力である。御大詔に『人倫を明にして親和を致し公德を守りて秩序を保ち』と仰せられ、

又『實に上下協戮振作更張の時なり』と宣はせられたその和合の力である。僧といふ字は印度の僧伽といふ言葉を支那の文字にうつしたものであるが、その僧伽といふのは和合衆と飜譯するのであつて、和合してゐる人、和合してゐる團體、それが僧であります。この意味からすれば、人間はみな僧伽になつてゆかなければなりません。明治十三四年ごろに神原精二といふ人がありました。佛教演說の行はれた殆んど初期の辯士で、相當の有力者であつた。この人が湯島の麟祥院で『日本全國をして僧侶たらしめんとす』といふ演題の下に說かれたのを聞いて見ると今の和合衆の講釋でした。

今日の時勢であるから、無論競爭は免れないけれどもこれが『君子の爭』であつたならば、競爭が却つて進步の階梯となつてゆくのでありませう。然しながら、爭はんが爲めの爭ひであつたならば、この爭が思想界にどんな影響をもたらすであらうか、要するに忠孝道德を基礎として國民の一致結合をはかてゆくといふことがこの和力の眞意義なのであります。

第七には信力、所謂『信仰の力』であります。今日の人の中には、今の思想を善導するに、宗教や信仰などゝいふそんな微溫的なことでは駄目だといふ人もありませう。けれども、その微溫的のところに力強いところがあるので、老子も『天下の至柔は天下の至堅に馳騁す』と云つてゐます。

老子で思ひ出したが、老子の師匠に常從といふ人がある。或は假說的の人物であるかも知れないが、劉

向の書いた說苑に出てゐる。その常從が死に臨んで枕頭の老子を顧み、大きく口を開いて『舌があるか』と問ねられた。『ハイ御座います』、『齒はあるか』、『イエ御座いません』、『これが俺の末期の敎だ、齒といふものは堅きが故に早く缺ける、舌は柔かきが故に永く保つ、人生の秘訣此に在り』といつて死んだといふ話であります。

舌は齒と違つて柔かい。柔かであるからその度量は寬大である。甘い物でも辛い物でも受付ける。朝から晩までどの位來賓に接するかわからないが、どんなものが來ても嫌な顏をしない。尤も、たまには嫌な顏をすることもありませう。下戶の舌に酒でも入つて來たらチツとは嫌な顏もするであらうが、大概は忍耐します。又、どんな物が入つて來ても輕蔑しない、みな自分の頭に戴く、舌は非常に謙讓の德に富んで居ります。いろ〳〵差別した種類のものを同一に待遇し、悉く和合さしてしまふ。砂糖もからしも一緒である。かく根本的に調和させるばかりでなく、決してそれを自分のものとしない。どんな結構なものでも奥へ送つてしまふ。かく舌は慈悲の德、寬容の德、調和の德を持つて居りながら、自身は極めて柔かである。柔かであつてこそ出來るのであります。柔かであるが一面からいふと非常に强い。澤山な御飯の中に砂利の一つも這入つてゐると徐ろに搜索して、勢よく放擲してしまふ。その勢たるや當るべからずである。微温的のものにして最も强健なるものは實にこの舌である。決して自ら貯へず、親の爲め、君の爲め、社會の爲め、人道の爲めに全力を盡す、是れ立派な報恩行であります。私共も斯の如き修養が必要

と思ひます。

七

佛教は報恩主義の道德を主張して居ります。然しながらその報恩主義は、決して佛教が强ひたものではない。人爲的の道德にあらずして、人間の自然であります。日本の佛教各宗はみなこの報恩道德を說いてゐるのであつて、眞言宗、天台宗の如きは鎭護國家を以て立教開宗の根本義とし、淨土門にあつては報恩謝德、禪宗に於ては尊王護國、日蓮上人に至つては立正安國主義を採つて居ります。假令宗派は異なると雖も、報恩道德は徹底的に宣傳されて、今日に至つて居るのであります。

次に佛教は慈悲中心で、『佛心とは大慈悲是なり』とあります。大慈悲が佛の心であります。『惻隱の心は仁の端なり』佛の慈悲は銘々が心の中にみな具へてゐるのであつて、慈悲中心が進んで行けば人類愛の最も進步したものとなるのであります。

第三に佛教は信仰爲本である、報恩行・慈悲行・信仰、この三は佛教の三大要義であります。大乘起信論に於て馬鳴菩薩は『根本を信ずる』と云はれてゐるが、永遠の生命を認識するのが信仰の要素であります。人生僅か五十年のその短い生命ではなく、不滅の生命を認めるのである。次は因果の原則、即ち原因結果の大法を信ずるも亦、宗教的信念の上に於て缺くべからざるものである。それからまた佛の救濟力を信ず

ること大慈の懐に抱かれるといふところまで進んでいくことが大事である。かくてこそ、無限の感激性があらはれるのである。無限の悦びに滿たされ眞の宗教的妙味がそこにあらはれるのであります。

八

近來、階級鬪爭といふことが喧しく云はれて居りますが、道德的に之を解決してゆかなければならぬと思ひます。法律も必要であり、政治も必要でありますが、一種の道德味を以て解決をはかつてゆかなければ根本解決は出來まいと思つてゐます。

實に現代は、一面からいふと反省要求の時代であります。政治家は德義の點に於て缺點があり易い。學者には君子儒たらずして小人儒たらんとするといふ傾向がある。また、宗教家にして慈悲の念が缺けるとか、信仰の力が十分でないとかいふ非難もあります、實業家にして『上下交利を征りて國危し』といふやうな虞を懷かせる場合もないではありません。しかし、此等の弊害は皆な一點の利己心から起つて來るものである、私欲のあるうちは何事も決して立派な成績を擧げることはできません。それは利欲のために叡智のはたらきが鈍るからであります。孔子も『棖や慾あり、焉ぞ剛を得ん』と云ひ、利己心があつては眞の強者になれないと說いてゐます。しかし、如何に佛教でも一切の慾を捨てよとは決して言ひません。華嚴經には『善法慾を斷ずるは菩薩の魔事なり』とあります。善法慾といふのは道德的の慾望であつて、道德

的慾望がなかつたならば佛教に入る資格がない。卽ち菩薩の魔事といふのは惡魔の仕事であつて、菩薩の行ではない。『此を以て入道のはじめ慾を以て道本となす』慾が道の本である。眞實に修行が出來上つてその極致に至つたならば、遂にその慾といふ名前も附かぬところまで自分の人格が練れるといふ面白いことにもなるのであります。

私共は人に信仰をすゝめ、修養を勸めはして居りますが、退いて自分の言行を省みるとどうも信仰が未だ堅實でない。修養が未だ不徹底である。

己が身はかへりみずしてともすれば人のうへのみ言ふ世なりけり

明治天皇の御製でありますが尊い極みであります。

世の中をおもふたびにもおもふかな我があやまちのありやなしやと

先帝陛下の御盛德を以てして、『世の中を思召される度毎に、さて自分の身に過はないか自分の精神に缺點がないかと、朕は反省するぞ』と仰せられた。私共は一生涯を通じて必要なのは反省であると思ひます。

今、吾々はお互が十分に反省して、一方に偏しない、中正の主義を採り、文化の完全なる發展を期したいと思つてゐます。一方に偏してはどんなものでも疵が出ます。科學萬能主義でもいかぬ、科學に偏するときは物質の一方に傾き、哲學に偏すると空想に流れ、宗教に偏すると往々人生を輕んずるやうになりま

す。學問と宗教とが各々一方に偏せず相調和してゆくところに、文化の完全なる發達があらうと思ひます。

人生を輕視するは宗教の本旨ではないが、さりとて人生に囚はるれば私共は始終苦痛を感じてゆかなければなりません。人生は何んなものであつても、私共の精神が强健であれば、この人生を精神の力で活かしてゆくことが出來るのであります。『上醫は毒を以て藥となす、下醫は藥を以て毒となす、中醫は藥を以て藥となす』假令、人生に缺點があつても、その缺點のある人生を以て、私共の精神を鍛錬する道場とせば、人生は實に立派な學校である。人生を魔窟となすも將又た學校となすも信念の如何にある。然しながら、その信念と雖も一方に偏したものではいかぬ。伊達政宗は人間の偏執を戒めて『仁に過ぎれば弱くなる、義に過ぎれば堅くなる、禮に過ぎれば諛ひとなる、智に過ぎれば嘘をつく、信に過ぎれば損をする』といつてゐるが、偏すれば仁義禮智信も病の本となるのでありますから、私共は佛教の主義により中正剛健なる思想と信念とを養ひ、それを國民生活に實現すると共に、御大詔を煥發あらせられたる御聖旨を體得して、實際の事實の上に捧讀し奉り、國民としての最大目的を達成致したいと希ふ次第であります。

唯我獨尊の理想

一

釋尊は御誕生の際、一指は天を指し一指は地を指して『天上天下唯我獨尊』と獅子吼せられた。此の一語は實に釋尊の大理想にして、御一代八十年の行持は、悉く此の理想の實現である。吾々も亦た釋尊の大理想を體得して自尊主義を執りたいものである。自尊といふは、傲慢心でも自負心でも己惚でもない。一言にしていへば自己尊重の觀念である。

尤も、人間は如何なる場合にも、謙遜辭讓の徳を閑却してはならぬ。謙遜は禮節の本、風格の源である。東西古今、何人と雖も謙徳を重んぜざる者は無い。我が佛教に於ても、法華經に常不輕菩薩の因緣といふものが說いてある。卽ち菩薩は常に衆生に對して輕慢の心を起すまいとの念願を實行せられたので、常不輕と稱せられた。況や、現時に於ては、人類平等、四海同胞の意義が益々高唱せらるゝに至つたのであるから、社會的にも國際的にも、最も能く謙讓の徳を修めねばならぬ。我國の如き、國民間に於て、今猶ほ階級鬪爭とか差別待遇とかいふ問題のあるのは甚だ愧づべきことである。彼の朝鮮人と內地人との間に於け

る融和の不成績なども、謙徳の缺乏が其の主因をなしてゐるものと思はれる。故に、吾々國民はどこまでも四海同胞の觀念に住し、國民間の協和、内鮮の融合、國際的親善の實を擧ぐべく最善の努力を拂はねばならぬ。

けれども、之と同時に自尊心を發揮して自己を尊重することを忘れてはならぬ。高祖大師は『人身得ること難く佛法値ふこと稀なり、今我等宿善の資くるに依りて既に受け難き人身を受けたるのみに非ず、逢ひ難き佛法に値ひ奉れり、生死の中の善生、最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風にまかすること莫れ』と仰せられ、太祖大師は『人々悉く道器なり』と示された。吾々は萬物の靈長と稱せらるゝ人間の身を受け、殊に萬邦無比の國體を有して神の御國とも稱すべき我が日本國に生を受け、而も開國以來最も文化の發展したる昭和の御代に遇ひ奉り、更に未來永遠の安心立命を獲得する釋尊の御教に歸命することを得たるは、實に無上の幸福、最勝の果報である。吾々の世界は一面から見れば苦痛もあり不自由もあり、不足勝のものであるが、人間は萬物中最尊ともいふべき精神力といふものを有して居る。

此の精神には絶對的自由の天地がある。けれども、人間は決して孤立し得べきものではないから、義務もあり責任もあり、其の人に依りて種々の境遇に身を處するが爲め、如何なる人でも絶對的自由を得ることは出來ぬものである。つまり、此の人生は不自由であるべきはずのものである。が、その不自由を忍び

耐へて、完全に義務を盡し責任を果す處に、人間生活の價値も現はれて來るのである。但だ精神上、殊に道德と信仰との二門だけは、眞に絕對的大自由が與へられて居る。

如何なる薄命な人でも信仰の世界には橫行濶步することが出來る。病中であらうと勞働中であらうと佛を拜し佛の御心に歸依し佛の御慈悲に浴するには、毫末も他に妨ぐる者はない。又、道德の天地も同一であつて、賤が伏屋に陋居して居る人でも、大君のため御國のためにと思ふ忠君愛國の觀念、親・先祖の爲め妻子・眷屬の爲めにと思ふ孝順慈悲の思想に於ては、決して高位上流の人に一步も讓る所が無いのみならず、聖人君子にも恥ぢざる程の道德世界を打開することが出來る。故に吾々は、道德と信仰との上に於てのみ、眞の自由と安心とを得るもので、此の自由と安心とが、彼の不自由、不滿足、其の他人生百般の苦痛をも征伏すべき德能を有してゐるのである。

二

吾々は、其の位地の如何に拘はらず、道德と信仰との上に於て自由たるべき特權を有して居る。是れ實に他の動物には見ることの出來ぬ、人類特有の至寶である。よく〳〵此の意を諒解して、自分自身を尊重し、苟も自己を汚したり傷けたり、また、亂用したり惡用したりしてはならぬ。

昭憲皇太后の御詠に

もつ人のこゝろによりて寶ともあだともなるは黃金なりけり

といふ尊い御歌がある。黃金は世の寶であるから、どこまでも寶たるべき價値を損ぜぬやうにせねばならぬ。『小人罪なし、玉を抱て罪あり』といふが如く、黃金の爲めに不正不義の行爲を敢てするやうのことがあつては、是れ黃金に對する大なる冒瀆である。吾々は黃金も遠く及ばぬ尊貴なる人身なることを認得して、此の身を尊重せねばならぬ。

父子も、夫婦も、一體同心といふべき關係があるから、家庭といふは自己の延長である。その家庭の延長が更に社會ともなり、國家ともなるのであるから、自尊心ある者は先づ家庭尊重の觀念が無ければならず、また、國家尊重の觀念が無ければならぬ。此の觀念だにあらば、自身の名譽を傷けたり自身の信用を失墜するやうなことは致されぬ。又、己れの家庭の實力を消耗したり其の家名を穢したり其の幸福を破壞する樣なことは出來ぬ。同時に、又、大切なる己れの國家の品位を傷けたり發展を妨げたり權威を失うたりする樣なことも出來ぬことになる。而して、自ら常に此の身をして人類として恥ぢざる功績を擧げたきもの、我が家庭をして道德的に一鄕の模範とも致したきもの、我が國家をして世界文明國中の儀表とも爲したきものとの覺悟を有せねばならぬと思ふ。

彼の米國人の如きは、常に、所謂『世界第一主義』を以て標語として居る。縱ひ小都會でも小規模の事業でも、必ず世界的に特色ある長處を發揮したいといふ考を有して居る。橋梁を架設するにも圖書館を建

造するにも、大都會にも無いやうな特長を示すべく努力して居る。米國は此の自尊心あるが爲めに、國力も文化も益々發展すると聞て居る。自尊心の無い人は、創造能力を發揚することが出來ず、卑屈となり柔弱となり退嬰主義となりて、自分自身が内部の醜態を外に揚ぐるやうなことになる。

『六阿彌陀嫁の噂の棄てどころ』といふ川柳がある。東京には六箇處ほど阿彌陀如來を安置した佛堂があつて、之を六阿彌陀と稱し、春秋の彼岸などにはお婆さんたちが盛に參詣する。如何なる信仰を捧ぐるかは知らぬが、いつの間にか嫁の噂で堂内を賑はす。それも好い噂なれば格別、多くの場合、嫁に對する不滿や不平を訴へるので、結局は自ら辱かしむるに過ぎぬ。家名を穢したり、鄕土を辱しめたり、國家の面目を傷くる樣なことをするのは、此の六阿彌陀の連中よりも一層罪が深いことゝなる。

殊に、世に最も尊きものは道である。敎育勅語には、忠孝義勇の職分を御示し下されて『斯の道は皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の倶に遵守すべき所』乃至『朕爾臣民と與に拳々服膺して咸其の德を一にせんことを庶幾ふ』と御敎へ給はれた。斯の道は神聖にして犯し難きものであるから、釋尊でも孔子でも各宗の祖師がたでも皆な一身を道に供せられた。忠臣が節に死するも、孝子が身を盡すも、貞婦が操を守るも、皆な斯道に對する自尊心である。して見れば自尊心の健全なる人こそ、純眞にして且つ博大なる利他的大慈悲心を發して實行せらるゝのである。

三

伊藤長堅氏は仁齋先生の第五子で、博學能文にして擧止端重であつた。紀州侯に仕へたが、始めて君侯の前に講座を開いた時、書に對してはゐたが講を開かず、ために滿座の人手に汗して、此の人寒素に生長して大名に接するに慣れず、氣おくれしたのではないかと思ひ、或者をして之を促したが先生は一向知らぬ顔である。やがて徐ろに口を開き『君侯、褥の上に在り、聖人の書を講ずべからず』と、座褥の上に居るは道を敬ふ所以ではない。で、聖典を講じませぬと言うたので、さすがに君侯も褥を去られた。そして、いよ〳〵聖經を講ずる段となると、音吐朗暢、辯論明快で、聽く者皆な歎稱したとある。

太宰春臺氏も嚴毅端方の儒者であつた。巖村侯の世子に請ぜられて行きし時、世子は送迎せられなんだ。氏、艴然として曰く『私は至りて賤きもの、されど説く所は聖人の道である、苟も道を奉ずる者ならば王侯と雖も禮すべきである、今、世子禮せず、故に私は見ることを欲しませぬ』というた。此の頃、巖村侯は閣老であつた。で、臣子の者どもは、此を傲岸不遜なりとして斥けんとせしが、世子は却て『寡人過てり』というて禮を厚うして之に事へられた。春臺は笛を吹くことが妙處に達して居た。東叡山法親王、音律を好まれ、使をしてお召しになつた。氏は之を辭して『私は儒生であります、若し儒を以て召さるれば直ちに趨りて拜謁仕るべし、其の私嗜する所の末技を以てお召しにならうとは情けなく存

じます』と申上げ、是より終身、復た笛を吹かなんだとある。

信州松本曹洞宗全久院に於て化門を開きたる洞門和尚は近世の大宗匠であつて、奕堂禪師も久しく隨身して鉗鎚を受けられた。全久院は松本藩主戸田侯の菩提所である。爲めに和尚は屢々登城せられた。或時、君侯の前にて法談をしてゐると、侯は偶ま坐睡した。和尚、之を見て大に怒り、見臺を侯に投げ着けられたといふ。

又、濃州臨濟宗伊深の正眼寺に住せし雪潭和尚は、家風最も嶮峻で、熱喝瞋棒、近づくべからず、世に雷鳴雪潭と稱せり。曾て尾州犬山瑞泉寺の請に應じて臨濟錄を提唱す。時に犬山侯も臨席せられ、簾を垂れて坐せられた。和尚座に上り、大喝して『簾裡に在りて法を聽くは禮に非ず、余の講座には粃糠は無い、篩を用ゆるの要なし』というたので、一座色を失うたが、侯は簾を撤し、其の非禮を謝して聽講せられたといふ。

此等も決して傲慢心より出でたるに非ずして、道に對する自尊心の發露である。吾々も、一面には、謙德を存するの必要なるは言ふ迄も無いが、之と同時に自尊心を涵養して、自己尊重の觀念を道德的に實行して、自己の人格を高め、家庭の圓滿を圖り、國家の向上發展に力を致さば、分に應じて釋尊の獅子吼したまひし天上天下唯我獨尊の大理想を實現することを得やうと思ふ。

身體と精神の訓練

一

此の頃、御住宅の方へ御伺ひ致しましたが、今晩は幸に店員の御方々に對して御話が出來ますので、非常に私は喜んで伺つたやうな次第であります。御話の題は『身體と精神の訓練』と云ふのであります。

申す迄もなく、御互に身體を健全にして精神の力を養つて、始めて眞の活動が出來ます。眞の活動に依つて皆さんの將來の運命が立派に開かれますれば、親に滿足せしめ、自分の子弟に滿足を與へ、祖先の心を慰め、進んでは國家の爲め社會の爲め、陛下の御爲となり、大きく云へば國民の義務を盡す事にもなります。今日、諸君の働き振りの如何は非常に大切な問題であります。

先々月、私が東京へ參つて居た際、其の月の十三日に、印度のタゴールと云ふ人の歡迎會が、上野の寛永寺と云ふ寺で開かれました。私も歡迎會の案内を受けて參りました。ちやうど大隈侯爵も御出でになつた。大倉喜八郎と云ふ老人も御見えになつて、タゴール氏の到着せらるゝ前三十分程、椅子を圍

んで種々御話をして居りました。大隈侯爵はさすが非常な元氣で語られた所に據りますと、日本の國は今後二十五年若くは三十年間が一番大切な時期であらう。日本は只今、歐羅巴の大戰爭の影響を受けて居るけれども、全體、日本の國の經濟界と云ふものは稍々順調に向ひかけて居る。此の際に於て、一層、日本國民が自覺して勉强を爲すと云ふ事になつたならば、今後二十五年若くは三十年の間に於て、日本が始めて安心の出來るやうな國となる。而して右二十五年間か三十年間の一番大切な時期に於て、日本國を立派に整理し經營すると云ふのは誰の力でありませうか、先づ現代の青年の力であります。卽ち皆さんのやうな若い方々の、今後二三十年間の御働き振りに依つて、日本國が始めて安心の出來るやうな地盤の固つた國になると云ふ事でありました。また大隈侯爵は却々元氣で、私は百二十五歳まで活きる。今後二十五年經つても未だ百五歳にしかならぬ。三十年經つても百十歳で、まだ若い。人間は死ぬまで若い氣になつて働かねばならぬと、話を自分の方へ引附けて、元氣好く話をせられました。併し之は眞理であらうと思ひます。

今後二三十年間に於て、日本の國家の運命は何うなるであらうか、我國の將來は、一等國になつたからと云つて決して安心は出來ない。一朝頓挫を來すと、二等國にも三等國にも蹴落されて了ふ。とにかく此處二三十年と云ふ處が最も大切な時期であるが、其の大切な時期に一番働きの中心となつて居るのは、卽ち今日働き盛りの若い皆さん方であります。皆さん方は、つまり大日本帝國に對し、貴とい責任を荷つて

居る地位に立つて居られます。其の責任の重い事は、日本開闢以來未だ曾て無いと云つて宜からうと思ひます。一面から考へると非常な最大な名譽で、殆ど得難い千載一遇であります。そこで、皆さんの活動の基礎となるのは肉體と精神であるから、身體と精神とを鍛へて往かなければなりませぬ。

併し、大體から見て日本國民の身體が幾分弱くなつて來て居る。壽命の上から見ても、明治二十七八年には三十二三年の平均年齡であつた處が、今日に至つて平均年齡が三十年になりました。種々原因がありませうけれども、とにかく平均年齡は下落して居ります。また、徵兵檢査の結果から見ても、何うも體育が不充分である。日本を立派な國にして往かうとするには、第一御互に身體を鍛へなければならぬ。幸に、衞生思想が進んで參り、或は學校に於ては種々身體の發育に就て注意せられ、或は運動をさせ、或は食物の上に於ても攝生法を執り、空氣の流通を良くし、清潔法を講ずる等、總ての上に注意が屆いて居ります。併し、精神修養法に至つては割合に開けて居りませぬ。

私は杉田玄伯の養生訓を讀みました。杉田玄伯は越後國糸魚川から出た、徳川時代第一流の醫者でありまして、糸魚川の名物の一に算へられて居ります。其處の名物は、豆腐、玄伯、稚兒の舞であつた、豆腐と稚兒の舞とは今もあるが、玄伯は只今死んで了つた。がこの御醫者さんの養生訓は殘つてゐる。この本には、十の中八まで精神上の養生訓が說いてあります。精神の修養法は非常に大切であると私は思ひます。大隈侯は百二十五歲まで活きると云つて、長生する口傳五ヶ條の秘訣を常に說いて居られる。曩の玄

伯先生の養生訓に能く適うて居ります。吾々が實行すべき標準として恥かしからぬ、大隈侯の御考へであらうと思ひます。皆さん御承知であらうと存じますけれども、其の五ヶ條を簡單に申上げます。

第一の箇條は『怒るな』と云ふ事で、些々たる事に腹を立てると云ふと、精神を濫りに使ふやうな形になるから、何うしても自分の精神が健全でない。從つて身體の上にも種々影響を生じて來るに相違ない。忍耐力を養はなければなりませぬ。忍耐力は所謂精神の力である。

第二の箇條は『愚痴を云ふな』と云ふ事で、くだらない事を愚痴と云つて居る。精神が快ければ身體に影響して身體が自然に快くなる、それで健全なる精神を養つて往かなければならぬ。

第三の箇條は『過去を忘れよ』と云ふので、過ぎ去つた事を何時までもよく〳〵思つて居らず、失念する、物忘れをせよと云ふ口傳である。人間といふものは、覺えた事を長く記憶すると云ふ力と、それを忘れる力と、二つを持て居らなければならぬ。お互の腹の中に入れるものは大抵極つて居る。種々なものを入れると腹の中が無茶苦茶になつて了ひますから、餘計なものを忘れて了ふと云う工風をする。處が、それと反對に、動もすれば肝腎な事を忘れて、餘計な事だけ覺えて居たりする事がある。それでは可かぬ。一種の淘汰をして、つまらぬやうな事を忘れて了つて、肝腎な事だけ記憶せよと云ふのであります。

第四は『將來に望みを置け』と云ふ事で、人には理想と云ふやうな事や目的と云ふやうな事が無ければ何事も出來ませぬ。

例へば、御若い御婦人方でもさうであります。御當家に御奉公をせられてゐる方は、立派な婦人となつて世に立ち、美い着物を着たいと云ふのではない、御金を澤山持つと云ふ事のみが立派な婦人ではありませぬ。何處へ出ても、如何に交際社會に立つても、横から見ても竪から見ても、人間として立派なものになりたいと云ふ事を、御若い方は常に心に忘れぬやうにして頂きたい。如何に財産は出來ましても其の心が邪慳であつたならば立派な人ではない。美しい着物を着て居つても品行が正しくなければ決して立派な人ではない。何んな立派な御屋敷に住んで居られても、自分の平生の考が誤つて居れば決して立派な人とは云へませぬ。其の人の身分に應じて、或は今日狹い家で貧しい生活をし、細々と煙を立てゝ往かなければならぬ運命の人でありましても、行や心がけは恥しくない立派な人でありたい。何うか、今晩はお若い婦人方も入らつしやるが、其の御心掛を常に持つて頂きたい。

俳聖芭蕉翁はさう云ふ人を花と云つて居られます。大和國へ櫻を見に往つた時、途中から京都へ戻つて了はれた。吉野の千本櫻を見ずに、途中から京都へ戻つて了はれたのは何故かと云ふと、途中の竹内村と云ふ處においまさんと云ふ孝行な娘があつて、それに感心して、持つて居つた小遣錢を皆なくれて了つたので、途中から戻つたのであります。『せつかく大和へ往つて、櫻を見ずに歸つては惜しい、殘念であつたでせう』と芭蕉先生に云ふと、先生は『決して殘念ではない、吉野山の櫻の花は見なんだけれども、竹内村のおいまさんと云ふ人間の花を見て來た』と申されました。おいまさんは貧しい家に住んで、加減の惡

い親に向つて、非常に艱難辛苦して孝行をして居ました。身分の上から云つて卑しい身分でありますけれども、心を籠めて孝行をする其の精神を芭蕉先生が認めて『立派である、人の花ぢや、おいまさんと云ふ人間の花を見た』と云はれたのであります。

立派な人にならうと云ふことを目的にして往く事が、『將來に望みを置け』と云ふ事になります。其の目的を分類すれば種々な事になります。祖先傳來の家業を相續して一家の興隆を計るのも一の望みであります。また年寄を持つて居られる人は、何うか一代の間に滿足を與へるほど成功したいと云ふ希望もありませう。希望は種々形が違つて居りましても、要するに立派な人となると云ふに過ぎませぬ。

第五は『人の爲に善を爲せ』と云ふ事で、此方の御店に御勤めになつて御出の方は、誠心誠意、御店の爲に盡すと云ふ事が自分の天職である。店の爲に盡すのは御主人の爲に盡すのではない、己の爲に盡すのである。例へば學校ならば、學校で生徒が何か氣に入らぬ一身の不平があつて、友達を煽動して學校に騷動捫着を惹起さしめ、而して、巧く先生方を苛めて成功の如き考へを持つ者がある。處が、さう云ふ生徒は、他日一家の主人となつた時分に、自分の使用して居る者が騷動を起す。是は私の二三十年の經驗上から見る所で、所謂因果の道理であります。人を苛めれば自分も苛められる。結果は報つて來ます。善い事も惡い事も報つて來ます。要するに、お互に誠心誠意、店の爲に盡さうとするのが人の爲に善を爲すのであります。御店に居られる皆さんは兄弟も主從も同樣で、幼けない方を親切に導き、下の方は經驗のあ

る上に立つ方の命令指圖に從ひ、お互に人の爲に親切を盡すのが人の爲に善を爲すのであります。是は精神修養法であります。玩味して下さると却々味ひがあらうと思ひます。

二

此の怒るな、愚痴を云ふな、過去を忘れよ、將來に望みを置け、人の爲に善を爲せ、之が長命の口傳であります。と云ふのは、精神が鞏固になつて往くと自然に、坐つて居つても運動になる。精神が全身に活動して往くから坐つて居つても運動になります。坐禪は第一に呼吸を調へる。只今の深呼吸のやうに氣息を調へる。坐禪を遣ると、身體は脊骨を眞直に、精神を穩かに修め、手は手、足は足、各々其の宜しきに從ひ、姿勢が正しくなつて往く、其の結果、血の循りが能くなり消化の働きが充分になつて、自然、身體全部が健康になつて往く。奇妙である。東京では禪理療法と云つて、實際、精神の働きであらうけれども、坐禪で病氣を癒すと云ふやうな事が實驗せられて居ります。

坐禪は何う云ふ功德があるか。專門の事は別問題であるが、第一、自分の心が丈夫になる。而して、自分の身體の姿勢が正しくなる。姿勢が正しくなると同時に、身體に在る總ての機關が思ふ存分に運轉して往くに依つて、自然、身體が達者になつて來る。併し、精神の方面さへ善ければ肉體は丈夫になるから構はぬと云ふ譯には往きませぬ。出來得るだけ清潔に注意し、飲食物に節制を加へなければなりませぬ。

先づ御若い方の注意すべき事は飲物である。飲物の中には酒と云ふ惡戯者がある。『ときのこゑ』と云ふ雜誌に、地獄行の鐵道の時間表が書いてありました。何う云ふ組立であるかと云ひますと、青年期の朝に發車して、段々惡い方へ惡い方へと汽車が進行し、眞夜中に遂に地獄谷と云ふ所へ到着すると云ふ時間表でありました。其の發車する停車場は何處かと云ふと、卷烟草村からである。十七八歳位の時、卷烟草を一本啣へて見やうかと云ふやうな考へが起り、動もすると一の虚榮心が湧出づる。それから心に油斷が出來て墮落し易うなる。卷烟草村を發し味淋ヶ原を通つて、午後、酒飲町を通過し喧嘩ヶ原等を通つて、眞夜中に地獄谷に到着するとあります。烟草や酒は墮落の因で、心に締りが無くなり油斷をするから、遂に精神を亂す惡戯者となり、身體を傷ける毒藥ともなるのであります。御若い時代に最も愼むべきものは酒色の二であります。御酒と男女の情慾、此の二のものを充分自ら御警戒になつて、而して益々精神を健全にすると云ふ事は、自分の爲め祖先の爲め國家の爲めである。心を達者にすると云ふ事は、佛教に於ても最も力を盡して說く所であります。

お互に心を大丈夫に養つて往くには、第一、忍耐力、堪忍が必要である。堪忍はてうど食物の鹽のやうなもので、御汁でも、漬物でも、何んでも鹽氣の無いものはない。御飯を除く外、總て鹽氣が調味をする。堪忍はお互の修養上の鹽氣となるものであります。何事にも忍耐力を加味しなければなりませぬ。故に吾々は、健全なる忍耐力、堪忍を養はなければなりませぬ。人は感情と云ふものを勝手に起し、つまら

ぬ事にまで腹を立てたり機嫌を損じたり仕易い。人を感情の動物とは能く云つたもので、つまらぬ感情の爲に、何うかすると愚かな子供のやうになる。滑稽じみて來る。

山梨縣某寺に西玉阿闍梨と云ふ立派に悟つた老僧がありましたが、人に齡を隱す癖がある。七十歳以上と云はれると氣持が惡い。それで、『阿闍梨さんお幾つであります』と尋ねると、『六十餘り』と答へる。また八九年經つて『お幾つであります』と尋ねると、『六 十餘り』、また五年も經つてから尋ねても『六十餘りになる』と答へ、何時まで經つても、六十餘り六十餘りと答へられる。其の餘りは幾つかと云ふと、七十六歳だから十六年になる。七十六と云ふよりも六十餘りと云ふ方が氣持がよい、それは感情で、價値もなく理窟もなく、平仄も合はぬ。一の感情に支配せられて、さう云ふ立派な人でも、かう云ふ妙な癖がある。

また或る人は脊が低く、左の足が短かい跛であつた。左の足が短かいと云はれると氣持が惡い。右の足の方が少し長いと云はれると御機嫌がよい。左の足が短かいと云はれるのも、右の足が長いと云はれるのも同じ事であるが、『貴方の右足が長い』と云はれると氣持がよいので、莞爾として笑ふ。がさもないとプン〳〵怒る。つまらぬ淺はかな感情の上に人情が現はれるものです。

依つてお互に物事に氣を附け、主人から小言を云はれる事があつても腹を立てゝはなりませぬ。殊に女の方々は倘更ら堪忍を立派に守つて往かなければなりませぬ。堪忍を守つて往くと堪忍が一つの癖となり、お互に諦める事が出來るやうになります。

江戸時代に柳亭種彦と云ふ小說家がありました。子供の時分に非常なる癇癪持であつたから、御父さんが何うかして其の癇癪を癒して遣りたいと考へて、柳に因んだ敎訓になる歌を與へて、能く之を覺え能く守れと云はれました。其の與へられた歌を、寢ても起きても忘れず、始終、御守りにいたしましたから、自然、自分の癇癪が鎭つて、忍耐力が出來て、他日立派な小說家に成られました。柳の歌で忍耐力を養つたから、柳亭と云ふ名を附けたのであります。

また東京に桶屋があつて、非常に堪忍が強い。親孝行で、御母さんが常住小言を云はれるが、少しも逆はぬ。處が、家内を貰つたが、家内も人間は善いけれども、とにかく御母さんが惡い、衝突をする。『何うか堪忍してくれ』と云つても三度に一度は衝突する。そこで、桶屋が歌を作つて、『此の歌を毎日三度、御佛壇に向つて十遍づゝ讀んでくれ』と云ひました。連合の賴みだに依つて、御佛壇に向つて、朝一度に十遍、晝も夜も十遍づゝ、毎日〳〵御經を讀むやうにしたので、御內儀さんが自然に優しくなりました。其の歌は桶屋さんであるから桶に因んだ歌であります。『木を竹の無理を言ふともそこが親言はしておけやたが笑ふとも』之を毎日〳〵御內儀さんが讀んで居る中に忍耐力が養はれて、無理を言はれ小言を云はれても惡い顔をしない人となりました。今日、將來に望みを置いて、活動して益々發展して往かうと云ふ方方は、或る程度までお互に感情を自ら制して、腹の立つやうな場合に立到つても、莞爾と笑つて耐へると云ふ精神の力を養ふが大切である。

悪い例を引くやうであるが、監獄のやうな處へ往つて重罪犯と云はれる人に就いて見ると、十人中二三人は立派な人である。何故、立派な人が重罪犯を犯すかといふと、大きな慾を起す、腹を立てるといふのが因である。窃盗や强盗などは非常に人相が惡いが、殺人罪等には立派な人がある。立派な人間であつて人を殺したり打つたりする、それは癇癪の仕業である。忍耐力を養はなければなりませぬ。

第二は克己、即ち己に克つ事で、自分の心を自分の心で立派に養ひ敎訓して往く事が出來ます。心の中には種々妄想が起り易い。良心はありながら、良心に反對する心が起る。中澤道二と云ふ人は之にケレドモと云ふ名を附けて居られる。立派な良心は佛のやうな心で、公明正大なる命令を下して居る。其の心の命令に從つて往けば物事に一つも間違がないが、其のケレドモと云ふ奴が反對すると、親孝行でも、大切とは認めても、悉く其の良心と云ふものゝ命令は駄目になる。朝四時頃に起きなければならぬと思つても、起き難い。たつた一分でも寢床に居つて寢んで居る。四時頃に起きなければならぬと心に思つても、ケレドモと云ふ奴が惡戲をする。起きなければならぬ、ケレドモもう少しと云ふ事になる。食物でも食べ過ぎてはならぬ、ケレドモもう一杯ぐらひはよからう。望みは少ないから宜からうと思ふのであるが、千丈の堤も蟻の一穴から壞れる。悉く我が良心に訴へ、立派に衷心から行はうとして居るに拘らず、ケレドモケレドモと云ふ奴が跋扈すると、敎育の力も學問の力も無駄になる。學問あり敎育あり、經驗はあつても、ケレドモの方が道に立ち塞がる。支那の王陽明と云ふ人は『山中の賊を破るは易く、心中

の賊を破るは難し」と云はれました。難攻不落と云はれた旅順の要塞を打破る事は出來ても、心の中のケレドモと云ふ惡戯者を打破るのは非常に困難である。旅順は一年經つか經たぬに開城するに至つたが、心の中のケレドモと云ふ奴は、日露戰爭が濟んでもまだ惡戯をして居る。旅順要塞戰より、もう一層、お互に心を制すると云ふ事は骨が折れる。けれども、何處までも剛堅なる意思力があれば心を制する事が出來ます。お互にケレドモが跋扈せぬやうにするのが克己であります。

塙保己一と云ふ人は盲人であつたけれども、非常な大學者となりました。十五六歳の頃、或る御大名の處へ參つて或る婦人の按摩を取つて居ると、その婦人は榮華物語を小さい聲で讀み始めた。何うも耳を傾けても充分聽取れぬ。そこで、揉みながら『何うか揉賃は只で宜しいから、大きい聲で讀んで頂きたい。本を讀むのを聽くのが私は御飯を食べるよりも嗜であります本を空で覺えたい』と申しますと『盲人が偉い事を云ふ、揉賃は揉賃で遣り、本も聽かせて遣る』と云はれたので、保己一は大に喜び蚊帳の外へ出た。『蚊帳の外は蚊が食つていけまい』と云ふと、『構ひませぬ、御女中さん何うか私の手を縛つて下さい』と云ふ、『猶更ら手を縛つたら蚊が食つていけまい』と云ふと『手を縛つて貰へば蚊を拂はうと云ふ氣が起らぬ』、『食ふだけ食へ、勝手にさせる、手が動かねば拂ふ氣が起らぬ、蚊のする儘に螫さば螫せ、と云ふ風に任せる、手がなまぢ動くと心が動搖すると云つて、蚊帳の外で、兩手を縛つて貰つて榮華物語を聽いた。之が大家になつた土臺であります。つまり意思力を訓練したのです。蚊に螫れるのは辛い。其の辛い

のを自ら抑へ附ける、それが克己であります。今日、青年時代の御方々は、何うしても克己力を養つて往くことが必要であらうと思ひます。

三

第三は服從である。是は申す迄もなく、物を知つて居る方の命令指圖を受け、其の命令指圖に從つて往くのが服從である。妻は夫に從ひ子は親に從ふ、臣民としては陛下の御言葉に從ひ奉る、下級の者が上級の者に從ふのが服從であります。服從と云ふと卑屈のやうに考へるのは間違で、道理に適つた服從は本當に人間獨立の基である。目上の人の云ふ事を聞き御主人の仰せに從ひ、また自分の親、先祖の御言葉に從ふ、何處までも、自分自ら艱難苦勞しても、其の言葉に從ひ之を守ると云ふ事が服從で、やがて人間の獨立の基となる。學生は學校の規則を、會社員は會社の規則を守り、日本國民としては日本の法律に服從して往つて始めて、日本國民たる權利を全うすることが出來ます。

支那の孔子は聖人と言はれた人で、殊に禮樂に達して居られました。孔子は老子と云ふ人に禮儀を問うたと云ふ事が禮記にある。禮記は四書五經中に四冊ある。私は禮記が嗜で自分の修養書として讀みますが、却々文章もよい、名論も澤山ある。其の禮記に明かに書いてあります。大廟の御祭の際に、孔子は一から十まで上役の命令を受け、他愛もない事まで何うして可うございますと、うるさいほど一々指圖を受

けられた。弟子達が『先生は禮に精しいと云ふのに、一々指圖を受けられるから世間で笑ひます』と申上げると、孔子は『是れ禮なり』と答へられました。下役であるから上役の指圖を受ける、これが禮である。指圖を受けぬのは無禮である。それで『是れ禮なり』と答へられたのであります。

各自優しい心を以て服從する。殊に女の御方々は尙更でありますが、自分より上の人の言ふ事に年中服從する。是が自分の心を耕す譯にもなる。自分が不實な事をすると、將來、自分が人を使ふ時に不實な人を使つて往かなければなりませぬ。自分が不實な奉公の仕方をすると、將來、人の爲に不實で苦しめられると云ふ事が廻つて來る。是は因果の道理である。

第四は堅忍持久、根氣よく遣る事で、仕事をするに一つの興味を持つて樂んで往く。私どもが斯うして袈裟法衣を着けて居りますと、『貴君方は、帷子を着て居つても暑いのに、其の暑苦しい重たい法衣に袈裟を掛けて、暑くて辛いであらう』と云はれますが、辛いと思へば一日も勤まりませぬ。暑からうが寒からうが、自分の心に樂みがあると一向苦にならぬ。自分の仕事に樂みを持たぬと根氣よくする事が出來ず、遣らうと思つても直ぐ飽いて了ふ。

日本人の心は煙火のやうで、ぱつと派手やかに出ても直ぐ消える。善い事を考へても長持がせぬ。西洋人は戰をするにしても、何年間でも根氣よく遣つて居る。獨逸は半年か一年ぐらゐは經濟が續くであらうがと云つて居つたのが、何年經つても未だ遣つて居た。戰の根氣のよいのは譽められぬけれども、吾々は

仕事をする上に於て、一生涯倒れるまでも遣ると云ふ根氣が無ければなりませぬ。『石の上に三年、土の上に三年、疊の上に三年』と、或人が申しましたが面白い。石の上に三年間難儀をし通すと土の上の三年は餘程樂になる。土の上に三年辛抱すると疊の上の三年はずつと樂になる。疊の上の三年を經過すると布團の上は尙ほ樂である。何事も根氣よくすると、勉强が習慣となつて愉快にするやうになる。それでお互に根氣を繼續して往かなければなりませぬ。是が卽ち堅忍持久であります。

第五は勉强、勤勉努力と云ふことが大切である。人は働けば働くほど達者になる。人は働かぬと遂に柔弱になつて了つて、總て身體の發育は止つて了ふ。車夫は足を働かせるから何十里往つても草臥れぬ。草臥れても、御酒の一杯も飮めば翌日は働ける。吾々の足は弱い。直に草臥れて水腫が出來て二日も三日も働けぬやうになる。私は昨年御醫者に見て貰つたら、下腹が非常に發達して居ると云はれた。私は坐禪で氣息を深くして下腹に力を入れるので、下腹の筋肉が一番發達して居ります。身體中何處も此處も共に發達して居らなくては心細い。手を使へば手、足を使へば足と云ふやうに、總て身體は活動により運動によりて發達し、抵抗力が强くなり、お互に働けば働くほど、身體は强健强壯になつて何事も愉快に出來る。身體が惡ければ御飯も食べられず、御馳走があつても不愉快である。勉强は仕事を進めるのみならず、第一、勉强する人は身體が立派になる。一面から見れば勉强は身體の養生法である。尤も休むと云ふ

事も大切であるが、休む爲に休むにあらず、働く爲に休むのであります。働く準備として寢るのであります。

今日の御若い御方の中には、一日に三十分づゝ勉強を餘計にせられると、一ヶ月に正身十五時間勉強が餘計に出來ます。私は五十三歳になりますが、是れまで時間を何のくらゐ無駄に費したか判らぬ。誠に殘念でなりませぬ。誰でも油斷すると自然に時間を空しく過ごす。日曜と大祭日と同じ日になると『之はしまつた、詰らぬ』と云ふ。書生たちは二月も三月も前から之を知つてゐて日蝕と云ふ名前を附けて居る。勉強と云ふ事は骨が折れる、辛らいが、不斷に勉強すると愉快が起る。私どもの經驗から見るとさうである。

第六は禮儀である。身體の行儀が善いと精神の行儀も善くなる。身體が落着くと心も落着き、言葉を愼み、人に對する應接、それから自分の仕事をする際にも、起居動靜に至るまで自ら優しみを存して規律正しくなり、亂暴な振舞はなくなる。名古屋は御茶の流行する場所で行儀が宜しい。禮儀を重んずると自然に風儀も備はり、掛物を掛けるにもきちんと掛つて、床の間に花もきちんとする。客の居る處には總て烟草盆が置いてあり、何んとなく其の間に禮儀が備つて來ます。茶も花も知らない田舍では、烟草盆一つ眞直に置いてない。靴脫石の上に下駄でも草履でも無茶苦茶になつて居る。是は自分の心の持方が亂雜だからであります。

東京の警視廳で盗賊が捕つた。其の盗賊が白状した一節に『家の入口の靴脱石の上に下駄や草履がきちんと揃つて居ないと、座敷の中にも締りがなからうと思へるが、きちんと下駄や草履が揃つて居ると、奥の方に何んな締りがあるかも知れぬ。氣味が惡い』と云つて居る。淺草の現成上人は『人間と云ふものは、下駄の脫方で見ても、雨戶の締方で見ても、荷物の締方で見ても、彼の人は心に締りが有るか無いか、粗忽であるかないか、愼みがあるかないかが判る』と云つてゐる。下駄の脫方、雨戶の締方の上にも禮儀がある。雨戶の締方は成るべく靜かに、成るべくきちんと締める、其處に人の品格が現はれる。

電話をかける上にも禮と云ふものがあるであらうと思ひます。或る家の御內儀さんは田舍から出た正直な人で、禮があり過ぎて、電話をかけながら一々御辭儀をして御早うございますと云ふ。之では禮が過ぎて了つて、却て先方へ言葉が通じない。併し、電話をかけるに禮儀が備つて、親切が伴つて往くと、聞く方では心持がよい。打切棒では人が心持を惡くする『旦那は居られますか』、『居りませぬ』と云ふやうに打切棒ではいけませぬ。『何か御用があつたならば承つて置きます』と自動的に進んで、出來得るだけ先方の人を滿足せしむるやうに電話をかける。さういふかけ方をする人は、小僧さんでも何んでも仕事が行屆いて居る。電話をかける上に禮が備つて居るか居らぬか、親切が有るか無いか自ら判る。御若い御女中さんに御注意を申上げたい。

二宮先生が或る所で御飯を上つた時、其の御膳に澤庵が四切ほどつけてあつた。それを一切食べやうと

して箸で上げると、四切ともぶらさがつて澤庵が本當に切れて居ない。そこで先生は料理番を呼んで『御前は庖刀で切る事を知つて居つても、心で庖刀を使ふ事を知らぬ。それればかりでない、庖刀の使方が、うそである。庖刀を使ふに禮と云ふものが備つて居らぬ。庖刀の使方に禮が備つて居らぬから表裏がある。表から見れば四切で、裏から見れば四切になつて居らぬから、一緒にぶらさがる。漬物の切方にも禮がある。其處に一の注意が足らぬ。將來、人の運命を支配する事も多くさういふ處から起る』と注意されたと云ふ事である。禪宗では禮と云ふ事を喧しく云つて居ります。起居動靜、坐るにも起つにも、御經の始から終まで、禮拜の仕方等却々嚴格に禮と云ふ事を修練させて往きます。

四

第七は諦める事、諦め方によつて快よくなる。諦めが惡いと自分の精神を苦める、物の取り方を善く取つて往くと、例へば緣起の惡いと云ふ事も善くなるものである。

滑稽文學で名高い蜀山人の話は澤山ありますが、或歲、蜀山人が年首に往つた。其處の主人が『今朝は元日である、御祝ひの言葉を交換しやう』と一同の者を座敷に集めて、床の間を見ると、床の間の眞中に黑いものがあつて、冷つこい雜巾が上つて居る。昨夜、女中が居眠り半分で掃除をして、忘れて置いた宵越しの雜巾がありました。主人は『今年は碌な事はない、氣色が惡い』と不氣嫌である。蜀山人は『決し

て御心配を爲さるな、御床の間に雜巾、それは却て目出度い瑞祥である。私が祝つて上げる』と云つて『雜巾を當字で書けば藏に金』土藏の藏と金銀の金とで藏金となる。『彼方福々此方福々』と斯う云ふ歌を詠みましたので、主人の機嫌が癒りました。

昔は大福茶と云つて元日には茶を飲むことが例であつた。或る殿樣が元日、大福茶を召上る時に、御給仕の御家來が袴の裾を踏へて柱に打衝つて、土瓶を破つて座敷中茶だらけにして了つた。主人は烈火の如く憤り、幾ら御詫をしても肯かない。其處で家來が或る先生に賴んだら、『何とか取爲して上げやう』と云つて殿樣の處へ來て『御前御目出度う』と申上げたが、腹立つて居るから返事もせず、『目出度ない、貧乏神が朝から來て福茶の土瓶を破つて了つて、福に去られた』と云ふと、先生は『殿樣は福の神だ、運の好い御方である。決して夫れは不吉の前兆ではない、土瓶を破られたのは却て目出度い瑞祥である。私が祝つて上げます』と云つて『元日にどんとびんを打破りてあとに殘るは金のつるなり』と云ふ歌を作つた。殿樣は『成程、さう云はれて見ると氣持が好い。御蔭で目出度くなつて來た』と云つて、家來を呼んで『先刻暇を遣ると云つたのを取消して、汝に御祝儀を遣はす』と云つて、昔の金で一分をくれた。夫れで家來は、一分の半分の二朱だけ先生へ上げた。先生は貧乏であつたから貰つて、其の代り記念の歌を書いて遣らうと云つて『元日に餘儀なき事を賴まれて一首の歌が二しゆとなりけり』と云ふ歌を書いて與へました。

人はなるべく開けた心持を持たなければならぬ。些々たる事の爲に精神を苦めると、初めは人の心が沈んで腦が過敏になり、根も葉もない事に心が動き、自ら腦や胸を傷める。また少し進んで非常な損害を受けると、夫れが爲に非常に殘念がつて、愚痴に陷つて、物質上の損害のみならず、精神上の損害を受ける結果に陷る。處が、諦のよい人であると、縱へば損害を來しても、精神が落着いて居て心持に餘裕があるから、また運命の開拓が出來て、取返す事が出來ます。

京都に手島堵庵と云ふ人があつて、其處へ丹波から來て居る女中は、正直者で、一年中給金を使はず、一襲の着物を拵つたが、袖も通さぬ中に鼠に食はれて、表着にならぬやうになりました。氣の小さい日本の婦人では氣が違ひはせぬかと思はれるのに此の女中は莞爾として居る。手島先生は『鼠の爲に大變着物を傷められても別に氣に掛けず、機嫌が好いな』と云はれると、『私は半年程以前から、先生の御蔭で諦がよくなりました。自分の粗忽で鼠に食はれたのです。自分が食つたと思へば腹が立ちませぬ』と云ひました。誠に簡單な諦方でありますが、着物等の事を快々思はずに立派に諦めると、今後は注意するやうに自分の心の力に餘裕が出來る事になります。何事でもよく諦めると自分を泰然自若と立派に養つて往く事が出來る。

和泉式部は可愛い娘の小式部が亡くなりましたので、涙の乾く暇なく、遂に佛教の信仰を起しまして、段々後になつて『娘の早逝したのは私に信心を授けてくれたのである。假に此の世に來て親を悲ませて

信心を教へてくれた、之も因緣である』と斯う諦めて、悟境を開かれたとあります。

また、親鸞上人が越後國柿崎で雨に降られたが、或家で斷られて宿る家がない。軒下では雨の飛沫が來て寢られぬ、夜半に起きて念佛を唱へて居られる。弟子が氣の毒に思ふと、『今夜は特別に有り難く思つて居る。何故ならば、若し此の家に宿めてくれると今頃は寢て居るであらうが、宿めてくれなかつたから、夜半に雨に叩かれながら念佛が出來る。私の爲に修行させて下さつたのであると思へば、今夜は喜んで居る』と云はれた。其の落着いた諦のよい言葉を聞いて、此の家の亭主が感心して、上人の手を取つて家に御連れ申して、火を焚いて與へ、一夜家に宿めて立派な信心者となつた。變れば變るもので、昨夜は家にも宿めてくれぬ者が今日は未來まで貴師の側を離れぬと云ふ信者になつて、其の德を慕ひました。其の時、親鸞上人は『柿崎にしぶ〳〵宿をとりければ亭主の心熟柿たりけり』澁柿が一夜の中に甘柿になつたと云ふ歌を作られました。

第八は心を落着ける事で、心が餘り狼狽ると、つい物が粗忽になり心に隙間が出來る。心が落着かぬと、洋燈を取扱つても、燐寸を取扱つても、御飯を焚いても、御汁を煮ても、庖刀を使つても、つい粗忽を生ずる。心を落着けるのは一の修養法であります。先達て或人が私の處へ參つて『腹が立ち、心が彼方此方動いて困る。此れには、自ら苦痛を感じて居るけれども、どうも治す事が出來ぬ。何とか、治す方法はありますまいか』と相談せられました。夫れは高等教育を受けた立派な御方であります。何事も自分

の心の底に留めて、自分の心が上の空にならぬやうに安靜にする。王陽明は夫れを心養と云つて居ります。今日いふ精神修養であります、心を他に散さず精神をづつと落着けるのが心の修養の原である。心は落着くと安靜になる。坐禪も安靜法である。一般の御方に坐禪の御話は無理でありますが、つまり自分の心を落着けるのであります。

第九は寛容で、心を寛くする事である。明治天皇の御歌に『あさみどりすみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな』とあります。てうど晴れ渡つた空のやうなひろい心を持てと云ふ事で、心が寛いと心に餘裕が出來て、腹の中に空地が出來て、如何にも自由に心の運動をして往く事が出來る。心が狹いと少しの事でも精神を刺擊して、夫れが爲に縛られる。心が寛いと縛られるやうな事はない。小さい穴の中から風が來る場合には、風の吹方が强い、針で刺すやうである。廣い座敷へは煙がどん〳〵來てもさうけむたくない。海は廣い。何んな川の水も皆な流込みます。自分の反對者が來ても決して憎まず、ひろ〳〵した度胸を以て、平氣で應接して往く寛容がなければなりませぬ。

越後の堀秀治は秀吉の家來であつた。世の中では何んな者でも使ひ道があると云つて、人を憎まず嫌はず、或時、二人扶持で泣男を抱へた。眼が大變凹んで眼病で、始終膠が出て、おまけに細い金切聲である。御家老は彼んな男を抱へて置くやうでは經濟が遣切れぬ、夫れとなく御意見を致さうと思つて『先達

存じます』と申すと『御前方は泣男の使途を知らぬで困る。世の中に決して役に立たぬものは無い。破れ太鼓の皮でも使ひ様によつては役に立つ、泣男でも用に立つ事がある。昔、楠正成は泣男を使はれた。予は彼を御悔みの使者にするのだ』と秀治公が笑ひながら云はれた。廢れ物は無いと云ふ事を云つたのであります。夫れくらゐ寛容な度量があつた堀家は、北越高田を領して居つたが、一般人民が非常に能く治まつた。しかし秀治公が亡くなられてから、越後はまた少し亂れました。何うしても人はひろ〴〵とした心を有つて居らなければなりませぬ。

明治天皇は非常に寛大なる大御心を持たせられ、日露戰爭の際の御製を拜しますと『國のためあだなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ』仇は懲さなければならぬが可愛がる事を忘れてはならぬと云ふ大御心であります。遼陽陷落の際、非常に將校兵卒の働を見て御滿足あそばされた其の時『さるにても朕が喜に引替へ、露西亞皇帝の御心配は如何であらう。御氣の毒ぢや』と仰せられました。人は何處までもひろ〴〵とした心を養つて往かなければならぬ。

殊に日本の御婦人の方は、何處の女と較べても幾分感情が強い。思込むと一直線に心が狹くなり易い。例へば、自分に反對したり虐めたりする者があると、非常に憎いと思ふ。夫れを憎いと思はず氣の毒と思ひ、何うか彼の人の心を素直にしたいと思ふがいゝ、夫れくらゐ優美な心を持たなければなりませぬ。世の中は自分一人の世の中でない、自分の氣に入つた事ばかりでないと諦が附いて居ると、何んな者でも

綺麗に親切に附合つて往く事が出來ます。

五

一番終ひの第十は、趣味と云つて樂を持つてゆく事。これは人は風流の道を樂め生花を遣れ詩を作れと云ふ意味ではない。天然を樂む心を養ふ、或は花を見て樂み、或は月を觀て樂み、人間の手の着けてない天然自然の風流を樂む心を養つて往くことであります。

東京深川の某俳諧師の處へ、夜、盜賊が這入つた。『何んでも持つて往きなさい、併し、此の文臺は末の松山の文臺である、是れだけは御免を蒙りたい、他の物は何なりと持つて往きなさい』と云つたので、盜賊は安心して種々な物を引擔いで、寒い晩でありましたから戸を閉ぢて出て往つたが、盜賊は『文臺だけ殘して往けと云つた、あれは値打があるかも知れぬ、序に貰つて往かう』と考へたから、更に後戻して竊に窓の隙間から家内を見ると、まるで盜賊の這入つたやうな樣子がない。行燈の側で頻りに何か云つて居る。耳を聳て〻聞いて見ると『盜人も戸を閉めて往く寒さかな』と云つて居る。盜賊は『吾々は夜中に人の物を取りに往く、實に恥かしい』と云つて改心をしたといふ。

越後國の良寛と云ふ上人の處へも盜賊が這入つたが、貧乏も貧乏で何にも取るものがない。『これ程の貧乏はない、偉い草臥れ儲けであるが仕方がない、己れの失策であつた』と云つて盜賊は歸つて往きます

と、良寛が『盜賊さん』と云つて呼止めて、何か持つて往つてくれと云ふ、盜賊は『何か持つて往きたいが何もない』と云ふ。良寛は『何かあらう己れの布子でも持つて往け』と云ふ。盜賊は『そんな汚いものは要らぬが、せつかくの思召なれば頂戴して往く』と云つて布子を貰つて出て往く。良寛は緣側まで送つて出てまた御出でと云ふ。盜賊は『もう一生涯來ない、貧乏で話にならぬ』と云ふ。良寛は『まあ無理に招待する譯ではない、暇があつたら何か持つて來たら宜いぢないか』と云ふ、盜賊は『盜賊に御土產を持つて來いと云ふのか』と笑ひ話をして往つて了つた。良寛は寒いのに自分の着て居る布子を脫いで與へてから、將來、彼が心を改めてくれるやうにと熟々思つて、觀世音菩薩に彼の改心を祈つてやり振返つて見ると、御月樣の光が窓から差込んで居る。良寛は暫らく月の姿を見て居つたが、思はず聲を出して『盜人に取殘されし窓の月』と詠んだ。

人は風流を樂んで往けば、必ずしも詩を作つたり歌を作つたりせぬでも、其のまゝ心に、云ふに云はれぬ樂みを生ずる。此の旋風機から風が出る、此の風の出るのは機械の力とは云ひながら、之は天地の作用である。此の如き機械をかりて天地の妙用が現れる。心に云ふに云へぬ樂みを生ずるのも高尙なる趣味からである。自然を樂むと云ふ事を佛教で云ふと、世の中には四苦八苦があつても佛樣は一の樂みを人に與へてゐて下さるといふのである。人は見て居らぬでも佛樣は見てござる。獨を愼めば人が見て居らぬから橫着をすると云ふ考は自然起らぬ。

佐々友房と云ふ人が倫敦に往つて、朝、町へ出て商店を見た。其の商店は夜半過まで商ひをするから、朝八時頃になつてもまだ戸が開いて居らぬ。其處に子供がぽんやりと立つて居る。學校の生徒らしい。佐々先生が『坊ちやん學校へ往きますか』と尋ぬると『はい』と答へた。『學校へ往くには時間が遅れる。買物でもあるか』と尋ねると、『買物ならば宜しいが、玻璃窓を傷めたから、窓の明くのは八時であるが、窓の明くのを待つて御詫をして往く積りである』と答へました。球か何かをぶつつけて傷めたらしい。佐々先生は子供の心配して居るのを氣の毒に思つて『人が見て居らなんだら咎める者はない。學校に御出なさい、大丈夫である』と云ふと、子供は『貴下は何地の御方でありますか』と尋ねたから、『私は日本だ』と答へると、子供は『人が見て居らなければ能く判りさうでないけれども、人よりもずつと眼の明るい御方が見てござる。人は見て居らぬでも神様が見てござる。御詫をしなければなりませぬ』と云つた。佐々先生は赤い顔をした。西洋では斯うした宗教的信仰があつて道徳の根底を爲して居ると云ふ事を聞きました。

宗教上の信仰があれば神佛を頭に戴いて總てを愼む。專門の御話は今夜申上げませぬ。專門的な形式に亙つた信仰は別として、普通の場合に於ては、吾々は國家に對する本尊として、天皇陛下を頭に戴くと共に、御先祖に當る神様や佛様を頭に戴いて居ると、人は見て居らぬけれども神佛が見て居る。人は咎めぬでも神佛が咎める、人は證明せぬでも神佛が證明する、人に知れぬでも神佛に知られる、さう云ふ信仰の

心が立派に確かになると同時に、心の中に千萬人の力を得たほど大丈夫の思ひが起る、心の中に非常に樂みを感じて來る。之も宗教上の趣味である。床の間の掛物之も一種の趣味である。山水の掛物であると或は木曾の山水を眺めると云ふやうな心持になる。或は月見をするも一の樂み、涼しい風に吹かれるのも一の樂みである。殊に詩を作つたり、歌を作つたり、天地自然を樂む、斯う云ふ樂みは高尚である。

昔、芭蕉翁は佛頂和尙を御師匠とせられました。佛頂和尙が芭蕉先生に『今日何のある處ぞ』と問答を仕掛けられた。芭蕉先生は『雨過ぎて青苔を流す』只今雨が降つて庭の青い苔が流れましたと答へられた。玆に云ふに云へぬ趣がある。更に佛頂和尙は『如何なるか是れ青苔未生前の佛教』雨もない青い苔も何もない時の佛教は何うだと問はれた。芭蕉先生が答へやうとする一瞬間、蛙が一疋池へ飛込んだ。直ぐに『蛙飛込む水の音』と答へた。佛頂和尙は『珍重々々』御前さんは立派に悟りを開かれたと云つて、如意を芭蕉先生に與へました。芭蕉先生は大變に喜んで、佛頂和尙の處から歸つた、さうすると、弟子達が『先生今日は御目出度う、蛙飛込む水の音、は實に結構であるが上の五文字がない。御附けが願ひたい』と申すと、芭蕉先生は『御前方各々附けて見よ』と云はれた。そこで杉風と云ふ御弟子が『寂しさや』と附けた。また一人の御弟子は『宵闇や』と附けた。高弟の其角は『山吹や』と大變派手に附けて陽氣の中に陰氣がある。何れも面白いが山吹は他より借りて來たらしい。寂しさや宵闇やは講釋になつて居る。夫れでは未だ本當の趣味が現はれて居らぬ。池其の儘の景色を取つて『古池や』と言はれた。門

弟はあつと感歎の聲を揚げて暫し歇まなんだ。今日、風流と云ふ事を間違へて居るものがある。汗水垂らして仕事をする上にも一の趣味があるのであります。

以上十ケ條は皆な精神の修養法であるが、箇條が多くて中心が定まらぬといけないから、今日の御若い御方は、一つ精神を立派に訓練しやうと思つたならば、其の中の二ケ條なり三ケ條なりを選拔いて、總ての行ひ總ての活動の中心土臺として往くが宜しい。堪忍の力、正直の力、勉強の力、親切の力を四本柱として、信仰を眞中の大黑柱として精神を修養して往くならば、標準が出來て宜からうと思ひます。併し、夫れには限りませぬ、前に申上げた事が御參考になつたならば、其の中の一ケ條なり二ケ條なり、生涯を通じて徹底的に守つて往かうと云ふものを定めて、精神を訓練して身體を達者にし、身心共に健全になつて往けば、縱ひ如何なる業務に就いて居つても、如何なる仕事に取掛つて居つても、總ての働きは忠義となり孝行ともなる。

此處に御出の御奉公の御方々か、受持の職分を忠實に盡さるれば、親に滿足を與へ、先祖に滿足を與へ、畏れ多くも、天皇陛下に對し奉り忠義となる。日本國民の偉大なる道德は皆な此の中より現はれる。女の御方は、臺所に居つて働き、御給仕するのも、洗濯するのも、諸道具を取扱ふのも、眞面目に遣つて往けば其處に立派な道德があります。寒さ暑さを我慢し、忍耐し、己れに克ち、目上の者に服從して、堅忍持久勉強し、禮儀を守り、何事も能く諦めて、心を充分どつしりと落着けて、ひろ〳〵した心を

持ちて仕事を樂んで遣つて往く、此の十ヶ條の中に訓練法が備つて居る。今日の一日は、將來、自分の立派なる生活を爲す、立派なる人間となる種子を蒔いて居るのである。

私は十二三歳の頃、死刑の宣告を受けたくらゐ身體が弱かつたが、山登りが因となつて健康が恢復しました。毎年、汗水を出して山登りをした。山登りを夏の年中行事の一として居りました。山登りと食物の制限、此の二つが自分の身體の健康を恢復した原因であるやうに考へられる。もう醫者にまで見放された此の身體が、今日ではぴん〳〵して居ります。自分は全く訓練の力であらうと有り難く考へて居ります。

皆さん方は身體を大切にして、健康を保ち心身を訓練せられたい。種々の箇條を並べ、つまらぬ献立を差上げて、一向御上り惡かつたかも知れませぬけれども、心身の訓練に就て、今夜、先人の言葉を御取次して申上げたやうな次第で、大分長くなりましたから、これで止めることに致します。

自殺論

一

自殺を論ずなどといへば、如何にも生硬な題目のやうであるが、近時我が同胞中に、自殺を遂ぐる者の甚だ多きを見て、誠に慨嘆に堪へぬ所から、聊か自殺の原因を考察し、且つ、將來自殺といふ厭はしき事件の發生を根絶するやうに致したいと希ふのであります。

自殺の動機及原因は多種多樣であらうが、抽象的に分類すれば、

一　奉公忠節の觀念
二　深刻なる責任感
三　生活の苦難
四　迷信
五　誤れる人生觀
六　精神の錯亂

等であらうと思ふ。尤も、自殺者の中には大に敬重すべきもの、同情すべきもの、哀愍すべきものゝ少なからざるは申すまでもないが、既往の事はともかく、今後は絶對的に自殺の跡を絶ちたいものである。

第一、奉公忠節の觀念より生ずる自殺——彼の殉死の如きが其の代表的のものである。殉死は尊屬が死せる場合、卑屬の者が之に殉ずることで、殉とは身を以て從ふの意である。此等は靈魂不滅の信念より起りて、隨分古代から行なはれたものと見える。既に人皇十一代垂仁天皇の御時に、皇弟の御薨去に當り、近習の者を埋めて殉せしめたが、數日の間死せず、晝夜號泣し、其の死するや犬鳥聚り來りて死屍を喰ふ。天皇大に愍みたまひ『生の愛する所を以て亡者に殉ずるは、縱ひ古風と雖も宜しからず、以後葬むるに殉を止めよ』と勅諚あらせられた。そこで皇后御崩御の時には、野見宿禰の議によりて埴輪（埴土にて造りし人・馬・甕等の類を墓の周圍に車輪の如く埋め立てしもの）の制を御採用になつた。されど、其の後も豪族國王等の間には、其の臣屬忠僕等に多くの殉死者を出して居る。前に在りし如き、殉死者が數日の間號泣して居りしといふやうに、無理死を強ひたる如きは殉死の意を冒瀆するものといはれやうが、忠臣義僕の如きは、多くの場合非常なる滿足を以て自殺したものであらう。それは奉公忠節の觀念の切なるより、その主君に別るゝに忍びず、泉下までも御伴を申し上げんとの傳統的信念より出でたからである。是は今日でこそ是非の議論も行なはるべけれ、從前に在りては正しく御奉公の最も徹底したる行爲とも見なされた。無理に殉死を強るが如きは、固より殉死そのものゝ精神にも違背するから、垂仁天皇の

御時には御禁制になつたのである。後世、武門武將の天下となつてからも、其の跡を絶たざるのみか、益々盛んに行なはれたのは、全く身を捧げて君公に奉ずといふ平素の覺悟から、如何にしても君主に離れ奉るに忍びず、遂に追腹を切て黃泉の下までも相從ふといふ一大信念から出でたるものと思ふ。然らば其の行爲と手段とは暫く措き、其の精神には敬重すべき道德的犧牲心が充溢して居る。而して此等殉死者は、死を以て決して生の斷絕とは思うて居らぬ。更生奉公の唯一の方法と信じたのである。而して此の信念は、何等の疑惑も怪訝もなく、理として斯くあるべきものと確信して居たものと思ふ。

されど此の信念は、果して正しき信念なるやといふに、決して合理的のものとは稱せられぬ。我が佛敎の因緣觀、倫理觀より觀じて、決して正しき信念、尊とき行爲とは稱し難いのである。佛敎には未來受生を說き、輪廻轉生を談ずるも、所謂業力相續といふのが法爾自然の原則である。現在の業力が未來の果報を招ぐ、業力各別なるが故に果報も亦た從つて各別であらねばならぬ。同時に死すればとて同時に更生すべきものではない。尤も、願生というて願力の受生もあるが、眞の御奉公は死後に非ずして生前に在り。奉公忠節の士は君父の沒後、此の世に在りて尊屬の靈を慰め、其の冥福を資助すべき勝善根は澤山ある。眞の信仰家は、此の道理を諒して報恩の行持を爲すこそ君父に報ずる所以の道である。

こゝで一言鄙見を述べ置きたきは、乃木將軍御夫妻殉死の問題である。乃木將軍の明治天皇に對する忠誠と、靜子夫人の將軍に對する貞淑とは、他の追隨を許さゞるものがある。將軍は殆ど己れあることを忘

れ、一意專心、明治天皇に其の全身を捧げられて居つたのである。其の崇高なる御精神と忠勇なる犧牲心とは、六十四年の生涯を一貫して居る。圖らずも天皇の御崩御に遇ひ、天地の間殆ど身を容るゝに處なき程に感ぜられ、どこまでも御聖駕に附隨し參らせんとの至誠が、止むに止まれず、禁ずるに禁ぜられず、遂に忠烈無比の最後を遂げられたのである。面あたり之を見たる靜子夫人の御心情は、果して如何であられしならん。將軍御夫妻の殉死の如きは、區々たる理窟を構へて批判すべき限りではない。六十四年間、忠孝義勇の熱誠の結晶とも見られる。故に、將軍の殉死は偉大なる神格の發露である。此の中には神祕があり靈氣がある。さればこそ、國内の同胞のみならず、海外の人々までも言ふに言はれぬ神聖味を感じ、且つ國民の思想上には絶大なる感化を與へたことである。併し、是れは將軍にして始て能すべきことにして、人格も高からず、忠誠も固からず、素行も嚴正ならず、奉公の行事も完全ならざる者が、單に自刃そのものをのみ模擬せんには、何等の價値も無いのみか、所謂株を守つて兎を待つの愚を演じ、西施の顰に倣ふ隣舍の醜女にも侔しかるべしと思ふ。

二

第二には深刻なる責任感より出づる自殺——是れは古武士間には屢ば行なはれたことであるが、今日でも必ずしも少なくは無い。會社の重役の失策、職務上の過失、公金委托金の失態、其の他德義上の責任等

にて面目を失ひ、慚愧恐惶の餘り、自殺するの類で、此等は眞に同情に堪へざる者が多い。併し、自殺は決して責任を果す所以の道に非ずして、畢竟責任を遁るゝ結果となる。佛教に所謂因縁業果の原則に照せば、來世に至りて其の責任を負はねばならぬ。また現世にても、自分だけは責任を廻避し得たりとするも、其の父母妻子等に及ぼす影響は如何に悲慘なことであらう。是に於てか自殺は決して恰當なる手段ではない。宜しく剛勇の氣節と、綿密なる觀察と、堅忍不拔の志とを以て、最善最良の方法を講究し、以て其の責任を果し其の失敗を挽回するの方法に出づべきである。

第三は生活の苦難に迫られての自殺――近頃は此の種の自殺者が日に增加を示して居る。幼兒を抱きつつ貧しき生活を營む婦人などが、只一人の賴りとする夫に死なれて生計の綱も斷たれ、身をもがいても活路を求むることの出來ぬ處より、幼兒を殺して己れも亦た自害するとか、または不治の病に罹りて快復の途なく、悲觀の餘り自殺するとかいふ者がある。私は此等の記事を新聞に於て見る度每に、同情の淚に咽ぶのである。是の如き事は、其の當人に取りては百計千謀も盡き果てゝ、泣々此の悲慘事を演ずるのであるが、此の苦惱を脫せしめんには、第一に社會的に救貧事業の發達を希望して止まぬ。市町村を通じて、之れに長たる人を始め、官民一致して其の市町村內の困憊者に注意し、豫め救護の法を施しなば、多くは救ひ得ることであらうと思ふ。また病者の如きは其の親族兄弟等の保護に依りて、自殺といへる如き不祥事より免かれしむることも、必ずしも不可能ではあるまい。

東海道の藤枝在の一勞働者が、大正七八年の頃、荷車を曳いて靜岡に往復するに一日五圓位の收入があつた。されど、彼は貯蓄心に乏しく、上景氣に乘じて飲食欲を恣にした。その家庭には妻子と四兒とがあつた。處が不幸にして、彼は突然急病にて死んだ。妻子は身に儋石の儲も無き爲めに、直ちに生計に窮し、焦慮の餘り精神に異狀を呈し、遂に四兒を絞殺して己れも亦た自殺した。誠に慘中の慘と謂ふべきであるが、斯る悲慘事も世には決して少くはない樣である。是れは主人たる者に貯蓄觀念も無く、後圖を顧みることもなかつたのが禍根であつたと思ふ。此の種の人も社會には可なりに多いといふことであるから、爲政者や社會事業家は、常に此等の人々に對して救貧防貧の道を敎ふることが必要である。急場の際には豫め之を救濟するの方策を講ぜざるべからず。宗敎家なども自己の天職として、此の點に最大の努力を拂つて貰ひたい。生活難の原因に基く者の自殺は、最も同情に堪へぬが、平素の敎化的努力と救濟的設備とに依りて其の慘事を減殺することが出來やうと思ふ。

第四に迷信より來るもの――これは頗る多い。第一には無智なる子女の自殺である。先年、大阪朝日新聞に佛敎中毒といへる見出しで、一條の哀れな記事が登載されてあつた。それは大阪市の某處に、高等女學校に通學してゐる中睦まじき二人の令嬢があつた。家も四五町を隔て居りしが、其の親きこと姉妹の如くにてありし。而も兩人とも佛敎を信じて居つた。或る日曜に、兩人連れ立て大和の當麻寺に詣で、中將姫の曼陀羅を拜し、其の緣起を見て涙を流し、感激して立去りしが、それつきり歸宅せざる爲め、兩家の

父母は心配して警察にも願出で、處々を捜索せしに、二日程を隔てて、兩人は死體となつて奈良市猿澤の水面に浮んだ。帶を以て兩人の身體を繋いで居つたさうである。是れは兩人とも一緒に、御淨土に往生せんとの觀念より出でたものと思はれる。

また青年男女が戀の道に陷り、此の世で夫婦になれぬといふ處から、悲觀して心中するの類も、佛教の未來觀を聞き違へた迷信の所爲と思はれる。また女子が丙午の生れなるが爲めに、緣遠きを悲觀して自殺する者も、此の近年各地にありしと聞いて居る。また中には甚だしく他人を恨み憎むことありて、自分の力足らざる爲めに、死して厲鬼となつて讎を復しやうなどといふ、穩かならぬ考へで自殺する者もまゝある。其の他色々の種類もあらうが、多くは昔の狂言や小說に作られたる誤れる未來觀や、丙午などといふ何等合理的根據の無い、社會的謬想の壓迫等に依りて自ら非業の最後を遂ぐるもので、如何にも不愍の至りである。斯かる迷信謬想は學者や宗教家の手に依りて之れが根絕を圖らねばならぬ。宗教家、殊に佛教家たらん者、未來觀を說くに當りては十分の用意と最も愼重なる因緣業報の解說とを施して、此等の迷信謬想を警戒することに注意すべきである。

三

迷信とは誤れる人生觀、是れ其の種類を分てば多端であらうと思ふが、概括して物質的人生觀と、

的との二方面がある。だが何れにせよ、自殺といふことは甚だしき不健全なる思想の產物である。
物質的人生觀、『觀』などといふことは少し大袈裟のやうだが、消極的の方は多く人生に對する不滿より出づるもの〻如し。事業を始むれば頓挫を來し、計畫を施せば齟齬を生ず、狂氣の如くに奔走しても金は溜らず、出世も出來ず、友人には見放され、人には欺される、自分よりは手腕も乏しく勤務力も無いものが、立派な位地を占めて大手を振つて橫行して居る、おまけに家庭は不和であつて面白味は無い、親戚故舊とても賴りになる者は一人も無い、何の爲めに生きて居るのか譯が分らぬ、嗚呼馬鹿々々しいといふ樣な考へからフラ／＼と死を求めるやうになる。積極的のものは、物質的に人生を一段深く見つめて、一種の厭世觀に陷るものである。人生僅か五十年、七十を古稀と稱す、此の間、只生きんが爲めに、汗を流したり喧嘩をしたり、噓を言つたり、腹を立てたりして居る、三寸の息絕えれば地下三尺の底に埋められる、せつかく蓄積せし巨萬の富も大地一震の下に粉碎せられ、手鹽に懸けて敎育せし愛兒も一朝の病魔に其の生命を奪はる、何といふ情けないことであらう、盥より盥にうつる五十年、夢に生れて夢に死す、人生果して何の價値か存するや『世の中は糸瓜の皮のだん袋底が拔ければ穴にどんぶり』、いやはや思へばつまらぬものといふ樣な考へから、死神に取付れる人が少なくない。
次に哲學的人生觀、是れも『哲學的』などゝいへば誇稱に失するが、假りに斯く名づけて見たまでゝあ

る。消極的のものは人生に對する價値觀念が缺乏するのである。吾々人間なるものは滄海の一粟にも侔しきもの、人間の生涯も多くは虛僞の生活を營みつゝあるやうなものである。宇宙の大より觀れば、人生の蠢動も螻蟻の區々として食を漁るが如く、戰鬪爭諍も蝸牛角上蠻觸の相凌ぐに似たり、萬物の靈長などと稱するは畢竟誇大妄想に過ぎぬ、かやうに人生を輕視し自己を蔑視するの結果、死を求むるに至る。

その積極的なるものは、吾々は宇宙の一分體である。宇宙は恆久にして絕大である、宇宙の大靈より分化して人體を現出す、而して、凡夫の悲しさは此の理を自覺すること能はずして、却て宇宙の靈德妙用に違背するの行爲を取り、妄りに泡沫の如き物質の幻影を追ひ廻つて居る、百歲の壽を保つも蜉蝣の一期に過ぎず、巨萬の財貨を蓄積するも一抹の浮雲に似たり、安んぞ能く皎々の白を以て世俗の塵埃を蒙らんやといふやうな觀念から、生の束縛を脫せんとするのである。

次に宗敎的人生觀に依る消極的のものは、三界の不安なること猶火宅の如し、人生無常、一として憑むべきなし、此の世は五濁の惡世なり、業繫の穢土なり、吾々も亦た罪深き身なり、之を愛着すればとて、思へば夢幻泡影にも似たり、水流れて常に滿たず、火盛んにして久しく燃えず、日出でゝ須臾に沒す、月滿て復た缺く、尊榮豪貴の者無常なること復た是れに過ぎたり、是の如き虛假不實の世相に愛着し、草露にも似たる生命に膠着して何んの樂みかある、現世は槿花一朝の榮にして未來は永遠である、賴みにならぬ浮世と頼みにするよりも、永遠の幸福こそ願はしけれと、いふ觀念から、往生淨土を急ぎ天國の福樂と

望みて自殺するの類である。積極的人生觀となると、人間の一期は無限の時間内に於ける一過程に過ぎぬ、生と死とは晝夜の如く、また開花落葉に似たり、花開くとも天地の爲めに一絲毫を增さず、葉落つるとも宇宙は爲めに一微塵を動せず、生死卽涅槃である、生も亦た全機現、死も亦た全機現、生死の相に着する勿れ、生死の形に囚はるゝ勿れ、生死圈外に獨歩して大自在を得べしといふが如き見地より、遊戲三昧を打せんとするの類で、此等は古の高僧や達人には少なからぬことであるが、それは一段向上の意味の存することで、決して自殺の部に屬すべきものでは無いのである。

第六には精神の錯亂――是れも其の原因は多岐多端である。先天的遺傳性に據る腦の疾患もあらうし、不幸なる運命、境遇の壓迫、絕望・失戀・激怒・痛恨・不平・不滿・嫉妬・高慢・妄想・恐怖等に原因して精神に異狀を呈し、遂に自殺するに至るのもある。此の錯亂にも發作的のものもあり、持久性を帶びたものもあることは周知の事實である。驚愕の餘り、忿怒の餘り、失望の餘り、河海に飛込まんとする者が、幸に人に阻止せられ、救助せられ、親切に諫止せられた爲め、夢から醒めたやうに自殺を斷念するの類も少なくはない。何れにしても精神錯亂の結果であるから、家族親近者等は十分に注意を施し、精々醫療を加へ且つ精神を鎭靜することに努めなければならぬ。

四

前に述べたるが如きは、ほんの大體の觀察であつて、決して科學的に論究したものでもなく、統計上から審判したものでもない。併し、大體に於ては誤謬はあるまいと信ずる。而して、何れの原因より來る者でも、自殺者の心理には同情すべきことが多い。

梵網經の、十重禁戒の第一には不殺生戒を制せられ、而して殺生を、自殺と、教人殺（人を教へて殺さしむ）と、方便殺と、殺生を讃美すると、殺生を見て悅樂を感ずると、見殺との六種を擧げて誡められた。解する者は、此の自殺を自ら他の生命を殺害することと、己れの生命を絶つこととの二種に說明して居る。その中、自ら己れの生命を絶つのが今の所謂自殺である。梵網經明曠の疏には、自身を殺すに三義あり、一には惡心を以て自殺す、二には身を厭うて自殺す、此の二者は何れも聖敎に違背して居つて、俱に罪惡である。經には身の無常なることは說かれたるも、身を厭離せよとは說かれて無い。三には衆生の爲め道の爲めに身を忘れて物を濟ふので、是れは罪とはならぬ。却て福分を成すと解釋して居る。第一は怨恨憎嫉等に依る自殺で、第二は迷信謬想、第三は人の爲め道の爲めに犧牲となるので、是れは自殺の部に攝すべきものではないと思はれる。

私が自殺の原因として掲げたる六種の中、第一の奉公忠節の觀念より出でたるものは、最も尊とき犧牲であるが、道德形式の變化せる現代に於ては、絶對に斯かる形式より離脫せねばならぬ。今の世に於て

ることとなる。

第二の責任感の如きは頗る同情に値するものありと雖も、死を以て責任を免かれんとする、此の放身捨命的覺悟を以て、己れの全身心を擧げて他に活路を求めなば、却て責任を果すことが出來やうと思ふ。會社の責任の衝に當れる人が大失態を來たして、申譯の無き爲めに自殺するとせんか、是れ一種の責任廻避である。自殺の爲めに會社が立派に復興し得るならば格別、然らざれば己れの責任を他に轉嫁することとなりて、己れは此の責任債を負うて來世の苦難を嘗めねばならぬこととなる。此等の點は平生に於て能々覺悟し、常に其の職責を尊重して失態なからんことを期せねばならぬ。

第三の生活の苦難に原因する者、此の類こそ最も氣の毒千萬であるが、資産に乏しき者は常々勤儉自ら處し以て生活の基を固めねばならぬ。勤めは貧きに勝ち、愼は禍に勝つといへり、平素の用心こそ最も肝要なれ。されど、若し生活不能の結果自殺する者を生ずるが如きは、社會として多少其の責任を負はねばならぬ。此の事は前にも述べた通り、各自の自省的發憤と社會の救濟的設備とに依て、相當に救ひ得ることが出來やうと思ふ。

次に迷信や謬れる人生觀は、宗教家・教育家を始め、社會教化に關係して居る人々は、東西呼應し自他協力して、啓蒙的大運動に從事し、一日も早く有害なる迷信を撲滅し、不健全なる人生觀に一大覺醒を與ふべく努力すべきは、實に刻下の急務であらうと思ふ。是れ獨り人類として自覺の上必要なばかりでな

く、迷信が國民の風教を汚濁し、謬れる人生觀が思想界の紊亂を來すの甚大なることを戒愼せねばならぬ。

精神錯亂の如きも、前記五種の原因より來るもの丶少なからざるを思へば、是れ亦た宗教的教育的事業として飽まで之を防衛すべきである。爲政者なども亦た十分此の點に力を致されたきものである。然るに若し、宗教家・教育家・爲政者等にして輕佻詭激の思想に囚はれたり、寧ろ逆に迷信を誘發する樣な行動を敢てしたり、責任も正義も顧みることが無かつたり、勤儉質實の美風を蹂躪する樣な生活振を示したりすることあらば、その國家を毒し民心を惑はすこと測り知るべからざるものあらん。恐れても且つ懼れざるべけんや。

五

余は茲に於て左の五點を擧げて、大方の君子と與に堅く之を操守したいと思ふのである。

一　業道の諦觀

二　人趣の尊重

三　人生使命の自覺

四　死生の重視

第一には、深く因緣の正理を觀じ、諦かに業道の大法を觀ずることが至要である。原因結果は宇宙の大法なり、苦樂昇沈、悉く業道の現象ならざるは無い。『善人は善を行ひて樂より樂に入り明より明に入る、惡人は惡を行ひて苦より苦に入り冥より冥に入る』とは無量壽經に說く所、『父不善を作すとも子代りて受けず、子不善をなすとも父また受けず、善あれば自ら福を獲、惡あれば自ら殃を受く』とは泥洹經の示す所である。邵康節の詩にも『天聽寂無音、蒼々何處尋、非高亦非遠、都只在人心、人心生一念、天地悉皆知、善惡若無報、乾坤必有私』とある。此の因緣の理を諦觀せば、自分が放蕩の結果戀愛に落ち、勝手に情死などをして未來の享樂を期待するといふが如きは、水に溺れるを恐れて火に投ずるよりも愚かなことならずや。

第二には、人趣を尊重することを忘れてはならぬ。我が高祖承陽大師も『人身得ること難し佛法値ふこと稀なり、今我等宿善の資くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみならず値ひ難き佛法に遇ひ奉れり、生死の中の善生最勝の生なるべし』と仰せられ、曩祖も『人身難受今既受、佛法難聞今既聞、此身向今生不度、更向何處度此身』と諭された。慈雲律師は十善法語に於て『人趣の尊重なることを憶念するは道に達する要津ぢや、自ら自己人身に尊重の心あれば自暴自棄の患がなきぢや、諸の國土に父母なく子なく親族の撫育に由ずして長ぜる人なけむ、自暴自棄せねば自ら父母親族に

尊重の心生ず、親族の中に尊重の心あれば孝悌の道立す、孝悌の道立すれば忠義も仁慈も立するぢや』云云と說てある。釋尊も或時、一芥の塵土を爪上に置き、阿難に對して『大地の土と爪上の土との比較如何ん』と仰せられた。阿難は『それは到底比較にはなりません』と申し上げしに、釋尊は『然り、一切衆生其の數の多きこと大地の如きものには非ず、然るに人身を受くる者の少なきは此の爪上の土にも及ばざるぞ』と御示しになつて居る。優婆塞戒經には五事の心得を示されて、第一には『己身の中に於て輕想を生ぜされ』と御諭しなされた。

吾々人間には果報拙き者が多い。されど幸に人間には精神といふ靈體がある。この靈體こそ自由にして無礙である。九尺二間の茅屋に居りても、勞働業者の群に伍して居ても、精神の力は能く無限に德性を發揮し得べく、神を奉じ佛に歸して法悅の境地に安住することを得べく、天地自然の風韻雅趣を飽喫することを得べく、高尙幽遠なる眞理の奧をも探ることを得べし、此の大自在の天德あり、何を苦しんで不平不滿の窩窟にのみ沒頭せんとするや。彼の俳人一茶の句などを見ると、たしかに天空海濶の世界を有し、其の間に十二分の人間味を備へて居る。花の題にて『花の陰あかの他人はなかりけり』、夏の句に『人は人我は我が家の凉しさよ』、奧信濃に浴して『下々も下々下々の下國の凉しさよ』、蛙や蟇の題『悠然として山をみてゐる蛙哉』、『罷り出たるは此の藪の蟇にて候』、夏座敷『松蔭や寢莫蓙一つの夏座敷』、粒々皆辛苦『あらましは汗の玉かよ稻の露』、何れも胸中の一仙境を寫して居るではないか。

第三に人生使命の自覺、人間には人間としての使命がある。吾々の衣食住の如きも、單に生きんが爲めに要するのではなくて、使命を全うせんが爲めに衣食を取るのである。殊に日本國民たる吾々は、人間としての使命あると同時に、日本國民として大使命を荷うて居ることを忘れてはならぬ。『徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり悲しむべき形骸なり』とは祖師の嚴訓である。只だ長壽であればとて、無意味の生活では何等の價値も無い。如何なる人でも必ず負ふべき義務がある。盡すべき職分がある。此の義務と職分とを放棄したならば石瓦と何等擇ぶ所がない。だが、人趣の尊重すべきことを知るならば、どうしても使命を果たさずには居られぬものである。その使命なるものを佛教に依て說明すれば報恩の行持である。

心地觀經には父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩の四恩を說かれた。私は之を我が國狀に鑑みて其の順序を改め、一に君主の恩（皇祖皇宗の遺恩を攝す）、二には父母の恩（尊屬及祖先の恩德之に攝す）、三に衆生の恩、卽ち社會同胞及人類互助の恩分なり、四に三寶の恩、佛・法・僧を三寶と稱するも佛陀の慈恩を中心とす。此の四恩も先天的または後天的に感受し、因緣の致す所生々世々に涉りて盡くべからず、忠孝義勇も、博愛共存も、皆な報恩の發動である。

彼の自己一分の滿足を得んが爲め自殺する者の如きは、此の大切なる報恩の義務を度外にして居るのではあるまいか。自分だけ死ねば事濟みと思うてはならぬ。遺族の心情は如何であらう。社會に及ぼす影響は如何であらう。父母の愁嘆をも顧みず、妻子の痛傷をも察せず、跡は野となれ山となれといふに至つて

は餘りに安價なる自殺である。此等は何と名くべきや、利己的自殺といはんか、背恩的自殺といはんか、報恩的大使命の上からいへば、慥かに一大罪惡と斷ずるに憚らぬ。人間の價値は利他的犠牲行爲に依て現はれる。如何なる人生觀的、藝術的、哲學的、理由が存して居ても、自殺そのものに依りて生命の尊とさを現出することは出來ぬものと思ふ。

六

大道といふ上から大觀すれば、普通の人間個人として生死などは、殆ど問題にならぬ程のものであるが、一人一己を中心として眺むれば、渺たる滄海の一粟たる人間の赤肉團、僅か五十年七十年を過ぐる者も少ない人間ではあるが、宇宙の靈德を具へて正に是れ宇宙の一分體である。千佛の一數である。之を訓育し修練する時は、神ともなり、佛ともなり、聖ともなり、賢ともなりて、其の德光は四表に輝き、其の遺澤は洽く萬世を潤ほすべし、思へば實に尊貴なる人身であつて敬重すべき生命である。夙緣あればこそ此の世に出生し來り、短き浮世に在りながら無窮の功德を莊嚴し得るのであるから、其の生をも重んじ其の死をも重んぜねばならぬ。之れが父母たる者も亦た、母胎に托せる時より、常に敬重の念を以て之を保護し、撫育し、敎育すべきである。是れは其の子一人の爲めに非ずして、社會の爲め、國家の爲めである。而して、それが最も重大なる義務である。此の義務を遂行し能はざる事情ある者に對しては、親戚

故舊とか、官署とか、一般社會人とかの手で、之を扶助擁護せねばなりませぬ。凡そ此の世に生れたらん者は、知能を啓發し德器を成就し、耻づかしからざる國民となり、各其の職分に從つて功績を擧げ、一日も永く、健康に、快活に、善德の因種を增殖すべきである。

然るに、古來より佛教家には生死を輕んずるの風がある。是れは生死の繫縛を解脫して、涅槃常樂の聖域に證入せんとする思想より出たることは勿論である。印度教に於ても、釋尊御出世以前に既に此の思想が盛んであつた。釋尊に至つて此の思想に一般高尚なる意義を施して、生滅々已寂滅爲樂の眞理を開示せられた。故に或る意味に於ては、死を以て寧ろ幸福と觀じた程であつた。釋尊御涅槃の折などは、餘りに御弟子たちが哀愁に沈むのを懲ませられ、『汝等は決して死を恐れたり悲しんだりしてはならぬ、此の肉體なるものは罪惡の結晶である、是を棄てゝ涅槃に入ることは、怨賊を離るゝが如くにして苦惱の本を脫するのであるぞ』といふ意味を教誡せられて居る。併し、是を以て厭世教と早計してはならぬ。此の種の御教訓は觀身法の半面である。此の臭皮袋に執着して種々の罪垢を惹起すことを防止せられたのであるから、更に進んで常在而不滅の無量壽あることを證し、幻化の空身即法身なることを知らねばならぬ。

釋尊は八十歲の遐齡を保たれて、一時一日も獨處すること無くして衆生を濟度したまうた。御涅槃に臨みても、猶ほ常在靈鷲山の御誓ひあるに非ずや、印度の脇尊者は、處胎六十年といふ奇跡を遺した方であるが、出胎後八十歲の時、發心出家して第十代の祖位を繼がれた。達磨大師の如きは百二十歲程になつて

から、支那に來りて禪道を弘通せられた。佛祖は生死や年齢などには屈托せられないが、その代り、生命のあらん限り、活動の出來る限り、斯道の爲めに精進せられたのである。往生淨土を以て本懐とせられた法然上人も、八十歳の御臨終まで御教化、親鸞上人も九十歳の御終焉まで御濟度に御盡し下された。

また禪門の高僧と稱せられる古來の人々の中には、死に對する態度に頗る奇拔なのがあり、その爲めに故らに變つた死に方をした人も少なくない。此等の知識たちは、生死の岐路に立て無礙自在の妙用を現はし、死といへる一大魔境に對しても、何等の不安をも恐怖をも感せず、自己の修行力を以て死を征服せんとせられたものと思ふ。それが爲めに、坐脱立亡というて、端坐のまゝに寂し、または直立して死するが如きを珍重したものである。尤も、高僧碩德にして坐脱せられたるは、達磨大師・洞山大師等を始め、我が國でも我が高祖太祖等は悉く坐脱あそばされた。併し、是れは決して其の形式に拘泥せられたるものに非ずして、生死の間に在て生死を相忘るゝ底の大安心三昧があらせたまうたのである。

明治十四五年の頃、東京深川某寺の住持にして相當に德望ありし人、臨終の折、坐脱せんとせしも、病臥衰弱の爲め坐禪すること能はざりしが、強て坐せんとして、看侍の僧に援けられて大騷ぎをして居た。時に舊知なる泥舟居士高橋精一氏が危篤の報を聞き、腕車を走らせて枕頭に來りしに、此の始末でありしかば、居士は大喝して『和尚、馬鹿な眞似をするな、和尚の阿爺はどうして死んだと思ふ』と怒鳴つた。阿爺とは釋尊のこと、釋尊は頭北面西右脇臥にして涅槃に入りたまうたのである。和尚は之を聞くと、うゝ

というて打ち點頭き、靜かに橫臥して終りを遂げた。唐代に於ける五台山の隱峰は、珍らしき遷化を示さんとて倒立、卽ち鯱鉾立になつて死んだ。此等は寧ろ死を翫弄するものにして、輕佻の誚りは免かれぬ。我が國の古禪僧中にも、滑稽に類した事の多きは、痛快の如く思はれるが、決して範とすべきものではないのみか、さういふ餘興氣分に侵されぬ様にせねばならぬ。

七

相州大雄山開祖了菴禪師の嗣にして、且つ實妹たりし慧春尼は、機峰嶮峻、行持綿密、禪尼界の伏龍でありしが、晩年、大雄山上に於て薪を積み自ら火を點じ火定に入て遷化された。人あり問うて曰く『尼和尙熱きか』彼は莞爾として火中に笑ひ『靑道心の知る所に非ず』と答へしといふ。其の勇豪なる氣節は實に驚くべきものあり、且つ亦た火定三昧に入るも、生死峯頭轉身の一路を開き、身を捨てゝ法供養を打せんとする一大信念に出でたものと思ふが、其の所爲は、その當時の時代思想一面の感化を受けたものであつて、決して現代人の模倣すべきことではない。

要するに、現身の死は來世に於ける更生の門出である。更生の相に四種あり、願生と通生と化生と業生とである。願生とは、現在に於ける堅固なる誓願力に依て未來生を受けるのである。佛の御慈力に依憑して安養淨土に往生するもの、願生娑婆というて願力に乘じて此の世界に生れ變りて來るのも、楠公

が七生報國を誓ひ、その念願力に依りて大日本國に出生入死し得たりとせば、此等は皆な願生である。次に通生とは、佛菩薩などが神通自在の力にて出生し來ること。化生とは變化して生を受くる者。業生とは此の世の善惡業力に引きずられて未來の生を招ぐ者である。吾々佛弟子たる者は、堅實なる理想と誓願、純眞なる信仰歸命に依て願生を期したいものである。往生淨土の如きも亦た願生といふことが出來る。然らば、死というても滅亡ではなく、寧ろ願力と理想とに活くるのである。死する爲めの死ではなく、活くる爲めの死である。

高祖大師には生死の卷といふ一篇の御示しがある。其の中には『この生死は佛の御命なり是を厭ひ捨てんとすれば即ち佛の御命を失はんとするなり、これにとゞまりて生死に著すれば是れも佛の御命を失ふなり、佛のありさまをとゞむるなり』云云とある。生死の假相に着せず、生死の實相を現證することが大切である。生を以て有の觀をなし、死を以て無の觀をなす、是れ即ち妄想の窩窟である。彼の正岡子規が最後に禪を研究し其の所感を記して、從前は『禪の悟道といふことは如何なる場合にも平氣で死ぬことだと思ひしが、是れは皮相の見であつた。今に於て、禪の悟道なるものは如何なる場合にも平氣で活きることなるを知る』といふ意味を言うたそうであるが、誠に知言といふべきである。來山が『來山は生れた過で死ぬるなりそれで恨みも何にもかもなし』と詠じ、一九が『世の中をどりやおいとまにせんこうの烟とともにはいさようなら』と詠ぜしが如きは、洒脱とはいはれやうが、やはり死生の取扱を輕視して居るか

ら、前途に一大光明を認むるには至らぬ。

それよりも、徳川の鬼といはれし本多重次やらが、死に臨んで『死にともなあら死にともな死にともな』といひしかば、枕頭に侍せる家族は呆れはてゝ居ると『御恩を受けし君を思へば』と詠み足したさうであるが、死を鴻毛よりも輕く義を泰山よりも重しと覺悟して、屢ばそれを實行の上に現はせし重次としての辭世には、寧ろ、尊い人間味がある樣に思はれる。此の問題は、詳細に說明せざれば誤解を來たすの恐れあるけれども、今は是れだけにして擱筆するが、とかく死生といふことを重要視して、是れに最高の價値をつくるのが人類の本務である。

第五の佛慈の感仰は、佛敎信者安心の法門である。佛敎の上でも、聖道門とか淨土門とか、顯敎とか密敎とか、色々の法門もありて、其の信仰の樣式も一樣ではないが、佛陀出世の本懷は法華經の壽量品に『每に自ら是の念を作さく、何を以てか衆生をして無上道に入ることを得て速かに佛身を成就せしめん』といはれた一語に盡きて居る。四十九年の御說法も、千百億の化身も、皆な此の御慈悲の現はれである。此の御慈悲に歸命して佛の正敎を信受し、佛の御指導に基づきて純一無雜なる宗敎的行持に入りなば、如何なる人でも大安心を得、大功德を成じ、大菩提を證することが得らるゝのである。業道の諦觀も、人趣の尊重も、人生使命の自覺も、死生の重視も、此の佛慈を感得し信仰することに依りて、始て其の全きを得るものであります。此の佛慈感仰の事は佛敎家の常に解說する所であるが、今は其の委曲を盡すの餘地

も無いから、單に其の題目だけに止めて置きます。

之を要するに、私は世の自殺者に對して嘲笑や輕侮の念は少しも有つて居らぬ。其の人に依り、其の場合に依り、寧ろ大に尊敬もし、同情もし、感激もして居る。されど、自殺といへる方法は、今日に於ては何れより觀るも是認すべきでない。故に私は、精神的にまた物質的に自殺者の發生すべき原因を除き、國民的啓蒙大運動の下に、自殺の根滅を切望して止まないのである。

信念と勇氣

一

近頃は、既往五個年に亘る世界的戰爭が平和に復しましてから、却つて種々の問題が社會の表面に現はれ、勞働の問題も起れば生活の問題も起り、樣々の問題が起つてゐるが、併し、その一番根底となつてゐるものは、やはり思想問題であらうと思ふのである。

一口に思想問題と申しても、其の人の着眼點に依つて多少趣きを異にしてゐる。從つて解釋も違つて居る。併し、一言にして云へば、國民全體の思想上安定を缺いてゐると云ふ形は免がれぬであらうと思ふ。また、外來の思想が這入つて來ましても、日本人が十分にそれを選擇する力があれば、敢て恐れるには足らぬ。古來の歴史を見ても分る。儒教が支那より這入つて參る、儒教は卽ち支那の思想を傳へたものである。儒教の中には隨分危險思想もある。『天下は一人の天下に非ず、天下の天下なり』といふやうな、日本の國體の上から見ても、日本の國民道德の上から眺めて見ても、甚だ危險を感ぜられる樣な敎へが澤山にある。併し、日本は其の儒教を採用いたして居つて、少しも儒教の爲めに、日本の國家的道德の上に何等

の動搖をも來さぬ。此の點に於て我々は、後世から眺めて見て非常に敬服を致すのである。

また其の後に佛教が傳つた。佛教は結局は世界的宗教である。國境を飛び越えて居る教へである。佛教の內部に這入つて見ると云ふと、あまり說が廣い。それが爲めに動もすると國家主義の上から、危險思想を惹き起すの恐れがありはすまいかと思はれる點がある。その佛教を聖德太子が公然御採用になつて、佛教の中の根本精神を日本式に活かして御使ひになつたのである。此の點に於ても、今日から見て非常に敬服するのである。

今日色々の思想が外國から這入つて來ても、日本人には日本固有の精神力、日本固有の國民的信念力がある。此の一大信念を根柢として十分に外來思想を選擇し、適當に之れに淘汰を加へて、さうして、之を我が國情に應じて利用し善用する時に於ては、世界の思想といふものも盡く、所謂他山の石で、我々の思想發達上の資料ともなつて行くのであらうと思ふ。然るに現今、世の中の有樣から見ると、動もすれば反つて惡化されんとする氣味合がある。私どもは、常に各地を經巡つて居る南船北馬といふ樣な境涯であるが、各方面に於て色々の御話を聞いたり、種々の狀況を眺めたりして、何となく現代の國民思想の中には種々の缺點があり、また惡化される傾向を持つて居るといふ樣な氣味合を感ずるのである。そこで甚だ國家の將來に對して深く恐れて居るのである。

其の所謂缺點、現代思想の缺陷といふものを擧げて見たならば、第一に自己中心主義とでも言はうか、

所謂自己本位になりつゝあることである。何事も自己を中心として行きたがる。その自己中心主義なるものも、十分に精練を加へて居らないのである。つまり精練の足らない自己中心主義が勃興して居る樣である。或は人格の價値、或は個人の獨立、或ひは個人の自由といふ樣なことを叫んで居つても、未だ完全なる精練を經たものではない樣に思ふ。

二

今日、個人主義といふと、直ぐに極端な利己主義の樣に解釋せられて居る。個人主義なるものが何の樣に使用せられて居るかと云ふと、あの人は個人主義だと云ふと、直ぐに利己主義一點張りの樣に認められて居る、あの人は個人主義であるから困ると云ふのは、所謂利己的のみで全く他を顧みない人の樣になつて居る。併し、眞の個人主義と云ふものは、自他相救ふと云ふ處より出發せねば、本當のものだとはいはれぬのである。若し人間として更に他を顧みず、他に向つて何等の交渉もせず、只だ自分一個のみを目的として居ると云ふ樣では、其の人は決して個人としての獨立を全うすることは出來ない、と云ふことは、固より論ずるまでも無いことであらうと思ふのである。

精練されたる自己中心主義であつたならば、即ち本當の意味の個人主義であつたならば、何等不都合は無いのであらうが、何等訓練を經ざる我儘主義が日を追うて勃興して、青年其の他一般國民をも惑して居

るから困る。我國民の美德たる報恩の觀念も次第に乏しくなる傾きがあるやうに思ふ。

是れは私が或る學校から聽いて非常に驚いたことであるが、東京に於ける、さる高等敎育を授ける學校の卒業式の後に、例に依つて生徒が擔任敎師を招じて謝恩會を開いたところが、其の席上に於て一人の卒業生が演說をして『私は此の謝恩といふ意味が分らぬ。今日で謝恩會などゝいふことは全く舊式の言葉である。陳腐の言葉である。恩を謝すると云ふけれども、我々は少しも恩惠と云ふものを感じては居らぬ』斯う云ふ演說をした。とにかく、自分が敎育を受けた敎師を前に列べて置いて、さう云ふ大膽な演說をした。そして、『恩を謝すると云ふけれども、自分は恩惠を受けた感じがない。この學校へ這入るときには相當の希望を持つて這入つて來た。然るに、自分の期待しただけの敎育を受けることが出來なんだから、寧ろ不平を持つて此の學校を去るのである。不平を持つて學校を出ながら、恩を謝する會を開くなどゝは時代錯誤の會である。だから、今後、謝恩會などゝ云ふ虛僞の名稱は撤廢するが宜い』と斯う云ふことを滔々とやつたさうである。今までに曾てない恐るべき現象であるとて、其の席に列つて居られた先生が、私に向つて非常に慨嘆して御話しなされた。其の時、また一人の卒業生が起立して『元來この學校の文科の如きは甚だ無氣力でいかぬ。この文科からは一人の先覺も出ないではないか』斯う云つて演說したさうだ。講師の一人は此の事を非常に憤慨して居られた。

私どもが各地方を巡回して、地方青年の樣子を聞いたり、また、一般人心の傾向を其の土地の御方か

ら承つたりして、全體に亘つて考へて見ると、恩義に感ずると云ふ觀念は、よほど薄弱になつたかと云ふ疑ひがあるのである。

佛教に於ては報恩主義といふことを高唱されて居る。佛教道德は何であるかと云ふと報恩主義である。佛教では四恩と云ふことを說いて居る。

第一　國王の恩、國家の大恩である。

第二　父母の恩、兩親及び祖先の恩である。

第三　衆生の恩、衆生の恩とは社會相互の恩惠である。社會は共同生活である。互に持ちつ持たれつで居る。自分もまた他の爲めには恩人とならねばならぬ。之れと同時に、他の恩惠に依りて自分の生存を全うして行くのである。故に社會は相互に恩惠がある。之れを衆生の恩と佛教では申して居る。

第四　佛教の上に於ける大恩、卽ち佛陀大慈悲の恩惠である。

以上を四恩と稱して、佛教に於ては最も重大なる報恩道德の標準として示されて居る。平重盛が父清盛を諫めし言葉にも、『世に四恩あり、皇恩最なりとす』と云ふ言葉があるが、あれは佛教主義の道德に依つて、父清盛に意見をせられたのである。併し佛教に於ては、殊更に恩惠と云ふことを說いて、強いて報恩を強要すると云ふ意味ではない、恩に報いると云ふことが全く自然の人情であるのである。

西洋人は恩と云ふ樣なことはあまり說かない。說かねけれども、西洋人の友だち同士の友誼の厚いこ

と、親子夫婦の間柄、其の邊の狀態を聞いたり眺めたりして見ると、やはり他の好意に報いる、他の恩愛に報いる、御世話になつて居れば有難いと感ずるの情を有して居る。是れ全く人間自然の情であるからである。また他より親切を盡されて居れば、己れもまた自然と親切を以つて報いやうとするのは人間本然の情である。

其の間、自然の情に基いて佛教道德は說かれてある。釋尊が殊更に、報恩といふことを我々に强制せられたといふことではなくして、全く有難いといふ恩に感ずるの精神があつたならば、嫌でも應でも其の恩に報いざるを得ない、報いずには居られないものである。然るに今日は、動もすると恩誼に感ずるといふ觀念が、何うも薄らいで參つたやうな傾向がある。是等も御互に餘程常に警戒すべきことであらうと思ふのである。

三

また今日は、信仰、所謂宗教的信念と云ふものが、漸々薄弱になつて來て居やしないかと思はれる。尤も、各地方を廻つて、各地方の一部々々の方に接して見ると云ふと、近頃は寧ろ、宗教的信念と云ふものが餘程一般に要求されて來て居る樣に思はれる。從前は寺參りをしない、宗教談などは口にもしないと云ふ方が、宗教の硏究を致したり、また、宗教上の談話を非常に興味を以つて聽かれたり、宗教上の書籍を購

讃せられたりして、宗教味をよほど帶びて來たやうに思はれる。

併し、全體の上から見て、この宗教的信念なるものがよほど薄弱になつて來て居る樣な傾向がある。縱しんば宗教的信念があつても、堅實な信念がどうも乏しい樣に思はれる。形式に流れた信念、只だ昔の舊習を守つて居ると云ふ樣な信仰が多い。本當に眞に活々とした信仰と云ふものは十分に現はされて居らぬ樣に思はれる。是等は私ども宗教家と云ふ上から眺めると、斯ういふことが非常に現代の思想を惡化する基であるまいか。近來何うも國民思想の上に於て、何となく安心が出來ないと云ふことは、是等のこと、即ち信念の缺乏が土臺となつて居はしないかと感ぜられる。それで私は、皆さん方に御參考として申上げるのは、何處までも共同生活の意義に住して、報恩の觀念を厚うし、さうして、最も堅實なる信念を養つて行くと云ふことは、その人の位地の上下貴賤に拘はらず、また智識の有無に拘はらず、一般的に最も必要であらうと思ふのである。

それから佛教では勇猛精進といふことをいふ、これは人生の向上、思想の訓練の上になくてはならぬ標準と力とを說かれたものである。勇猛精進の四文字に就て、是れから私は一通り大體の型だけのお話をする。勇猛精進を銘々各自が自分の物として完全に實行して行き、また十分に咀嚼し研磨して修養唯一の指南者とせられたならば、非常に實生活の上に大なる意義と興味とを齎らすことであらうと思ふ。

第一に勇猛の勇といふ文字は常に勇氣と熟字して居る。勇氣は人間の力である。我々の精神の力が即ち

勇氣である。『能く勇なる者は義を守つて動かず』義を守つて動かぬと云ふのが眞の勇氣であらうと思ふ。吾々は守るべき義と云ふものがある。義を守つて毫末も動かぬ。如何なる艱難に住しても、如何なる辛苦に當つても、自己の守るべき正義、信義、德義または義務を堅固に守つて、毫末も其の守る所に動搖を來さぬ。是れぞ眞の勇氣である。私は禪宗である。禪家では坐禪をする。即ち禪定の力に依つて安心立命をすると云ふのは、やつぱり一種の勇氣を養つて行くことを第一とする行である。

世の中は始終此の春夏秋冬の四季が變遷するが如く、吾々の周圍の境遇も、或は順境の時があり、或は逆境の時もある、苦痛を感ずる時もあれば快樂を感ずる時もあり、仕合せの好い時もあれば仕合せの惡い時もある。吾々の一代といふものは、やつぱり此の天地の變化と同樣に、其の境遇の上に於て種々な變化があると云ふことは、御銘々經驗のあることであらうと思ふ。人は動もすると、順境の時には自ら安んじて油斷をする。逆境に出遇ふと云ふと頻りに不平を鳴らして、怨嗟の念に囚はれて、結局は深き煩悶に陷る。自分を觀ることは甚だ重くして、他人を觀ることは甚だ輕きに失すると云ふことは、立派な人でも免れぬ精神の弱點である。

私が申すまでもなく、近頃の日本の社會の狀態は如何であるか、堂々たる上流に立つて居る方であつて、忌まはしい評判を立てられ、新聞紙上に每日の樣に書き立てられて居る。或ひは不正事件といひ、或は疑獄事件といひ、それがどの位この社會の人心に向つて惡影響を及ぼして居るか分らぬ。私は、地位の高い

人ほど、此の點に付ては常に修養して、自ら深く警戒を加へて戴かなければならぬと思ふ。總て善惡邪正といふものを甄別する力に乏しいから誤つて惡い事をすると云ふよりも、十分に善を善とし、惡を惡とし、善惡共に識別して居つて、或る事情の爲めに制せられて、自身の心に惡いといふを能く知りながらそれを行ふ、善い事は善いと知りながら夫れを行ふ能はずと云ふのが多いのである。

古人も人格に三通りあると言うて居る。第一の人格は、『其の惡を惡として之れを去る能はず、其の善を善として之れを行ふ能はず』と、また支那の孔子も斯う言つて居る。

孔子が魯の國を通られた時に一つの城趾を見た。門人の子貢が孔子に向つて、是れは何人の城趾であるかと問ひしに、是れは郭氏の城趾であると敎へられた。草茫々と生い茂つて、石垣は崩れ壕は埋まつて、見る影も無い姿である。一體、郭氏といふのは如何なる人となりであつたかと尋ねると、孔子は『善を善とし、惡を惡として、智識の聰明な人であつた』と、如何にも內心憂へるところある面もちで答へられた。子貢は大いに驚いて『斯かる聰明の人にして斯くの如き末路を見ると云ふのは何う云ふ譯であるか』孔子はそれに答へて『彼れは善を善とするも之れを行ふこと能はず、惡を惡とするも之を去る能はず、智識は明かであつたけれども、實行の力が乏しかつた。即ち勇氣が乏しかつた』と仰せられた。是れが第一の人格に當り、即ち人格の劣惡なのである。

修養の力の存する人は、これから一歩を進めて『力めて善を行ひ、力めて惡を去る』といふに達する。

力めるとは即ち努力することで、非常なる覺悟と努力との力に依つて、辛うじて善を行ひ、辛うじて惡に遠ざかるのである。私どもは平生努力主義に依つて、常々善を行ひ惡に遠からんと心掛けて居るけれども、却々旨く行かぬ。自ら恥ずることが多い。吾々が此の世に處して人生の道中を進むには、常に善を行つて惡に遠かる様にせねばならぬが、それにはよほど精神の努力を要するのであらうと思ふ。

第三の人格は『善を行うて善を忘れ、惡を去りて惡を忘る』というて、此の修養努力が十分に成功すれば、所謂道德的に習慣となつて、努力せずして自づと惡に遠ざかり善に親しむこととなる。併し、それまでには非常なる訓練を要するのである。

四

北條時宗は我が國歴史上著名の偉勳者である。忽比烈の兵を筑紫の沖で以つて鏖殺したと云ふ豪傑であつた。幼年の時代から鎌倉の執權職と云ふ職を襲いで、位は僅か四位の位であるけれども、役目はと云ふと、只今の總理大臣で、海陸の元帥を兼ねたといふ様な仕事をして居つた。非常に任務が重い。ところが、段々學問をして自分の智識才能は發達をしたけれども、惜い哉、非常に臆病であつた。怯弱性であつた。是れではならぬといふので、祖元禪師と云ふ禪僧に依つて修養をしやうと心掛けられた。禪師は有名

一番最初に祖元禪師と相見の時の問答がなか〳〵面白い。人生の憂患怯懦を以つて最たるものとす、如何に

脱すべけん』と問うた。人間として一番に困り最も苦痛に感ずるのは臆病である。執權職の位置から言ふと、臆病にして勇氣に乏しく果斷力がなくては何にも出來ぬ。故に、怯弱が一番に人生の憂患である。如何すれば此の臆病を脱することが出來るか一つ敎へて戴きたい、斯う尋ねた。其の時に祖元禪師之れに答へて『脱すること最も易し、須らく怯弱の來所を閉づべし』禪宗流の挨拶である。怯弱を脱するは造作ない、臆病の出口を塞ぐのが近道ぢや、妙なことを言はれたものである。それで北條時宗は『怯弱孰れの所より來る』臆病は何處から出づるか、臆病の出口を塞げと云つても、一寸何うも解らぬ話、臆病は何處から出て來るかと云ふと、祖元禪師『時宗より來る』時宗は吃驚して『時宗怯弱を忌むこと甚し、曷ぞ時宗より來ると言ふや』、と言ふと、『試みに來日より時宗を放擲せよ』禪宗的な明快な說得である。お前の臆病と云ふいたづら者は、御前自身から出て居るものである、その自分と云ふものを棄てよ、自己放棄、是れが我々の臆病といふものを脱れる最善の方法である。自分を棄てよ。其の自分を棄てるには禪に依つて棄てるが宜い。それで時宗公は熱心に坐禪を實行して、禪定の力に依つて到頭自分を棄てることが出來たと見えて、終には『相模太郎膽甕の如し』といふ樣な大膽不敵の豪傑になつた。其の勇氣の源は何處にあるかと云ふと、小なる自己を棄てゝ、自分の全身が義に燃える、己れの全身が義で固まつて居る。其所からして眞の大勇氣が發生するのである。」

どんな人でも、覺悟の力に依つて非常に強くなるものと見える。私が二三年前の十二月の極寒い時分に、第三師團の各聯隊を訪問したことがある。其の時に、岐阜の聯隊に參つた日は十二月二十七日で、雪混りの大雨が降つて居つた。自働車を驅つて聯隊へ參つて、聯隊に慰問の言葉を述べて、直ぐ特科隊の方へ移らうとすると、『せつかくとお出になつたことであるから、何うか兵士に御話をして貰ひたい』といふことである。『承知致しました、けれども場所がありますか』、『場所は何うも適當な所がないから、營庭に一同を集めませう』といふことであつた。それで向ふに御任せして置いた。ところが私の御話をする演壇は將校集會所の玄關の處に築き上げられて、その前の廣庭に兵士一同を集めた。私は演壇に立つは立つたが、雪交りの雨がどん〳〵降る中に皆さんが立つて居られるから、何うも遣りにくいこと此の上ない。『たゞ簡單に御挨拶だけをして置きませう』と申しますと、『せつかく集まつたものであるし、殊に新兵が多いから、成るべく緩り遣つて貰ひたい』斯う云ふ御答へである。『だつて何うもこんなに雪混りの雨が降つては非常に御氣の毒ですから』と言ふと『ナアニそんな御心配は決して御無用、戰爭のことを思へば何でもありません。』

私は非常に其の時に感じた。是れは善いことを聽いた。縱へ雨の中に立つて居ても、戰爭と比較して見れば何でもない。兵士諸君も『戰爭に較べて見れば』といふ觀念を以つて雪の中に起立して居られる。其

ふものは偉いものだと私は思つた。何事でも此の通りであらうと思ふ。堅固な覺悟を有すると、最早小さい自分と云ふものは無くなる。自分と云ふことを棄てゝ卽ち其の全身を義に任せるのである。是れは銘々が平素其の職務を執行する上にも、斯くの如き勇氣が必要である。

五

東皐心越禪師と云へば、是も禪宗で有名な人、水戸黃門光圀卿が態々支那から招待して教へを乞はれた方である。光圀卿は非常に聰明な賢人であつた。妄りに迷信に耽ると云ふ樣な方ではない。自分が師と賴むには十分に其の人物を選ばなければならぬ。表に殊勝らしくして居つても、實行の伴はぬものが幾らもある。どんな人物であるか、その人物、卽ち人格を十分に試驗しやうと云ふ考へ、そこで、江戸小石川の水戸屋敷に於て色々の方法で試驗を爲された。是は有名な御話である。

先づ第一の試驗法としては、小石川の水戸邸内第一と謂はれた愛嬌のある美人を御側に附けた。朝から晩までその美人が側に附添うた。御給仕もすれば衣服の世話もする、何もかも親切に世話をした。さうして置いて、光圀卿は窃かに其の近侍に命ぜられて『和尚の態度を見ろ、和尚はあれに依つて滿足をして居るか、厭氣がさして居るか、迷惑相な風があるか、恥かし相な風があるか、どんな風だか能く見よ』と仰せられ、一週間も三週間も婦人を御傍に附けて、さうして和尚の態度を見守つて居つた。ところが、和尚

は別に喜ぶ風もなければ厭ふ風もない、極まりが悪いと云ふ風もない、恥かしがると云ふ風もない、滿足すると云ふ様子もない。ちやうど書生を使つて居ると同じ態度である。其の事を光圀卿に申上げる。『なかなか腹が出來て居る、何うも贋物ではなささうぢや』

それから第二の試驗法としては、或日、靜かな座敷で和尚と光圀卿とが對坐をして、今日は緩くり食事を認めながら閑談を試みやうと仰せられて、酒を呼んで一盃飲みながら四方山の話をして居るうちに、酒宴半ばと云ふ頃ほひ、改めて盃を賜はりその盃に滿々と酒を注がせ、今や和尚が盃を手許へ引かうとするときに、直ぐ一間ばかり離れた軒下で以つて、ヅドンと大砲を撃ち揚げた。それが脅かす爲めの大砲であるから、何うも天地も崩れるかと思はれる様な轟然たる大音響であつた。ところが、和尚は恰も聾者の如く聽こえぬ様子で、知らん顔をして其の盃を手許に引き、酒などは一滴も溢さない。また瞬き一つしない。平氣で靜かに其の酒を飮んで居る。誠に光圀卿も拍子拔けがして了つた。『せつかく閑談を試みやうとして居る所に、あんな物騒な音をさせて失禮をした、何うか氣に掛けんで貰ひたい』と言はれると、和尚は莞爾として『イヤもう鐵砲は武門の習いでござる。決して御斟酌あそばされまするな』そこで非常に其の大膽なる定力に感ぜられた。それと同時に一層歸依の念が高くなつた。で心越和尚は其の盃を飲み乾して『失禮ながら御返盃』と光圀卿に差上げて『私が御酌を仕る』と和尚自ら銚子を執つて、酒を滿々と注いた。光圀卿が今や將に其の盃を手許に引かんとする瞬間、和尚は『カアッ』と

大喝せられた。讎討であるのだ、伸び上つて一喝を震はれたのだ。思ひがけなき心越の一喝に依て、光圀卿は、盃を持つて居つたが手がブル〳〵とふるへ、酒がバラ〳〵と溢れた。『和尚。何を爲さる』心越はニツコリ笑つて『棒喝は禪門の習ひでござる、御斟酌は仕まつりませぬ』平氣なものであつた。光圀卿は是れよりして、一層、心越和尚に歸依せられて、水戸の城下に祇園寺と云ふ立派な寺を建てゝ開山に招待せられ、常に『弟子源光圀』と云つて師弟の禮を取られた。其の祇園寺は只今でも水戸市に殘つて居る。斯くの如きは本當の眞の勇者である。

孔子曰く『義を見てせざるは勇なきなり』と、孟子は『浩然の氣を養ふ』と言ふ。浩然の氣と云ふも、つまり大意志力、即ち精神の偉力の發露したる大勇氣である。また『志至焉氣次焉』と孟子は言つて居る。氣と云ふのは一種の精神の力である。精神の力が十分に充ちて居れば、其の義を守つて更に動かぬ。其の心志が大磐石の如くになつて、決して順逆の境遇に支配せられぬ。泥中に在つて泥に染まらざる蓮華の如く、萬境に處しながら超然として大解脫地に住するものである。

六

次に勇猛の猛の字は猛烈、猛威などゝ熟字して、大勇氣の外部に現はれたる力が即ち猛の字の意味になる。能く猛なるものは難に臨んでも屈せぬ。如何に困難なる場合に遭遇しても些とも屈せないのが勇者の

力である。自ら艱難を求めてそれを凌ぐと云ふのが一種の精神訓練法である。山中鹿之助は北辰妙見に祈願して『我に七難を授け給へ』と祈つたさうである。甚だ何うも物好きの様であるけれども、私に災難を御授け下さい、壯年の時代に於ては、自ら進んで難關に當つて行かうと云ふ猛威の氣象がないと、本當の勢力を現はす事は難しいであらうと思ふ。平生は精神の頗る堅固な人でも、一たび難關に當ると忽ち動く事がある。それが爲めに屈して了ふ場合がある。

乃木将軍は能く稗飯を召上つたと云ふ。凡ての點に於て非常に儉約を爲された。先達て東京の本郷で授戒會を勤めましたとき、乃木将軍の妹さんが授戒に就かれて、私と弟子師匠の約束を結んだ 二三度私の座敷へ來て貰うて、乃木將軍の事に就て色々と御話しを聽いた。將軍は五人の兄弟があつて、惣領は勇で卽ち乃木さん、次男は前原一誠の亂で死んだ眞人君である。尤も其の間に女の方があつて、小笠原家やらに行つて居られる。四番目が授戒に就かれた長谷川稻子と云ふ方である。五番目の方は周作と云つて那須野ヶ原に居られる。五人兄弟で三番目の男の方が早く亡くなられたのみで、乃木さん以外は三人の兄弟の方がまだ存命です。あゝ目出度い事である。そこで乃木さんの遺物として長谷川稻子さんより戒場たる喜福寺に納められたのは、將軍の羽織一枚、靜子夫人の紋服等である。其の乃木さんの羽織と云ふのは、那須野ヶ原で百姓をして居られた時代に拵へたもので、將軍に取つては上等の羽織であるが、薩摩絣にキヤラコの裏の付いた極めて麁末なものである。また靜子さんの紋服も極めて惡い小紋の綿服である。

而もそれが夫人に取つては一番上等の着物である。今日から見れば誰も着手の無い様な麁末なものである。

禪宗などに於て、執着心を去れと云ふのもそれである。禪的の修養から云へば『執着心を去れ』物に執着する念と云ふものを極力退けるのが、この禪宗流の修養法の一つになつて居るのであるが、是等はやはり本當の勇氣、精神の猛威力を養つて行くので、眞の勇者たらんことを期せしめるのである。我々は何か一種の執着心に囚はれると、遂には勇氣も挫けて了ふ。本當の力を現はすことが出來ず、境遇の爲に却つて自分が壓迫されて了ふ。

臨濟宗の支那の高僧で大慧禪師と云ふ御方は、有名な日本の白隱禪師などの法の祖先である。其の人の友達に法一と云ふ高僧があつた。この法一と大慧とは兄弟同樣の親しき間柄、禪宗で言ふ同參、普通で言ふと同僚の友である。

兩人が笠を冠つて雲水に出掛けた。後になり前になり道中して歩く。其の法一が大慧禪師の樣子を見るに、笠を被つて居るが、何か笠の中に自分の心を引かれて居る樣に見える。始終、笠の中に注意が籠つて居る。何うも變だと思つて、『何かあの笠の中に彼の心を引付けるものがあるに違ひない、一つ點檢をして遣らう』と云ふので、途中で茶屋に休んだ時、大慧が便所へ行つたのを幸ひ、其の間に笠の中を檢べて見ると、頭へ付ける處に小さな布團樣の臺が重なつてある。其の布團と布團との間に何やら物がある。それ

を引拔いて見ると、金の簪が入つて居つた。これは或る信者から大慧に與へたもので、『あなたは道中なさるから、其の途中に於て、何時病氣其の他不時の災難が起らぬとも限らない、萬々一にも然う云ふことがあつた際には、此の簪を賣つたならば三兩や五兩にはなるであらうから、之れを幾分の助けにして下さい』と言つてくれた品物である。

ところが、貧乏な雲水であるから『此の金の簪を落してはいけぬ、失くしては大變だ』と思ふ所から、つひ簪の方に氣を取られて居つたのである。それを法一和尙が見て取つたのである。『ハ、ア、彼の心を奪つて居るのは此の簪だな、俺が同僚の誼を以て彼の惡魔を拂つて遣る』と、其の簪を前の方の非常に流れの急な川の中へポーンと棄てゝ了つた。そんなことは知らずに、大慧は便所から出て手を洗つて、法衣を着て行きながら笠に手を掛ける。簪を見やうとすると簪がない。『アツ大變だ』と吃驚した。さうして恨めしげに法一の顏を覗き込んだ。すると其の時、法一は大喝して呶鳴つた。『我々大法の爲めに身命を惜まずして道を究めんと欲する者が、一本の簪の爲に精神を奪はれると云ふ事は何事ぢや、是は御身の爲めに非常な惡魔であるから、今、川の底へ打ち沈めて了つた』と呶鳴りつけられたので、大慧は思はず大地に頭を突けて禮拜した。『老兄に非ずんば此の語なし』ア、お前さんなればこそ、親切に斯う云ふ敎訓をしてくれて誠に忝いと、涙を流して感謝をしたといふ。誠に麗しい美談である。是等は皆な執着の念を打拂ふ勇猛振りを見るべきである。

今日、我々は動もすると、或は金錢の爲に迷ひ、または虚名の爲に誘はれ、堂々たる位地を有して居る人が、些々たる事の爲めにその一生涯を誤つて了ふ、と云ふ樣な事は澤山ある。將來益々國家の爲めに御活動をして下さる方々は、如何なる地位の高い方でも、如何に思想の堅固な方でも、自ら戒め自ら制し、十分に自ら其の身を戒飭して置くと云ふ事が最も必要であらうと思ふのである。

大中至正

一

宇宙萬象は實に正直の姿を現はして居る。天の萬物を覆ふや、公明正大にして少しも偏頗はない。地の萬物を載するや、公平無私にして微塵も依怙の沙汰はない。故に萬物は天地の誠に養はれて、生々發育してゆくのである。此の誠を吾々人間の上に現はすのが道である。

故に中庸には、「誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり」というてある。親が其の子を愛するのは、全く天性より出で、決して人前を繕らうのでもなければ、義理づくでするのでもない。赤子が其の母を慕ふのも、天性の自然で、是れを誠といふのである。大方等大集經には三種の實といふことを示されてある。其の一つは、

諸佛を誑かさず、

即ち信仰上の誠である。明治天皇の御製に、

目に見えぬ神に向ひて愧ぢざるは人の心の誠なりけり

目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけり

千早振神の心に叶ふらむわが國民の盡す誠は

とあるのは、正しく此の信仰の上の誠である。神佛は昭々として四海を照覽まし〳〵、冥々に吾々の心の底までも見そなはせられ給うて居る。此の光明を感じた時に眞の信仰が起る。此の信仰こそ神明に交通し佛陀に感應するの美德である。其の二には、

己身を誑かさず。

卽ち自己の良心を昧まさぬことである。口と心とが表裏したり、心には惡しと知りながら、外部を飾りて眞實らしく立ち振舞ふの類は、皆な己れの良心を欺くのである。縱ひ如何ほど學問才藝に通じ、金銀財寶に富み、又は高位高官に在らうとも、一點自己を欺くの心あらば、其の者の人格は全く墮落して了ふものである。如何に巧みな演說でも、噓があつては半文の價値も無い。どんな立派な書畫の類でも、贋物であつては有たぬに劣る。山ほど貨幣を積んでも、僞貨では一文にもならぬ。人間も亦是の如くで、所謂『誠なければ道なし』である。明治天皇の御製に、

思ふことつくろふこともまだ知らぬおさな心のうつくしきかな

言の葉の上ににほひて床しきは人の心の花にぞありける

人はたゞ誠の道を守らなむ高き賤しき品はありとも

と仰せあそばされたるは、誠を己れに體することの貴き御教訓である。其の三には、

衆生を誑かさず

即ち他人に對するの誠である。社會の生活上、最も大切なるは相互の信用である。若し互に相疑うて信ぜざれば、何事でも圓滿に行くものではない。而して、信用の本は互に正直を守りて人を欺かざるに在り。光明皇后は、

君臣信ぜざれば國政安からず、父子信ぜざれば家閨睦まじからず

とも仰せられて、誠實を缺き信用を失ふ時は、大にしては國家の安寧を破り、小にしては一家の平和を缺くに至るものである。然るに『人間萬事嘘の世の中』などゝ申して、とかくに誠の道を昧まし易いのが人間世界の惡習である。それが爲めに、容易に道德の光輝を發せられぬ。又、人を欺かんとする心も無く、知らず〳〵の間に誠の德を失ふ場合もあるから、曾子は『吾は日に三び吾が身を省る、人の爲めに謀りて忠ならざるか、朋友に交はりて信ならざるか、傳て習はざるか』と云うてゐる。

明治天皇の御製に、

思ふこと思ふがまゝになりぬとも身を愼まんことな忘れそ

思ふこと思ひさだめて後にこそ人にも斯くといふべかりけれ

うち向ふたびに心を磨けとや鏡は神のつくりそめけむ

等の、最と有り難き御教訓もあらせられる。

二

凡て世の中の事が複雑になればなる程、嘘をつくことが上手になり易いものである。されば大岡越前守忠相も『松ケ枝の直な心を保ちたし柳の糸のなびく世の中』と云ひ、僧正遍照も『蓮葉の濁りにそまぬ心もて何かは露を玉とあざむく』と歎かれてゐる。

元來、誠は天地の道であるから、誠ある人は其の心に限り無き樂みを得るものです。故に孟子も、『身に反して誠なれば樂み之より大なるはなし』というてある。又、誠の後援者は天地神明であるから、何事を爲すにも最後の勝利は誠に依て得られる。故に中庸には、『誠は物の終始なり誠ならざれば物なし』とあり、孟子は『至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり、誠ならずして未だ能く動く者あらざるなり』というてある。此の意を拙堂和尚は『八百のうそを上手にならべても誠一つに叶はざりけり』と詠ぜられた。

昔、支那五台山の麓に一老婆があつた。五台山は文殊菩薩の靈場である。そこへ參詣する雲水が、老婆に向つて『台山の路、何の處に向てか去る』文殊菩薩に參詣したいが、どう行けば宜いかと問ふと、老婆は『驀直去』と答へた。誰れが問うても、『驀直去』とのみいふ。そこで雲水の僧が三歩か五歩出懸ると老婆は、『好箇の阿師又恁麼にし去る』ア、好い坊さんちやが又ヒヨロ〳〵と出懸けなさるわいといふのであつ

た。是は禪門に於ける有名なる公案です。此の老婆の『驀直去』といふが眼目です。文殊は智慧の菩薩である。智慧は佛のお悟りだ。之れを佛知見とも般若ともいふのである、眞箇のお悟りは驀直去、即ち驀直に行くでなければならぬ。少しでも偏つたり枉つたりしてはならぬ。即ち誠の道でなければ佛知見は現はれぬ。活きたる文殊菩薩を拜まれぬ。維摩經に『直心是れ道場』とあるのと異曲同工である。參禪の上で申せば、祇管打坐の正當時、善惡を思はず是非を管せず、一切の妄想葛藤を打破し盡して大無我の境界になつた時、自己本來の面目、即ち本心佛性の誠が現はれて來るのである。此の佛性の德が身の上にも、口にも、心の上にも發揮する樣になれば、自づと神を敬ひ佛を信じて神人感應の大信仰となり、己れを欺かず、兄弟には友愛となり、夫婦には和合となり、親に向つては孝となり、君に對しては忠となり、朋友には信義となり、社會には博愛となり、業に服しては忠實となり、事に當りては忍耐となり、往くとして可ならざるは無しといふ境界になるのである。中庸には『誠は勉めずして中り思はずして得、從容として道に中るは聖人なり』とありて、誠は天性にあるものなれば、勉强せずとも自然の道に中り、思慮を費さずして得られ、從容として自づから道に合する、是を聖人といふのである。儒教といふも此の大中至正を說たものである。

三

大中至正に就いて、伊藤仁齋先生は次ぎの如くにいうてゐられる。『論語の書は、聖人大中至正の心を以て大中至正の道を説く、故に唯大中至正の人能く之を知る』といはれた。二宮尊德翁も、『夫れ我が敎は書籍を尊ばず故に天地を以て經文とす』と、又、予は歌に『音もなく香もなく常に天地は書かざる經をくりかへしつゝ』とよめり。如此、日々繰返し〳〵て示さるゝ天地の經文に、誠の道は明らかなり』というてある。

宋の賈黯は范仲淹に敎を請うた時、范仲淹は、『不欺』の二字を授けて、終身之を行へよと敎へた。黯は謹んで之を受けて忘れず、毎々人に語つて『吾は范公から二字を得て一生を用ても盡きぬ』というたとある。

又、宋の司馬溫公は名高い賢人である。人ありて先生は神に事ふるかと問ひしに『事ふ』と答へた。『如何なる神に事ふるか』と尋ねしに『心の神に事へる』というた。更に、何うして事ふるかと聞きしに『唯だ欺かぬを以て事ふる、君子は、上、天を戴き、下、地を履み、身を其の中に容れて居るから、之を欺かうとしても欺けぬ』と答へた。又、劉忠定公が『心を盡し己れを行ふの要、以て身を終るまで之を行ふ者ありや』と問ひし時、溫公は『其れ誠か』と答へた。更に『之を行ふに何をか先きとせん』と問ひしに、『妄語せざるより始めよ』といはれた。劉公、初めは甚だ之を易しと思うたが、退いて自ら守るに及んで、日々の行ふ所が其の言ふ所と矛盾する事が多い。そこで力行すること七年にして、而して後ち成る。

此より言行一致、表裏相應し、事に遇うて坦然常に餘裕ありといふ。嗚呼誠は一切道德の淵源にして、一切事業の基礎である。『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』吾々は常に誠の道を實踐して大中至正の德を修養せねばならぬ。

大中至正の德を養うて誠の道に達しても、自身一己の解脫では未だ最善の德とは申されぬ。即ち大慈大悲の願輪に駕して自ら生死海中に出沒し、普く一切の衆生を濟度するのが善の最上なるものである。

元來、佛の敎は唯心觀より出でゝ居る。尤も第一義諦に至つては、唯有一乘の法門を說き給ふに依つて、色心の二法を超絕して居ることは云ふまでも無いが、釋尊垂敎の本懷は、衆生をして迷執を脫し苦悶を脫せしむるを急務とせられたから、百千の法門も多くは唯心觀に出でざるはない。故に華嚴經には、

若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性は一切唯心造なりと觀ずべし。

と仰せられた。未來の問題でも、他方世界の事も、是を餘り遠方の事とのみ見ず、即ち自己方寸の中に收めて觀ずれば、日常の修養上に多大なる利益を被るものである。さればとて、指方立相の敎を否認するのではない。吾人は他方淨土說も、輪廻轉生說も、或る確實なる正道理の下に於て明かに之を信じて居る。されど實地に道を修めんには、總てを歸納し、自己の脚跟下に實現せんことを期するがよい。惠心僧都も『道といふことばに迷ふことなかれ朝夕己がなしわざと知れ』といはれた。弘法大師は『百千の陀羅尼之を貫き、萬億の曼陀羅之を一身に布く』と仰せられた。彼の淨土と稱する淨は善の變辭である。至善の世

界が淨土で、罪惡の國土が穢土である。吾人若し至善に止まりて毫も缺點なきに至らば、此の土が直に淨土である。維摩經に、

淨土を得んと欲せば當に其の心を淨むべし、其の心淨きに從うて卽ち佛土淨し

と仰せられた。佛教道德の實踐は、必ず是の如く實際的でなければならぬ。『唯心の淨土、己身の彌陀』と申せばとて、淨土門に反對した教であると思ふならば、大なる誤解である。『梁つたふ鼠の道も道なれど眞の道ぞ人の履む道』とは故行誡上人の御歌である。多種多樣の道の中の道と云ふ可きは人道である。人道の最極點に達したのが佛道であるに依つて、人道と佛道とは決して相離れたものではない。而して、人道の中に佛道ありとは云はれまいが、佛道の中には必ず人道がある事は確である。此の理を吾人が能く心得たならば、急いで佛道に入らねばならぬ。

佛教に於て淨土を得た人を、佛菩薩といふ。菩薩といふは、此に覺有情とも大士とも譯して居る。覺有情とは、一切の有情を化度して齊しく大覺の位置に昇らしむるの謂である。修證義に所謂

己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營む

のであるから、又は大人ともいふのである、大士の士は人といふ字と見ても差支ない。佛教に大小乘の二門がある。理智の深淺は別として、單に解脫の點に就ていへば、自己一身の解脫を期するのが小乘で、己れを捨てゝ普く衆生を利益せんことを期するのが大乘である。故に、小乘の善は小善で、大乘の善は大善

である。さればとて、自己を輕んぜよといふ意味ではない。之を一身の上で申せば、私情を離れて公道に順ふのが、最善である。又、家庭の上で申せば、一身の快樂を犧牲にしても父母・舅姑の爲めに盡し、兄弟・妻子の爲めに盡すのが最善である。社會の上でいへば、一家の幸福を第二として社會公衆の爲めに盡すのが最善である。國家の上でいへば、一身を抛つても國家の安寧と隆盛とに努むるのが最善です。

中根東里の壁書の中に、

父母をいとほしみ兄弟に睦まじきは身を修むる本なり、本かたければ末しげし、老を敬ひ、幼をいつくしみ有德を貴び無能をあはれむ、忠臣は國あることを知りて家あることを知らず、孝子は親あることを知りて已あることを知らず、云々

とあるは、何人でも必ず守らざるべからざる敎へであるが、何れも已れを忘れて他の爲めに盡すべき最善の法則である。然るに、吾人凡夫は、動もすれば我見我意といふ奴となりて、私意私情を張り通さんとする病に陷いり易うて困る。

明治天皇の御製に、

よしあしを人の上には言ひながら身を顧みる人なかりけり

と仰せられ、又

ともすれば搔濁しけり山水のすませばすまん人の心を

と仰せられしも、皆な我見と私欲とを御誡め下し置かれたものである。若し我見我欲を恣にすれば、忠孝仁義も皆な藏れて了ふこととなる。故に、大人は必ず己れを空しうして人の爲にし、所謂『獻身犧牲の精神』を以て國家社會の爲めに盡すのである。大人の大なる所以は、全く家を以て身となし、社會を以て身と爲し、國家を以て身と爲し、更に進んでは、天地を以て身と爲すに在るのである。

我國御歷代の天皇の大御心などは、盡く大乘の大德を備へあそばされてある。仁德天皇は宮殿損ぜしをも修めたまはず、三年の間、人民の課役を免じ、民の豐になりたるを見て『朕既に富めり、民の富は卽ち朕の富なり』と仰せられた。是れ卽ち民を以て御身とあそばされたのである。後鳥羽天皇の御製に、

夜を寒み閨の衾のさゆるにもわらやの風を思ひこそすれ

とあり、後嵯峨天皇の御製に、

なか〳〵に人より物を思ふかな世を思ふ身の心づくしは

とあり。伏見天皇は、

神や知る世の爲めにこそ身を思ふ身の爲めにとて世をば祈らず

と仰せられ、後醍醐天皇は、

世治まり民安かれと祈るこそわが身に盡きぬ思ひなりけり

と仰せられてある。何と有り難き御仁心ではないか。

取り分け、明治天皇の御仁徳に至ては、天地と共に窮り無い程であらせられる。明治元年、五箇條の御誓文を立てさせられて、帝國の國是を定めさせられ、其の時の御宸翰には、『日本國民の中、一人でも其の所を得ざる者があれば、皆な朕一人の罪なるぞ』といふ勿體ない御語さへあらせられた。されば御製にも、

罪あらば朕を咎めよ天つ神民は此身のうみし子なれば

と仰せられしと承はつて居ります。實に惶れ入つたる、貴くもまた忝き大御心である。露國と戰爭の折などは、一意專心に東洋の平和をのみ思召されて、

四方の海みなはらからと思ふ世になど波風の立ちさはぐらむ

と戰爭の禍亂を歎かせられ、

國の爲めあだなす仇はくだくともいつくしむべきことな忘れそ

と仰せられて、敵國の將卒を憐れませられた。殊に遼陽城陥落の際の如きは、我軍の勝利を御滿足遊ばされて御感賞あらせらるゝと同時に、『さるにても露國皇帝の御心中や如何ならん』と仰せられて、深くも御同情あらせられしと承つて居る。明治天皇の廣大なる御仁心は、獨り皇國を以て御身となさせ給ふのみならず、全世界を以て御身となさせ給うたのである。

四

釋尊は、

今此三界は皆な是れ吾が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾が子なり

と仰せられて、三界を以て身となし、一切衆生を以て子となし給うて居る。此の廣大なる慈悲が卽ち佛心である。されば各々は、內、誠の道を守りて至正の德を全うし、外、同情博愛の念を運らして普く四恩に報じ、以て大慈悲の妙用を現はすのが、聖代の國民として恥かしからざる眞箇の道德と申すものである。此の如き大道德に倣ひ奉りて、己れを忘れて道を守り、身を捨てゝも國家社會の爲めに盡し、一切衆生の爲めに利益を施さんとの大願心を發する時は、手の舞ひ足の踏む所ろ悉く佛事に非ざるはなく、百姓が鋤鍬を取り、商人が算盤を彈く上にも、佛果菩提の功德が莊嚴される。故に高祖大師は、

この發心よりのち大地を擧すれば黃金となり大海をかけば忽ちに甘露となる、これよりのち土石瓦礫をとる、すなはち菩提心を拈來するなり、水沫泡焰を參ずる、親しく菩提心を擔來するなり

と仰せられてあります。斯く廣大なる慈念を發すれば、其の心は既に天地と其の德を同じうするに依て、決して些々たる事情や一時の境遇の爲めに動亂することは無いから、自ら金剛不壞の大勇氣を生ずるものである。母が其の子を愛育するに當りては、其の愛念の爲めに非凡なる忍耐力も出來、男子も及ばぬ

ほど、勇氣も生ずる樣なものである。

、されば高祖大師は大心を發すべきことを示されて、大心とは不偏不黨の心である、而して其の心は大山の如くにして、八風吹けども動せず、又、其の心は大海の如くにして衆流を攝して漏らさず、故に、

春色に引かれて春澤に遊ばず、秋色を見ると雖も更に秋心なし

で、花を見ても花に迷はず、秋の夕暮に逢うても悲みに沈むこと無しと仰せられてある。吾々も能く此の大心を發すれば、日用の一擧一動も天地に充滿するほどの大德大行となり、自づから『有情非情同時成道』の功德を莊嚴するものである。

司馬溫公解禪の偈中に、

仁人之安宅、義人之正路、行レ之誠且久、是名二光治者一

の一首がある。禪としては固より半提の禪であるが、當らずと雖も遠からずである。仁を守り義を履み、之を統ぶるに誠を以つてせば、其の行ひ昧からず、其の家また道を明かにするを得べし、是れ豈に光明藏ならずや。此の光明藏を目前に現出するのが、唯心の淨土とも娑婆卽淨土ともいふのである。正月などは全く此の淨土の一現象ともいふ可きもので『元日や去年の鬼が禮に來る』どんな癇癪持でも、元日になると嬉しさうな顏をして居る。面白い事だ。されど此の喜びと芽出たさは習俗から生れたのであるから、ほんの一時的現象である。故に、

據を築き上げねばならぬ。そこで、余は常に家庭の四本柱なるものを御勸め致す。その四本柱とは、

一、柔和忍辱(勘忍)

二、至誠眞實(正直)

三、勇猛精進(勉強)

四、孝順慈悲(親切)

勘忍は無事長久の基、勘忍は生涯の守り本尊である。些々たる事に無益な腹立ちをする者は、臆病者である。老子も、『天下の至柔は天下の至堅に馳騁す』といふたが、勘忍力ある人は最大の勇者である。

また、人間に正直の徳が無ければ、人間たるの價値は無い。萬兩の財寶ありとも贋金では半文の價値もない。

勉強は人の動力だ、動力なき者は死人も同然である。唯だ愉快に動き、氣持好く働き、油斷なく隙間なく勉強せねばならぬ。

親切は最大の寶である。忠孝といひ、慈悲といひ、皆な親切の輝きだ。

以上の四本柱は身を立つるの本、家を齊ふるの基、世に處するの資、國家に奉公するの源である、道の光りは此の如くにして現はれてくるものである。

五

以上四本柱には一の堅牢なる土臺がなければならぬ。之が土臺とは信念である。信念の本はやはり心の誠だ。王陽明も『聖賢の學は唯だ一誠のみ』というた。表裏なく、虛僞なく、玲瓏玉の如き誠心を養ひ得ば、自然に、智、六合を照し、德、十方に輝く底の大覺妙髓に合致して、そこに無限の歡喜と絕大の安心とを得るものである。人の心には智・情・意の三作用がありて、鼎足の如く相離れざるものであるが、修養の方面からいへば、情が中心である。智は眼の如く、意志は足の如くである。智眼を借らざれば邪見に走り易く、行足に依らざれば實踐し難し。情には優美なるあり、醜劣なるあり、之れを淘汰することが省察存養の道である。中に就てありがたいといふ情の如きは、忠義を勵み孝行を務め、善順服從あらゆる美德を產み出すものである。次に勿體ないと感ずる情がある。身を愼むのも、儉約を守るのも、皆な此の情の力に依るものである。次にきのどくな可愛さうなといふ情がある。諸佛菩薩の大慈悲といふも此の情の發現に過ぎぬ。而して、信念なるものは、ありがたいといふ情に關する至誠の偉力であるから、國家に對して絕對的報效三昧に入る者は國家的信念を得た人である。

更に一步進めて、佛陀の大慈悲大行願に歸依して絕對的安心を成ずる者は、宗教的信念を得た人である。信念ある者には必ず滿足がある。而して、永遠の希望が充たされて居ることに依つて、大信念の下には、

死生幽明の隔ても無く、内外二魔の束縛も無い。
故に大信念の中には必ず大解脱あり、大解脱の中には必ず大活動がある。信念は、名誉とか、利益とか位階とかの所謂俗界を超越したものである。此の信念の土臺を確に立てた上に築く四本柱ならば、洵に以て、めでたくもまた喜ばしい月日のもとに、淨土遊びをなすことが出來やうと思ふ。人々悉く道器、日日是れ好日、願くは皆さんと共に永く此の道の光に照されたいものである。

青年と佛教

一

青年は我國民としての精華である。平和の戰爭とも謂ふべき生存競爭の世界的舞臺に起つて、第二陣の地位に列し、國家將來の運命に對して能く其の優勝を保證し得ることは、實に現在青年の健全なる活動に依らねばならぬ。現在の青年が、玆五年か十年を經過せば、忽ち先鋒隊となりて世界を對手に奮鬪し、十五年か二十年を經過せば、忽ち國民の樞軸となり、先輩となり、指導者となりて、國民としての所有義務を双肩に擔ひ、上は天皇陛下と、皇祖皇宗とに對し奉り、下は祖先と其の子孫とに對する、一切の責任を引受けねばならぬ。

如何に現在の大政治家・大敎育家・大實業家等が、心血を注いで努力したればとて、若し其の後繼者たる青年にして、實力に乏しく、活動に鈍く、世界的平和の戰爭に應ずるの準備と訓練とに缺くる所があつたならば、國家的事業の總てが、恰も後援なき軍隊に齊しきを以て、頗る孤城落日の感なきを得ぬではないか。さすれば現代の青年諸君は、能く其の地位と責任との重且つ大なることを自覺し、常に我國家に於

ける、第二の柱石、第二の中堅を以て自ら任じ、而して、之に應ずる準備と修養とに勤勉努力せねばな

ませぬ。

日露戰爭に於て絶大の勝利を贏ち得たる我が帝國が、一躍して世界一等國の班に列することを得たるのは、寔に同慶至極のことであるが、國家内外の實力が、果して一等國として、寸毫も缺くる所が無いといはるゝであらうか、一等國たるの榮譽を永久に持續し得るに於て、何等懸念する所が無いといはるゝであらうか、是れ實に吾々國民たる者が、深く察し遠く慮るべき重大なる問題であります。

抑も世界の一等國と稱せらるゝものは、兵力と富の力とに於て最も優越なる位置に居らねばならぬ。我國は兵力の點だけは確に一等國たるの實力あることを證明されて居るが、富の力に至つては、なか〳〵一等國として世界に誇るべき實力は無いのである。我國の貿易は、近年頗る盛んになつたとは申しながら、僅かに四億萬圓臺を出でぬさうです。それも近頃の調査に依れば、輸出額が四億三千二百四十一萬三千圓で、輸入額が四億九千四百四十六萬七千圓であるから、約五千萬圓ほど輸入が超過して居る。之を佛國の二十二億圓、米國の三十七億圓、獨逸の三十五億圓、英國の五十一億圓等に較べたならば、到底、御話にはならぬ。文明の進度を測るべき照尺ともいはれる鐵道の上から見るも、英の二萬三千哩、佛の二萬九千哩、獨の三萬六千哩、露の四萬一千哩、米の二十二萬八千哩に比して、我國は僅かに五千〇九十四哩に過ぎぬ。その殖民地の比較に至つては、とても比較どころではない。商船の數だけが露國より勝れて居る

と申すことであるが、英米獨佛等よりは猶ほ數十等劣つて居るといはねばならぬ。其の他、鐵や石炭等の産額に於ても、到底、對等の位置ではない。

或る學者の說に依ると、我國の財力は僅かに百十七億圓を出でぬといふことである。英米等では一銀行でも、我國の全財力以上の資力を有して居るものがあるとのことである。此の外、殖産興業等の各方面に就て仔細に觀察して見たならば、我國は多くの點に於て、甚しき缺陷あることを證明し得らるゝであらうと思ふ。果して然らば、我國民たる者は上下心を一にして、此の缺陷を補塡して我國力の充實を圖り、將來益々發達に發達を加へて、獨り一等國として世界に愧ぢざるのみならず、優に歐米各國を凌駕する程の勢力を作らねばならぬではありませんか。

僅々四十餘年の間に、斯くまでに長足の進歩を遂げたる我國の國民が、勝て冑の緒を締めて、今後益々油斷なく、所謂華を去り實に就き、荒怠相誡め、自彊不息にし去つたならば、五大强國の一として最も遜色ある現在の狀態も、決して徒らに悲觀すべきではない。唯だ恐るべきは國民の荒怠と油斷とである。「苦にやむな金は世上に撒てある欲くばやらう働いて取れ」、勉强の力は能く瓦を變じて玉と爲し、砂を化して黄金と爲すの能力があるものである。世界の大勢を察し、世界を以て富を作るの田地と爲すの志あらば、世界の財力をも我國に吸收することが出來るであらう。要するに、我國が世界の一等國として、益々全世界に横行濶歩することが出來るか、または一等國といへる看板が張り切れぬやうになるかは、全

く我國民の精神と努力とに依て分るゝのである。

或人が、東郷大將の日本海大海戰に『皇國の興廢は此の一擧に在り』と示されたる信號は、平和の今日に於ける我國民の覺悟と爲さねばならぬと云はれたが、實に尤もなることゝ思ふ。即ち我國の興廢は此の一時機に在るのである。而して、此の一時機に於て、最も多くの責任と義務とを現在及び將來に負ふ所の者は、實に我國の青年諸君であると謂はねばなりませぬ。健全なる青年は能く國家の威嚴と信用とを高め、また能く國家を莊嚴して花よりも麗はしからしむ。故に、實力ある青年諸君こそ、正しく國民の精華であります。

二

凡そ人間は、何事を爲すにも覺悟が一番大切である。覺悟といふは、自己の責任を自覺して、誓て此の責任を果たさんとの決心を定むることである。敵を知り己れを知る者は事必ず成る。故に、深く世界の大勢と時代の趨勢とを觀察し、而して己れの責任を知り、此の責任を盡すが爲めには、如何なる艱難にも打勝つことが出來るといふ、大自覺と大勇氣とが無ければ、決して二十世紀に處すべき我が大和民族の青年とは謂はれませぬ。

例せば學生の如き、『男兒立レ志出ニ郷關一、學若不レ成死不レ還』との大志を確立して故郷を立出ても、

足一たび都會の塵を踏めば、俗眼を喜ばしむる色、俗耳を娯ましむる聲、此等の誘惑する所となりて、遂には貴重なる一生を誤り、墮落の淵に投ずるに至る者さへ少なからぬではありませんか。是れ皆な學生としての責任を忘れ、大自覺を閑却した爲めである。

故に明治三十九年の頃、時の大學總長山川健次郎博士が、現代青年學生の訓戒として、我佛教の五戒に擬らうて五戒を說かれたことがある。卽ち、一に忘國戒、御國を忘れぬこと。二に奢侈戒、奢りを制すること。三に邪婬戒、品行を愼しみて情欲に打克つこと。四に妄語戒、正直を守りて虛僞を言はざること。五に輕生戒、自己の生命を重んじて、自ら求めて危險の場所に立入つたり、または妄りに生命を自暴自棄するが如き振舞を爲さゞることであります。更に積極的に五德を擧げて、一に忠。二に勇、卽ち沈勇。三に潔、卽ち廉直潔白なること。四に斷、卽ち決斷の勇氣あること。五に勉、卽ち勤勉力行の德である。此の五戒五德の如きは、獨り學生ばかりではない、一般青年にも最も必要なる教訓であらうと思ふ。

辨意經と申す御經には『五事人中に生ず』というて、眞實の人間となるには五通りの事柄を實行せねばならぬと說てある。其の五通りとは、第一が布施、第二が持戒、第三が忍辱、第四が精進、第五が忠孝である。是を今日の普通の語に改めてみれば、慈善と修身と忍耐と勉强と義務との五通りであります。

始めの慈善といふは、常に同情慈愛の念を抱き、己れを捨てゝも普く他に仁惠を施すをいふ。これにも

財施と法施との二つがあつて、物質的仁惠が財施で、精神的仁惠が法施である。敢て必ずしも下を愍むのみが布施ではない、上を敬まひ貴びて誠心を以て之に事へ、且つ之を供養し奉るのも亦布施であります。されば布施の行は、本性の慈悲、即ち利他心の發動である。此の利他心ありてこそ、人間一切の道德が成立つのであります。

第二に修身といふのは、其の心を善良にして其の身を修むることです。釋尊は良心を調節するの標準として、戒法なるものを定められた。戒法とは防非止惡というて、身口意三業の上に於て非を防ぎ惡を止むるの規則である。その戒法には大乘小乘等の別ありて、甚だ精密なるものであるが、我が曹洞宗所傳の戒法は總體で十六條の大戒、即ち十六箇條に過ぎぬ。此の十六箇條の中に世間・出世間に所有道德的法則を攝して居るのであります。併し是れはなか〱難かしいもので、天下廣しと雖も、人類多しと雖も、能く其の身を修めて毫末も遺憾なき者に至つては、寥々として曉天の星の如くではあるまいか。

大學にも『天子より庶人に至るまで壹是に身を修むるを本となす』ともありて、修身は學問の最大基礎であるにも拘はらず、容易に修身の實を擧ぐることが出來ぬといふは、畢竟、學道の念が薄弱であるからであらうと思ふ。學道といふは、道を學びて道を已れに體せんとの志を立つることである。換言すれば、人として恥かしからぬ人とならんとするの志を立てゝ、修養を積むことです。伊藤仁齋の歌にも『思ひとれば此の身の外に道もなし身を守るこそ道を知るなれ』とある通り、修身は大道を通ずるの基本

であります。孔子が『三十にして立つ』といはれたのも、道に志し、身を修め、以て人の人たる精神の獨立したるをいうたものであらうと思ひます。

名譽も人の欲する所、利益も人の望む所、此の天性の欲を全然棄てよとは佛も仰せられぬ。小乘教等に於て、極端なる禁欲主義を説かれたのは、卽ち隨機方便の施設である。唯だ人間としては名譽や利益以上に、更に崇高なる希望を有せねばならぬ。然らざれば、一生の事業も全く名利の奴隷となり了るに過ぎぬことゝなる。崇高なる希望とは、人としての道を踏み、人としての德を修むることです。此の道の爲めには、場合に依りては名譽をも捨てねばならぬ。此の德の爲めには、場合によりては利益を顧みるの暇が無いこともあるものです。縱ひ火水の中に投ずるとも、一歩も道を枉ぐること無く、劍樹刀山の間に陷るとも、微塵も德を損ずること無しといふの大勇氣がありてこそ、獨立自尊の人といふことも出來るのである。

かゝる覺悟を有するに非ざれば、二十世紀に於ける世界の一等國たる青年とはいはれぬ譯であります。

三

併し人生には、種々の誘惑物が多い爲めに、縱ひ一旦は立派なる覺悟を有しても、見る物、聞く物に惑

はされて、何時の間にやら其の覺悟を忘るゝ様なことゝなるものである。田地に植付ける稲を見ても、發育の時節や、今や將に實を結ばんとする時期になると、水害や風害に罹り易いのである。人間の一代に就て見れば、一番天災地妖の禍に罹り易いのは青年の時代であります。故に、青年の時代は最も精神の修養に努めねばなりませぬ。而して、修養の基礎となるべきものは忍耐と勉強との二つである。

如何に修養に努めんとするも、忍耐と勉強との二つの力が無かつたなれば、恰も汽車の汽罐に石炭の無いやうなもので、到底、其の目的を達することは出來ませぬ。そこで佛は、第三と第四に忍と勉、即ち忍耐の勇と勉強の力とを御示し下されたのであります。忍耐といふにも生忍と法忍との二通りがある。不可意の境、すなはち氣に入らぬ相手に向うても腹を立たぬ、これを生忍といひます。或人が、腹の立つ事のあつた時には、しばしの間ジツと耐へて、つまり腹立の日延をせよというた。これも修養上の一方法であるかも知れぬ。そこで拙衲は、某信徒の需めに應じて、かういふ事を書てあげたことがある。

徳川家康公は、堪忍は無事長久の基といひ、蓮如上人は、堪忍は生涯の守り本尊と仰せたまひぬ。之を守らんとせば、心に叶はぬ事に接する時は、思ひ切て一兩日腹立つことを延期すべし、是れ克己安心の法なり。

　　氣に入らぬ時のありせばやゝしばし腹たつことの延引をせよ

次に境遇または自然界の壓迫を忍へることを法忍といひます。即ち寒暑饑渇、其の他所有艱難に打克つ

のであります。要するに忍耐といふは消極的勇氣です。其の精神勇氣が積極的に現はれたのが即ち勉强であります。

茂木廣善の歌に『夜もなほ業を勤めよ世の中は寢て待たぬこそ果報なりけり』とあるが如く、勉强せざる者には成功も無ければ幸福も無い。故に、カーライルは『此の日永遠より來り、夕に及んでまた永遠に復る、白日復た來らず浪費せざらん事を勉めよ』といひ、支那の朱晦庵は『少年老い易く學成り難し、一寸の光陰輕んずべからず』というてあります。然るに現今、我國民の一部に存する理想としては、早く金持にでもなつて、寢て居て樂の出來る樣な幸福者にならんことを目的として居る者もある樣であるが、以ての外の心得違ひである。人間の事業は何時まで行つたからとても際限のあるものではない。

故に菩薩は、四弘誓願というて『衆生は無邊なるも誓て之を濟度せん、煩惱は無盡なるも誓て之を斷滅せん、法門は無量なるも誓て之を修學せん、佛道は無上なるも誓て之を成就せん』との大誓願を發し、生生世々を盡して此の願行を果たさんことを期したまふのである。卽ち、第一は慈悲博愛の行、第二は迷を轉じ惡を離るゝの行、第三は智を磨き德を修むるの行、第四は理を證り道を得るの行である。而して其の目的は、國王・父母・衆生・三寶の四恩に報答するの爲めであるから、辨意經に第五に忠孝と御說きになつたのであります。

申すまでも無く、我が日本國民の道德は忠孝一本であつて、忠と孝とが道德の根本となつて居るのであ

る。故に教育の御勅語には『我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは、此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に玆に存す』と仰せ下されてあります。克く忠に克く孝にといふのが、正しく國民道德の基礎を示されたものです。『爾臣民父母に孝に兄弟に友に』といふより都合十五點の德目の標示せられてあるが、其の歸する所は忠孝の二道の分科であります。忠義というても、決して、租税を納むるとか、兵隊に出るとか、國憲國法を守るとかいふこと許りのものではない。親に對して孝を盡し、朋友及び社會に對しては信義を守り、恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし、學業を勵み智德を進るに非されば、眞に陛下に忠良なる者とは稱せられぬ。

孝行の上からいうても同じことである。つまり孝友和信より義勇奉公に至る十五點の德目が、殘らず、忠義の仕方、孝行の遺方を示されたものとも見ねばなりませぬ。唯だ國に在りては皇室を以て中心とし、家に於ては父母を以て中心とするが我國の道德であるから、百行の基礎を忠孝の二つに定められたのです。而して、君に忠なる者は自づから孝となり、親に孝なる時は自づから忠となる。即ち忠孝元來不二であります。故に御勅語には、明かに此の意を御示し下されて『是の如きは獨り朕が忠良の臣民たるのみならず、又以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らん』と仰せられたのであらうと思ひます。

四

善戒經には四力といふことを說てある。即ち內力と外力と因力と莊嚴力とであります。力とは勢力である。青年たる者は時代の健兒であるから、國民勢力の根源とならねばなりませぬ。勢力というても、法律上や財產上の權力をいふのではない。即ち精神的氣力のことである。青年の氣力にして萬一薄弱の樣では、何事も成功は出來ませぬ。唯だ注意すべきは氣力の濫用であります。それには此の四大力を以て、勢力開展の標準とせねばなりませぬ。

第一の內力とは、自己に對するの勢力です。これにも消極的と積極的とがある。消極的とは所謂自制・自護・自訓の勇氣です。即ち自ら其の私を制し、其の德操を護り、自ら己れを警戒し指導して、誓て人間の本分を守らんとの志を確立することである。積極的とは崇高なる理想を發し、如何なる艱難辛苦を嘗むるとも、誓て其の理想の域に達せんことを期するのである。之を佛敎の上から申せば、佛陀の境界こそ最も崇高なる理想であります。『佛祖の往昔は我等なり、我等が當來は佛祖ならん』と御開山が御示し下された通り、必ずや佛祖の道を明らめて其の功德を成就し、第二の釋尊となり、第二の阿彌陀如來ともならんと欲する心である。次に外力とは客觀的勢力です。即ち一切の衆生を利益せんとの大願を發して、常に社會の安寧、國家の隆盛、人類の幸福を目的とすることである。

第三に因力といふは、生れ易り死に易り未來際を盡して佛菩薩に師事し、忍耐・勉强等の所有精力を發揮して、自利々他の功德を成就することに努力するのであります。儒書にも『三軍は帥を奪ふべし匹夫も

志を奪ふべからず』とあるが、縦ひ水火に逼まらるゝとも、一毫も其の志を動かさぬといふ勇氣が無ければ精神の獨立したる青年とは申されぬ。

二宮尊徳翁は、常に床の間に不動尊の名號を書せる掛物を掛けて居られた。或人が『翁は不動樣を信ぜらるゝか』と尋ねしに、翁は之に答へて『私は壯年の時に小田原侯の命を受けて野州物井の郷に來た。處が、人民は離散し土地は荒蕪に屬して、殆ど手も着られぬ樣であつた。そこで私は、功の成否はともかくとして、一生此處を動くまじと決心した。例ひ何んな出來事があつても、背に火が燃つくとても、決して動くまいと死を以て誓うた。そこで、不動尊とは動かざれば尊しといふのであるから、特に本尊樣にしたのである』といはれたさうです。青年諸君は斯の如き大決心を有せねばならぬ。これが因力であります。

第四に莊嚴力とは、莊嚴は嚴正なる莊飾といふので、つまり法に契うた美觀を現はすの力である。縱ひ如何に精神が潔白にして且つ堅固でも、萬一、外形上の美觀に缺くる所があつては、やはりいかぬものである。卽ち風俗や儀式の上に於ても、一國の裝飾が文明的でなければならぬ。勿論、虛飾や虛禮は人の信實を害するものであるから宜しくない。道理と實際とに適合したる裝飾なれば、是非とも之を施さねばなりませぬ。優美なる文學、暢明なる辯舌、淸麗なる建築等も、皆な世の中の莊嚴です。故に佛敎では福・慧の二莊嚴とも申してあります。殊に同情博愛の念に厚きことや、慈善的經營の如きは、盡く是れ

身を飾り行を飾るの大莊嚴であります。

以上四箇の大力を有せざれば、文明的青年の大活動は出來ませぬ。四十二章經には『夫れ道の爲にする者は、譬へば一人と萬人と戰ひ、鎧を掛けて門を出るに、意或は怯弱し、或は半路にして退き、或は格鬪して死し、或は勝つことを得て還るが如し。沙門の學道は當に其の心を堅持し、精進勇鋭にして前境を畏れず、魔羅を破滅して道果を得べし』とあるのも、皆な氣力涵養の必要を示されたものである。

明治天皇の御製に『くろがねの的射し人もあるものを貫ぬきとほせ大和心を』と仰せあそばされてあるが、苟も我が國民たる者は、常に此の覺悟を以て萬事に當らねばなりませぬ。然るに我國の青年には、動もすれば小成に安んじたがる傾きがある樣である。また、地位權勢や財産以外に氣高い大理想を有して居る者が少ない樣な趣がある。所謂大國民的の氣象に於て、多少の缺乏を免れぬ樣に思はるゝのは甚だ遺憾であります。是れ畢竟、信念の修養が足らぬ爲めであらうかと思ふのである。

五

近頃は政府に居る方々の中にも、頻りに信念の鼓吹に努めて御居でる方が多い。また、各地方ともに信念の必要を感ずる所から、自然、官公吏及び敎育家等と宗敎家とが増々接近しつゝある樣に見受けられます。宗敎家もまた其の布敎方法が自づと、社會的、倫理的、現實的方面に敎義を應用して來た樣であ

ります。

佛教眞諦の法門は、無論、成佛得道を期するのであるから、超世間的の處に其の根據を有して居るは當然であるが、宗教なる者が國家の要素として世に立つ以上は、一面には佛教の根本義を弘通すると同時に、專ら國民道德の基礎を確立して、國運發展の本を養ふことに努力せねばなりませぬ。殊に我國の青年は、甚だ信念に乏しいことは事實である。青年の佛教に對する態度を見れば直に解ります。尤も、近年に至りて、青年諸君の中で、非常に眞面目に信念を涵養して居る人も少なくはない樣であるが、一般の上に就て見れば、まだ〱信念は行屆いて居らぬ。試に青年に向て、『君が佛教に對する觀念はどうか、佛教とは如何なるものであるか、君が道德的理想の基礎はどこに在るか、君の精神的快樂はどこに根據を有て居るか』と一々尋ねて見たならば、能く之に答ふる人は、恐らくは甚だ少數なことであらうと思ふのである。

然らば、如何やうに信念を發すべきやといふに、いふまでも無く崇高なる人格、換言すれば智德圓滿なる佛陀に歸依し奉るのである。佛陀の光明は宇宙に充滿して照さゞる隈もない。華嚴經には『佛身は法界に充滿し普く一切群生の前に現ず』とある。宇宙の大精神の融合一致せられたのが佛の境界であるから、宇宙の大精神の存する處、盡く佛の大光明の輝く所である。此の大光明の内には、限り無き智慧と窮まり無き慈悲とがある。此の智光に接すれば、衆生の迷雲は自から霽れ渡りて跡形も無くなる。此

の慈光に觸るれば、信心歡喜の念内に發し、從前の煩惱業障は泯然として鎔解して了ふのである。縱ひ逆境に處するとも、縱ひ無人の境に彷徨とも、縱ひ生死岸頭に臨むとも佛の智光に照され佛の慈悲に包まれて居ることを感ずれば、得も言はれぬ喜びと樂みとは、溢るゝばかりに此の身心に充ち滿つるものであります。これと同時に、能く其の獨りを愼しみて、心の底より道を守り職に勵み、所謂忠實業に服し醇厚俗を成すに至るものであります。

斯くの如き信念を發起するには、先づ以て無我の修養を積まねばなりませぬ。無我というても、馬鹿になることでもなければ、枯木の樣になることでもない。即ち『おれが』といふ我儘根性を去りて、天地の公道に服從することである。本より極端に欲を禁ずるのではないが、或點までは欲を制せねばならぬ。とかく人間といふ者は『おれが』といふ塊物の爲めに、種々の煩惱を引起すものである。夫故に、青年時代には萬事を愼しみて、欲情を制限する克己の修養が必要であります。

坂田公時は大丈夫たるの人物であつたが、或人が『貴殿は如何なる修養を積まれたか』と問ひしに、『予は臆病の稽古を致しました』と答へたさうです。臆病の稽古といふは萬事に愼しみの深いことである。一言一行をも等閑にせず、一擧一動をも輕々しくせざる所に、眞の大勇氣が現はれます。是れ即ち無我的の修養です。

徹底無我の極致に達する時、忽然として大我が現はれる。小勇を捨てゝ大勇を得、小仁を離れて大仁を

成じ、小智に滯らずして、大智に進む、これを『無我の大我』といふのであります。もつと具體的に說明すれば、社會國家の爲め公利公益の上に大活動を演ずるのが大我である。是を大慈悲心ともいふのである。佛祖の神通光明といふのも、盡く是れ大我の圓滿なる發動であります。

青年諸君が、此の大我的精神の氣力を有すれば、箇々の大我が集合して、遂に國家的大我が現はれますれば、我が帝國は實に嚴然たる金城鐵壁です。縱ひ我國小なりと雖も以て全世界を服するに足り、我國狹しと雖も以て天下に橫行步濶するに足れり。武力に依りて世界の一等國となりし我が帝國は、經濟及び其の他の方面に於ても、優に一等國たるの實力を保有せねばならぬ。而して、其の責任は實に青年諸君の双肩に懸つて居ると申さねばならぬ。御國の興廢は全く此の一時機に在るのである。

抑も國家の大恩、父母の大恩及び社會の恩惠に酬ゆるは、吾々お互の最大義務であります。而して其の恩德に報ずるの道は、修證義第廿九節にも『唯當に日々の行持其の報謝の正道なるべし』とあるが如く、日々夜々の吾人の勤め行ひが眞の報恩行である。大道元來近きに在り、寶所豈に夫れ遠からんや。青年諸君は宜く佛敎の精神に基きて確乎不拔の信念を養ひ、能く前に述べたる四種の勢力を增進し、四弘誓願の馬に鞭ちて五事の大道を實踐し、飽まで男性的に、活潑に其の本分を盡し、以て國運發展の本を確立することに努力せねばなりませぬ。

是れやがて國家忠良の臣民にして、取も直さず、佛祖の愛子となることが出來るのである。

若し能く是の如くならば、人生の本務、佛教の目的において、亦た遺憾なきことを得るであらうと思ひます。

女子と佛教

一

今日は佛教の上から、女子の心得を御話致さうと思ひます。それには、先づ以て佛教上に於ける女子の位置を説明して置く必要があらうと思ふ。

元來、佛教の目的は轉迷開悟・離苦得樂・止惡作善に在るのであるから、衆生の根性と時代の狀況とに依りて、種々樣々に御教へ下されて一樣ではありませぬ。或は女子を以て惡人と說き、邪見人と說き、其の甚しきに至ては『女人不成佛』で、女子には成佛の資格は無きものぞとまで說てある。併し是れは、女子の弱點を指摘して、それをして轉迷開悟せしめんが爲め、最も痛切に御叱りなされたものである、といふことを忘れてはなりませぬ。故に要する所は、女子たる者が能く其の弱點を自覺して、自ら十分の修養を施し、以て佛果菩提に證入せしめんとの、大慈悲心より御示し下されたに外ならないのであります。また、男子の女色に迷ふ者を誡めて、其の迷夢を覺さしめんが爲めに、手ひどく女子の惡德を指斥せられた場合も少なくない。

加之、古へに在りては、東洋は總じて女子に對する教育が甚だ不充分であるばかりか、男尊女卑の風習は自づと女子を輕蔑する所より、女子自身も亦たその輕蔑に甘んずる樣になり、其の結果は女子の志操をして卑劣ならしめ、從てその智識も道德も、甚だ淺薄にして且つ極めて幼稚てあるのである。尤も、古來よりして女子にして賢良の德に富める者も少なからず、貞女烈婦、忠信孝悌の女子は勿論、往々にして、堂々たる大丈夫をも壓倒する程の才媛も頗る多いことは言ふまでも無いが、概して言へば、思想が狹隘で品性が賤劣であることを免れぬ。これ全く時代や境遇の然らしむる所であります。況てや釋尊御出世當時に於ける印度婦人の如きは、女性の特長たる和順貞潔の德は開發せられずして、その短處たる姧を好み華を衒ひ、虛榮を貪り恩愛に偏することのみ多かつたものと思はれます。諸經論に於て女性の惡德を列擧せられてあるのは、全く當時の實際を寫されたものであらうと思はれます。

佛教の本領、殊に大乘佛教の根本義より論ずれば、一切衆生悉有佛性、草木國土も亦た悉皆成佛の理を談ずるのである。況てや同じ人間の中に於て、男女を區別して成佛不成佛を論じたり、生理組織の相異に依りて、罪の輕重を定め德の貴賤を斷ずべき譯は無いのである。故に涅槃經には『女人と說くと雖も丈夫の性ある者は我れ是を男子と說く、若し丈夫の性なくんば說て男子と言ふと雖も我は是を女人と說く』とあります。男子は尊く女子は卑しと見るは當時の思想であつたが、眞の尊卑は形體に在るに非らずして實德に在り、外相に在るに非ずして實際の活動如何に在らねばならぬ。

故に、若し人としての實德なき者は男子と雖も尊からず、之に反しに、實德ある者は女子と雖も決して卑しきにあらず、されば、高祖承陽大師は正法眼藏の中に於て、叮嚀懇切に慈訓を垂れさせられて『男兒なにをもてか貴からん、虚空は虚空なり四大は四大なり五蘊は五蘊なり、女流もまたかくの如し『得道はいづれも得道す、ただし何れも得法を敬重すべし男女を論ずることなかれ、是れ佛道極妙の法則なり』と仰せ下されてある。して見れば、成佛の上には元より男女の別を論ずべからず、唯だ信念及び行持の深淺厚薄を論ずべきである。

信念なき者は男子も佛の慈光に浴すること能はず、行持堅固なる時は女子も佛地に證入すべし。惡を作る者は男子も惡人なり、善を行ふ者は女子も善人なり、男を先にし女を後にするは社會の秩序なり。敢て必ずしも尊卑を論ずべきに非ず。夫唱へ婦和するは家庭の秩序なり。敢て必ずしも輕重を分つべきに非ず。さすれば、佛敎上に於ける女子の位置は、獨り男子と同等なるのみに非ず、賢聖とも同等といふべきである。妄りに『我れは女人なるが故に罪障深厚なり』と思ひ、『我は女人なるが故に成佛の緣薄し』と思うて、自ら其の身を卑しみ、自ら其の位置を輕んずる者は、寧ろ佛の御敎に違背する考へといはねばなりませぬ。

故に、佛敎の婦人たる者は先づ第一に、受け難き人間の身を受けたるのみならず、遇ひ難き佛法に遇ひ奉りたる因緣を深く喜び、常に『吾は我が本性を練磨して佛祖同道の德を修め、吾は我が天職を全うし

て聖賢にも耻ぢざるの行を勵み、以て日本婦人たるの美徳を發揮し、佛教女子たるの功徳を圓滿せずんば已まず』との大誓願を發することが肝要です。此の大誓願を發して堅固不退轉ならば、其の志操も自づと貞潔になり、其の思想も自づと高尙になり、忍耐・勉強・慈愛・孝貞等の所有美徳も、自然にその身に備はるものであります。

二

然らば、女子の天職とは如何なるものかといふに、家庭または社會に於ける位置と境遇との如何に依りて、其の職分の形式も自から同一ではない。卽ち家庭に於ては、子としての女子、兄弟姉妹としての女子、妻としての女子、母としての女子、叔母または伯母としての女子、主從としての女子といふやうに、様々なる位置がある。また社會及び國家に對しては、男子に對しての女子、他の女子に對しての女子、上に對しての女子、下に對しての女子、進んでは社會の一員としての女子、國家の一民としての女子、人類の一人としての女子といふ風に、皆な其の位置に相應せる天職が無ければならぬ。故に父母に對しては孝女となり、夫に對しては良妻となり、子に對しては賢母となり、家族に對しては慈愛の神となり、公衆に對しては平和の母となり、以て男子を扶助し上下を親睦ならしめ、常に幸福快樂の護持者を以て任ずべきである。而して、之れが基礎となるべきものは、柔和・忍辱・孝順・慈悲の四徳であらうと思ふ。是れが

女徳の四大綱領ともいふべきものである。

第一には柔和で無ければならぬ。其の心情より見ても、其の行動より見ても、女子たる者は必ず優しく美くしい處が無ければならぬ。其の骨格も容貌も音聲も、男子に比すれば優美であるのが女子の特性である。然れば萬事萬端の上に、優しく美くしき態度と趣味とを持つのが、女子の自然性を完全に發揮したものといふべきである。さればとて、奴隷の樣に、卑屈で無氣力で柔弱ではならぬ。其の思想の上にも、態度の上にも、毅然たる勇氣も無ければならぬ。是を貞操とも品格ともいふのである。孔夫子が『婦人は人に服す、是故に專制の義なくして三從の道あり、家に在りては父に從ひ、人に適ては夫に從ひ、夫死しては子に從ふ、敢て自ら遂ぐる所なし』といはれたのが、固より東洋流の道德にして、今日に於ては最早、舊式に屬して居ることは勿論であるが、或る意味に於ては、いま猶ほ全然否認すべきものではあるまいと思ふ。

我國の家族制度に於ては、一家の平和と統一とを保つには、或る點までは此の訓戒を守らなければならぬ。服從といふことを奴隷主義と思ふのは大變な間違ひである。家庭の道德は孝行を以て中心とするのであるから、家に在りては父に從がふのが當然である。また人の妻となりては、無論、夫に從がはねばならぬ。家の權利が其の子に移つた後は、其の子を以て家の中心となす、是れも當然である。唯だ其の父たる者、夫たる者、子たる者が萬一にも無道であつた場合は、多少、權道をも執らさるを得さる必要に逼られ

ることもあらうが、それにしても、正義と同情とに背いたりして、優美の性を傷ける様なことがあつてはならぬ。これが柔和の徳であります。

次に忍辱とは所謂忍耐です。他より恥辱を受くる様な事のあつた場合にも、ジツと耐へて腹を立てぬといふので忍辱というたのであります。併し、廣き意味でいへば腹を立てぬばかりでなく、總て物に屈せぬ大丈夫の勇氣を存するのが忍辱である。故に梵語では是を羼提といひ、玄弉三藏は安忍と譯して置かれた。忍辱よりも安忍といふ方が意味が廣い。華嚴經に『菩薩は一切の惡を忍受し、衆生に向ては心平等にして動搖なきこと大地の如し』とあるやうに、順逆の二境に處して毫も心を動かさざるものが、卽ち安忍であります。故に、眞に安忍なる者は、場合に依りては、白刃頭に臨むとも驚かさる程の勇氣がある。極柔らかで極堅いのが忍辱の力であります。

次に孝順とは孝友和順の徳である。孝は能く其の父母舅姑に事へて親切忠實なること、殊に女子は其の特性を善用して、身分の如何に拘はらず、父母舅姑に對するの孝養給仕等は皆な之を親らし、一旦、病氣にでも罹らせたまふ時の如きは、大小便の御世話までも人手に掛けぬ程に盡すの覺悟と孝心とが無ければならぬ。其の他、兄弟姉妹に對するの友情、親族一門及び主從間に於ける和合、夫及び師長に對する從順等は、皆な婦徳の肝心であります。而して、孝順の行ひは總て慈悲心の發露である。

慈悲というても下々に向つてのみの憐愍心ではない。慈は與樂の義であるから、他人に對して幸福・滿

足・快樂を與ふるのは皆な慈である。また悲は拔苦の義であるから、他人の苦痛・憂愁・困厄を拔濟するのが盡く悲である。而して、此の慈悲心の發動する所、天地萬象をも網羅して猶ほ餘りあるものである。況してや、禽獸蟲魚等の動物より一草一木、一絲一塵の末に至るまで此の德に漏るゝものはない。鬼貫の句に『行水の棄て處なし蟲の聲』といひ、千代の句に『朝貌に釣瓶取られて貰ひ水』とあるが如きも、皆な人間自然の慈悲心の流露した姿である。一茶の句に『やれ打つな蠅が手をする足をする』とか、『俄川とんで見せけり鹿の親』とか詠じたのも、やはり一種の慈悲觀であります。

以上の四德が、女子の天職を發揮すべき要素であるから、萬一、この反對に出でゝ、卒暴な處があつたり、怨み嫉み忿り惡む等の醜き態があつたり、または孝友和順の道に缺けたり、同情慈愛の念に乏しかつたりしたならば、如何に智勝れ才豐かに、事務に慧く辯舌に巧なるも、眞の職分を果すことは出來難いものであります。卽ち女子らしい女子になれぬ樣になるものです。

或人は『女子には三の大なる惡魔がある、卽ち一には嫉妬心、二には猜疑心、三には虛榮心である』というた。なるほど此の中の一つでもあれば、女子としての天職の神聖を害すること少なからぬのであります。貝原益軒の女大學には、五の疾あることを誡めて『凡そ婦人の心持の惡き病は、和ぎ順はさると、怒り恨むと、人を謗ると、ものを妬むと、智慧淺きとなり。此の五の疾は十人に七八は必ずあり。是れ婦人の男に及ばさる所なり』とあるが、これまた女子の反省すべき要點であります。

三

漢の曹大家の女訓には、女子の四行というて、婦徳・婦言・婦容・婦巧の四を說てある。植村玉枝の女中庸に、之を說き明して左の如くいうてあるが、これらは女子たる者の必ず心得て、且つ修養すべき大切なる要件である。

第一婦徳とは、氣質をよくし僞らず僻まず我慢ならず嫉妬せず狐疑せず萬に意氣好きやうにたしなむ事と知るべし。

第二婦言とは、言葉を愼みて物事はしたなくいふはつたなし言舌强からず淫ならず聲高からぬぞよし、强めて尋常にいはんとするも巧言ひたるやうにて惡し、勿論口佞しく我しりたる顏に罵るもいやし、都て言葉づかひに限らず凡て女の言ふまじき事は如何に懇人に遇うても口より外へ出すべからず。

第三婦容とは、粧容の事なり、鷄鳴ごとに身を淸め梳化粧し衣着起居擧動神妙にするの類なり、髮容化粧衣着のやうす身の粧人々相應になすべし、然るを當時世にもて時勢などいひて異容なる衣裳などの模樣又は浮華なる化粧など、いかさま奇異樣にと好むべからず、唯有るべきかぎりにて見たる所の麗きがよし。

第四婦巧とは、紡績裁縫洗濯の事より始め萬女の所業眞實に勤めて懈るべからず。

宋の司馬溫公は篤學の君子であるが、曾て婦人の六德を說て、柔順・淸潔・不妬・儉約・恭謹・勤勞との六つを擧げてある。

第一の柔順とは、前の柔和と孝順とを併せたる意味であるから、萬事に親切にして、家に在りては能く父母に從ひ、他に嫁しては能く夫に從ひ、老ては子に順ひ、親戚に和し、下部を憐むの類である。

唐の崔謐の妻の唐夫人といへるは、姑に事へて最も能く孝行を盡した。姑、年老いて齒盡く落ちて、食物を喫べる事が出來なんだ。今日の樣に牛乳とか豆乳とかいふ物の無い時分であるから、唐夫人は毎日、堂に上つて自分の乳を姑に進めた。姑は爲めに數年を經て益々健康であつたが、非常に唐夫人の優しき志を喜んで、終りに臨み家族に諭して、『吾れ久しく嫁の唐夫人の恩を享けたが、遂に之に報ゆるの道が無い。唯だ願はくは、夫人の子の、夫人に事ふること、夫人の吾に於けるが如くせば、吾家は永く榮ゆるであらう』と申したさうです。

第二の淸潔とは、邪しまに僻みたる心なく、能く貞潔を守り男女の別を愼しみて、常に淨らかなる品行を持つことです。故に、淸潔というても、白粉や香水や綾錦を以て身姿を作ることではない。尤も、女子は努めて見苦しからぬ樣にするのが本意であるから、同じ着物でも、身分に適ひ禮法に背かず、成るべく品格を善くして淸淨なるべきは勿論であるが、今の所謂ハイカラ風の如きは餘り褒めたものではない。とにかく人は美姿より心であるから、心操の潔白にして品行の端しきを貴とばねばならぬ。玉耶經の中に

も『女人の法、容顔端正の者を美人と名けず、唯だ心行端正にして人に愛敬せらるゝ者を美人と名く』とも仰せられて居るではないか。

第三に不妬とは、夫の心に背かず、他人の幸福を妬まず、常に己れの身を正うして衆人を憐れむの心操あること。

第四に儉約とは、虛飾に流れず、虛榮を貪ぼらず、物事を始末して奢侈に涉ること無く、且つ萬事を控へ目にすることである。

第五に恭謹とは、常に其の容儀を正しうして油斷なく身を守ることとです。些々たる事に目に廉を立てたり、姬御前のあられもない振舞をしたり、口汚なく人を罵り嘲つたりしてはならぬ。女子の醉狂、婆の腕捲りなどは見られたものではない。

昔、織田信長公に事へたる小野お通といへる人は、博學にして能く文を綴り、曾て參州矢矧の長者の女、淨瑠璃姬の事を叙するに、藥師の十二神將に擬して十二段と爲し、是を淨瑠璃物語と名けた。岩船檢校が之に音節を付けて、終に後世淨瑠璃の祖となつた。此お通は信仰も深く、且つ謹嚴の人であつて自分の娘に招かれて、信濃の國に赴かんとて、姨捨山の麓を過ぎける時、供人が見物を勸めたるに、お通は姨捨といへる名を忌みて『姨捨の山には入らじ名を聞きて車をかへす人もこそあれ』との一首を詠じ、遂に見物を斷つたとある。車をかへすとは、古書に『縣を勝母と號し曾子入らず、邑を朝歌と名け墨子車を

廻す』とあつて、曾子は至孝の人で、母に勝つといふ名の縣があつたので、遂に其の縣には足を入れなんだ。また、墨子は謹直の人で、朝歌といふ邑の名を聞て、遂に車を廻して戻つたとある。そこで、通女は姨捨の名を忌んで見物をせなんだのである。

かやうに些細の事までも、忌むべきは必ず之を忌むといふ程の志氣も無けねばならぬ。尤も、餘りに極端になつては一種の愚癡に陷るから、此の邊は十分注意して貰はねばなりませぬ。殊に女子は、餘りに神經が過敏になると、例の猜疑嫉妬などと稱する惡德が起るものであるから、つまらぬ事に氣を揉まぬ樣に、どつしりと心を落着る修養も必要であります。

第六に勤勞とは、卽ち勉强努力です。勉强の缺くべからざることは男子も女子も同一です。樂をして遊ぶことを目的として居る樣なことでは、到底その天職を盡すことは出來ませぬ。勉强は人間の凡ての職務を進行せしむべき原動力たることを忘れてはなりませぬ。

四

更に大聖釋尊の御慈訓を拜し奉りますれば、優婆夷淨行法門經の中に、優婆夷の十大行といふがある。優婆夷とは梵語で此には近事女と譯す。卽ち佛に近き事へまつる女子といふので、換言すれば信女といふ名である。此の御經は二卷あつて信女の淨行を御示し下されたものです。其の十大行の全文を擧ぐれば、

一には慳貪の過を見ては樂うて行施を修す。二には五根の過を見ては樂うて禁戒を持す。三には在家の過を見ては樂うて出家を欲す。四には疑惑の過を見ては樂うて智慧を修す。五には懈怠の過を見ては樂うて精進を勤む。六には瞋恚の過を見ては樂うて忍辱を行ず。七には妄語の過を見ては而も忠信を樂ひ、八には亂心の過を見ては常に禪定を樂ひ、九には罪苦の過を見ては而も慈悲を樂ひ、十には苦樂の過を見ては樂うて捨心を行ず。

といふのであります。是れは凡夫の十大過失を離れて、十大德行を修むることを御示し下されたものである。御教訓の語が稍や專門的になつて居るから、これを解り易く說明して見やうと思ひます。

第一の過失は慳貪である。慳貪といふは、物を惜み貪ぼりて同情慈善の念に乏しきことです。殊に女子には、動もすれば、人に物を與ふることの大好な質でありながら、一面に向つては、一椀の水、一錢の費をも施すことをせぬといふ樣な、偏頗でけちな性情があつてならぬものであります。これらは度量の狹き所より、自づと半面には非常なる慳貪の過を現はすのである。故に、此の過を離れて、出來得る限り誠心を運んで布施を行ひ、而して、其の布施も自ら深く樂うて之を行ふ樣にせねばならぬ。

彼の和氣清麿公の姉君たる廣蟲の如きは、常に孤獨の兒童を救うて之を愛育し、棄子の養子となつた者が八十三人もあつたといふ。聖武天皇の御后光明皇后などは、施藥院を設けて藥を施し、悲田院を建て、鰥寡孤獨を賞揚あそばされ、且つ浴室までを設けて、一般人民に入浴せしめられた。淳和天皇の御后

正子内親王は、尊貴の御身を以て、自ら洛陽の棄兒や孤兒を集めて養育あらせられました。これらは純然たる佛菩薩の大行持であります。

二に五根の過というて、品行に關する過失である。五根とは眼・耳・鼻・舌・身の五である。とかく人間は此の五根、卽ち五官の用に依りて樣々の誘惑に陷いり、知らず〳〵品行を亂すものである。此の過を離れんには、樂うて禁戒を持たねばならぬ。禁戒とは、佛が之を致してはならぬぞよと禁制せられた戒律である。是には五戒・十戒等の區別もあるが、つまり七佛通誡の偈と稱する『諸の惡は作すこと莫れ、衆の善は奉行せよ、自ら其の意を淨うす、是れ諸佛の教なり』といへる一偈の意味に外ならぬ。卽ち身・口・意三業の上に於て、一切の惡心・惡行・惡語を捨離し、淨心・淨行・淨語を發表するのが佛戒の目的である。

三に在家の過とあるは、人生の束縛といふことです。出家というても、必ずしも剃髮染衣をすることのみではない。志を菩提の道に傾け思ひを佛の御慈悲に寄せ奉りて、人生に在りながらも永久不滅の大安心を獲得するのが、心の出家である。常濟大師も『心の出家といふは髮を剃ず衣を染めず、設ひ在家に住み塵勞に在りと雖も、蓮の泥に染まず玉の塵を受けざるが如し』と仰せ下されてある。抑も女子は人生の荒波に揉れて、涯も無い煩悶の海に溺れ易いものであるから、人事以外に一の確乎たる信念を立て、宗教的安心を獲得することが必要である。

昔、天保の頃、石見銀山領の荻村といふに石川初女といへる篤信者の女があつた。三寶に供する膳部などを運ぶ時は必ず高く戴きて『慳貪の妾に上げさせたまはる心、一つは如來の賜であるから其の御恩を戴くのである』というて喜び、雪中に寺に詣づる時は、道の片端のみを歩みて『中央は御身分ある方の道路であるから斯く片端を通るのである』とて、少しも我見らしい擧動は無かつたさうな。然るに、夫重藏は無類の酒亂にて、初女の信心するのを怒りて、夜中に門外に逐出したことがあつた。時しも霜月中旬にて、北風霰を撒し寒氣骨を刺すが如くなりしも、初女は露恨むる色も無く、菰を被つて一夜を軒下に過しました。夜明けて後、却て其の夫に御禮を陳べて『良人の御陰樣にて、佛樣や祖師方が雪に立ち霜に歩みたまひし御苦勞の樣が、骨身に徹して感じました』と申したさうです。彼は、天保十二年七月十日、七十歳にして目出度往生を遂げたと申すことであります。一文不知の輩にてありながら斯る逆境に立つても、滿足なる安心に住することが出來たのは、全く信念の力であります。『姿こそ深山そだちの木なれども心は花になさばなりなん』と西行法師の詠じた通り、安心の力は、能く人をして、心の花を開き菩提の園に遊ばしむるものであります。

四に疑惑の過、これがなか〱の厄介物です。心に疑があつたり妬みがあつたりすれば、到底、物事を正當に見ることが出來ぬものである。殊に佛教の上からいへば、疑の中で一番重いのは、因果の理を疑ひ、若くは神佛の存在を疑ふことである。學者は智慧の爲めに昧まされて、却て此等の疑ひを霽すこ

とが困難である。茲に智慧といふは、世智に聰明なるをいふのではない。卽ち因果の理を明らめ神佛の存在を認め、以て生死の一大事を決着することである。尤も、更に進んで心地を開明して大悟徹底するが如きは、無論、智慧の中の大智慧であります。

五に懈怠の過とは、戊申の御詔書に所謂荒怠の弊である。全體、男女ともに、遊んで樂に暮す者を幸福者と思ふのが、抑も大間違です。ブラ〳〵遊んで贅澤をして居るやうな人は、寧ろ哀れ氣の毒な者で、達者なる片輪者です。眞個の人は身體の動けるだけ動かして、此の身體を無用の長物とせぬのが、獨り國家社會に對するの義務たるのみならず、畢竟自己を保任する所以の道であります。

五

六に瞋恚の過とは、腹を立てることであるから、是を離るゝ爲めには忍辱、卽ち堪忍を守ることが必要である。女子は男子に比して一層感情が強いだけ、些々たることにも激し易い性を持て居る。一たび感情に制せらるゝ時は、前後の辨へも利害の考へも忘れて、動もすれば見苦しい樣を演ずるものであるから、深く自ら愼まねばなりませぬ。

七に妄語の過とは、虛僞りをいふことである。うそは却て男子の方が多いかとも思はるゝが、物事を誇大に言ひ觸すこと、卽ち一寸の事實をも一尺程に言ふ癖は女子の方が多いかとも思はれます。而して、其

の誇大に言ひ觸らすのも、人を欺くといふ様な惡意はなく、殆んど無邪氣で言うて居る風がある。是れまた感情の刺戟が強いせいもあらうと考へるが、併し、大を以て小となし小を以て大となす、何れも一種の妄語であるから、此の邊も平生に於て注意し、常に忠信というて忠實信義の德を守らねばならぬ。女訓孝經に『婦は心を貞しく正直の魂を磨き、柔和第一に人に順ひ、内を理め門より外のことに拘らず、目は色に隨はず耳は聲に迷はず見ると聞くとの欲を禁しむべし』とあるも確かに一種の好教訓であります。之に反して、見る物、聞く物に迷うて徒らに外界にのみ心を馳するのが、第八に所謂亂心の過であるから、常に禪定、卽ち坐禪を樂うやうに致したいものです。坐禪というても、心地を開明するとか公案を工夫するとかいふことは第二の問題で、先づ以て精神をおし靜めて、物に動ぜぬ訓練を施すことが急務である。

九に罪苦の過といふは、此の世の中の苦痛の狀態をいうたものです。一度吾々お互の周圍を見渡したならば、天災地變に罹れる者、哀別離苦に惱める者、病に襲はるゝ者、衣食に窮する者、順境に溺れる者、逆境に泣く者等を以て充されて居る。此等に接する每に常に慈悲哀憐の心を運らし、分に應じて之を救ひ助くるの志を表するのである。

最後に苦樂の過といふは、自分の身に迫り來る種々の事情をいうたのです。苦は逆境で、樂は順境である。一日一夜の間にも、苦みあり樂みあり、禍あり福あり、千態萬狀であるが、此等の事情に束縛せ

られず、脱然として心を人生以外の樂地に置き、所有執着の妄念を解脱するのが捨心といふのであります。大乘佛教に於て、女子の典型とも謂つべき勝鬘夫人が、釋尊より十大受というて十ヶ條の教訓を御受けなされたことがあるが、其の時、無愛染心、無厭足心、無罣礙心、此の三心を以て自行化他を勵むべきことを誓はれてある。其の中、無愛染心とは私情私慾の爲めに執着せざることで、今の所謂捨心の意味に當ります。無厭足心とは未來際を期して退轉せざること、無罣礙心とは一切處に應用して滯らず、一切衆生を攝して餘さざることであります。

これらの事を委しく御話しては、際限も無いことであるから略して置くが、とにかく以上十種の淨行は、世間・出世間に通じて女德の總てを包括して、其の綱領を御示し下された者とも見ることが出來やうと思ふ。尤も佛教に於ては、女子道德に關しては、隨分細かい事までも御說きになつてあります。例せば、玉耶經には五事の心得を示して、「一には、晩く眠り早く起きて家事を修治め、美膳あらば先づ姑嫜夫主に進めよ。二には、家の物を看護せよ。三には、口を愼しみ忍耐して瞋りを尠うせよ。四には、誡め愼みて恒に及ばざるを恐れよ。五には、一心に姑嫜夫主を敬うて孝を盡すべし」などと教へられてあります。其の他、大寶積經等に於て、なか／＼御叮嚀な御教訓もありますが、今は一々御紹介を致すの餘地が無いから、後日の御話しに讓つて置きます。

之を要するに、婦人の德性は、柔和・忍辱・孝順・慈悲の四大綱目に約することが出來る。一般の女子

とても常に此の四大道德の根を養うて參りさへすれば、家に在りては家齊ひ、人に接すれば人自づから和し、其の一擧一動も、任運にして平和と快樂とを生み出して、自他平等の大功德を成就することゝもなります。さすれば、これが取も直さず國家の幸福、社會の慶幸となり、やがては國家の實力を堅め、國運の發展をも促すことゝなるであらうと思ひます。佛教と女子との關係及び佛教的女子の生活に就ては、まだ述ぶべきことも澤山ありまするが、本日は先づこれだけに致して置きます。

禪の女性觀

一

本日は、當女學校に取りて最も芽出度い日で、多數の方々が御列席下さいまして、開校の式を擧行致しましたが、今日の式に、眞に意義と價値とを在らしめるか否かは、一に今後に於ける生徒諸子の勉强如何にあるのであるから、どうか皆さん、一層奮勵努力して、理想的の成果を收められるやう切に希望いたします。

只今、木村博士から、女子と宗教といふ御講題の下に、色々と有益な御話がありましたが、私は之から『禪と女性觀』といふ事に就いて御話を致します。

佛教では佛性といふことを說きまするが、此處で謂ふ性の字の意義は、今日普通に男性とか女性とか謂ふ場合に使ふ性といふ字とは其の意義を異にして、本體といふ意味であります。そして佛教の根本義から申せば、男性・女性共に佛と同體の理想境に到達し得るものであつて、之を佛性論、法性論などから觀ましても、男女の間に貴賤尊卑の差別は無いのであります。

153

男尊女卑といふ思想は、支那や印度などに、古代から在つたものであるが、之れは全く、人類の文化が未だ發達しなかつた時代の思想である。總ての事が腕力の强弱に依て左右せられて居た野蠻未開の時代には、所謂弱の肉は强の食で、腕力の優れて居る者が尊重され、腕力の劣つた者は卑下せられて居た。從て、そんな時代には女よりは男の方が腕力が强いといふ理由で尊ばれた譯だが、文明の今日、猶ほ男女の間に尊卑の區別を立てるなどは、非常に誤つた事で、人格の本源に遡つて考へれば、兩者の間に何等の差等の存在すべきものではありませぬ。單に腕力の事だけから云へば、今後幾千年を經過しても、やはり女は男には敵はぬことだらうと思ふ。

元來、男は剛性で女は柔性であるから、腕力では女が男に劣つて居るのは當然であつて、よく考へて見れば、斯くてこそ世の中の萬事がうまく行くので、若し女が男の樣に筋骨の逞しい剛性だつたら、それこそ大變である。女は何處までも女らしく、身體の構造や性質が男と比べて柔かく又やさしく出來て居る所に、女としての長所もあれば、また其處に女としての天職も使命もあるのである。

私は昨年、病氣で床に就いて居ました時、つく〲感じました事は、男の方から看護して貰つて居る時、サア寢床でも換へやうといふ時は、全く命賭で、ゴツ〱とした體に力をこめて抱き上げられると、こちらの骨でも挫けはせぬかと思はれるほど痛い。それが看護婦さんにやつて貰ふと大層樂であつた。やつぱり看病は女に限るわいと思ひました。女が男の樣に腕力主義で子供を取扱つた日には、赤ン坊は壓し潰

されてしまふ。母親の柔かい懐に子供を抱いて守むからこそ嬰兒も育つのである。」

以上の事から考へて見ても、男と女とは元來其の天職と使命を異にして居るのであるが、決して其の間に貴賤尊卑の差別は無い。然るに、支那に於ても、遠き昔より、男尊女卑の思想が在つたもので、或時、聖人孔子が弟子の子貢を連れて旅行をせられた際、或る人里離れた山奧で、一人の老人に出逢つた。其の老人は大層みすぼらしい風體はして居たが、何處となく心に綽々たる餘裕があり、自然を友として悠々自適して居る樣子であつたから、孔子も彼の老人はあれで何か樂しみがあるのだらうかと思ひ、弟子に云ひつけて、老人に『貴君には何かお樂しみが有るか』と尋ねさせた處、其の老人の答へに、『自分にも三つの樂がある』。其の老人こそは榮啓期といふ學者であつた。

其の一つは、幸に自分は萬物の靈長たる人間に生れて來た。此の幸福を思ふ時に心は自ら樂しい。

其の二は、同じ萬物の靈長たる人物の中でも、男は尊く女は卑しいものであるのに、自分はまた幸に男と生れて來たことを樂しく思ふ。

其の三は、一旦人間と生れて來ても、若年で此の世を去る不幸の人の多い中に、自分は既に九十歳の長壽を保ち、今尚ほ壯健で居ることは、何物にも換へ難い無上の樂で、富貴の如きは自分の少しも望むところではない。

といつたので、之を聽いた孔子は大層感心したといふところであるが、此の老人の話からも男尊女卑の思

想の存在して居た事が看取出來るのであります。

男尊女卑の思想は、古から遂に近代にまで傳はり、其の結果、女子の教育を輕んじ、女は男と違つて、家の中に引き込んでさへ居れば良いものだから、女に智慧が有つては厄介だといふので、小學校以上の教育は受けさせなかつた。そこで女の智識才能は發達するに由なく、人間として當然知つて居なければならぬ事すら知らなかつた。智識才能が無いから、自然、男から卑しめられるといふ樣な譯であつたが、此の事たるや、全く教育の不備から來た事に外ならないのであります。

然しながら、前にも述べた通り、人格の根本から論じますれば、決して男女の間に貴賤尊卑の區別があるべきものでなく、男女同人格である。考へて見ますれば、男尊女卑といふ思想は、是れ取りも直さず自らを卑しうする思想であります。何故かと申すに、我國に於ては、天皇陛下は我等七千萬國民の大父君に、皇后陛下は大母君に在しまして、一視同仁、我等赤子を御慈しみ下さると同じく、我々の家庭に於ては、父と母の二方が共に居られて始めて吾々が生を享樂して居るので、此の場合に、お父樣は尊いがお母樣は卑しいのだなどゝいふ事のあるべきはずのものではなく、父母共に尊き我等の大恩人で、其の間に毫厘の差等が在るべきではありません。女を卑しいものだと考へるなどは、誠に母親に對して何とも相濟まぬ事である。

二

さて斯様に人格の根源に遡れば、男女の間に差別は無いからといつたとて、直ぐ男女同權だ、男女の機會は均等だなどゝ唱へて、女子本來の天職や使命の何たるかを打忘れて狂奔するが如きは、飛んだ心得違ひである。佛教で男女間の人格は平等だと說いたからといつても、其れは決して男のやるべき事を、其の儘に女もやつてよいと教ふるのではない。男には男としての天職が在る如く、女にはまた女としての使命が在る。そして各々が其れぞれの天職と使命とを果す處に、眞の人間としての道は存在するので、各々が爲すべき事柄は異なつて居ても、それは差別即ち平等で、彼と此との間に貴賤尊卑の差は無いのであるから、皆さんは克く此の道理を辨へ、各自人格の修養に專念し、女としての眞價を發揮するやうにせねばなりません。

假令、男子と女子とで其の天職は異なつて居やうとも、人間として踐み行く道の上から云へば、男女一體であつて、其の間の原理原則に二つはない。例へば教育の勅語に『克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ』と仰せられてあるが、此の忠孝といふ大道の上から申せば、男子の忠孝も女子の忠孝も其の本體に少しの差違はないのである。

人間としての道を歩む上に於て、斯様に男女の區別は勿論、有ゆる形式を超越して、自然の大精神と絕

對の眞理とに融合一致した無我の境地に、一心を落着ける所に禪の玄旨が存在するので、端坐默然の修養を積んで此の境界に突入した時、卽ち佛教に所謂三昧に入つた時の心境は、ちやうど皆さんが、イザ之から寫眞を撮影しようといふ瞬間に、自分の容貌のことも、男子たるか女子たるかも、暑い寒いといふことも打忘れて、頭の中に少しの雜念をも宿さない、あの瞬間の心境にも喩へるべきものでありまして、此の統一せられ、純化せられた明鏡の如き心、何物にも拘束せられぬ獨立不羈の大精神を、お互の信仰の基礎として進んで來ります時には、最早其處には、男女の區別は素より、此の世の中の有ゆる物質上の形式の如きものは、吾々に對して何の束縛とも障害ともならぬものであります。

元來、形式とか物とかいふものは其れ自體に何等の罪は無いものである。昭憲皇太后の御歌にも

　　もつ人の心によりて寶ともあだともなるはこがねなりけり

と仰せられてあるが『善惡は法なり、法は善惡に非ず。善惡は時なり、時は善惡に非ず』で、物や形式それ自體に本來善とか惡とか、或は有用、無用などの區別のあるのではなく、善惡や有用無用の區別は所詮人々の心の中にあるものである。善用すれば物皆な有用、惡用すれば物悉く無用ならざるはなしで、煙突から出る煙でさへ、之に最新の學理を應用すれば、其の中から種々の藥品が採れるものである。

私が、先年、布教のため滿洲の鞍山に參りました際に見ましたのに、滿鐵の製鐵工場に煤煙利用の機械が裝置してありました。其の時の話では、現在の方法では未だ收支が償はぬとの事でありましたが、近

き將來には、一層良い方法が發明せられることでせう。人の嫌がる塵芥でも之をうまく利用すれば、燃料や肥料や火藥をも採取せられる。其れと同じく、人間でもそれ〲適材を適所に使へば、皆な立派に役に立つものである。

昔、越後の高田五十五萬石の領主であつた堀秀治公は寛仁大度の人で、或時、朝から晩まで泣つ面をして居る或る男を召抱へられ、然も其れに二人扶持を給與された。之を見た家老どもは大變に驚いて、『如何に御殿樣には御物好きとは申せ、あの樣な泣き面をして、泣いてばかり居る男に、扶持まで與へて御召抱へになるとは、甚だ以て其の意を得ぬ事だ』と蔭口を叩いて居たが、其の內、家老が殿樣に拜謁をして『人も有らうに、あんな男を御召抱へに相成る御思召の程、一同恐察致しかねます。イザ戰爭と申す其の時にも、何の御役にも相立たぬは素より、あの男の顏を見に時には、せつかく出た一同の勇氣も引つ込んでしまひますから、どうかあの男を御召抱への儀は御取止めあつて然るべきかと存じます。それとも我君樣には何か仔細あつての事に御座りまするか』と、御諫め旁々御伺ひ致して見た處、公は笑つて『いや汝は左樣に申せども、予が考へでは、あの男にもまた好い使いどころがある、人の死んだ家へお悔の使者にはもつて來いの奴ぢや』と申されたさうであるが、是れは世に廢物なしとの理を示したもので、全く其の通りである。惡用すれば總ての物惡しく、善用すれば有ゆる物善しの道理、幾ら榮養になる食物でも食ひ過ぎれば却て胃腸を害し、運動が宜いから云つて度を過せば不健康の基ともなる。

人間の拳とて、此の拳は色が白いとか黒いとか、大きいとか小さいとかは云へるけれども、之れが善か惡かと道德的に評價することは出來ぬ。ところが此の拳で以て人を毆つて御覧なさい。直ぐ巡査が來て交番に引つ張つて行く、其の時、此の拳が毆つたのだといつて拳だけを拘引はせぬ。使ひ途を誤まれば人を毆る其の拳も、御兩親が御疲れの時、肩の一つも叩いて上げて御覧なさい。直ぐ孝行をする拳になるではありませんか。親孝行な良い子だと賞められて、御褒美の御菓子を頂戴しても拳は食はうとは云はないで、拳の代人の口が食つて了ふ。拳一つでも既に此の通り、其の使ひ方の如何に依りて善惡が岐れる。萬物の靈長たる人間の、善惡とか尊卑とかは、決して、男であるから、女であるからといふ樣な事で定まるのではなく、全く心の働き如何に依りて定まるものであるから、皆さんはどうか、つまらぬ形式に拘泥せず、人格の尊き本源に立ち返つて確乎たる信念信仰の上に、其の身を處して行かねばなりませぬ。

三

ところが人間は、やゝともすれば外界の形式に捕はれ易いもので、金のある者は金に、地位とか名譽のある者は其の地位や名譽に捕へられる、學者は其の聞く所に溺れるの喩へ、女の中にはまた自分の容貌のために捕へられて煩悶する方もあるが、心を外にして眞の美醜の在るべきはずはないのに、顔や形にくよくよするなどは甚だつまらぬ事ではありませんか。當本山の婦人會に始終參られる、或る一人の感心な御

婦人がありますが、其の方の申されるには『私は此の通りの不器量に生れて來たことを常々有難く思つて居ります。お化粧をする手數も掛らなければ金も要らないし、少々位ゐ墨がくつついても汚點は見えないし、御蔭様で若い時から人様に誘惑せられた事もなし、全く私の顔は安全地帶ですよ』と云つて、少しも自分の顔容の醜いことを悲觀されません。洵に偉い方ではありませんか。

とかく人間が形式や物にばかり拘泥すると、心の眞の働きがお留守になる。現在の世の中を觀ましても、學問や智識は段々進んでも、道德が之に伴はないで、學問や智識の有る者が却て惡事を爲し、科學が進歩するほど却て犯罪が多くなるといふ有様、斯んな頭ばかりの發達した文明は、之を福助文明または假裝文明とでもいつたら可いでせう。假裝行列も一年一度や二度ぐらい見るのは面白いが、年百年中、到る處で假裝行列をやるに至つては、全く狂人の沙汰で、こんな連中は松澤村の瘋癲病院行きの者といはなければなりません。道德を缺いて物質文明にのみに走ることは慨嘆の至りであります。

さて吾々が、有ゆる形式を超越した確乎たる信仰に入るがためには、男と女とにより區別がある譯でないことは度々申述べましたが、今玆に、女で形式を超越した偉い人の一例を擧げませう。臨濟和尚の弟子灌溪志閑は大分修行も出來たので、之から一つ諸國を巡歷して、いろ〳〵の人物に接して見やうと勢込んで旅行に出掛け、そして末山の了然和尚（比丘尼であつた）の寺を訪れた。見るから山門の境域は幽邃で、伽藍の結構も壯大、其の上、雲水も多勢居る大寺であるのに少々驚いたが、何をいつても高が女の山

主であると輕蔑して、草鞋を履いたまゝ面會を求めた。そこで了然和尙から『貴君が當寺を御訪ね下さつたのは、御見物の爲めであるか、それとも佛法の御爲めでありまするか』と皮肉に尋ねられたので、『佛法修行のために來訪したのだ』と橫柄に答へた。すると和尙から重ねて『して何處より御越しか』と問はれた故『今日は路口より來たのだ』と返答するや、直ぐ和尙は路口といふ語を捉へて『何ぞ口を塞がざるや』即ち、佛法修行のためとあれば何故口を塞がないのか、何故學問智識などゝいふものを捨てゝ、己を空しうして來ないのか、學問や知識を鼻の先にブラ下げて居ては佛法の修行は出來ませぬぞ、と怒鳴りつけた。そこで灌溪志閑も、此奴比丘尼ながらもなか〳〵偉いわいと心の中に感じながら、續いて『如何なるか是れ末山』即ち、貴山の本領は那邊に在るのか聽かせて貰いたいと問うた。すると和尙の答へて曰ふには『不露頂』當山の本領などゝいつて、それは彌が上にも高く、頂上が那邊に在るかなどゝ到底も見えない。言葉に依る說明や智識に依る想像を超越した處に妙境が存在するのだとやられたので、灌溪志閑は益々感服したが、尙ほ負けぬ氣を出して『如何なるか是れ末山の主』當寺の本領は了解したが、然らば貴女個人の御人格御家風は如何で御座るかと疊みかけて聽くと、和尙は答へて『男女の相に非ず』男性女性の差別を超越して居る。同一佛性の上に立脚したる絕對眞理こそ我が眞面目であるといふた。志閑は更に『何ぞ變じ去らざる』變化の作用が無ければなるまじと詰め寄つた。了然は『神に非ず鬼に非らず箇の什麼をか變ぜん』體と用とを別々に見るのは妄見だ、千變萬化の作用その儘が平等絕對の眞理なるぞと答へ

た。志閑は遂に敬服して、三年間も此の比丘尼の薫陶を受けたのである。此の問答を見ても分る樣に、佛敎に所謂絶對境に悟入した者の味ふ妙味は、到底言葉や筆の力で表現し得るものではなく、たゞ修養の功を積んで自ら此の境地に踏み込んだ者だけの味はひ得るものである。

　一口に飲みたる水の味はひを問ふ人あらば如何に答へん

の歌の通り、實際味はつて見た事のない人の、想像に依りて窺ひ得るものではありませぬ。

　男女を超越し、形式を脱却して、始めて宇宙の大道と合致し、端坐默然、敬虔の誠を致して、南無歸依佛、南無歸依法と唱ふる時、神佛と一體になるのであります。どうか皆さんは、端坐默想以て心地を淨潔にするの修養を積み、各々其の身を修めると共に、善良な家庭を作るやうに努められたい。そして、良い家庭を作るには家族全體が善い人にならなければならぬ。が、若し不幸にして家庭の内に平和を亂す樣な人が居りましても、それに屈しないで、益々强固なる信念を以て德を修め、遂には其の人を敎化善導するといふ大覺悟を以て居なければなりませぬ。徒らに自分の環境に支配せられて、自分の不運や不遇を悲觀して煩悶し、他人の好運や順境を嫉妬して愚痴をこぼしてはなりませぬ。

　世界第一の富豪といはれた亞米利加のカーネギー氏は、或人から、『あなたは、どうして今日の成功をせられたか』と尋ねられた時に、『自分が今日の位地に進んだのは、幸に貧家に生れたからだ』と答へたさうですが、卽ちカーネギー氏は自分の貧乏といふ境遇に挫折せず、却て貧しい處に發憤して一生懸命に働

らいたからこそ、あの樣な大富豪にも成り得たのであります。

四

私は今此處で、皆さんの御教訓として、聖徳太子が親ら講義もせられ注釋をも書かれた勝鬘經といふ御經の話をしたいと思ひます。是れには勝鬘夫人といふ賢夫人が釋尊に歸依して、十大受と稱して十箇條の誓を立てられたことが書いてあるのであります。御經の御言葉は非常に難しいから、分り易い徳目に直して、お話しをいたして置きます。

一、品行――人間は如何なる人でも修身を第一としなければならぬ。國民の品行が亂れては國家は危い。家族の品行が崩れると家庭は紊亂する。

二、禮讓――自分が幾らえらくなりても、人に對して決して高慢振らないこと。

三、寛容――心を大きく度量を廣くして、妄りに怒らず恨まざること。

四、隨喜――人の幸福や好運を見たり聞いたりした時、之を自分の事の樣に共に喜ぶこと。

とかく人間は他人の不幸や不運には同情もし涙も流すが、人の成功や好運を見て、それを恰も自分の事の樣に喜ぶ、所謂隨喜他善といふ事は、なか〳〵出來ない。自分の友達に成績優秀で學校から褒賞されるといふ樣な人があると、其の人の爲めに自分も一緒に之を喜ぶどころか、卻て之を嫉んだり惡口をい

つたりする。洵に淺ましい事になり易いものです。故に、常に嫉妬を斥けて他の善を隨喜すること。

私が或人から、山脇高等女學校の校長山脇女史のことを聽いたのですが、女史は松江の人であるさうなが、其の父が女史を女子師範學校に入學せしめ、卒業試驗を受けた際、親の心は誰れも皆一つであるが、父上はどうか娘が試驗をうまくやつて、卒業をしてくれゝばよいがと氣が氣でない。試驗の當日となつては、到底、起つても坐つても居られない程の心配をし、もう娘が歸つて來さうなものだがと、門口に出ては首を伸ばして、娘さんの歸りを今や遲しと待つて居る。處へ、娘さんの姿が見えたものだから、いきなり『試驗の成績はどうであつたか』と尋ねられた、女史は『御父さん安心して下さい試驗は上成績でありました』と答へられた。其の時の御父さんのうれしさ、直ぐに女史の手を取つて家に入り、先づ御先祖の位牌を安置してある御佛壇の前に連れて行き、『此の度は娘も芽出度上成績で卒業を致しましたから、何卒御安心下されたうございます』と御報告せられたので、それを聞て、山脇女史も非常に感動せられたといふ事であります。親の子に對する慈悲は洵に廣大無邊であるが、願くは、此の親が子に對するが如き廣く純なる慈愛を、他人にも推し及ぼして行きたいものであります。

五、正義――財を積むにも業を修むるにも、常に正義の觀念を土臺とすること。

六、同情――利己的に走らず、分に應じて他の爲めに利益を圖ること。

七、報恩――精神的に社會に奉仕し、且つ君父師長の恩に報ずること。

八、慈善――弱き者悩める者に對し、力の及ぶ限り救護の徳を顯はすこと。

九、敎化――正しき道を以て弟や妹を善き方に導き、其の他の人々をも正しき道に引入れて行くが如き、是れ敎化であります。

十、信念――此の事に就ては、先刻よりいろ〳〵と御話を致しましたから、よく御了解になつた事と存じますが、此の信念に似て非なるもの、卽ち迷信は飽まで避けねばなりませぬ。世の中にはよく『丙午生れの女』などゝいふ迷信に捕はれて、悲觀や煩悶をし、甚しきに至りては厭世自殺をもやる人があるけれども、是は實に馬鹿げた事で、信ずべき何等の根據も無い事であります。斯樣な迷信の存在することは、洵に文明國として耻づべきであります。元來、人間の幸不幸は、生れ年の如何に依りて定まるものでは無く、各人の心の如何に依つて、幸ともなれば不幸ともなるので、生年月などに何等吉凶を判ずべき意味はありません。人間として是非とも健全なる信念を持たなければなりませぬが、迷信はまた何處までも排除しなければなりません。

それに就て佛敎に關する繪畫や彫刻などに、時々怪異な動物を描いたり、或はまた非科學的な形像を彫んだりしたものがありますが、此等は多く大慈大悲の佛を中心として、それに屬する威德の一面を表徴するために、種々の形像を借りたもので、決して迷信から來たものではありません。佛の敎へ其のものは決して現代の科學や常識を無視したり、否定したりするものでなく、否、此等は何處までも尊重し

つゝ、科學や常識を以てしては到底及ばざる高遠な境地に佛の教の眞の味はあるのであります。
どうか皆さんは、以上述べた十ヶ條の教へをよく守つて、新時代の女子として眞に立派な人になつて下さるやうに望みます。毎日學校に來て學問を一生懸命に勉強するは素より、家庭に歸りても常に其の品行を愼み、人が居る處と居ない處で其の行を二三にしてはならぬ。そして自分が如何に幸福な境遇にあらうとも決して之を誇るの心なく、不幸の境遇にあつても妄りに悲觀しない様にせねばなりませぬ。

五

本日皆さんの爲めに御講話下さる御考へで、先刻まで此處に居られたが、御友人と御約束の歡迎會に御出席の時間が差迫つたので、餘儀無く御歸りになつた文學士兒玉九十君から、私が親しく承つたお話を申上げます。同君は昨年五月歐洲行の際、恰も御渡英あそばさるゝ、秩父宮殿下と御同船の光榮に浴し、且つ船中で始終、殿下の御相手を申上げられたが、殿下の御起居、御動作を拜すると、殿下が大層平民的に且つ御儉素に亘らせられた事には、同君始め一同の者が、いたく恐懼し、餘りの有難さに感涙に咽んだ事も度々であつたさうです。
御乘船が香港とかに着いた時の事、殿下が木綿の衣服を御召しになつて居られたのを拜し、一同非常に驚いて、そつと御附の方に聞いて見た處、殿下には、皇后陛下の御綿服主義を御遵奉に相成り、公の場

合の外は大概綿服で在らせられるとの事を拝承し、此の上もなく感激したとの事。

次には印度洋を御航海中の事、殿下には多くの御相手の方と甲板上で、いろ〳〵の御運動をあそばされたが、皆は汗でシヤツが濡れたので、各々自分の船室に歸つてシヤツを着換へたが、殿下には一向御召換の御模樣が無いので『殿下には御召換へはあそばされぬか』と御伺ひ申上しに、殿下には『いやボタンをはずして風を入れゝば此の儘斯うして居つても日光と體溫で間もなく乾いてしまうよ』と仰せられたので一同恐縮し、先きに著換へた連中も、何んだかきまりが惡くなつて、著換へぬ顏をして居たさうですが、斯樣なことを拝承しても、金枝玉葉の御身で在らせられながら、殿下が如何に御儉德高く在しますかゞ拝察されて、何とも畏多いことであります。

殿下には毎朝、五時頃には必ず御起床になつて御運動あそばされ、總ての事に御規律正しく在らせられるが、明日は愈々御上陸といふ日に、一向甲板に御出ましがなかつたので、御附の方に伺つて見ると、殿下には御自身で御身廻りの御品を一々御整理あそばされて居られるとの事、卽ち、御自分の事は成るべく御附の人の手を煩はさず、御自ら御處理あそばす御心、身は尊貴に居て尊貴に居らずとは、洵に殿下の御事と返す〴〵も勿體ない事ではありませんか。

次にまた地中海御航海中の事であるが、殿下には御側に居た二三の者に向はせられ、眼の前に見える山を指されて『あの山までは何米突あると思ふか』と御尋ねがあつたので、或一人が『二千五百米突』と

御答へし、他の一人は『私は二千米突ぐらゐと思ひます』と御答へした處、殿下には『兒玉君、君は幾らと思ふか』と仰せられたので、兒玉君は『千五百米突』と申上げた上、『殿下には幾米突と御思召されまするか』と伺つた處、殿下は『僕は先刻海圖を見て知つて居るのだから、云つても駄目だよ。だが、あそこまでは一千米突だよ』と仰せられたさうだが、斯の様な場合でも、大概の人は先きに海圖を見て居つても、素知らぬ顔をして、知つた振りをしたがるものだが、『僕は海圖を見たのだから、的中る資格はない』と仰せられた。殿下の奥ゆかしき御禮讓の德が偲ばれて洵に有難き事であります。

以上いろ〳〵と御話を致しましたが、要するに、佛教の根本義から觀ますれば、男女の間に少しも貴賤尊卑の別はありません。昔、高野山などで、女人禁制など〻申しましたも、之は當時、風紀上の取締から來た事で、決して佛教の根本義から出た譯ではありませぬ。吾々は唯だ其の修養一つで、佛と同體の理想境に到達し得るので、吾々が一切の形式を超越して、始めて凡ての形式を使用し得るのであります。男女の異なれる差別を超越したる眞理の上に立脚して、高尙純潔なる精神を養ひ、それより下つて、其の天職と使命とを自覺し智德兼備の彼岸に向て進まねばなりませぬ。どうか皆さんは、眞の佛教を理解し日々の修養に努めて、確乎不動の信念を得らる〻様くれぐれも御願ひ致して置きます。

婦人と自覺

一

混沌たる一氣、分れて陰陽の二氣となり、陽氣は昇りて天となり、陰氣は降りて地となり、天地の氣相通じて人類及び萬物を生ず。中に就て、人類を以つて萬物の中に最優最良なるものと稱して居る。その人類の中に於ても、男子は陽性に屬し、女子は陰性に屬し。それは體質の上からいうても氣質の上から云うても、爭ふべからざる事實である。故に天地の氣相通じて萬物發生し、男女の性相合して子孫繁殖す。

是を以つて、天高しと雖も貴きに非ず、地低しと雖も卑きに非ず、男子は剛なりと雖も貴しといふべからず、女子は柔なりと雖も賤しといふべからず、兩性は恰も水火の如くにして、斷じて其の一を缺くことを許さず。天には天德あり、地には地德あり、男に男德ありて尊ければ、女に女德ありて貴とし。此の間に強ひて尊卑を分たんとするは、恰も水火の間に貴賤の別を立てんとするが如し。況んや我が佛教に於ては、一切衆生悉有佛性と說いて、男子も女子も皆な同一佛性を具有して居る。故に、男子も成佛すれば、女子も成佛する。此の間寸毫の區別もない。

釋尊が時として『女人不成佛』といふが如き教を垂れさせられたるは、釋尊御出世當時の印度の一般の女性は、教育もなく訓練も乏しく、從つて品性も賤しく智力も薄弱であつたから、智識、道德、其の他種々の點より觀て、概して、女子は男子に比して甚だ低能であつたからである。故に男尊女卑といふことは、理論に非ずして實際の事實であつたのである。故に釋尊は此の事實に基いて、女子を品評あそばされた場合が往々ある。併し、是れは決して佛教の根本的教義ではない。

また、古の高僧が道場を建立するに當りて、女人の入場を禁ぜられたるは、要するに、その道場なるものが、比丘僧、卽ち男僧の衆會して淨行を實修する場處なるが爲めである。男僧聚會の道場に女性の入場を禁ぜられたは、全く風紀の尊嚴を保つが爲であつて、決して尊卑を分ちて故らに之を隔てた譯ではない。之に對して色々の說明を附けた者のあるのは、人の智識の幼稚なる時代であつた爲めに、比喩的に說明を施して、倫理綱常の道を正うせられたので、畢竟、第二義門の施說である。故に、世の婦人は此の本義を知つて、常に、『吾々婦人は男子と與に、此の人生を向上せしめ、國家の文明を發展せしむべき能力を有してゐるのである。吾々婦人は男子と同じく、聖人たり賢人たり、佛たり菩薩たることを得べき、德性を具へてゐるのである』と、いふ觀念を以つて居らねばならぬ。是れが大自覺の根本である。

併しながら、以上は天性の德に就ての問題、所謂天職の價値に就ての問題である。其の家庭的社會的に於ては、各々其の性質と長處とがあるからして、守る所の職分、掌る所の業務に相違あるべきは勿論、

秩序の上に於ても男女別あるべきは言ふまでもない。要するに男子と女子とは天賦の性の價値に於ては同等であるが、其の職守に於ては別あるが故に、男子を先にして女子を後にし、『夫唱へ婦和する』といふ風にせねばならぬ。殊に、我が國には我が國の家族制度に應ずる良風美俗があるから、其の固有の特長を保存し、惡弊陋習と思はるゝものは程宜く改善を加へ、以て益々婦人たるの性德を發揮することに努めねばならぬ。

二

我國に於ける婦人の位地と功績とは實に非常なるものである。畏れ多くも我が皇祖天照大神は女性にてあらせられた。我が國の武威を海外に輝かし給ひし三韓征伐の壯擧は、神后皇后に依つて行はれたのである。我が國より始めて外國へ留學したのも女性の僧であつた。

されば婦人は能く其の婦德を修め得て、精神的美性を發揮する時は、獨り其の身を聖賢たらしむるのみならず、家を修め、社會を調和し、國家を扶翼するの功績は實に偉大なるものである。人間は決して男子のみを以て生るゝものではない。家庭は決して男子のみで和樂を視るものではない。男子には男子の特徴があると同樣に、女子には女子の特徵がある。之を兩輪の車に譬ふれば一輪は男子にして一輪は女子であら、兩輪の上には決して尊卑の別はない。[illegible]

のは、全く國家の缺點、社會の弱點、家庭の瑕瑾である。此の意味に於て女子たる者、大に發憤努力して、健全なる發達を遂ぐるに勉めねばならぬ。

三

古來、婦人の五德といふ說がある。即ち

一には、剛に勝つの柔德、

二には、粗に勝つの密德、

三には、外を補ふ內德、

四には、貌に溢るゝの愛德、

五には、身を養ふの乳德、

といふのである。此の五德は全く婦人の特徵である。完全に此の五德を修養せば、自餘の諸德は自づと此の中に含蓄せらるゝであらうと思ふ。

第一に柔德とは、柔和善順で、物やさしく人の氣に逆はず、容姿から言葉使ひまで柔かに素直にあるべきことである。『一抱へあれど柳は柳かな』で如何なる場合でも、どこかに優しい處のあるのが女性の特點

であつて、此の特點が剛强なる男子の心をも和ぐる程の力あるものである。

第二の密德は、注意の行き屆くこと、些細の處にも用意の行はるゝことである。一本の糸でも一錢の金でも決して疎略にせず、着物の折目から物置の蛛の巢にまでも注意を拂うて行く樣にするのが、是れまた女性の天德です。併し此の德を濫用して、召使や家族に對して、一々重箱の隅を楊子で掘ぢくる樣なやり方をしても困る。どこまでも前の柔德と此の密德とが調和して行かねばならぬ。

第三の內德は退いて內を守るの德である。男子は外に當り女子は內を守る。各々其の特性に應じて分業的になつて居る。世間には多少の例外もあれど、多くは內を守りて、其の夫や父をして後顧の憂ひなからしむる樣、家政を整理し兒童を敎育するのが、婦人の大切なる務めである。

第四には愛德、是れが女子の生命である。男子は比較的智に長じ、女子は比較的情に長ず。其の情が慈となり愛となりて、父母の心を安んじ夫の精神を慰め、且つ兒童を養育するに於て、殆んど其の全力を傾注して敢て辭せぬ。併し情といふものは、智力の制裁と指導とを借らされば、全く盲目的に發動するに依つて、動もすると種々の病的現象を見るものである。程よく愛德を使用すれば、親子の樂みも、夫婦の和合も、家庭の平和も、盡く愛の產物というてもよい。

第五には乳德、是れが實に不思議の作用です。母は其の身より乳を出して以て子を養ふ。自分の血肉を

寶、人間の至珍である。

昭憲皇太后陛下の御母たりし一條順子は松壽院樣と申上げたが、實に完全に婦德を備へられた立派な御方であつたと申すことです。平生の御日課は極つて居て、毎朝、豫定の時間に御起床なされ、懇ろに天神地祇を敬禮してから、始て朝餐をあそばさる。朝飯は必ず純精進であらせられた。御食後、叮嚀に御佛間にて御諷經、それより一時間程は、一寸五分もあらうと思はるゝ觀音樣の御姿の木印を白紙に押されたが、それも一枚一枚に御名號を稱念して押され、その御眞影は時として侍女に命じて海中に流さしめられ、以て溺死者の靈や鱗族に佛緣を結ばしむるの御思召しであつた。それから正午までは、紙布に用ゆる美濃紙の紙撚をあそばされ、門番の妻に命じて紙布を織らしめられた。午後もまた御同樣の御勤めをなされ、一日たりとも空しく時間を送りたまふことはあらせられぬ。御晝飯は必ず一椀を控へられて御庭前に群集ふ雀に與へられ、春秋の彼岸には蜆三升づゝの放生會を行なはれ、御好の人形に對しては夏冬の衣服は親ら着替させ給うたと申すこと、其の他、御慈愛の深き、御同情の厚き、物事に綿密なる、起居振舞の優美にして柔和にてあらせられしことは、實に感激せざる者はなかつたさうである。

此の一條樣の如き心懸けと愛情とを有したならば、誰人でも分に應じ境遇に隨つて、それ相當に婦德を修むることが出來やうと思ふ。併しながら、世の中は樣々であつて、その境遇もまた千態萬狀で、殊に變化常なきは世の習ひなか〳〵何事も思ふ通りに行くものではないが、縱ひ如何程困難なる境遇に處し難し

き事情に纏はれるとも、其の間に在りて、煩惱に囚はれず束縛に苦まず、泥中の蓮華の如き麗しき生活を營むには、精神の底に大磐石なる根據を有せねばならぬ。その根據は正しき信念である。信念は總ての基礎である。都會の人などは比較的信念の確立を缺く人が多いから、物質的には幸福なるも、精神的には不幸を感じてゐる方が少なからぬ。是實に現代の一大缺陷である。我國の婦人は此の點に於て、一般人の模範となつてもらひたいものである。

滿鮮より歸りて

一

滿鮮の巡錫も、約二ケ月を過ごして無事歸朝いたしました。

ちやうど六月十六日、東京を出發しまして、翌日、神戸から天長丸に乘つて大連に向ひました、海上の風波は極めて穩かに、音に名高い玄海洋も取り分け靜で、何う考へても、荒海の上を快走してゐるとは思はれないくらい、ちやうど湖水でも渡るやうな氣がいたしました。たゞ、山東角といふて威海衛の際を通過するときは、少しは搖れたが、どうやら風波を凌いで、六月二十一日といふに大連に到着いたしました。

豫て皆樣御承知の通り、今回の巡錫は滿鐵會社の招待であるから、凡て宿泊する所や講演會場の時間表など、遺漏なく會社の方で定めてくれました。尤も、滿洲の要所要所には曹洞宗の寺院や布教所もありましたけれど、そこには一泊もしないで、悉く會社指定の旅館に宿泊し、また巡回中、會社からは叮嚀に社員を二人附ききりに、途中で人事課の一人と都合三人、それに出發の時からの隨行河合眞英師、それに大連の森口惠徹師、これだけの人員で、北は哈爾賓から吉林へ、西は蒙古の關門たる鄭家屯まで參

りました。

滿鮮各地には多數の同胞が往て非常なる活動をしてゐる。それらの人々が、大抵は役人若しくは工場とか會社とかに携つてゐるのは、內地と餘り變りはないが、それでも多くの人々には活氣がある。も少し研究を續けねばならぬとか、または大いに成功をしなければならぬとかの大抱負を持つて從事してゐる。他にはまた內地で喰ひ詰めた揚句、ここへ避難してゐるものも尠くはない。また、何かよい拾物でもしやうと逃腰になつてゐるのもある。

滿鐵會社の經營に關はる移民政策、土地の開發を計るために力を盡してゐる學校なぞは、到底、內地も及ばぬほど敎育機關の設備が行き屆いてゐる。工學堂とか醫學堂とかは皆な滿洲人を敎化するための學校です。それには外國の笑を招かぬやう、日本國家のためといふので、各敎員方も非常な熱心で努力してござる。

二

滿洲一般の狀況を見ますると、滿洲人は一概に、利益を計るより外に道を知らない。支那人が孝行といひ道德信義といふ德目を尊重することに於ては、遙かに日本人より厚いが、ただ利益のためにはいかなる勞苦も厭はぬ、卽ち金錢のためなら牛馬の代りにもなる、といふのが滿洲人の卑しい氣質です。故に、そ

の勞働といふ點に於ては、到底、日本人も叶はぬ。

鞍山といふ所に製鐵所がありますが、それは九州八幡製鐵所の倍以上もあらうかと思はれる大建築と、それに伴ふ製産力とがある。なんでも一日に一萬噸の鐵を製してゐるといふ非常な勢力であります。この製鐵所の勞働者は、大抵支那人を使用して、日本人は稀れです、といふのは、その勞働の耐力からくるので、支那人は一日に十時間十二時間といふ長時間を働き、日給は僅に五十錢か六十錢といふが限度である。婦人の勞銀は男子よりは少いが、その貯金をすることを忘れないのは、大いに日本人も倣ふべき點であります。

哈爾賓には日本人五千、ロシア人五萬、支那人十五萬といふ割合に住んでゐます。就中、支那人が最も金持で、貧乏なのが日本人ださうであります。日本人は智識が發達してゐるから、大抵は工業に從事してをります。

日本の軍隊だけは有繫に模範的である。哈爾賓へきても、米國や佛國のそれよりも優良なる兵を有つてゐるといふことが非常な評判である。長春から五十里離れてゐる吉林省の、名古屋旅館といふに一泊したが、こゝまでは支那の鐵道に據らなければなりません。なんでも、この鐵道の經費が年々に不足を生じて、到底、經濟が持てないといふところから、只今では日本に管理權が移つて、現に福島新といふ人が驛長である。最初、支那から引き繼ぐするときには十餘萬の不足金があつたといふ。これを支那人に話すと

『それは當然だ、上の人はみな賄賂をとり、下の者は横着を決め込むといふ始末で、どうして足りる氣遣ひがあらうか』と、これを聞く毎に、吾人は國家に奉ずる精神を自覺して働かなければならぬと思ひました。

三

滿洲の專門學校を參觀して講演をやつた時、非常に感じたのは、この學校が日支人混合の立派なもので、生徒は約三百人、その四分は支那人でしだ。支那人には北京や廣東あたりから遙々やつてきてゐるのもありました。そこで美はしいことは、この日支の生徒が極めて仲がよい。教員は悉く日本語を以て教へてゐました。それで、私が講演をするに就ても、普通の日本語で了解するだらうかと危ぶむだが、よく解つて、全然日本人對手に講演をするのと違ひは無かつたくらひでした。さうした特徵のある學校であるから、校長といふのが有難い程うれしい。『同文同種、日支の親善は緻密に結ばれて居る。これが一度日本へ留學というて東京へ來ると、いつの間にやら悉皆思想が變つて、せつかく日本に厄介になりながら反抗をする。うつかり日本へは留學させられない。日支親善を完成するためには、支那に高等教育の施設がなければならぬ』と校長が云うて居ました。何故、日本へ來ると、日支親善に教育された支那人が反抗をするかといふに、それは、神田あたりの下宿屋なぞが、待遇に差別をつけるに基因するさうです。而して、本國へ歸

つた後は、江戸の仇を長崎といつた風に、排日思想を唱導するといふことになる。

これは單に一面の觀察ではあるが、東京の中央に斯した濁つた空氣が流れてゐることは、特に人種差別撤廢を主張する邦人にして、尙ほ同文同種の國民に構へて事をなすは、誠に苦々しいことである。それといふのも、國民全體として心の奥底から修養が積まれてゐないからなのであります。

四

國家に宗教が盛んであるといふことは、やがて國民の精神が美はしいといふ反證にもなるものです。支那は由來無宗教の國である。國内にはお寺も隨分あるが、國民はただ現世利益を求むる心からの信仰のみで、例へば、子供を授けて下さるとか、富籤を當てゝ下さるとかいふことを信じてゐるらしい。私も實地に祭典を見たが、其の祭祀には臨時列車をたてたり、臨時停車場を設置するといふ大變な騷ぎで、山一面が人で埋まつてゐるといふ盛況であつた。かくの如くであるから、支那の宗教は、單に淺薄な慾望の滿足にのみ信じられてゐる空虛な宗教である。

朝鮮の方も、また宗教の程度は支那と同じである。子に死なれた親の情は、切なるのが人情であるに、支那人や朝鮮人は極めてこの情が薄い。親がなくなると、三年は喪に服して深い笠を冠るのが習慣で、この三年の內にまた人が死ぬと、同じく服喪をつゞけるといふ按配で、喪から喪へと何回も喪を重ねる。そ

こで鮮人は、一層のこと通常服は白にした方がよからうとなつた。掃除をするにも、草取をするにも、純白の服をきて作務するのが常であります。婦人は明けても暮れても洗濯ばかりしてゐる。朝鮮の婦人は、洗濯をするために世の中に生れてきたやうなものである。

子に對するの愛情もあらうが、七歳や八歳で死ぬやうなことがあると、そんな場合には、不孝者だというて、葬式なぞは出さないさうで、慘らしくも兒童の死骸を野放にして鞭打つといふことである。さうして置いて喪に服すといふもおかしな話である、全く形式一片の服喪である。普蘭店で我が宗門の僧侶が實見したといふ話であるが、野原の眞只中に、小兒の顏だけ眞黒に燒きすててあるのを見た、野犬がそれを貪り食ふといふ。習慣の力ほど恐ろしいものはない。南洋のボルネオなぞの話によると、同族に死者があると、死骸を天日に曝して、その肉體から滲み出る脂を手に掬うて、親戚故舊は顏にそれを塗るといふことである。

凡て善い習慣を植え付けることは困難であるが、惡い習慣には染り易い。佛教ではこれを人間の薫習力によるものだと說いてをります。

五

健全なる宗教觀念といふものは滿洲や朝鮮で見やうと思うても見られない。京城に覺皇寺といふのがあ

る。この寺の主任は嘗て曹洞宗大學にも居た人であるだけに、本堂なども日本式に疊が敷てある。布教は日曜ごとに說教をなし、參詣聽衆は八十人から百人はあるといふ。少しづつは鮮人の聽衆にも宗教談が味ははれると見える。日鮮合併の今日、政治上からも、敎育上からも、鮮民同化に就ては隨分力を盡されてゐるが、宗教の力が一般の上に普く行き亘るやうに、佛の敎を頭に吹き込むことが必要であると思ふ。

また、或人は、朝鮮人は背恩の民だといふが、決して彼等は背恩の民ではありませぬ。非常に恩に感ずる國民である。それといふのも、鮮人を使ふ日本人が、ただ物質的に金を與へることを知つて、精神の誠を與へない。殆んど奴隸のやうに見るからである。また滿洲人などから好感を以て迎へられない理由も、日本人が彼等に對してむやみに威張るからです。支那人をチャンコロなぞと云ふが、彼等は侮辱されたものとして非常に憤慨する。また露西亞人をロスケなどいふのもこの例である。ロスケなんぞはロスキイが訛つたのだというて、日本人は侮辱の意味を持たせてゐないのだともいふが、とにかく國際的禮儀を重んじなくてはならない。

今や全世界は、ここに全く平和の光に包まれました、一樣に世界人類のためにお祝ひをしなければならぬ。併し國と國とが眞の競爭場裡に立つてゆくのはこの平和後であります。戰爭で儲けたといふのは、恰も『火事ドロ』で、不自然な虚利であるが、實利は、戰爭といふ大火が終つて、一般が自然に復した上に來るものでなくてはなりませぬ。佛教者たるものが、その任務に向つて精進を要するのもこれから

であります。

六

佛教に於ては、自らその任務を全うし、また他をして任務を全うせしむるについて、常に大綱要が示されてゐます。即ち信仰と禪定と戒行との三つであります。

一に信仰——解り易く云へば、眼に見えぬ神佛をば認める、即ち信仰の眼で以て神佛を認識するといふことである。所謂信念の篤い方は神佛を認めるといふのです。

步兵大尉松本七郎氏は京城の聯隊の中隊長であるが、誠に信仰の熱い方である。その姉さんが神戸に住つて居られる。本年二月お母さんが逝くなつた。それに就て不思議なことに、現在、朝鮮で七郎さんと同居して居られるお母さんが逝くなる前日、神戸の姉さんに夢幻の裡に會ひに來られたといふことである。『お母さん突然まあ何うして』と言ふと『アア一寸來たよ、實は自分の心にかゝるのは悴の七郎、あれも大尉になつたが、これからが出世時、妾も年を老つてゐるから何分賴むよ』とお母さんはいふ。『何んです、そんなに改まつて』と云ふ刹那、急に『モシモシ』と他人が言葉を掛けたので本氣に復つた。『貴女は誰とまあ話て居らしつたの』、『イエ今お母さんが確に』もう姿はかき消されて了つてゐた。不思議なこ

あまり明らかに母の姿を見て、現に『七郎を頼むぞよ』とまで云はれたのがたゞ事ではない、母の身の上に變事でもなければよいがと思ひながら、京城の七郎氏へ手紙を出さうかと思つてゐると、その翌日になつて母危篤の電報が來たので、直に京城へ參られたさうです。

また母の逝去なられた後、ちやうど彼岸中日の前日でした。七郎氏が、朝、床からもう起きやうと半身を起してゐると、急に裏手の戸が開いたかと思つたので、彼方を眺めると、何者とも判らぬ黒い影が椽に坐つてゐる。眼を開けて見ると母さんの姿なので、思はず布團をはねのけると、『七郎や、もう彼岸になつたが神戸の家へは何とかしてくれただらうね、お彼岸が大切だからのう』と、姿はまたかき消すやうに見えなくなつた。そこで七郎氏も、この亡母の告げによつて、朝飯前であつたが、郵便局へ走つて、電報爲替で、中日の回向料を神戸へ賴むでやつたといふことです。これは正に母のために實驗したことである、七郎氏はこの不思議な實驗をば、滯鮮中の私に話したいというて態々來られました。

とかく信仰が無ければ眞面目な精神は起らない。日本人全體が信仰を抱けば、そこに日本人全體としての滿足がある。而して、明かに眼に見えぬ神佛の實在をも認め人間の誠が見られる。『眼に見えぬ神の心に通ふこそ、人の心のまことなりけり』の歌の意も神人冥合の信仰である。

七

ここに禪定――これは坐禪のことで、心を落ちつけることです。越後長岡に講習會がありました時、會員には婦人も交つて頻りに坐禪をしてゐた。また滿洲の寺でも、信者の方が五人三人と來て讀經したり坐禪をしてゐた。坐禪の目的は、前にも述べた通り心の落ちつきを計るのです。日本は昔から坐る習慣であるから、普通に坐つても成るべく脊梁骨を眞直に立てて、下腹を突き出す心持で坐ると、自然に精神の落ちつきが出來る。

凡て學問が進むに伴れて人間が利巧になる。釜山の女學校で一席の講演をしましたが、其の時、この學校の一女教員で極めて模範的な方が、何したものか自殺をしたといふ話を聞きました。その死因は正しく迷信厭世の淺薄な考から起きたので、餘り學問に深く耽つた結果、哲學問題とか人生問題とかの苦悶から、精神に異狀を來たしたのではあるまいかとのことであつた、要するに、精神の不健全がかくあらしめたのである。故にお互は、このお腹にグッと力をいれて、所謂『八風吹けども動ぜず天邊の月』といふ大丈夫の精神を養成しなくてはなりません。

池袋の成蹊學校では生徒に坐禪を奬勵して、寒中眞裸で坐禪をする。腹に力が這入るので熱氣を發し、寒中でも汗が出るやうな鍛錬をしてゐる。昔の英雄なぞも初めからの偉い人ではなかつた。みなこの修養

練磨の力が致したのであります。

八

支那に慧鬼といふ和尚があつた。元來度胸のいゝ人で、屢惡魔が脅かしにきたものでした。ある時の如きは、眞赤な頭でお腹のない異形を現した。和尚は嘲笑つて『お前はさぞ胃病の患がなくてよからうなう』と言はれた。惡魔が今度は暗中から頭のない姿を出すと、和尚これを見て『頭痛の心配がないからよいだらう』と言はれた。それから惡魔は幾度か手を替へ科をかへて、和尚の定力を迷はさうとしたが、終ひに退散しなければならぬ破目になつたといふことである。かくの如く、お互の心さへ確と定まつてゐれば、正に盤石不動の心境となるのであります。『七度恕して以て善に進む、七度思うて惡を防ぐ』で、善にも惡にも落着いてやるといふのが肝要である。

ネルソン提督は背の低い人で、當時『倭小の艦長』とさへ渾名せられてゐたくらゐであつたが、自ら『何が貴様』といふ負じ魂が、彼のトラファルガルの海戰に散々ナポレオンの艦隊を悩ましめ、笑を含むで死に際までも軍人としての職分を果し、赫々たる海軍軍人の勇將として世界にその武勲が傳へられてゐる。若しネルソンにして背が高かつたならば、果してこの芳名を遺すほど立派な人になることが出來なかつたかも知れない。

凡て世の中の事は、みな運不運で、苦しいことと悲しいことが一つの動機となつて、それぞれ善道に導くものであります。世の中の萬事はみな心のとり方一つで、氣に入つた事でも、氣に入らぬ事でも、よく考へると結局は腹に力がなくてはならぬ。

朝鮮木浦で雨の一日、宿から前の通を眺めてゐると、そこは一條の坂路になつてゐた。多くの鮮人は往來してゐるが、縱ひ雨の中でも急がない。極悠々乎と全身濡れ鼠になつて歩いてゐたのは奇しい現象であつた。日本人ならすぐ走り出すに違ひないが、鮮人はそれだけ落着がある。それといふのも、頭の上に大きい水甕を載せたりしてゐる加減もあるが、併し、その態度は實に堂々たるものであつた。そこへ往くと日本人は何處かに齷齪しいところが見える。

すべて心に落着があれば物を苦にしない。厭なものを眼にしても、また、耳にしても、更に神經に刺戟を受けない。而して心を寛く持つてゆくことが出來る。眞言宗では阿字觀、三密相應といふ、または天台にては止觀といふ、皆な禪がその根本をなしてゐるものであります。

九

三に戒行——如來の說法の第一は梵網經であつた。この經の最初に『孝順は至道の法なり、孝を名づけて戒となす』と言うてある。孝は人臣としては陛下を親とし、家族としては親を君とし、學校では生徒が

先生を親と仕へることである。

盂蘭盆會の起源も、目蓮尊者の孝順心から發した拔苦の供養會で、昔から皇室でも行はせられ、一般民間へも普及せられたのであります。今日ではいろ〳〵の方法によつて佛を供養し、御先祖の魂をお祀りするが、それもよろしい。一家仲よく無邪氣になつて、佛をお喜ばせ申すことが肝要である。盆踊といふのもその始めは、一年中でこの一日を、老いた人も子供に若還つて無邪氣に踊り遊び、子供になつて心の滿足を味ふことから起つたものである。それが段々風俗を紊すやうになつたのは惜むべきことである。

日本では昔時より火を聖火と稱して、盆になると迎火をして道を淨め、只管御先祖の御魂をお迎へする。御先祖が今日居らつしやるといふ心になるのが、何とも云へぬ敬虔の念を起させるものです。實にお盆の行事は國民的招魂祭とでも云ふべきもので、第一に家内の和合、子孫の繁昌、祖先の崇拜の三に歸するのであります。お盆によつてすべてを忘れて、仲よく團欒を樂む、家内和合が何よりも一大幸福である。要するに、道徳本位によつて現はれた儀式が盂蘭盆會であります。

故に、佛は何よりも先に孝行を説かれた。五戒も十戒もみな道徳である。この道徳を立派に守るには學問だけでは到底解らない。誰でも知つてはゐるが行はれない。『心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん。』で『誠』に契へば精神に表裏がない。僞がないから佛心に契うてゆく。眞に信仰のあるといふことは、きつと道徳にも契合してゆくのである。道了薩埵を信仰して家内安全や商賣繁昌を祈願し

ても、一方に於て道徳を破壊してゐるやうでは、何等利益のあらうはずはない。實に信仰によつて凡の道徳は完成されるのである。有り難いと感ずれば、そこに忠孝の心が湧く、故に信仰と禪定と戒行とは鼎の三足に等しいものであります。

佛の敎は簡易である。易いといふ點から言へば、誰しも三大綱領の精神を自然に實現することが出來るのである。『上智下愚を論ぜず利人鈍者を選ばず』で、今日以後は益々大勇猛信仰の人を造りたい。今度滿洲朝鮮を回つて參りましてからは、よりこの感を深くしました。皆さんお互は悉く在家の菩薩である。菩薩は佛の本當の精神を繼がせられる方である。菩薩なれば道徳を基礎として信仰生活をなさるれば、やがてそれが不言の説法となるのであります。

朝鮮の將來と佛教徒の使命

一

朝鮮の將來と佛教徒の使命、私は今日、此の題下に於いて、明治四十三年八月二十九日、新に我が帝國の版圖に併合されたる朝鮮に對し、我が內地人の將來當に盡すべき大綱を、佛教主義に依りて之を概說し、同時に、聊か朝鮮と佛教との關係を述べ、以て我が天皇(明治天皇)陛下の御聖德の宇內萬邦に光被する所以を稱揚し奉りたいと思ふのであります。

抑も朝鮮國は、今を去ること三千年以前、支那殷の王族箕子が、周の武王の亂を避けて遼東に遷り、後に朝鮮王となつたのが先づ建國の始めであると申します。それより九百年程を過ぎて、燕の衛滿が箕子の社稷を滅して之れに代り、治世僅に八十餘年にして漢の武帝の爲めにまた亡ぼされました。其の後、馬韓・辰韓・辨韓の三韓に分れ、三韓漸く衰ふるに及びて新羅と高勾麗と百濟との三國に分立したのです。佛教の朝鮮に傳つたのは此の三國分立の時代であります。

それより七百年を經て唐の高宗に征服せられ、高勾麗と百濟とは皆な滅びましたが、新羅は唐の助けを

藉りて南朝鮮の全部を領しました。これを新羅統一の時代と稱して、紀元七世紀より十世紀までの間に當ります。其の後、新羅の王族弓裔の部將に王建と稱する豪傑ありしが、自立して王となり、都を今の開城に定めて國を高麗（日本ではこれもコマと呼ぶ）と稱し、遂に新羅を滅ぼしました。是れが高麗の太祖にして、是より以後を高麗統一の時代と申します。

高麗國を傳ふること凡そ五百年、紀元十四世紀の中頃に至り、外患內亂並び起り、如何ともすること能はざるに至り、遂に李成桂と稱する英雄出でゝ、高麗に代りて王位に登り國號を復して朝鮮と稱し、都を今の京城に移された。是が朝鮮の太祖康献王にして、即ち舊韓帝、今の昌德宮李王殿下の御祖先であります。

太祖の時より專ら明の太祖の封冊を受けて明朝に服事して居つたが、明亡びて清朝となるに及びまたまた清朝に臣事するやうな有樣になつたのである。然るに、近世に至りては外患頻りに逼り內政更に振はず、前帝位に即くに及び、彼の有名なる大院君が攝政として數々其の才能智略を揮ひたるも、到底、李朝の衰運を挽回すべくもあらず、後に東學黨と稱する亂民の蜂起するに當り、之を鎭定するの力なく、其の結果は、遂に日清の大戰爭を惹き起す樣な事になつたのである。

而して此の戰爭は、日本の大勝利に歸したるを以て、朝鮮は漸く清國の羈絆を脫し、時の韓帝は『清國に依附するの念慮を割斷し、自主獨立の基礎を確建す』といへる洪範を定めて、祖宗の大廟に誓告せられ

た程であつたが、弱國の悲しさは自ら獨立の基礎を確保するに由なく、種々の経過は遂に日露の大戰争を見るに至つたのである。

該戰争は一年八ケ月の長きに渉り、全然、我國の大捷に歸したるに依り、朝鮮は遂に我國の保護の下に立ちて内政の改善を圖りたるも、到底、一國の獨立を保ちて國民の幸福を增進するの見込なき爲め、斷然、朝鮮國を擧げて我國に併合し、永久に我が天皇陛下の御主權の下に屬し、其の國民は盡未來際陛下の赤子となり、吾々お互とは最も親密にして長へに離るべからざる同胞兄弟となつたのであります。

二

是の如く朝鮮半島は新たに我國の版圖に歸したやうなものゝ、古來よりの歷史的關係に就て熟々考へて見ますれば、必ず斯くならざるべからざる深き〳〵因緣があるのでございます。抑も我國の皇祖たる天照大神の御弟君にわたらせらるゝ素盞嗚尊は、神代に於て既に朝鮮を統治したまふの御思召を以て御渡海あらせられ、新羅の國の曾尸茂梨といふ所に在して一國を御統治あそばされたのです。出雲の國の簸の川上に在したのは其の後の事であります。曾尸茂梨といふのは、江原道の春川だといふ說もあれば、今の慶州だといふ說もある。此の時既に、朝鮮の全部ではあるまいが、其の大部分は素盞嗚尊の御治道の下に歸したものと思はれます。

三國鼎立の時、辨韓の伽羅が蘇那曷叱智といへる者を朝貢使として我國に遣はし、自國の保護を願ひ出た。これが崇神天皇の六十五年である。天皇は其の請を容れたまうて國名を任那と賜ひ、鎭將を遣はされて其の國を御治め下されたのです。其の後に有名なる神功皇后の三韓征伐がありまして、新羅國は全く之に降服して年々八十艘の貢物を奉ることゝなり、高麗も百濟も共に西蕃と稱して朝貢することになつた。

應神天皇の十五年には、百濟王が阿直岐といへる者を遣はして貢を納めしめ、其の翌年は同國の博士王仁が來つて論語や千字文を獻上した。是が我國の文敎を興した端緒である。造船の術や醫藥の法、其の他種々の技藝も此の時代に我國に傳つて來たと申すことである。繼體天皇の時には朝鮮の三國は互に爭鬪に絕間なかりしかば、我國よりは近江毛野だの大伴挾手彥などを彼地に遣はして、保護を加へられたこともある。それから欽明天皇の御宇には、百濟の聖明王が使を我國に遣はして佛像や經卷を獻上した。是が我國へ佛敎の傳つた濫觴であつて、其の時の佛像が今の善光寺如來であるといふ。其の後、新羅の勢力が段々と强大になつて、終には百濟や高麗をも併合して所謂新羅統一の時代となり、また三百年程を經て新羅が亡びて高麗の時代となつたが、此の數百年間も我國は、或は使を發して百濟を救ひ、或は兵を派して高麗を佐くる等、間接直接に彼國の爲めには御盡しになつて居る。

高麗の朝には支那の勢力に屈從し、殊に元宗の時には支那の元の世となり、宋朝を滅ぼして海内を統一

安四年の役である。我國では執權北條時宗が拔山蓋世の勇を以て元に當り、毫も我國の威嚴を損ぜず、十萬の元兵筑紫に薄りたるも、奮撃突戰して上陸せしめざるうち、神風大に起り敵艦皆な破れ、我兵勢に乘じて掩撃し、殆んど之を鏖にし、生きて還る者僅かに三人なりしとのことである。李朝になつてからは、彼の有名なる太閤秀吉が征韓の師を起して、文祿・慶長の大活劇を演じた。

德川時代には使節の贈答ぐらゐに過ぎなんだ樣であるが、維新以後に至り、我國と朝鮮との關係は益々密接を加へ、明治八年より以來種々の事變をも生じ、延ひて日清の戰爭ともなり、日露の戰爭ともなり、遂に今日の大革新を見るに至つたのである。此等の事はクド／＼しく御話申上げるまでもなく、諸君の御承知の事であらうと存じます。

要するに、我國の朝鮮に對する關係は幾ど開國以來深密なる因緣を有し、且つ我國は始終一貫して朝鮮を保護誘掖するの位地に立つて居りし事は、疑ひもない歷史上の事實であります。殊には、人種といひ、言語・文字といひ、大體に於て其の起源を一にして居るといふことは、種々の方面より研究して最も確實なるものとすれば、我國と朝鮮とは殆ど先天的に併合し得べき性質を有して居るものというても差支はあるまいと思ひます。

三

殊に宗教の方面から申せば、朝鮮國は我國と同じく、佛教國といはれるであらうと思ふ。朝鮮佛教の起源は高句麗國十七代の主の小獸林王（我が仁德天皇の頃）の代に、支那の秦の符堅王が順道と阿道との二人の僧侶を使として、佛像・經典を賜はつたのが濫觴であります。王は特に肖門寺といへる寺を建てゝ順道を置き、伊弗蘭寺といへる寺を建てゝ阿道を住せしめられた。是は今より千六百年餘も以前の事であります。其の後、百濟の十四代枕流王の時、印度僧の摩羅難陀といへるが支那より來りて百濟佛教を開いた。これより十餘代の後なる聖明王の時に、佛像・經論を我國に獻じて日本佛教の起原を造つたのである。

新羅の佛教は同國十九代の主の訥祇王の時に高麗より傳へたのが始めである。それより忽ちの間に隆盛を極め、同國の明君と稱せられた二十三代の法興王の如きは、大興輪寺といへる大伽藍を創建し、晩年には出家して法號を法雲と呼び寺中に住せられ、王妃もまた出家して妙雲と號し、永興寺を建てゝそれに住せられた。二十四代の眞興王は皇龍寺を始め多くの寺院を創立して、宮中に八關齋を修行せられた程である。

我國では、欽明天皇の朝には百濟より曇慧・道深等の僧が來り、崇峻天皇の時には善信尼などは態々百

濟に渡つて佛教を研究した。推古天皇の時には高麗より惠慈・僧隆等、百濟よりは慧聰・觀勒などいへる僧が來朝した。聖徳太子の時代には百濟や高麗より多くの高僧が我國に來つて、盛に佛教を宣布したのである。

禪宗の方では、新羅の統一時代に支那より禪法を傳へた。國慧・洪直などいふ新羅僧は入唐して、馬祖大師の弟子智藏禪師から法を嗣ぎ、大梅禪師の下よりは新羅の僧、迦智・忠彦の二禪師を出し、洞山大師の下よりは、新羅の金藏和尙を出し、其の他、新羅及び高麗より支那に入りて禪を傳へた僧が澤山あつて、明かに傳燈錄の中に列してあります。新羅亡びて高麗の時代になつてからも、代々の國王が皆な非常なる佛教の篤信者であつた。高麗の太祖は印度僧の摩喉羅嚃哩嚩日羅を迎へて宮中に八關齋を修し、六代の成宗は興天寺を建てゝ禪宗の大本山とし、興福寺を建てゝ敎宗の大本山とせられた。

十一代の文宗は王子煦窺を出家せしめて、後に大覺國師と號した。是が高麗の天台宗の開祖である。其の外、天台四教儀を著はした諦觀も高麗僧であつて、諦觀は宋朝の招きに依り、支那に至りて天台の教義を宣布した程である。元曉・義相などいふ人々も皆な高麗の名僧です。有名なる高麗版の大藏經を刻したのもやはり高麗の時代である。是の如く朝鮮國の全局面に涉つて全盛を極め、且つ文化の進歩、人心の開導に多大の効蹟ありたる佛教も、漸次に弊害を生じて來た爲めに、李朝になつてから宮中及び儒者の間に排佛家が續出し、遂には高麗の十二宗派を減じて、比較的弊害の少ない禪と教との二宗となし、寺祿等も

多くは官に沒收して、僧侶を虐待した處から、たうとう今日の樣なあさましき狀態になつたのである。

併し、幾百年の間、人心の奥底に滲みわたりし佛敎の感化力は、猶ほ一種の習性を爲して居る樣に思はるゝ。況や朝鮮の勝地には、大概相當の寺院が存してある。中には通渡寺・海印寺・金剛山等は實に堂々たる大刹である。今後、善良なる方法に依りて之を導き之を勵ましたらんには、再び新羅高麗時代の盛運を見ることなしとも斷言は出來まいと思ふ。縱や朝鮮在來の佛敎は當分其の見込なしとするも、我國の國體と民情とに順應し、殊に寬容主義、平和主義、慈忍主義なる我國の佛敎を彼地に宣布して、彼國の同胞の幸福を增進するのは、實に目下の最大急務であらうかと思ひます。

四

抑も我が天皇陛下の朝鮮を併合したまひし所以の大御心は、併合當時の御詔書及び併合條約にも明示したまひし通り、『相互の幸福を增進し、東洋の平和を永久に確保せん』との御仁德より出でたのである。過去三千年以來、常に親密なる關係を有し、殊に明治の御代になりてより、一層、朝鮮保護の大任に當らせたまひ、朝鮮の爲めには殆んど國家のあらん限りを盡し、且つ幾百萬の忠良なる臣民の生命をも犧牲に供したまうたのである。日露戰役の後に至り、朝鮮を擧げて我が保護國となして其の安全を保ち其の文明を扶植するに御盡し下されたるも、猶ほ未だ治安の保持を全うするに不十分なるを以て遂に韓國皇帝の要

求を容れさせられて、朝鮮を我國に併合せらるゝに至つたのであります。

されば舊韓國皇帝が舊國民に發せられた御告諭には『朕、是に於て瞿然内に鑑み確然自ら斷じて、此に韓國の統治權を從前より深信修交せる隣國大日本皇帝陛下に讓與し、外、東洋の平和を確固にし、內、八域の民生を保全せんとす。顧ふに爾大小臣民、國勢と時期とを深察し、繁擾すること莫く自ら其の業に安んじ、大日本帝國の文明新政に服從し幸福を享受せよ』云々と仰せられてある。

我國有史以來の大懸案たる、朝鮮問題を解決し、永久に相互の幸福を增進すべき大果斷を行ふに當り、寸毫の故障も無く、微塵許りの波瀾も無く、和氣靄然たる間に於て合邦を決行せられたといふは、古今東西に比類なき皇上の御仁德の致す所と察し奉るのであります。殊に舊韓國皇帝に對しては、特別の御禮遇を賜うて王の隆錫を與へさせられ、昌德宮李王と稱し、以て世襲と爲し、太皇帝を太王として德壽宮李太王と稱し、皇太子以下皆な夫々の尊稱を賜うて、待つに皇族の禮を以てせられ、功績ある人々には相當の榮爵を賜ひ、兩班や儒生や孝子節婦等には恩典を與へられ、之れと同時に、舊韓國法令の罪を犯したる囚徒中、情狀憫諒すべき者に對しては特に大赦を行はせられ、積年の租稅の未納及び今年の租稅は之を減免するの恩典を施したまひ、また七百萬圓を支出し、之を十三道に配與して慈善・敎育・救恤の資に充てられ、其の他、朝鮮國民に對する各種の恩惠は、實にや一視同仁の惠澤、天よりも高く地よりも厚く、隅から隅まで至らざる所なく、及ばざる所なしといふ有樣であります。

涅槃經に佛の心を說て『諸々の衆生に於て大慈心を生じ平等にして二なきこと一子を視るが如し』と、陛下聖德の光被する所は實に是れ佛陀大慈悲の光明であります。陛下が曾て『月前に志を言ふ』といへる題にて詠ませたまひしといふ御製を拜し奉るに、『わがこゝろ至らぬくまのなくもがなこのよを照す月のごとくに』と仰せられてある。併し、陛下の御仁德の廣大無邊なることは月の光よりも一層高く且つ明らかであらうと思ふ。なぜなれば、陛下の御恩光には晝夜の隔てもなく盈缺けの變りは無いからであります。

斯も甚大なる御恩德に浴して居る。吾々は、どうして此の御鴻恩に報い奉つたものでありませう。修證義にも『唯當に日々の行持其の報謝の正道なるべし』とある通り、陛下の御心に副ひ奉るやうに吾々の本分を實行するのが報恩の正道です。さすれば新日本たる朝鮮の同胞に對しても、專ら溫情を以て之を迎へ慈愛を以て之に接し、新らしき同胞をして陛下の御聖德に感じ國家の仁政に服し、吾々お互と一心同體となりて、盡未來際安寧幸福を與にするの實を擧ぐるのが、最も肝要な事であらうと思ひます。

五

然るに朝鮮の狀態は如何であらうかといふに、悲しい哉、近代に至り、世界の大勢に拮抗する由も無く、國民は益々疲弊を極め、且つ統治の方法其の宜しきを得ず、教育は依然舊習を墨守して、更に發達の

道を講ずるといふ樣な事は無かつた。殊に高麗の時代より國民の上に兩班即ち貴族と常民と奴隷との三種
の階級を設け、おまけに、それが殆んど世襲であつた爲めに、貴族は妄りに權威に誇り、常民以下は益々卑屈に陷り、自然、人材登用とか人物淘汰とかいふ事は更に行はれぬ所から、聖も聖ならず、愚は獨り益々愚なりといふ有樣になつたのである。

我が明治二十七年に、内政を改革して此等の階級を廢したるも、實際に於ては依然として習慣を破ることは出來なんだのである。而して、官吏の横暴は殆ど言語に絶し、民間に多少の資産を有する者あれば、何とか難癖をつけて其の資金を横領するといふ始末である。朝鮮に往つて、第一に目に着くのは、見渡す限りの山々に樹木らしい樹木は更に無く、皆盡く禿山である。であるから、燃料に窮して、往々、馬糞などを燒いて居る者がある。然らば、朝鮮の山には樹木が育たぬのかといふに、江原道方面などは樹木があり過ぎる爲めに、火賊や暴徒がその森林を巢窟として居るので困る位なさうである。鐵道沿線の山々とても、いくらでも殖林が出來るのであるが、せつかく殖林しても、どうせ難癖をつけて取られるから、却つて禍を植込む樣なものだといふので、特と裸山にして置くとの事である。

また、大邱にせよ、平壤にせよ、朝鮮屈指の都會でありながら家らしい家はない。皆な例の豚小屋式です。何故かといふに、土藏を建てたり立派な家でも造つたりすると、惡い役人や火賊の爲めに強奪さるゝ恐があるから、金や寶物は穴藏に收め、有所地の如きは少しづゝ幾箇處にも持つて居て、なるたけ貧乏人

らしく見て貰ふやうにして居るのださうです。

中流以上の人間は、宵ッ張の朝寢坊で、午前十時過でなければ寢床を離れぬ。釜山邊で聞くと、貧乏人でも、夜と雨降とには仕事に出ぬ。食物が無ければ食はずに寢て居る。天氣になると停車場や海岸等に出るが、仕事が無いと八月の炎天でも、顔を曝してゴロ〳〵と地上に寢て居る。男も女も外を歩くには、一尺七八寸もある長煙管を手に持つてスパ〳〵やりながら歩く。殊に女は水桶まで皆んな頭の上に載て居る。男は肩を使ふ事が出來ぬと見え、天秤棒に釣した桶などまで、腰の處へ横に縛り付けて歩いて居る。尤も、人情風俗の上には、多少取るべき處もあるには相違ないが、大體に於ては、卑屈と遊惰との惡習に沈み切つて居る所から、進取の氣象、高尚なる氣品、勤勉力行の勇、廉恥信義の德といふ樣な、文明國民の要素が缺けて居るものと思はれる。併し、是れは決して國民のみの罪ではない。畢竟、政治の不完全なると教育の不行屆とに依りて玆に至つたものと信ずるのであります。

六

今や幸に我帝國の版圖に入り、今後、朝鮮總督は天皇陛下の大御心を奉じて、着々之れが誘導改善を御謀り下さるゝのであるから、日一日と國内の面目を改め、年一年に國民の智德を進め、幾年ならずして

朝鮮國は御承知の通り、面積の廣さが八萬二千方哩、人口は一千何百萬といへる一大邦域である。且つ最も農産物に富み、また三面海に瀕して海岸線の延長八百餘里もあるに依つて、自然、水産物にも富み、其の上、鑛業も殊に有望との事である。然れば、朝鮮その物が既に立派な寶である。若し其の國民にして文明の智識を養ひ、內地人と手を携へて産業の發達に努めたならば、山も河も、海も野も、草も木も、水も石も、盡く文明の光りを放ち開運の花を咲すに相違ない。

國の文明と野蠻とは人に依つて分れる。人の智愚强弱は敎へに依つて分れる。敎ふるに道を以てすれば愚人も智者となり、弱き者も强くなる。智にして且つ强かりしならば其の國は駸々として文明の域に進むものである。內、智德の啓發に勵み、外、産業の發達に勤めなば、山も海も自ら己れを利し人を益し、草も木も自ら家を賑にし國を豐にす、卽ち今までは憐むべき狀態に在りし國が、忽然として喜ぶべく樂しむべき佛の淨土となるのである。修證義の御文に『是時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を爲すを以て』とあるは卽是れです。佛事といふは佛樣の御仕事、佛樣の御仕事は何かといへば衆生を利益するの業です。

そして次の御文には『其の起す所の風水の利益に預る輩』とある。風水とは、此の世界及人身の原素たるべきものを、佛敎では地・水・火・風の四大と說いてある。此の四大が和合して世界をも人身をも成立し、また相續して居る。地は能く萬物を載せ、水は能く萬物を濕ほし、火は能く熱を與へ、風は能く

動力を與ふ。誰からも頼まれた事ではないが、天地自然の約束として地水火風ともに能く其の力を施して、大利益を與へて居る。吾々は此の風水の利益を被つて、生れもし、働きもして居る。佛の御心は大慈大悲で、佛の仕事は衆生利益に在りとすれば、地も水も、火も風も、皆んな佛様の仕事をして居るのである。吾々もまた、今後、朝鮮の同胞に對しては先進者たるの位地を守りて、最も親切に、最も着實に、佛様の仕事をせねばならぬ。是が我が天皇陛下の御化育の御仁德を宣揚し奉る所以である。

其の佛様の仕事の仕振を、修證義には布施・愛語・利行・同事の四つに分けて示されてある。布施といふはホドコシです。自分の力を頒ち彼れに與ふることです。金力のある人は金力を以て彼を導き、學力ある人は學力を以て彼を教へ、宗教家は宗教を施し、政治家は政治を施すのである。だが、いくら施したからとても、高貢我慢の心を起して彼を輕蔑したり、妄りに恩に着せて彼より報いを貪つたりしてはならぬ。故に、次には愛語を守ることが肝要です。愛語というても、言語の上ばかりではない。總ての振舞が親切で柔和で、實體に眞面目でなければならぬ。即ち朝鮮人を視ること、我が親しき兄弟か友人の如くに思うて居れば、自然と愛語の德を守ることが出來る。併し、いくら親切でも柔和でも、向ふの不爲になる事ではならぬが、萬般の施設は、盡く彼を文明に導びきて相共に永久の幸福を得るやうにして行くのが利行です。それには同事というて、向ふの民情にも背かず風習にも逆はず、時機と人情と場合とを見計うて、所謂宜しきに適ふの方法を取るのが同事である。

斯ういふ方針を以て、新日本同胞の爲めに誠意を傾けて盡したならば、皇上至仁の御聖德も益々彼地の津々浦々にまで現はれて、其の恩光が朝鮮國內の人心の奧底にまで滲みわたる程になれば、自然に新日本の同胞兄弟も悅服し、同化せしめて、純然たる、陛下の忠良なる赤子ともなるであらうと思ひます。

七

前にも申した通り、御國の大恩に報い奉る所の第一義は、陛下の大御心を奉戴して御仁德を遺憾なく普及するやうに、日本國民として、世界列國の模範ともなるべき行持を現はすに在ります。殊更、我國に於ける家庭道德の基礎は孝行で、國家道德の中心は忠義である。此の忠孝の二道は、元來、一體不二にして其の不二の德が信義ともなり、博愛ともなりて、社會道德の根柢を造るのである。中に就いて、忠の一字は國民道德の源泉であつて、孝悌博愛の道も、畢竟、忠の分身といふことが出來る。然れば、陛下の大御心を奉戴するのが、やがて人道の全體を收めたるものである。父母は是れ一家の君、君は是れ一國の父母なる事を忘れてはなりませぬ。されば薩遮經には『王とは民の父母なり、法を以て衆生を攝護して安樂ならしむるが故に』と仰せられ、華嚴經には『國に君主あれば一切安きを獲る、是故に人王は一切衆生安樂の本たり』とも仰せ下されてある。

況や、我が天皇陛下の御仁德の如きは、其の至高至大なる、古今東西に秀でさせたまひし事は申すも畏

こし、日露開戰の際などは深くも御歎きあそばされて『四方の海みな同胞と思ふ世になど仇波のたちさはぐらん』との御製あり、戰死せる勇士を惜みたまふの餘り、其の遺族の事を思召されては『國のため斃れし人を惜むにも思ふは親の心なりけり』との御製あり、農民の辛苦を思召されては『あつしともいはれざりけりにへかへる水田に立てる賤を思へば』、『賤の男が獨り曳きゆく小車の重荷の上に積もる雪かな』と仰せられ、天候不良にして風雨烈しき折などは、御衣の濕るゝをも厭はせられず、御縁の端近くへ出御ましまして『斯く暴風雨にては、下々の身の上いと心もとない』と仰せられたまひ『照るにつけ曇るにつけて思ふ哉わが民草の上はいかにと』といへる御詠さへあらせられしを、漏れ承はるだに感涙の滴るゝを覺えます。

斯かる限りなき御仁徳に渡らせらるればこそ、朝鮮併合の大事を御斷行あらせらるゝに當りても、一語の爭ひもなく、一人の傷けるも無く、全く談笑の間に定まつたのである。故に、朝鮮併合の事たる征服者と被征服者との關係あるにも非ず、占領・被占領の意味あるにも非ず、全く眞の親子兄弟が集つて、『然らば願ひます』、『宜しうございます』といつた樣な御約束の下に成立つたのであります。

して見れば、吾々は、常に、陛下の御心を戴き奉りて、朝鮮の人々に對しては、眞實、兄弟の觀念を以て之れに接し、毫も高下尊卑の分ちを付けぬ樣にせねばなりませぬ。朝鮮の人々が內地に來りし場合には、彼の人々をして肩身の狹いやうな思ひをさせぬやうに、相當の敬意を拂ふ事も大事である。萬一、彼

の人々の心得違ひの振舞があらうとも、妄りに之を惜んだり罵つたりすることなく、常に兄が弟を愛

し、姉が妹を憐れむが如き親しき情を持ねばならぬ。因果經には親友の道を三ヶ條に說てある。即ち、第一には惡しきことある時は諫め曉して善に遷らしむる事、二には、善きことあらば中心に喜んで之を賛助する事。三には、困難ある時は之を救うて捨てざる事の三ヶ條です。吾々は此等の教訓に基いて、何處までも、朝鮮の開發と同化とに努め勵まねばなりませぬ。さすれば、前にも申した通り、吾々の行持が其のまゝ天地と其の德を同うし、天地の大化育、地水火風の大利益といへる。

即ち『甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす』で、吾々の一擧一動が天地の德、雨露の惠と同樣なる佛陀大悲の御化導となつて、お互が冥々の間に、資けたり資けられたりするのであります。是れが佛の御悟の顯はれた姿である。佛の御悟の道が目の前に現はれて、自利々他の功用を起してこそ、佛法も活きて來るのです。親き悟りとは活きた佛法といふことである。

縱ひ朝鮮に行かぬ人でも、自分の家に居りながら、新同胞の平和と幸福とに盡さんとの眞實心が有りさへすれば、其の眞實心は知らず〳〵の間に、朝鮮の人の頭に入り、腸にも泌み込んで、内地の人の誠心に感じ、内地の人の力を賴みとし、自然と先方より慕ひ憑つて來るやうになる。是を『無爲の功德』とも『無作の功德』とも云ふのである。而して是の如き行持こそ『是れ發菩提心なり』で眞實の佛心佛行であるから、其の功德といふものは何の位廣大であるか測り知ることの出來ぬものであります。

改めて申し上ぐる迄もなく、朝鮮に對する今後の成績如何は、我が帝國の實力の輕重を定むる秤の様なもので、萬々一にも、成績が思はしからぬ事があつたり、內地の國民の態度に不親切な事や傲慢輕侮の振舞でもあらうものなら、それが爲めに陛下の御仁德を汚し奉ることが無いとも言へず、またそれが爲に世界列國の嘲を招くやうな事ともなる。若しもさういふ事でもあらうものなら、吾々は、上、皇室に對し奉り、また、我が祖先に對して何共申譯がないではないか。殊に佛陀の御慈訓に對しては、全で仇をなす様なものです。

惟ふに今日の我國は、陛下御聖德の光被に依り、數ならぬ吾々までが、嬉しき、樂しき、光榮多き地位に立つて居るのであるから、益々奮勵して、此の貴重なる位地を一層發達させる事が、實に我々の本分であります。此の本分を全うするに當りて、胸中一點の妄念だも存せざれば、それが眞に懺悔心の土臺、佛の御戒法の功德を現はす源となるのである。而して、能く之を實行に現はすのが利生の願、報恩の行で、本宗安心の骨髓たる修證不二、即心是佛の効果は、玆に於て現はれるのでございます。此外、御話し致し度い事が澤山ありますが、餘り長くなりましたから、先づ今席は是にて御免を蒙ります。

民力の涵養と十條の箴

一

世界的大戰亂も、獨逸の降伏に依りて平和に復することを得たるも、世界列國の實力的競爭は、今後益々激烈を極むべきは自然の勢である。國家の興隆發展は、その國民の堅牢にして且つ充實せる力に俟たねばならぬ。秦を亡ぼした者は六國に非ずして秦そのものである。獨逸をして降伏せしむるに至りたるは、聯合國の鋭鋒に因ることは勿論なるも、その敗亡の根本的原因はやはり獨逸それ自身であるのである。即ち獨逸そのものが民心の統轄力を失うたのが最大原因であると聞て居る。『外からは手もつけられぬ堅城を內より破る栗のいがかな』で、若し將來國家を傷くる者ありとすれば、その根本的原因は民力の衰亡に歸せねばならぬ。

今や我國は、世界の大舞臺に立て世界的發展を圖り、以て世界的平和の師表とならねばならぬ位地に立て居るのである。從つて、內、民力を涵養して國家の基礎を鞏固にするといふことが最も大切であります。民力を養ふのは即ち國力を養ふ所以の本である。然らば、民力といふは何んな力であらうかといふ

に、凡そ民力を分析して見ると七通りになる。

其の一は體力である。國民の體力が怯弱であつては決して活動は出來ぬ。然るに我が國民の體力は、他の文明國に比すれば、遺憾ながら優良とは稱せられぬ。否な、多くの弱點が認められ、從つて能率も低下して居るのである。吾々國民は此の點に於ても大に注意せねばならぬ。

二には富力である。國民が自覺的に勤儉力行して、產業の發達を圖り以て富力を增進せねばならぬ。

三には智力である。知識は實に文明の母である、知識は人類の眼である。若し知識が劣等であつては恰も盲人の如くにして、殆ど競爭の舞臺に顏出しをする資格が無いのである。今や文明國人の知識は所謂日に就り月に將みで、恰も一年一昔といふの感がある。昨年の知識も今年に至ればもはや陳腐である。今年の知識も明年に至れば低級たるを免れぬ。故に國民全體が、常に研究的態度を以て間斷なく知識の向上に努めねばならぬ。

四には武力である。武力を養ふといふことは盡く軍人たれといふのではない。國民盡く尙武の氣象に富み、所謂活人劍を揮つて勇敢なる威氣を現はす樣でなければならぬ。殊に我國は建國以來、尙武の德を以て國家を治め來つたのである。今日の如く、國民の多くが文弱に流れて英氣が衰へる樣なことでは役に立たぬ。

五には德力である。即ち道德の力である。如何に智勇に長じ財力に富んでも、之を統ぶるに道德を以て

せねばならぬ。殊に忠孝不二の大道を以て國民の生命となすべき我が國に於ては、一層德の力を訓錬せねばならぬ。世の進歩につれて競爭が益々激烈になり、社會の組織が複雜となる處から、動もすれば德の力が薄らぎ易いものである。近代に至りて益々此の感を深うせざるを得ぬ。『開けゆく道に出でゝも心せよつまづくことのある世なりけり』とは、明治天皇の御敎訓である。敎育の御勅語には『朕爾臣民と倶に拳々服膺して咸其の德を一にせんことを庶幾ふ』と宣うてある。吾々國民は此の點に於て、滿身の誠意を傾けて道德の向上を期せねばならぬ。

六には信力である。即ち信念の力である。神佛の實在を認めるのも、祖先の靈を祠るのも、皆な信念の力である。實驗科學の方面が如何に發展しても、若し信念を有せざる時は、決して、神佛を見奉ることも、祖先の靈に接することも出來ぬ。否な、天道を畏れ、宇宙の大靈に觸れ、渺たる一身を以て天地の精神に合致し、以て絕大の威德を感じ無限の妙樂を感得するは、實に此の信力の賜であります。吾々國民が常に神佛の照覽を畏こみ、一身の利害得失を顧みず、超然として天地の公道に殉ずるが如きも、全く信力の所發であります。此の信念こそ國民の根本的偉力である。

七には和力である。國民としても、家族としても、その團結力が强固でなければ決して國力を充すことは出來ぬ。億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは、我が國體の精華である。今後益々和協の力を養はねばなりませぬ。以上の七大力は實に是れ治國齊家の要素にして、斷じて其の一をも闕くことを許されぬ。

然るに、我國の現狀は何うであらうか、と顧みれば、何れの點から見ても、猶ほ未成品であることを免れぬ。民力の充實は國力の發現である。その民力とは、要するに以上の七大力の調和と充實とに存するのである。故に吾々は宜く全力を傾注して、此の七大力を完成することに努めねばなりませぬ。

二

予は曾て、吾々國民の修養すべき標準を、十則に分けて勸めたことがある。即ち

(一)盡忠篤孝　(二)尊重職分　(三)至誠眞實　(四)同情慈愛
(五)嚴守秩序　(六)堅忍剛毅　(七)獨立不羈　(八)趣味向上
(九)陰功獨樂　(十)信念堅固

以上は何れも平凡なる條目を羅列したのであるが、此の平凡なる條目が寧ろ修養上闕くべからざる標準であらうと思ふ。

抑も吾々國民に共通する大理想は何であるかといふに、一言にしていへば『國體を擁護して忠孝の大義を全うする』といふに歸するのである。之を以て單純にして偏狹なる國家主義と思うてはならぬ。我が國に教ふる所の忠孝は、其の内容頗る豐富にして、之を擴張する時は、日本國民として世界的に大道德を

而して、如何なる場合にも日本國民たるの本分に住するのが、我が國の忠孝主義である。

或る一部の學者が、『忠孝といふは自國に限られたる狹き道德であるから、世界的に發展すべき人類道德の原則とはなりかねる』とか、或は『忠孝といへる名は應仁天皇の時、支那より儒教が傳はつて以來の敎範で、それ以前には忠とか孝とかいふことを標示する言辭をも有して居らぬ。故に忠孝といふは支那傳來の道德である』、などと論議するが如きは、以ての外の大邪見と謂はねばならぬ。神武天皇の孝道を以て祖宗に奉じ臣民を撫育したまへるの事蹟は、炳焉日星の如くである。而して我が國の忠孝主義は、國家的道德なると同時に、世界的發展の基礎であることは、敎育の御勅語を拜すれば明々白々である。

故に吾々國民は、我れは日本國民なり、東洋文明の模範を示すべき國民なり、世界人類の道德的標本を以て任ずべき國民なりといふ、至高最上の信念に依りて、益々忠を盡し孝を篤うすべきである。是れ即ち百行の根本、道德の基礎であります。世界大戰の結果として思想界に變調を生じ、所謂新らしき思想なるものが、滔々として東洋に襲ひ來りつゝあるも、我が國民は國民道德の本義に則とり、始終一貫、國體の尊嚴を奉じ忠義の大道を守りなば、毛の頭き程も國民思想の根柢を侵さしむる樣な事はあるまいと思ふ。

二には、職分に對する尊重の觀念を養ふことが大事である。我が國の通弊として、とかく勞働に從事して居る者を卑み、坐食して居る者を尊むの風がある。農作に從事したり、大工、左官を業とする人々の如きも、吾は百姓である。吾は職人であるというて、自ら其の職業を輕蔑する風がある。是れは古へ士分の

者が、士百姓・素町人というて卑く見た習慣の遺物であるが、職業に貴賤なし、但だ心術に依る。百姓が泥まみれになつて働く、職人が眞黒に爲て働く、是れが爲めに之を卑むべき理由は無いはずである。軍人が劍を持つのも、農夫が鍬を執るのも、商人が算盤を彈くのも、皆な同等であります。人は各々其の分を守りて其の業に勵むのが大切なる務めである。世は分業に依て成り立つものである。法律と德義に反せざる限りは、如何なる業務も、皆な社會の一員として其の天職を盡すのであります。此の意味に於て常に職分を尊重すべきである。尊重の觀念は其の職分を神聖にし其の人の品性を高めるの力がある。若し自ら其の職を卑むに於ては、之れが爲めに品性が下劣になるのは自然の勢である。

明治十五年の冬に、某子爵が政府の命を帶びて歐洲に赴く途中、アレキサンドリヤ港に於て、有栖川宮威仁親王殿下が、同港に碇泊せる英國艦隊ビクトリア號に、海事御練習の爲めに御在艦なることを知り、拜謁せんものをと思ひて同艦を訪ひしに、『只今御勤務中』との事なりしかば、放課時間を待つ間、艦長の案内にて艦内を巡覽せしに、晝尙ほ暗き階下石炭庫の前に、燈火の光を浴びて一兵卒の直立するを見る。近いて見れば是れぞ殿下にておわしければ、思はず低伏して控處に立返り、やがて御沙汰を得て拜謁し、先刻の事を申上げ、金枝玉葉の御身を以て斯る勤務に從事したまふを、餘りに勿體なしと申上ぐれば、殿下には『卿は予が勤めし事を低き業と思はるゝや、そは甚だ間違ひならん。石炭は軍艦の生命である、其の生命を監視するといふことは實に重大なる任務では無いか。それを、姿が疎末であるからというて輕視する

様なことでは相成らぬ。我が國民には、動もすると勞働を輕んずる風がある。今後は大に注意すべきこと
だ』と仰せられたさうであります。

三

既に職分の尊重すべきことを知りなば、其の業務を執行するに當り最も忠實でなければならぬ。是れが第三の至誠眞實である。凡そ仕事をする場合には、必ず眞面目で、本氣で、親切でなければならぬ。宜い加減、間に合せ、胡魔化しは禁物である。眞劍勝負で腹の中からする仕事でなければ、決して徹底的成績を見ることは出來ぬものである。『居候ふ四角な坐敷圓く掃く』といふの類は至誠を缺いたやり方である。仕事に裏表がある様では自己の生活にも陰陽が出來る。卽ち虛僞の生活に陷いるものである。正直は最善の資本で、信用も之より生じ、幸福も亦た之より來るのであります。

更に進んでは、第四の同情慈愛の德を修めねばなりませぬ。同情とは思ひ遣りの深いことである。『我身だにわがまゝならぬ世の中に人のそむくはとがならばこそ』、堪忍も親切も此の同情から自然に發動するものである。然らされば、己れを責むるに緩にして人を責むるにのみ嚴重となるから、自づと我儘なる根性が現はれて來る。范純仁が、

人を責むるの心をもて己れを責め、己れを恕するの心をもて人を恕せよ

というたのも、皆な同情心の要を說いたものであります。慈愛といふは、親切を盡し情けを施すことである。凡そ父母が其の子を育つるにも、子が其の父母に孝養するにも、夫婦の和順も、朋友の信義も、皆な此の情の力に基づかざるはない。情は正しく人道的生活の根柢である。併し、之を導くに知識を以てせざれば、盲動的となつて却て禍を醸すことがある。また之を制御し實行するには、必ずや意志の力に待たねばなりませぬ。

併し如何に親切であつても、其の間に自づから嚴然たる秩序が無ければならぬから、第五に嚴守秩序を擧げたのである。家庭にも、社會にも、自然的に階級があり秩序のあるのが人間界の常である。人は之れあるが爲めに權利も義務も生じ、道德も分業も行はれるのである。儒教に『父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり』といふも皆な秩序を示したものである。秩序というても、必ずしも貴賤を以て判ずるものではない。各自の本分に從うて人道的禮儀を存するのが嚴守秩序である。

近頃は動もすると、子弟が父兄を輕蔑したり、學生が敎職員を雇人視したり、勞働者が資本家に對して反抗的態度を取つたりする傾向がある。また父兄も子弟に臨むの道を誤つたり、敎職員も學生に對して威嚴を失うたり、資本家も勞働者を奴隷視したりする風がある。此等は相警戒して、上下共に秩序を重んじ禮讓を守る樣にせねばならぬ。殊に我が國では、社會的禮儀といふことが、深く敎へられて居らぬ樣に思ふ。此の邊は御互に注意せねばなりませぬ。

宋の古靈陳が僊居の令と爲りし時、其の民に教へて

吾が民たる者は、父義に、母慈に、兄友に、弟恭に、子孝に、夫婦恩あり、男女別あり、子弟學あり、鄕閭禮あり、貧窮患難は親戚相救ひ、婚姻死喪は隣保相助け、農業を墮ることなく、盜賊を作すことなく、賭博を學ぶことなく、爭訟を好むことなく、惡を以て善を凌ぐことなく、富を以て貧を呑むことなく、行く者路を讓り、耕す者畔を讓り、斑白の者道路に負戴せざれば卽ち禮儀の俗とならん

というた。是れ亦た秩序の要を說たものである。要するに至誠を傾けて能く職を勵み、慈念を運らして能く衆に接し、秩序を守りて能く禮を整ふ、此の三德は處世の要訣、修道の基本であります。

四

惟ふに此の世は不如意の世である。人生行路難、禍福逆順轉々窮り無し。斯かる世に在りて能く始終を全うするは、決して容易とは謂ふべからず。水流れて常に滿たず、火盛んなるも久く燃えず、日出でゝ須臾に沒し、月滿ちて已に復た缺く。若し境に依て心を變ずる時は、千變萬化、遂に止まることあるべからず。故に第六には堅忍剛毅の氣象を養ふの必要がある。

堅忍剛毅とは、內、己れを制して妄りに怒らず、外、辛酸を凌いで苦難に當るの勇氣である。此の大勇氣が無ければ、決して平和を保つことも事業を爲し遂げることも出來ぬものであります。眞の勇氣には必

ず堪忍の力が添はねばならぬ。軍人の御勅諭にも『武勇には大勇あり小勇ありて同じからず、血氣にはやり粗暴の振舞などせんは武勇とは謂ひ難し、軍人たらん者は常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るべし、(乃至)、武勇を尚ぶ者は、常々人に接するには溫和を第一とし諸人の愛敬を得むと心懸けよ』と御諭したまうてある。此の御諭しに從ひ奉りてこそ、眞に能く堅忍剛毅の人たるを得るのである。而して、吾々は亦た之と同時に、第七の獨立不羈といふことが大切である。

獨立といふことは孤立一本立のことではない。但だ自分の爲すべき事は必ず自分に爲し、自分の家は自分の家人の力にて立派に治め、自分の市町村は自分の市町村民の力にて完全に治め、妄りに依賴心を起さず、妄りに他人に迷惑を懸けず、能く其の本分を守り、能く其の義務を盡し、而して、更に益々其の發展を圖りてこそ、始めて自治とも獨立とも謂ひ得るのである。殊に地方の青年とか、軍人分會とか、婦人會とかいへる團體の如きは、會員互に相勵みて、益々獨立の面目を發揮せねばなりませぬ。納稅を滯るとか、約束を破るとか、借金を返さぬとか、義務を怠るとかいふ樣な人では、縱ひ學者であらうが高等官であらうが、決して獨立不羈の人とは申されませぬ。

第八に趣味の向上、是れも大切である。人間は或る意味に於ては、全く趣味的動物である。面白味が無いと何事でも眞面目に働けないものであります。併し、その面白味、即ち樂みを劣等なる材料から造り出す樣では、却て品性を傷くる樣になる。芝居や相撲を觀て樂むとか、碁や將棋を打て樂むとかいふの類

は、決して悪いとは謂はぬが、何れも一時的の娯樂であつて永久の趣味とは申されぬ。況てや酒を飲で樂むとか花見をして樂むとかいふの類は、動もすると反對の結果を招くの恐れがある。故に趣味性を養うて向上せしむることが肝要である。

自然趣味は天地自然の風致を樂むのである。江上の清風、山間の明月、實に是れ造物者の無盡藏である。

春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪、若無閑事挂心頭、便是人間好時節

春は花夏ほとゝぎす秋は月、冬雪さえてすゞしかりけり

天眞の風致は無限の趣味を吾々に與へて居る。園藝趣味などもやはり此の自然味に屬して居る。次に讀書趣味、是れは衲が、一般青年諸君等に常々御勸めするのである。書物にも、知識の資料となるものと、精神の糧となるものと、單なる娯樂的のものとがある。成るべく前二者の中を擇ぶが宜い。娯樂を目的とする物は餘程その材料の撰擇に注意せねばなりませぬ。更に進んで宗教趣味、是を適度に養はゞ、最も高尚にして且つ無限なる趣味である。風流文學の趣味も亦宜しいが、是れは一般人に望むことは出來ぬ。されど、宗教趣味を有する人は、自づと文學的趣味をも感ずるものであります。

第九に陰功獨樂、是れは精神修養に志す人々には殊に大切なる自修的要件である。陰功とは、陰德ともいうて、人に知られずに善き事を爲し、それを自ら樂むのである。人といふものは多くの場合、名と利

との爲めに善き業を勸めたがるものである。名譽と利益、此の二つの物が殆ど目的となつて、一切の道德的行爲も、此の目的を達するの手段に供せられて居るのが人間の通弊である。要するに、目的と手段とが主客顚倒して居るのである。故に眞實道に志すの士は、名利の外に超然として、眞心をもて道德的善行を修むる。是を稱して陰功といふ。此の陰行を行ふことに於て、獨り自ら樂むのが陰功獨樂であります。
吾々にして能く此の修養を勸めなば、良心は益々健全になり、道德觀念は愈々明瞭となり、其の行爲は自づから聖賢君子の如くになるものである。而して、陰德陽報で、求めずして甚大なる勝果を獲得することが出來るのである。内、堅忍獨立の氣象を養ひ、外に高尙なる趣味と陰功とを蓄積すれば、所謂無我の德行、至善の功德を成就することも、決して不可能ではない。我が佛祖の敎ふる行持は是非とも斯くあらねばなりませぬ。

五

最後の信念堅固といふは、最も大切なる箇條である。我が國民の精神界に於ける缺點は何かといふに、信念力の薄弱といふことが、重なるものであらうと思ふ。信念とは我が心に堅く守る所あるをいふ。我が心の中に、最も尊重すべく恭敬すべき守り本尊を安置して、之れに歸仰し、之を愛念し、身にも命にも替へられぬ程に、之を守るのが信念である。

吾々は大日本帝國の臣民として、何物を犧牲にしても、天皇陛下に御奉公申し上げ、御國の爲めに盡さんとの覺悟を有する。是れが國家的信念である。次には道德的信念といふが必要である。即ち人の正に踐むべき道を守るに於て、堅固不動なるをいふ。或は一身を忠孝の犧牲となし、或は一命を貞操の爲めに抛ち、或は義の爲めに命を捨て、或は職の爲めに身を棄つるが如き類である。朝に道を聞いて夕に死すとも可なり、吾々は必ず是の如き信念を有せねばならぬ。信念は實に完全なる自覺の光明である。

天地の間生物何ぞ數あらん。生れて人と爲り、殊に大日本帝國の臣民となり、而も幸に、飽まで君恩を辱うして文明の惠澤に浴す、曷ぞ徒らに他物と與に朽つべけんや。吾々の一身は正しく道德の器である。聖賢の道、佛菩薩の德、皆な此の一身に依て實現し得べし。若し此の道德を失却せば、人としての價値は無いのである。此の自覺こそ信念の動機である。此の信念こそ人道的價値を現はすべき基礎であります。

更に一歩を進めて、宗敎的信念の堂奥に進みますれば、是れが信仰となつて現はれる。吾々は國家に對し、若くは道德上に於ける信念を養ひ得るとするも、自ら深く顧みれば、妄想私慾が、時を嫌はず襲擊して、此の信念を破壞する。精神の中央に安座せる信念が、何時の間にやら傍の方へ推しつけられて、煩惱邪見の魔王が精神界の首府を占領して居ることがある。思へば吾々の思想は力弱きものであります。此の力弱き吾々が、幾百千劫の時間といへる將來の永き道中を、どうすれば無事に通過して、彼岸に達するこ

とが出來ませう。思へば心細きことではないか。

獨り佛陀の慈光のみありて、天地法界照さゞる所なし。一切衆生是れ吾が子なりと呼びかけて、佛は慈悲の手を以て迷界より救ひ出し、生死の怒濤を超えて菩提の樂土に御導き下さるのである。吾々は斯かる御佛の尊ときを信じ、其の御慈悲に救はるゝを喜ぶの一念發起せば、此の身は全く佛の光明に包まれて、此の世ながらの極樂住居となるのである。況や佛は、智慧と慈悲との結聚したる御身であるから、佛に歸依し奉るのが、やがて宇宙の眞理に歸依し、徧法界の慈悲體に投入することである。その信仰の結果として、自然に眞理の感化と慈悲の抱擁とに依りて、信ずる者の精神にも、邪見を離れて正見に住し、邪念を脱して道德に順するの功德が現はれて來るものである。

以上三種の信念は決して別々では無い。三卽一の體を爲して、吾々に、完全圓滿なる自覺と、愉快窮り無き安心とを與へるのである。而して、此の信念に依りて、前來九箇條の修養に、最も神聖にして且つ高遠なる意味が備つて來るのであります。此の信念を根據にして、益々堅實なる精神を養ひ、その力を以て、前に述べたる十大力を增進せば國民としての力が充實する、國民全體が此の力を蓄積するに至れば、始めて國家の力が堅牢となるのである。我が大君及び父母祖先に對するの報恩謝德の行持も、自づから此の中にあるのであります。

今是れ何の時節ぞ、世界列國各々其の民力を傾注して、平和の競爭に努めて居るときである。吾々は

寸刻もグヅ〳〵しては居られぬ。勇猛精進、大磐石の如き覺悟を以て、競爭の舞臺に立て優良の地位を占めねばならぬ。是れ實に民力涵養の根本義であります

國家の三寶

一

元日の見るものにせん富士の山

と云へる古人の句は、如何にも我が日本國民の元日の氣分と、彼の秀麗なる富士山の天然美とを云ひ現はしてゐるのであるが、更に深く考へてみれば、彼の富士山は秀麗とも云ふべく、或は壯嚴とも云ふべきであるが、要するに一の大土塊であるとも云へるのである。物質である。形而下である。之を精神的方面、形而上的方面より考へたならば如何であらう。我が帝國臣民の誇るべきものは何物であらうか。惟ふに、此等の事は、細かに穿鑿したならば、多くの誇るべきもの寶と稱すべきものがあるに相違なからうが、その中に於て、最も誇りとするもの、最も寶と稱すべきものは、先づ三種であらうと思ふ。それは、

第一、國　體

第二、國民性

第三、佛　教

である。這稱は之を『一國家の三寶』と申したいのである

我が國の國體は、萬世一系の皇統を以て國家の中心とし、臣民は赤子の如く、天皇陛下は慈父の如くである。神代の事は且らく置き、神武天皇の御即位よりしても、二千五百八十四年の今日(大正十三年)に至るまで、國家の中心は微塵許りの動搖も無い。外國に於ては、政體の變更と共に國體も革まることは、最近に於ける支那や露國の革命に徴しても明かである。然るに我が國に於ては、政體が如何に變更しても、國體は少しも動かぬ。

今上(大正天皇)陛下御卽位の御勅語には『爾臣民世〻相繼キ忠實公ニ奉ス、義ハ卽チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノゴトク以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ』と御宣らせあそばさせられた。我が國家は大なる一家族の樣なもので、君臣の關係は父子の如き親しみより結びつけられてある。而して此の因緣は、開國以來、堅固に結合せられて殆ど天則の如く、如何なる力を以ても之を動かすことは出來ませぬ。此の國家といへる大家族を縮小したのが、臣民各自の家族制である。卽ち父を中心として家庭を作つて居る。故に一家の君は父母であります。父母に對して盡すを孝といひ、大君に對して奉ずるを忠といふ。大君に孝順なるを忠と名づけ、父母に忠順なるを孝と稱す。忠孝一體、君臣一德である。是の如き國柄は實に萬邦無比の至寶であつて、我が帝國の大生命は全く此の國體に在るのであります。

夫故に、神武天皇より以降、今上陛下に至るまで、一百二十二代の大君は何れも至聖至慈にて在まし、

全く慈父の御心をもて、臣民、即ち吾々の祖先及び吾々に對せられてある。先帝(明治天皇)の如きは、皇祖皇宗の御盛德を御一身に集めさせられ、その大御心は御製の上にも明かに顯はれて、感激に堪へざる次第である。社頭祈世の御題にて

とこしへに民やすかれと祈るなる我が世を守れ伊勢の大神

農民を思召す心よりして

照るにつけ曇るにつけて思ふかなわが民草の上はいかにと

國民を御愛護下さる御仁德よりして

夏の夜もねざめがちにぞあかしける世の爲め思ふ事多くして

殊に尊嚴高貴の御身を挺して

罪あらば我れをとがめよ天津神民は我身の生みし子なれば

の御製の如きは、其の御恩德の廣大無邊なる、只々感泣し奉る外はありませぬ。

二

次に我が國民性、所謂大和魂なるものが、世界に誇るべき至寶であり、且つ我が國運發展の基礎となるべきものであらう。されば昨年(大正十二年)十一月十日の御詔書の劈頭にも

朕、惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘ
カラズ

と仰せられてある。

抑も我が國民性は國體より生れ出でたるものであるから、其の根柢は忠君に在ることは言ふまでもない。我が國は萬世一系の大君を戴き奉るのであるに依て、君と國とは一體である。國家は大君の御家も同然で、大君は國家の御主人でゐらせられる。吾々國民は陛下の御家の内に仕して、其の一部分の御部屋を御預りして居る様な姿である。されば日本國民は、二千五百八十有餘年の長き年月の間、君國一體の觀念に依りて鍛ひ擧げられて、茲に一種の國民性、卽ち大和魂なるものを養成したのであるから、總ての事が忠君本位であります。忠君の中に愛國は必ず從屬してゐるのである。

彼の世界大戰に於て、歐米、共に其の國民の精神が非常に緊張して、自國を愛護するの精神は、殆ど我が國民にも勝れるかと思はるゝ程であつた。併し歐米國民の心理は、國家本位であつて君主本位ではない。尤も、米國や佛國は共和政體であるから、忠君の觀念のあらうはずが無いが、その他の英・白などの國民も、縱ひ帝國とは申しながら、皇帝陛下の御爲めとして、民心が結合してゐるものとは思はれぬ。露國の革命や支那の革命に徵しても、其の國民の君主に對する觀念の甚だ薄弱なることは、想像に餘りあることではありませんか。之に反して、我が國民は皇室を中心として愛國の精神を鍛練し來つて居るから、

其の精神は、地位・名譽・財産等に束縛せられず、時間・空間を超越したる向上心である。

獨逸のシーボルトは『日本人は乳呑兒に至るまで、忠君といふことを理解してゐる、是れ其の母の教訓に依るものである。されば成長するに從つて、行住坐臥君國を忘れず、旅行する際にすら、握飯の中に梅干を入れ、日の丸の國旗を形にして懷中してゐる』と評してをる。此の國民性が實に我が國の寶であります。萬一にも、將來、歐米に行はれてゐる個人主義や社會主義の樣な思想が我が國に浸潤して、我が國民性の特長に動搖を來すが如きことあらば、それこそ如何なる結果を招くやも知れぬ。人文の發達と共に、世界的競爭が益々激烈を加へ、從つて國民の思想界に種々の變化が生じ易い。

殊に昨年秋、東京を中心とする大震火災は、百億内外の富と十餘萬の同胞とを喪つたのであるが、此の影響は、決して、その罹災地のみの事であるとして見るべきでない。全國的の事件として、深く考察して、善後策を講ぜねばならぬ重大時機で、斯樣な際には、國民性の涵養振作と云ふことに層一層の力を盡し、明治天皇の御製なる

いかならんことにあひてもたゆまぬは我が敷島の大和魂

と云ふ思召に背かぬやうに、大に努めねばならぬのである。

三

如何に立派な寶を有つて居つても、せつかくの寶も、時には塵の爲めにその光りを失ふことが無いでもないのである。恐れ多いことであるが、陛下は殊に現代の風潮に對し深く御聖意を注がせられて、詔書の中に、

輓近、學術益々開ケ人智日ニ進ム、然レトモ、浮華放縱ノ習、漸ク萠シ、輕佻詭激ノ風モ亦生ズ、今ニ及ビテ時弊ヲ革メズンバ、或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル。

況ヤ、今次ノ災禍甚ダ大ニシテ、文化ノ紹復、國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ、是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ。振作更張ノ道ハ他ナシ、先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實効ヲ擧グルニ在ルノミ。

宜ク敎育ノ淵源ヲ崇ビテ、智德ノ竝進ヲ努メ、綱紀ヲ肅正シ、風俗ヲ匡勵シ、浮華放縱ヲ斥ケテ、質實剛健に趨き、輕佻詭激ヲ矯メテ、醇厚中正ニ歸シ、人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ、公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ、責任ヲ重ジ、節制ヲ尙ビ、忠孝義勇ノ美ヲ揚ゲ、博愛共存ノ誼ヲ篤クシ、入リテハ恭儉勤敏、業ニ服シ、產ヲ治メ、出テハ一己ノ利害ニ偏セズシテ力ヲ公益世務ニ竭シ、以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮、社會ノ福祉トヲ圖ルベシ。

と仰せられてある。實に一言一句、眞に我が國現下の病弊を痛誡あらせられたる一大聖訓にして、國民の

朝夕忘るべからざる國家的大經典と申すべきである。

思へば、實に此の詔書に御誡めあらせられたる通り、學術は益々開け、人智は日に進んでも、浮華放縱と申して、上つ調子で規則のない、しかも輕佻詭激と申して、輕るはづみで過激な言行を喜ぶやうな狀態になつてをるのである。

之を匡救するには、智識偏重の弊を矯める『智德ノ竝進』と云ふことが大切である。何となれば、綱紀の肅正も、風俗の匡勵も、質實剛健に赴くのも、醇厚中正に歸するのも、親和を致すも、公德を守るも、忠孝義勇に勵むのも、博愛共存に努むるのも、恭儉も、勤敏も、公益世務に竭すも、要するに道德の範圍である。今日の文化は『智識の文化』にして『道德の文化』ではない。如何に善意に解釋しても『智德ノ竝進』と云ふことは出來得ないのである。

是れ實に明治維新以來、敎育と云ふも、多くは形式的に趨り、智識の偏重に傾き、殊に千三百年來、國民性の涵養と日本文化の發達とに甚深の關係を有する我が佛敎を無視し、若しくは甚だしく輕んじたるの結果であると云はねばならぬ。茲に於て、佛敎の盛衰は、單なる一宗敎の盛衰にあらずして、我が國民性の涵養と我國特有の文化の發展とに重大なる影響を及ぼすものである、と云ふことを深く考察せねばならぬのである。

四

第三の國家的至寶は佛教であると思ふ。佛教は印度に生れ支那に傳はり、而して後、我が國に弘通せられたものであるが、印度は國の滅亡と共に佛教も亦た非常の衰頽を來たし、今日では僅かに印度の一方面に小乘佛教が行はれて居ると云ふ有樣である。支那佛教は學問としては非常なる發達を遂げたには相違ないが、支那國民の全體に、宗教として深く浸潤するには至らなんだ樣に思ふ。殊に宋末以後は種々の弊風が生じ、佛教は寧ろ退化の傾向となり、今日に至つては殆ど其の極點に達してゐる樣な感じがする。

然るに我が國に於ては、聖德太子十七憲法を制定せられ、推古天皇十二年四月三日を以て御煥發になり、其の第二條に於て、佛教を以て國民指導の大敎と定めさせられたのである。卽ち其の御文は『篤く三寶を敬ふべし、三寶とは佛法僧なり。卽ち四生の終歸、萬國の極宗、何れの世何れの人か是法を貴ばざらん。人尤だ惡きもの鮮し、能く敎ふれば之れに從ふ。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直うせん』といふのである。此の條文を拜すれば、我が皇室に於かせられて、佛教を國敎として御採用あそばれし御趣意は實に明瞭である。

聖德皇太子は我國の大聖である。神道も儒教も皆な太子に依て隆昌になり、國家諸般の制度より農商工藝に至るまで、總て太子の御力に依て勃興したのである。太子は實に我國文明の母、敎化の祖にてあら

せらるゝ。殊に太子は佛教に就て造詣最も深く、親ら宮中に於て法華經・勝鬘經・維摩經を講說せられた。想ふに、法華經を以て治國安民の標準となし、維摩經を以て男子を教導し、勝鬘經を以て女子を教化せらるゝ思召であつたであらう。且つ太子は親ら此の三經に註釋を製せられた。あの時代に於て非常に立派な經文の註釋を著はさるゝが如きは、到底、凡人の及ぶ所ではない。是の如く、太子は佛教を以て國民の精神を教化し、以て精神的文明の發達を圖られたのである。その御感化が後世に傳はりて、奈良朝時代には行基・道昭等の高僧輩出し、專ら人文の開發に力を盡された。

行基菩薩は普く海内に遊歷し、國每に國分寺を建てゝ教化の中心とせられた。府中と稱するは此の寺のある所である。其他、橋梁を架し、道路を通じ、山林を開き、農業を勸むる等の功績擧て數へ難し。道昭、其他の高僧も亦た各々力を國家文明の進步に致されたのである。聖武天皇の御代に至り、諸國の國分寺に僧正・僧都を派して講師・讀師となし、六ケ年每に交代して、國守同樣となして、學問其の他の事を人民に教へしめられた。

時に傳教大師・弘法大師の二大高僧が世に出で、傳教大師は比叡山を開き、弘法大師は東寺・西寺を起し、更に高野山を開き、何れも鎭護國家の道場とせられた。而して、此等の施設は皆な聖德皇太子の御旨意に基いて、佛教を專ら國民教育の方面に應用し、其の根柢を皇室に置き、卽ち忠君の思想を實現せられたものであります。

されば鎌倉時代に至り、臨濟宗・曹洞宗・淨土宗・淨土眞宗・日蓮宗等が開かれ、曠世の古佛とも稱すべき大善智識が番々出世せられ、蘭菊の美を競うて教義を宣布せられたが、何れも忠君愛國を以て布教の根柢としてゐられる。榮西禪師は興禪護國論を著はし、禪を以て國家を擁護せんとし、曹洞宗の高祖承陽大師は、尊王護國主義に依て曹洞の宗風を擧揚せられ、

國家ニ眞實ノ佛法弘通スレバ諸佛諸天ヒマナク衞護スルガ故ニ王化太平ナリ、王化太平ナレバ、佛法ソノ力ヲ得ルモノナリ

と仰せられ、更にその宗風を恢弘せられたる太祖常濟大師は

汝諸人、悉ク皆國土ニハラマル、一天下、國土上、悉ク是レ國王ノ水土ニアラズトイフコトナシ、然ルニ家ニアレバ親ニツカヘ、國ニ侍ベレバ君ニツカフマツル、如是ナル時、天地加護アリテ、自ラ陰陽ノメグミヲウク、然モナマジヒニ佛法ヲネガハント號シテ、可仕親ニモ仕ヘズ、ツカフマツルベキ君ニモツカフマツラズ、ナニヲモツテカ父母生成ノ恩ヲ報ジ、ナニヲモツテカ國王水土ノ恩ヲ報ゼンヤ

とお誡めあらせられ、法然上人は淨土教を敷て困難せる國民の精神に慰安を與へ、且つ高倉天皇・後白川天皇・後鳥羽天皇の三朝に戒師となりたまひ、信仰の一門を以て教義の基礎とせられた。親鸞上人も亦た同一轍であつて『外には王政を以て表とし、内心には他力の信心を深くたくわへて、世間の仁義を以て本

とすべし』と仰せられた。日蓮上人は『立正安國論』を著はして、最も熱心に國家的宗教を宣揚せられたのであります。

五

是の如く我が國の佛教は、縱ひ宗派は多數ありても、盡く皇室を中心とし國家を基礎として國民の教化に當られたのである。殊に各宗ともに、教義の研究と應用とには非常なる成績を現はして居ります。釋尊の教法は、天地間の妙理と至道とを包括して缺くる所が無いのに、我が國各宗派の開祖及び歷祖が超倫の智德を以て、益々佛教の玄扉を開き、是を尊皇護國、濟世利民の方面に應用せられたのであるから、其の教義といひ、其の妙用といひ、何れの方面より見ても、我國の佛教は世界に比類なきほど完全なのであります。

佛教は智識の寶庫、道德の樞府で、彼の基督教などゝ肩を齊うするものでない。故に佛教は、智的方面よりいへば轉迷開悟の妙法、意的方面よりいへば最高道德の指南車、情的方面よりいへば安心解脫の要術、凡そ全世界を通じて佛教の如き圓滿具足の宗教はない。此の人生に佛教を有するは人類全體の幸福である。而して、此の完全なる佛教の所有者は卽ち我國であるに依て、佛教は實に我が國家の一大至寶であらうと思ふ。殊に我が國で申せば、國體と國民性と佛教とは鼎足の如くにして離るべからざる關係を有

じてをる。萬邦無氏の國體に依りて我が國民性は養はれた。また國民性に順應して日本佛教が發達を遂げたのであります。而して、佛教は民心の内部に浸潤して益々國民性を培養し、國民性の發達に依て我が國體は益々堅固になつたのであります。故に今後益々佛教の發展を圖り、一面には國民教化の中樞となし、一面には是を世界的宗教として歐米文明國民をも教化すべきは、實に佛教徒の一大使命であらうと思ふ。

惟ふに、火に燒かれ水に流れる寶は眞の寶ではない。火に入れども燒けず、水に入れども溺れざる寶にして、始めて寶の中の寶と云ふべきである。お互に年の改まるとともに、今まで動もすれば忽にした此の三つの寶を磨きに磨き、之を修養し、之を涵養して、自ら利すると共に社會を利することに努めたいと希ふ次第である。

財・劍・政・教

一

佛教は國民教化の大道である。禪は佛教の大生命である。而して其の教化の目的は、國家を擁護して、國運の發展と國威の伸張とを期するのである。此の意味に於て、佛教は卽ち護國教、禪は卽ち護國禪であります。或人は『佛教は世界的宗教ならずや』と云はれた。勿論、佛教は世界的大宗教で、禪は宇宙の大生命を活捉する底の妙法である。

佛教は宇宙の大眞理の上に築かれたる教義である。眞理に國疆は無い。故に佛教を全世界に弘通する時は、英の生命ともなり、米の生命ともなり、佛の生命ともなり、獨の生命ともなる。併し、物には體と相と用とがある。佛教眞理の本體は宇宙の大眞理で、佛教々義の法相は、人類全體を包容して攝取不捨なるものであるが、其の應用に至つては、個人の至寶となり、社會の樞軸となり、國家の要機となる。水性には國疆は無いが、日本に湧出する水は能く日本國民の要求を盈たすが如きものである。雲月これ同じく溪山各々異なる、月には國疆はないが、石山に在りては石山の美を成し、松島に在りては松島の景を粧ふが

如し。禪も亦是の如し。

我が曹洞宗の高祖太祖が佛祖正傳の禪道を弘通せらるゝや、尊王護國を以て化儀の目標とせられた。上、御一人を尊奉して誠忠の實を擧ぐるには、必ず國家を擁護して國運の發展を圖らねばならぬ。國家を擁護するには、民人の智德を涵養助長して其の幸福を增進せねばならぬ。宗教は死物ではない、禪道は理論ではない、宇宙の大精神たる佛敎を以て國家國民の上に其の大德用を實現するのが、禪の妙用である。これが護國禪であります。

先づ國家を擁護するには、國家の富力を增進して財力を豐になさねばならぬ。貧弱なる國家は、到底、世界的大活動は出來ない。否、世界的活動の出來ない所ではない、その國家自身の獨立さへもむつかしいのである。

顧みれば、我國も世界大戰の當時は、經濟界は甚だしく好景氣を呈し、國家の財力も增進したのであつたが、平和克復になつてより次第に不景氣となり、殊に昨年の關東一帶の大震火災は、十萬の人を喪ひ、五十五億の富を失ひ、國家全體の上より考へて甚大なる不幸であつた。されば此の不幸を償ひ、猶ほまた數年來打續ける貿易上に於ける輸入超過の缺陷を補つて行くには、國民擧つて一大決心をせねばならぬ。卽ち大正天皇は御詔書の中に

入リテハ恭儉勤敏、業ニ服シ產ヲ治メ、出デテハ一己ノ利害ニ偏セズシテ、力ヲ公益世務ニ竭シ、以テ

國家ノ興隆ト民族ノ安榮、社會ノ福祉トヲ圖ルベシ。

と仰せられてある。我等は此の聖旨を奉じて、國民一致して國力の充實振興に努めねばならぬ。而して、此れを我佛教より見れば有形的方面の財であるが、此れと同時に無形的方面の財を蓄ふると云ふことが大切である。よし有形的財力に富むと雖も、無形的の財力がなければ、放蕩児が金を持つた樣なもので、却てそれが爲に身を危うすることがある。澁澤子は論語と算盤とを一幅の畫に造つて居らるゝといふが、論語は道德で算盤は經濟である。即ち道德と經濟との一致といふ意味である。道德は取りも直さず無形の財である。道德は本心の光りである。本心を開明せざれば眞の道德は現はれぬ。南北朝時代の高僧、石屋禪師が防州を旅行して某家に一宿せしに、其の家の主人は盜賊であつた。三更潛かに師の寢室に到り、師の偉大なる人格と風采とに恐れて手も足も動かされず、驚いて懺謝せし時、禪師は『世に無價の寶がある、汝は宜くその寶を奪得するが宜い』と言はれた。彼は『是非とも其の至寶を得たし、願くは其の所在を聞かされよ』と乞うた。時に師はいきなり彼の胸鞍を摑みて『這裡に在り』それ此處に在るぞと仰せられた。此の痛切なる接得に遇うて、彼は飜然志を改めて師の德化に歸し、出家して非常なる難行を積み、後に天晴なる高僧となつた。聖賢の道も、佛祖の德も、皆な吾人方寸の中に在りて、微塵もかくる所は無い。孟子すら『萬物皆な我れに備はる』といひ、王陽明は『心即理なり』といふた。清盛の愛妾祇王祇女すらも『佛も元は凡夫なり、我等も遂には佛なり、同じく佛性具せる身の、隔つるみこそ悲しけれ』と

云うたではないか。然らば心内の財寶には、如何なるものであるかといふに、無量の光明、無量の功德である。先づ今は、國民道德の方面より觀察して見るに、今日の狀態は、此の心の財寶が充分に露れて居るであらうか。どうも寒心に堪へない幾多の事實があるではあるまいか。殊に昨年の暮に起つた『虎の門事件』の如きは、我等大正の國民として眞に戰慄恐懼に堪へざる事であつたのである。昨年、降したまへる御詔書の中には、

輓近、學術益々開ケ人智日ニ進ム、然レドモ、浮華放縱ノ習、漸ク萠シ、輕佻詭激ノ風モ亦生ズ、今ニ及ビテ時弊ヲ革メズンバ、或ハ前緒ヲ失墜センコトヲ恐ル。

と仰せられてある。

惟ふに、かやうな狀態になつたのは經濟上の大變革、外來思想の侵入等種々の原因があるであらうが、要するに、知識を偏重し、德性の涵養に缺くる所があつた結果に外ならぬのである。今や、我々國民は、飜然として先非を悔い改め、國民道德を涵養し、國民精神を振起し、國家の興隆に努め、本心の光明を發揮し、有形的無形的の財寶を以て眞に護國の用に供せねばならぬ。

二

禪宗の語に『大丈夫慧劍を秉る、般若の鋒、金剛の焰、但だ能く外道の心を摧くのみに非ず、早く曾

て天魔の膽を落却す』とある。慧劍とは智慧の劍である。此の劍の鋒が般若で、其の鋒先より發する光焰は金剛の如くにして、如何なる惡魔をも驚倒敗走せしむるとのことである。般若は智慧で、光焰は勇氣、即ち大なる意志力である。

智慧にも根本智と後得智の二がある。根本智は生死の根源、一心の本體、眞理の妙諦を明むる智慧で、後得智は現象界の生滅變遷の原則と運用とを明むる智慧である。禪門に於て自己本來の面目を證得するのは根本智である。吾人は第一に根本智を發得せねばならぬ。

楠公が湊川戰死の前日、廣嚴寺に至り明極禪師に謁して『生死交謝の時如何』生死岸頭に於ける決心を問うた時、禪師は『兩頭倶に截斷して一劍天に倚りて寒し』と答へられた。根本智を開く時宇宙の大精神に承當す。五尺分段の此の身がそのまゝ絶對界の大靈と融合するを以て、生だの死だのといふものは無い。語を換へていへば、佛の淸淨法身に抱き擁へられて了うたのである。故に自己の光明蓋天蓋地である。楠公は是に於て、不滅の大生命に觸れて大安心を決定せられた。

吾々はとかくに、肉眼に映ずる假の相に執着するから樣々な妄想を起し、從つて八萬四千の煩惱が絶えず生起するのである。此等の妄想窟を打ち破る、是が殺人劍であります。妄念の雲散じ盡せば眞如の明月が心の空に輝く。是れ即ち佛知見である、之を活人劍といふ。吾人の根本智は、自づと此の殺活の機を發するのである。一休和尚が、正月元日に年始に廻り、杖の先きに髑髏を懸けて『御用心〳〵』といはれし

と申すも、全く此の靈機を知らしめんが爲めであらう。故に『にくげなき此のしやれかうべあなかしここれより外にめでたきは無し』と詠ぜられたとある。

抑も現代は、知識の發達殆ど空前の勢を示し、其の精密なる研究と應用とは天工を奪ひ神籌を凌ぐかと疑はるゝ程である。されど、多くは是れ後得智に屬する進歩であつて、根本智に至つては、却て古人に一籌を輸するといふ有樣である。宗教的大安心といふも根本智の一分または全分である。此の智慧に依りて、人生に處して人生を解脱し、苦境に在りて苦惱を忘るゝことも出來る。『坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』である。

傳說に依ると、上杉・武田の兩將が信州川中島に戰を交へし時、兩將ともに蓋世の英傑、而も信玄は僧形にして大僧正の位を有して居る。謙信も亦た僧形にして禪學の造詣深く、達磨不識の公案に依りて大悟し、自ら稱して不識菴主といふ。彌々兩將が大接戰をせし時、謙信は信玄の軍略を看破し、一擧雌雄を決せんものと、朝霧に乘じて信玄の本陣に斬りこみ、自ら太刀を提げて馬を信玄の陣中に躍らした。互に面識は無かりしが、中央の將几に腰を掛け居る魁偉の人物こそ信玄ならんと睨み、疾風の如くに進み、三尺の秋水を大上段に振り翳し、電光の如く信玄目懸て斬りこみながら『正當恁麼の時如何』とやつた。あはや、信玄は眞二つと思ひの外、軍扇を以てひらりと受け流し『紅爐上一點の雪』と答へた。爐上の雪ならば消えて跡なし、道の本體より諦觀すれば、斬る人も斬らるゝ人も無い。敵もなく味方もな

く、天地一枚の光景である。

吾々も亦た此の見地が無ければならぬ。名譽を得ても名譽に役せられず、利益を得ても利益に縛せられず、戰場に臨んで百萬の大敵を擊破するの武勇を震ひながら、超然として敵味方の牆壁を存せぬ。さればこそ、先帝の御製に『國のためあだなすあだはくだくともいつくしむべきことな忘れそ』と仰られし如く、博愛仁慈の德をも發揮するのである。之を大死一番大活現成というて、徹底無我の時、完全なる自我の實現を見るのである。謙信は更らに二の太刀を振下して『消えて後如何』といふた、信玄またもや、軍扇を以て之れを受け留め『犀川水潺々』と答へた。その中、双方の家臣が各々其の主を救はんとて飛込んで來たから、遂に物別れとなつたさうだ。此の話は或は事實では無いかも知れぬが、併し兩雄の胸臆裡には怎麼見識があつたことゝ思はれる。

また宋の祖元禪師は、元兵の爲めに將に頭を刎られんとせし時、泰然自若として『乾坤無ㇾ地卓㆓孤筇㆒、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劔、電光影裡斬㆓春風㆒』と偈を唱へた。元の兵は此の大人格に恐れを懷きて、遂に斬ることを息めて逃げ去つた。此の禪師こそ鎌倉圓覺寺の開山として、北條時宗を接得せられた人である。山岡鐵舟居士は深く之れに私淑し、擊劔道場を春風館と命名された。

併し、護國の劍は元來無形の劍である。一切の妄想を截斷して不生不滅の大生命を把捉する底の物である。是が根本智である。此の根本智より現はれたる後得智であれば、科學的一切の知能や藝術や農工商賈

等の業に至るまでも、盡くこの智によつて活佛法となり、忠孝の二道となり、時に應じ處に從つて天地を動かす程の權威も發揮するに至るのであります。

三

政治は國家の活動機關である。政治の目的は國家の庶務を整理し、國家の文明を伸張し、國民の安寧幸福を增進する。一として政治に關係せざるは無い。而して、其の政治には種々の綱目はあれど、其の源は皆な聖上陛下の神聖にして至仁至慈なる大御心に發せざるは無い。故に政治に與かる者は、常に大御心を奉戴して護國の大義に背かざらんことを期せねばならぬ。若しも、大御心に悖り護國の精神に反する樣なことがあつたならばそれこそ、不忠不孝、此の上も無い大罪を犯すこととなります。

前にも述べた通り、我が曹洞宗は全く尊皇護國を以て立教開宗の最大目的として居る。此の目的を達するの道は忠誠を以て基となす。佛教に於ける信心といふは、忠誠三昧に止住した當體に名けたものである。天皇陛下御即位の御勅語に『爾臣民、忠誠其の分を守り勵精其の業に從ひ、以て皇運を扶翼することを知る』と宣はせられたるは、國民一般が暫時も忘るべからざる畏き御仰せである。中に就て、國家の活動機關たる政治を取扱ふ者は、一層此の御聖旨に悖らざる樣にせねばならぬ。忠誠といふは、內、私曲の念なく、外、其の道を格守するの德である。上は總理大臣より下は町村役場の屬吏に至るまで、飽まで公

平無私を以て心底から國憲國法を嚴守し、以て國家の隆盛に努むべきである。

　進歩せる國家の行政には自づから四大政務がある。即ち一には敎政、所謂敎化に屬するもの、敎育・宗敎・美術・風俗等に關する政務は、何れも國民の智德品格を進むるが目的であるから敎政に屬す。二には民政、即ち衞生・土木・警察・交通・郵便・電信等、國民の生活に直接關係あるもの。三には財政、四には軍政である。其の他、司法・立法等の機關、何れも一日も缺くべからざるものである。此等の局に當る人々は、果して能く忠誠の德に於て毫も遺憾なきまでに發達して居るといはれやうか、仔細に點檢し來れば、どうも安心が出來ぬことが少なくは無いかと思はれる。

　昔、承陽大師が支那天童山に在ませし折、或日、極々大暑のみぎり、佛殿の邊を通られしに、本府の用典座といへる六十八歳の老僧が、笠も被らず、竹杖を手にして頻りに作務をして居られた。典座は庫院を掌る重役である。大師は氣の毒に思召し『屬僚や人夫も多いのに御老體自身に勤めらるゝは餘りに勿體なし』と仰せられると、彼は『他は是れ吾に非ず』他人にさせては自身の勤めにはならぬわいとの答であつた。大師は更に『今日餘りに暑さ强し、其の作務强ちに今日には限るまじ』と仰せられると、『更に何れの時をか待ん』寒いゝか暑いとかいうて居たならば勤むる時は無いではないか、との挨拶であつたので、大師は非常に其の心操を感ぜられたことがある。

　また支那禪門に於ける叢林の規矩を大成せられし大偉人百丈禪師は、七十歳以上の高齢に達し數百人の

門徒を有しながら、毎日、大衆と共に作務に從事せられた。弟子たちは如何にも御氣の毒に思ひ、故らに作務に要する道具、卽ち箒や鍬を隱して了うた。禪師は作務をなすことが出來ないので、そのまゝ方丈に歸られた。處が其の日一日は何にも召上がらぬ。侍僧は心配して『御加減でも惡しきや』と問へば、別に變りなしとの御答、そこで『何故に食事をあそばされぬや』と强て御尋ねせし時、『一日作さゝれば一日食はず』、一日でも作すべき事を作さざれば、勿體なうて食事が喉へは通らぬぞやとの御旨意である。上下共に是の如き心を以て其の職に當りなば、護國の目的に背くことはあるまいと思ふ。

聖德太子の十七憲法にも『私に背きて公に向ふは是れ臣の道なり、凡そ夫れ人私あらば必ず恨みあり、憾みあれば必ず同はず』云云とある。吾々は先づ第一に公正の德を養はざるべからず。元明天皇の詔には『凡そ政を爲すの道、禮を以て先と爲す、禮無んば言亂れ、言亂るれば旨を失す』と宣うた。今の政務公務に從事する人々は深く此に注意して貰ひたい。一家を齊へるも、一身を修むるも、其の原則は同一轍である。禮あれば秩序正しく規律整ひ、公正なれば上下相和し內外相調ふ、誠に太切な事である。

四

政治の發達と同時に、敎化の普及を圖らねばならぬ。明治三年の詔にも『天神天祖極を立て統を垂

れ、列皇相承け之を繼ぎ之を述ぶ、祭政一致、億兆同心、治敎上に明に、風俗下に美なりき』と宣はせたまうてある。我が國は古より敎化を以て政治の根柢とせられた。敎化の大本は孝道である。孝道の表現として祖先を崇拜し、祭祀するに其の誠を竭したのである。神武天皇は祖先の神靈を御祠りあそばされて『以て大孝を伸ぶ』と宣らせたまひ、孝謙天皇は詔して家ごとに孝經一卷を備へしめられた。吾々國民が、至尊陛下に盡し奉るのも亦た孝の道である。陛下は國民の御親にてあらせられ、父母は一家の君である。

併し道德の根柢は、どうしても信念に歸せねばならぬ。有形の父母に事ふるには、義務觀念を以てすることも出來やうが、祖先の如き無形の靈に奉ずる事は、信仰中心に非ざれば全く無意味である、『目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけり』とは明治天皇の御製であります。『祖宗の神靈照鑒上に在り』、とは、大正天皇御卽位の御勅語である。然るに維新以來、一般の信仰觀念が非常なる動搖を來し、知識もあり位置もある階級の人ほど、信仰には餓て居る樣に思はれる。殊に科學一點張の人に在りては、多くは無神無靈魂の見解を有して、斷見外道の御仲間が多い。故に敎化の普及せざるも亦宜なるかなである。元來、見佛とか見神とかいふことは信仰の眼に映ずる現象であつて、物質本位の人には到底解るものではない。眼に觸れ耳に觸るゝものは實に生滅變遷定まりなき假相である。此の假相の根本體に向つて道德の大本を立つるのが宗敎である。故に禪門に於ては、先づ以て自己の妄念や迷想を一切驅逐して了ふので

ある。善惡を思はず、是非を管せず、一心寂靜に歸して吾れ我れを忘ずる時、忽然として宇宙の大靈に觸れ、玆に始めて靈界の消息に通ずることが出來る。先づ極めて簡易なる見神見佛法を申せば、朝にせよ、晩にせよ、或は佛の御前、或は靜かなる室内にて、端坐冥想して一切の分別を離れて見よ。無我無心となりし時、忽爾として偉大なる神靈、莊嚴なる佛身を觀見することが出來るものである。此の時、更に一段の修養を進めなば、我が心神心に通じ佛心に冥合することを得るものである。

吾々の境界は譬へば蠟燭の樣なもので、十分可燃性を有して居るが、火を點ぜざれば一向光明が現はれぬ。佛は火の如くにあらせられる。佛の力に依りて吾々の心光が現はれる。心光一たび現はるれば、佛の火も吾々の火も同性同體である。信仰もちやうどその如くで、吾々は本來佛性を有して居ながら、永く三界六道の暗路に迷うて居たのである。佛は之を憐れみて、敎ふるに轉迷開悟の法を以てし、導くに離苦得樂の術を以てし、誘ふに止惡作善の法を以てせられた。その佛の御心に觸るる時、言ふに言はれぬ有り難さを感ずるものである。此の時こそ、浮世の義理や人情で無意味に義務を盡したり、御世辭に働いたりする樣なことではなく、心の奧底から佛性常住の孝順慈悲が現はれるに依りて、我が心が天地の誠に合ひ、神佛の御心に一致するのである。『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』、此の誠こそ敎化の根本である。誠より發する行爲は、天地自然の活動の如し、毫も毀譽褒貶や得失利害の爲に、轉ぜられることがない。

梁の武帝が始めて達磨大師に御對面の時『朕は卽位以來、寺を建て僧を度して佛法の爲めに力を致せり、此の功德如何ん』と問はれし時、大師は直ちに『總に無功德』と答へられた。此の無功德の一語こそ、功德などを的にせぬ敎化の眞髓を說破せられたものである。今日の敎化事業家などは、この境地を養ふことにまだ努力が足らぬ樣に思はれる。故に、子弟には修養を勸めても、父兄自身は修養を閑却することが多い。雇人には精神問題を皷吹しても、雇主は餘り自己の精神に注意を拂はぬ傾きがある。されば、吾人は益々其の至誠の德を修め、以て護國の敎化を大成することに努力せねばならぬ。

五

元來、國家を擁護することゝ佛法を護持することゝは、一致して行かねばならぬ。佛敎は各自の精神界に一大安心を與ふるのが目的であるが、進んで其の力を社會國家に及ぼす。此の安心の力は、自然に個人の品性を高め德操を養ひ、進んでは家庭の平和を保ち社會の幸福を進め、遂に國家の發展伸長を見る樣でなければならぬ。然れば佛敎の普及に努めるのが、やがて國家の開展を圖るので、國家向上に盡すのが、やがて佛敎の弘通に盡す所以である。況や、佛敎が益々流通して國民の信念が强固になれば、諸佛菩薩、諸天善神の加護力に依りて、國家の安穩と開發とに大なる御利益があるに相違ない。故に、眞の護國家は眞の護法家でなければならぬ。然るに我國の佛法は、中世以降、動もすれば社會に遠さかり人事に隔

たり、或は未來のみに偏し、或は遁世解脱の方面に走りたる爲め、自然、人生々活と沒交渉であるかの如き觀を呈するに至りしは、返す〳〵も惜むべきことである。しかし、此は一時の變態で、眞の佛敎の精神こそは、我等お互の眞の生命となり、生活の規範となるべきものである。

吾等は常に精神の修養に努めねばならぬ。禪語に『脚下を照顧せよ』とはこゝである。孔夫子も『高うして能く下り、滿ちて能く虛に、富で能く謙に、貴うして能く卑く、智にして能く愚に、勇にして能く怯に、辯にして能く訥に、博うして能く淺く、明にして能く闇し、是を損じて極めず能く其の道を行ふと謂ふ』と申された。智者でも、學者でも、多くは三毒煩惱の支配を受くるから、本來の面目を現前することが難いのである。或は貪慾の奴隷となりて私利維れ事とし、或は瞋恚の情に制せられて他を害し己れを傷つけ、或は愚痴の爲めに囚はれて心眼の盲者となり、遂には國を汚し家を敗るの醜態を演ずるに至る。故に、願はくば心を禪の天地に遊ばしめられんことを希望する。禪の天地には苦みも無く憂ひも無い。『寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心なければ苦みもなし』、固より枯木の樣になることでは無い。不動の精神に安住するから、苦中に苦を忘るゝのである。

八苦我れに逼るも我れに護國の劍あり、斬つて三段七段となさん、貧乏身を犯すも我に護國の財あり、『無一物中無盡藏』である。かくして、發しては萬朶の櫻ともなり、凝りては百錬の鐵ともなる。腹には諸法實相の息を蓄へ、身には事々無礙法界の妙行を現はし、足には般若眞空の地を踏み、

眼には諸法緣起の理を觀じ、朝な夕なに八萬法藏の財寶を運出して、法悦歡喜の中に自利利他の妙功德を現ずることが出來るのである。

忠孝と佛教

一

我か國に於ては、忠孝の二道を以て道徳の根柢とせられて居る。然るに、外國の人々などは、此の忠孝を以て、自國の範圍に限られた、狹い道徳の如くに思うて居る樣であるが、これは我が國の道徳觀念に對する諒解が無いからである。尤も、我が國は家族制であるから、父母を以て一家の中心となし、又、君國一體であるから、天皇陛下を以て一國の元首となして崇敬し奉り、一身一己の私を棄てゝ、君と親とに盡し奉るといふ觀念が、世界の何れの國の人よりも强烈である。

元來、忠孝の觀念は感恩の至情より發したものである。一餐の食、一着の服を惠まれても、之を感謝するのは人間の情である。況てや、此の身を生み且つ育てゝ下されたる父母に對しては、ありがたいと感じて常に感謝の念を懷くが當然である。而して、吾々が生長を遂げて敎育の恩惠に浴し、生命・財産の保護を蒙るのは、皆な御國の御蔭である。その御國の主腦にてあらせたまひ、常に廣大なる御仁德を以て吾々を撫育したまふのが、大君であらせたまふとすれば、是れ亦た當然、感謝の情を發すべきである。

君主を有せざる米國や佛國の人でも、愛國心は非常に強固であると聞いて居る。殊に、我が國の如き神聖にして犯すべからざる大君を奉戴し、國家に於ける千般の施設經營は、皆な大君の御仁德より發するものであるのであるから、我々が、一國の大御親として、其の深大なる御恩に感激することは當然である。人間性の眞情である。

亞米利加の如き父母の御恩といふことを深く感ぜぬ國民でも、近頃は孝行の觀念が萠したものと見え、俳優にして、親孝行の芝居を演じて成功して居る者があるさうである。米國でも歐洲でも、やがては親孝行といふ道德を閑却することが出來ぬやうにならうと思ふ。是れ正しく人間の良心、卽ち佛性の奧底より自然に湧き出づる人情の泉である。して見れば、忠孝の觀念は決して人爲的の法則ではなく、實に是れ人間の人間たる所以の眞情である。而して、その根源は恩に感じ德に酬ゆるの天性に出でたものであるから、此の眞情がやがて世界的道德の基となるべきものである。

古人も『親を愛する者は敢て人を惡まず、親を敬する者は敢て人を侮らず』といはれた。此の意味からいへば『誠を君に盡す者は以て義を天下に致すべし、節を君に守る者は以て信を世界に行ふべし』といふことも出來るはずである。要を取て之を言はゞ、眞に能く忠孝の志を存する者で無ければ、世界的に正義人道を恪守するの能力を全うすることが、不可能であるといふことになるのである。

二

我が教祖釋尊は、成道の後、直ちに戒律なるものを設けて御弟子に課せられた。これ即ち佛教に於ける道德的命法である。その道德的命法の根本として『孝順』の二字を標榜せられ、『孝順は至道の法なり』と仰せられた。孝順とは孝行の事、至道とは佛道の事、即ち孝行即佛法ぞとの御示しである。

釋尊は孝行の德を大きく強く力說なされてあるから、衲は佛意を忖度して孝道の內容を擴張し、之を七親・七德に分けて說いたことがある。即ち七通りの親と七通りの道德である。

第一の親は父母、これは形體の親で此の身を生み育てたまうたものである。之に報ゆるに孝を以てせねばならぬ。孝とは敬と養との二つであるが、眞に能く父母を敬ひ、その老を養ふには、單に其の傍に侍して、朝夕その生活を安らかに遂げしむるばかりではならぬ。吾々が天性として禀け得たる能力を發揮し、活用して、社會・國家に貢献する所が無ければならぬ。

第二の親は君主、是れは國民の親であらせられる。殊に我が國は萬邦無比の國體を有し、我が大君は祖先以來の大御親であるから、之に報ゆるに忠を以てすべきである。此の忠も亦た單に國憲・國法を遵守するといふ計りで無く、益々智能を啓發し德器を成就し、以て國家の進運に貢献し、世界の公益にも努力せねばならぬ。

第三の親は師長、これは知識の親である。人生れながらにして知ることは出來ぬ。必ず師長の薫陶に待たねばならぬ。一技一能の末に至るまで、夫々の師長・先輩の教導に待たねばならぬ。之に報ゆるの道は順である。卽ちその教に順うて能く之を守り、而して益智德の向上を圖るべきである。

第四の親は社會、是れは生活の親である。人は孤立にて世に生存することは出來ぬ。一衣一食も皆な社會の恩力に依らねばならぬ。之に報ゆるの道は義である。卽ち正義を守り當然の義務を盡し、以て社會の公利公益に資するの道を行ふべきである。

第五の親は天地、これは萬物の親である。人皆な天地の間に生を稟け、常にその恩惠に浴して居るのである。之に報ゆるの道は誠である。誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり、內に正直の德を守り外に一草一木をも疎略にせず、常に感謝の念を以て能く物を愛念し、尊重し、保護する樣にすべきである。

第六の親は眞理、是れは人道の親である。縱ひ東洋と西洋と其の風習を殊にし、我が國と歐米とは其の國情を異にするとも、根本の眞理に於ては必ず歸一すべきものである。正義は人生缺くべからざる常道、平和は人類に普遍なる目的、誠實と慈愛とは古今等しく敎ふる所、勤勉と忍耐とは東西倶に勸むる所、況や、科學といひ、哲學といひ、宗敎といひ、眞理を中心として、發明し、論議せらるゝものは、皆な其の本源に於て共通する所があるべきものである。眞理は最高の權威者で、又、最善の審判者である。如何なる英雄豪傑でも眞理には服從せねばならぬ。如何なる才子智人でも眞理を左右することは出來ぬ。釋尊も

眞理に據りて世界的大宗敎を建設し、孔丘・基督も眞理に基いて則を天下に示したのである。人道は全く眞理の所産であるから、之に報ゆるに敬を以てすべきである。即ち眞理を尊敬し、眞理に服從し、絶對敬意を拂ふべきである。私欲私情を離れ、何事も眞理に隨順するのが人格向上の第一義である。

第七の親は佛陀、これは解脱の親である。人生に於ける所有煩悩と束縛とを解脱し、眞に能く自由無礙の境地に達し、永久的大安心を獲得するのみならず、終には見道成佛の大覺位に證入することは、佛陀の御化導に從ひ、其の御慈悲を信ずることによりて達せられる。故に之に酬ゆるには、信を以てする。即ち信仰歸依の力にすがるの外は無いのである。此の佛陀を本尊とし、親として信仰を捧ぐることは、實に佛法の大海に入るの門戸である。此の事は改めて詳細なる説明を爲すことゝ致さう。

以上七親の中、第二の君主は共和國には無いが、之を國家と見れば宜しい。又、第七の佛陀は外敎者には無いが、之を神とか宗敎とかいふ題號に替へて見れば宜い。是の如くする時は、世界人類が齊しく此の七種の親を有するに依つて、誠心誠意、之に酬ゆるの心掛けが無ければならぬ。

三

忠も孝も佛性の自然に發する眞情であるに依つて、眞に能く忠誠孝順なるを得る者は全く無我の三昧に入つたのである。楠公の如き、乃木將軍の如き誠忠の士は、最早、鬪爭とか勝敗とかいふ武力的競爭の

範圍を飛び超えて、全く眞理の中心に安住したものである。

此等の大忠臣の心理をば普通の軍人として見てはならぬ。楠公は至善を以て兵と爲し、乃木將軍は至誠を以て兵とせられて居る。故に其の一代の行狀は、單に軍人の標本といふばかりで無く、實に人道の龜鑑と見ることが出來る。よしや匹夫匹婦だも此の忠誠を存する時は、其の心は既に一種の宗教的信念に入つたのである。故に、千載の下、人をして感激措く能はざらしむるの力がある。

明治三十七年の四月、日露戰爭が始つて間も無い頃、四國の多度津港から、丸龜師團の兵が御用船神洲丸に搭乘して滿洲に向ひ出發した。縣知事始め多數の人々は防波堤に居並んで萬歲の聲も勇ましく見送りをした。其の時、一人の老婆、紫紺色の包みを腰に卷き石疊の上を轉ぶ樣に馳せつけて來たが、遠慮も無く知事の面前に出て、御用船を目懸け大聲を揚げて『一太郎やあい、其の船に乘つて居るなら鐵砲を上げろよ』と怒鳴つた。

此の老婆は香川縣三豐郡豐田村の百姓岡田彥三の妻である。夫婦の間に只一人の一太郎といふ男子があつた。貧乏甚だしき爲め、彥三は九州方面に出稼に出たつきり、後には行方も知れぬことになつた。母も一太郎を連れて九州に行きしが、遂に彥三にも遇はれず、十年餘りにして國もとへ歸つたが、母子の身には幸ある運を見ること能はず、間も無く母は重き病の床に臥すこと〻なつた。一太郎は貧しき內にも、心づくしの看病に骨身を惜しまず、一心不亂に神佛に祈請せし甲斐あつて、母の病氣も全快を見るに至つ

たのである。

間もなく、一太郎は動員令を受けて、丸龜の師團に入營することゝなりしが、二ヶ月計りを經て、彌々戰地へ赴くことゝなつた。母は我が子を送らんものと思ひ、少々の小遣錢を調へて、出發の前日に、一太郎に面會して之を渡し、翌日は我が子の傍について海岸まで行き、まだ出發までには多少の時間ありと聞き、せめては氷砂糖でも買うてやらんとて、急ぎて町へ出て行つた。後で多くの兵士は數艘の小船に分乘して、追々と本船に乘込んで行つたのである。

老母は買物をすましてそこに來て、之を見てビツクリした。夢中になつて波打際まで走り出で、先刻申したやうな大聲で『一太郎やあい、其の船に乘つて居るなら鐵砲を上げろよ』と怒鳴つた。一太郎は先頭の渡船に乘つて居たが、母の聲を聞いて、埠頭の石段の上に居る母の方をみつめて鐵砲をあげた。

其の時、老母は、またも大聲を揚げて『親一人子人だぞ……』と叫び、更に『うちの事は心配するな、よう天子樣に御奉公してくれろよ……』、『わかつたか、わかつたら、もう一度鐵砲を上げろよ……』と叫んだ。次第に遠ざかつて行く渡船の上に、高く差しあげられた一太郎の鐵砲を遙かに認むることが出來た。かくして、母は惜しき別れを忍び、人々に慰められながら、歸路に就いた。此の親子の眞情、飾りの無い眞心の樣を見て、泣かない者は無かつた。

一太郎は旅順包圍軍に加はり、十一月二十六日の東鷄冠山攻擊の際、絕倫の武勇を現はしたが、遂に

名譽の負傷を爲し、一旦は內地へ護送せられて善通寺の豫備病院に入りしが、次第に回復したので、翌年三月、再び戰地に赴いて忠節の功を全うした。
凱旋の後、手指の負傷した跡が痛み出して、貧苦の中に一層の惱みを受けたが、世の情ある人々の惠みに依りて、僅かに細き煙を立ててゐた。が、病氣の方は中々癒えさうにもなかつたので、此の上は信仰の力に依るの外なしと思ひ、四國八十八ケ所の靈場を巡拜に出かけた。
それは第四十五番の札所たる伊豫の岩屋寺に詣で、早朝、身體を淨めて一心に御本尊不動明王を伏し拜んで居りし折である。絕壁の洞穴から吹き送る冷い風が、颯と我身にあたつたかと思へば、不思議や、今まで疼いてたまらなんだ手指の痛みが、忘れたやうに全癒した。これよりして、一太郎は益々信心を勵み、貧しき中にも、慈愛深き母親と、貞操正しき妻との扶けに依り、最も樂しき平和の家庭を作り、二男二女の敎養を樂しみに、信仰生活を營んで居るとのことである。
此の母の眞心、此の子の孝心、是れ全く至誠の結晶で、此の親子の胸中は、軍國とか、侵略とか、鬪爭とか、勝敗とかいふ樣な範圍を超越して、只々一身を道德の大海に投入せる大無我の大精神である。而して此の精神の中には、自づから前に擧げたる七親・七德の全部を含有して居ることを味はねばならぬ。

四

孟子は『至誠にして動かざる者は未だ之れあらず』といひ、劉向は『誠の至るや金石之れが爲に開く況や人をや』というて居る。一太郎親子の如きも全く誠の姿であるから、微々たる一老婆の、我れを忘れて怒鳴り出した聲が、天下の仁人義士をして感動止まざらしめて居る。故に、此の物語りは文部省編纂の國定小學讀本の第七にも載せられ、東京朝日新聞にも委しく紹介せられ、東京小石川に住する橋本春陵畫伯は此の物語りに感泣して『一太郎物語』と題する書物を著はされた。

又、東京の柏木に居る三菱會社員平岡和氏は、元陸軍經理部に奉職したる爲め恩給を受けて居らるゝが、此の物語りに感動して其の恩給を一太郎親子に贈與せられ、且つ此の一太郎親子の物語りに依つて生活上の大安心を得られたと申すことである。平岡氏は基督教信者で、常に完全なる精神生活に志し、種々の煩悶も疑惑もありしが、一太郎親子の行動を聞いて始めて、人生に於ける深遠なる理想に對し、一道の光明を感得せられたさうである。して見れば、世に誠の力ほど廣大なるものは無い。縱ひ匹夫匹婦なりとも能く誠の力を備ふる時は、智者にも、勇士にも、聖賢にも感動を與へ、天地・鬼神・神佛までも動かすことのあるものである。

誠は心の奧底から湧き出づる眞情である。此の眞情の中には忠孝も慈悲もあり、細かに分解すれば有ゆる美徳を自づから含蓄して居る。誠には嘘が無い、野心も無い、欲望も無い、全く無我である。此の誠を以て君と親とに對するのが眞の忠孝である。故に忠孝の根本たる誠は、正に是れ世界的大道徳の源泉

である。

然るに、近時の人心には誠の德に甚だしき缺損がある。能々各自の心を點檢して見るが宜い。道を修むるに誠ありや、職務を執り行ふに誠ありや。人に接するに誠ありや。國民社會の奉仕に對して果して能く誠ありや。絶對に誠が無いとは言はぬが、惜しむらくは、その誠らしきものも名聞や利慾の爲めに混濁して居る。情慾や私望の爲めに取り亂されて居る。神佛の御目から御覽なされたならばどうであらう。若し誠に缺損あるに於ては、善事を行ふも僞善となり、道德を行ふも僞德となる。虚僞の生活に陷りて幸福を求めんとするは、石を抱いて玉と思ふよりも淺まし。

佛教に於て勸むる所の信心とは、此の誠が宗教的に發露したのをいふのである。苟も正義人道を貴び、忠孝報恩の道を行はんとする者は、寢ても寤めても、その心の誠ならんことを願ひ、其の行ひの誠ならんことを期せねばならぬ。

五

原敬氏は近代に於て最も傑出したる大政治家であるが、政治家としての原氏は衲等の評論する限りでは無い。が赤裸々にした原氏の美德は、衲の深く感歎措かざる所である。

氏は、皇室を尊崇するの念殊に厚く、大君に對する忠誠は國民の龜鑑として大に尊敬すべきである。山

縣公や西園寺公も特に原は大忠臣である、原ほど皇室に厚き者は珍らしいと言はれたさうである。

氏は母上と兄に對する孝悌の念また厚く、其の遺言狀中にも、葬儀は母と兄より厚からざる事を誡め、また如何なる事にても、母と兄に對しては盲從と思はるゝ程に柔順なりしといふ。腰越の別莊は『介眉山莊』と號し、老母を鄕里より迎へ、朝望夕省に便する爲めに營まれたるものである。香華所大慈寺を獨力私財を投じて再建せられしも、全く父母の菩提を弔ふ爲めに發願せられたるものである。

身を節する事の儉素なる、自分の邸宅の如き自動車を乘入ることの出來ぬ樣な質素な家屋に甘んじて、遂に首相官邸にも引移らず、常に人事を盡して天命を俟つの信念に基き、自ら平民を以て安んじ、敍爵の恩命を拜辭し、護衞を斥け、何時如何なる死を遂ぐるも悔いざるの覺悟をなし、全くその身を天命に打任せて居られしことは、遺言狀を見ても想像し得ることである。高橋光威君が護衞を附せんと勸められし時、氏は之を拒絕せられ、『死生自づから命あり、縱ひ護衞の士ありとも、まさかの用には立ち難きことは、故伊藤公に徵しても分る』といはれたさうだ。

又、越後の丸田等觀居士の話しによると、原氏夫人は、往年、政友會領袖諸氏が原總裁邸の新築を議せし時、絕對に反對し、若しやむなく他へ轉居を餘儀なくせらるゝとするも、三百坪以下を條件とすと主張せられしとか。夫人は平素虛弱の爲めに、原氏身邊の事を擧げて令妹に委して些子の隔意を抱かず、原氏もまた病夫人に對する溫情最も濃かにして、家庭の圓滿は實に羨ましき程なりしといふ。

一昨々年、令息貢氏が英國に留學に出發する時は、洋行の行李の調度は自身其の任に當られ、別れに臨み『縱ひ吾が身に變事ありとも斷じて歸還するに及ばず』とて、殆ど生別と死別とを兼ねて、將來を奬勵せられしとか。衲は此等の事を聞き、世の政治家たる方々も皆な斯くありたいものと思つた。

西郷隆盛公は、一朝事ありて怒る時は泰山をも覆さんとする勢があつたといふが、老母に對して孝行を盡したことは非常なもので、自ら老母を抱き、小兒の如くにして之を入浴せしむるのが常であつたといふ。前の東京市長後藤新平氏も母に事へて至孝であつて、母は九十餘歳の高齢であるので、箱根などに避暑に往かれる時、氏は自ら母の手を執つて孝侍せらるゝとて、彼の地の人々が歎賞して居つた。

九州で名高かりし五岳上人の處に、或る青年が尋ねて往き、『私は餘りに御名の慕はしきに、父母にも告げず密に家を脱れて參りました、何卒憐れと思召して御染筆を願いたい』と申出づると、上人は『父母の許しも無く來られし人には俺の書畫は與へがたし』と斷然謝絶せられ、『併し内所で來たとあれば歸途の旅費に差支あらん』とて金若干を惠まれしといふ。

池大雅は其の母を喪ひし時、自ら其の柩を負うた。門人等が切に之に代らんと乞ひし時、氏は之を斥けて、『我が母老いて病むや、人を見ることを厭ひ、三度の食膳も皆な予自ら之を供せり、されば死を送る人生の一大事に當りて、之を人手に委せて濟むべきや』と申せしとぞ。此等の孝行談を見ても、我が國の忠孝は、全く一種の信念であつて、正しく至誠の發現であることを知らねばならぬ。

六

愛知縣知多郡横須賀町なる漁民の子に近藤ミスミといへる女子がある。同地には貧しい家が多い。爲めに小學校に出しても完全に就學を續くること能はずして、途中に退學せしむるが多い。ミスミも大正二年、同女が十一歳の時、父を喪ひ活計困難なる爲め退學して、某呉服店に子守奉公に出たのである。

同町玉林齋佐治大謙師は、深く此等の兒女を憐れみ、子守學校を創立し、自ら教鞭を執つて子守の教育に從事して居る。同女も大正三年にその學校に入つた。多くの子守りは毎日一錢宛、父母又は主人より小遣を貰ふのであるが、飴の二三本も買へば直に無くなる、誠に哀れな生活である。師は之を不便に思ひ、郵便局に交渉して、その内五厘宛を貯金させることにした。塵も積れば山となる、僅かに一日五厘でも一ケ月には十錢餘、一年には一圓四五十錢にもなるから、手拭や半襟や下駄位は買はれる。貧民の習ひとして半歳でも貯金して置く者が少ない。

然るにミスミは、三年以上も、一文も引出さぬに依つて三四圓にもなつた。そこで佐治師は同女に向つて『御前の貯金も大分たまつたが何か目的があるか』と聞くと、『はいあります』、『その目的はなにか』、『あの御父さんが大正二年に歿くなられたが、また御父さんの住はるゝ家が無いから、それを造つて上げたいと思ひます』と答へた。御父さんの住むべき家とは御佛壇のことである。十二三歳の少女が、一日五厘

の積み金を二三年繼續して、御佛壇を造つて亡父に酬ひたいとは、何といふ美しい心根であらう、佐治師も非常に感じ、自ら周旋して、その貯金を土臺として、立派なる佛壇と位牌と附屬品とを取揃へ、玉林齋に於て開眼式を勤めしに、有志の人々を始め、小學校からも女生徒若干を率ゐて參列し、盛大なる法要を營んだ。ミスミの喜びは果して如何許りであつたらう。

同女は大正六年に子守學校を卒業したが、それまでには、彼の五厘貯金が再び大分たまつたので、佐治師は『何にか欲しき物にてもあるや』と聞きしに、ミスミは『お母樣が近年、齒が缺けて見惡くなりなさつたから入齒をして上げたいと思ひます』といふ希望を陳べた。師は今更の如く其の孝心に感じ、また自ら世話をして、彼れが目的を達せしめた。

彼女は卒業後、同町の製絲工場に勤めることになつたが、模範工女として賞せられ、休日毎には必ず玉林齋に詣づるさうである。翁が大正七年の五月、同町大字鍵屋普濟寺に滯錫中、母子共に來りて相見せしが、その人品も貧家の者の樣にも覺えず、どことなく圓滿なる容貌を見て大に感じたことである。愛らしき少女の眞心より發する孝行は、能く大人をして覺えず感激の涙を絞らしむるは、是れまた誠の力である。

誠は人間の良心に固有する美德であつて、所謂佛性の發動であるから、英雄でも賢者でも傭人でも少女でも、此の誠の發する所には、實に鬼神をも動かすべき偉大なる力を有して居るのである。人々悉く此の誠を有して居るが、貪欲とか、瞋恚とか、愚痴とか、憍慢とか、猜疑とかいふ妄想が發生すると、此の

眞心が隱れて了ふ。又は不純なものになつて了ふ。故に、信心修養の力を藉りて此の妄想を洗滌し、聖き直しき誠心を發する樣にすることが、人間生活の土臺であつて、所謂精神作興の第一歩である。

七

人間は妄想が起ると樣々なる束縛を受くることゝなる。貪欲といふも瞋恚といふも、吾々の精神より發するものであるから、その心的作用を分解して見れば、絶對に厭ふべきものでは無い。吾々の精神中には自然に進取の力がある。此の進んで取らうといふ進む力が樣々な欲望となつて現はれる。是を合理的に發動させれば正に是れ活動の中心である。利を求むるも名を求むるも、知識欲も生活欲も無くてはならぬものである。

併し、同一の水でも牛の腹に入れば乳となつて出で、蛇の腹に入れば毒となつて出づる如く、活動の源泉たる欲望も妄想の中に入ると恐ろしい罪惡の種子となる。腹を立つのも、吾々の精神には、外物の刺戟に抵抗する所の力があつて、それが瞋恚となつて現はれるのであるから、此の情を程好く調制する時は、これが一大勇氣となつて、魔を降し、惡を斷ち、艱難をも排して、向上奮進するの力となる。

愚痴は順逆の岐路に立ちて決斷の明なく、且つ理智の判斷力が昧されて、徒らに愛着の爲めに束縛せらるゝより起るゝのであるが、此の愚痴の黑幕たる妄想を突破すれば、そこから般若の知見が顯はれ、又、

菩薩の如き慈悲の德が現はれてくるのである。即ち欲いといふ情を善導すれば、それが佛の願とも行ともなり、又、吾々の希望とも理想ともなつて活動を起すのである。憎いといふ情を制御すれば、それが妄想を打拂ひ私情に打克つ所の勇氣となつて現はれ、可愛いといふ情を調節すれば、それが道德の根柢たる慈悲仁愛となつて妙用を發揮する。迷ふ時は三界は魔境となり、悟る時は十方が佛土となる。煩惱も菩提も決して別の根據は無い。

達磨大師より四代の祖師に當る大醫禪師が、始め三祖鑑智大師に參じた時、『願くば慈悲、乞ふ解脫の法門を與へよ』と問はれた。煩惱あるが故に業苦がある、業苦あるが故に生死の苦しみ絕え難く、三界の繫縛斷じ難し、之を解脫せざれば安心を得ることも出來ぬ、自由の境致に達することも出來ぬ。その時三祖大師は『誰か汝を縛す』と反問せられた。汝を束縛する者は誰ぢや、汝を迷はす者は何物ぢや『極樂も地獄も己が身にありて心こそなれ鬼や佛に』一心生ぜざれば萬法に咎なし、眼若し睡らされば諸夢自づから空ず、一切の束縛も苦痛も皆な自ら招く所に非ずや。禪師は此の一言を聞いて深く思惟を凝らされた結果、始めて何物も我が本來の心光を昧ますものは無きことを知りて『人の縛する無し』と答へられた。その時三祖大師は『何ぞ更に解脫を求むるや』、汝を束縛する何物も無きことを知らば、汝は元來解脫して居るでは無いかといふ適切な御接得であつた。禪師は此の言下に於て大悟せられたとある。

吾々も亦、本來解脫の境に居るのであるが、その實際は色々の魔障があつて、束縛に束縛を重ねて居る

る。境遇の變化、複雜紛糾せる環境、各方面から襲ひ來る種々の事件、一日も半時も吾々の心を安んぜしめぬ。人の此の世に在るや、皆な夫々の義務と職分とを負うて居る。此等の境遇や事情や事件に對して、知らぬ顏をして居る譯にはゆかぬ。若しも仙人氣取で『我れ關せず焉』などゝ言うて居たならば、義務が盡くされぬ、身が立たぬ、役目が勤まらぬ、生活が出來ぬ、束縛を受けざらんと欲するも得べからずといふ有樣である、煩悶せざらんと欲するも得べからざる狀態である。さあ、こゝが修養上最も用心すべき處である。

此等の境遇や、事情や、事件に觸れて、是を魔軍の來襲と思うてはならぬ。是れぞ吾々が爲めに、修養上の好機會を與へてくれて居るのである。色々の故障は却て我れに向上の意氣を與へてくれる、樣々なる逆緣こそ堪忍波羅密の製造場である。困難なる家庭でも社會でも、見やうに依つては好個の試練所である。

西哲も『我等をして忍耐せしめよ、大なる苦痛は地より來らず、天の恩惠は屢々此の苦痛を我等に齎す事あり』といひ、また『若し困難來りて汝を苦しむる時は何時も必ず思ふべし、之を忍耐せば卽ち反つて幸福なり、是れ決して不幸にあらず』というて居る。況や過去世以來の因果關係を諦め、未來永劫を期するの大慈悲の願を抱き、常に御佛の御救ひと照鑑とを信じ得る者であらば、人生に處すと雖も猶ほ淨土に在るが如く、苦難の間に在りと雖も猶ほ安樂の鄕に住するが如き觀想を有することが出來る。

『聖人は心を治めて境を治めず、小人は境を治めて心を治めず』兎角、凡夫は、境遇の改造をのみ希望して心地の修練を閑却するから、どこまで往つても安心の分が無い。偶ま安心の地に至りし時は、最早、此の世に用の無い人間になつて了ふ。佛の御教は決してそんな事を御示しにはならぬ。吾々の精神を眞化し、善化し、美化するの法門を御開演下されたのである。況て禪門の教は娑婆卽寂光土の御指南である。徒らに遠方にのみ見てはならぬ。徒らに淨土を死後にのみ期してはならぬ。人生の眞只中に於て大解脫の門を開き、解脫堂中に、德を積み功を累ね、自を度し他を度するのが禪生活の妙機である。

八

禪の生活といふは、世法を棄てずして佛法を信受奉行することである。禪といふは定慧均等の義である。定とは妄想私慾を解脫して、一切時、一切處に於て不動の心に住すること、慧といふは眞理を究め大道を明め、己れの本心を悟り因果の道理を體得するの謂である。一言にしていへば、佛法を悟ることである。前に述べたる忠孝の道を明めて、深く信じ堅く守るのも、正しく悟りの一分である。此の忠孝の道、誠の德を治生產業の上にも、政治教育の上にも、職務執行の上にも、交際應接の上にも、寢るにも起るにも、之を實行するのが禪の生活である。

故に眼に諸々の不淨を見るも心に諸々の不淨を見ず、耳に諸々の不淨を聞くも心に諸々の不淨を聞か

す、茶を飲み飯を喫する上にも忠孝報恩の志を存し、業を勵み職を務め、一には[illegible]の爲めに欺かれず、聲や色の爲めに惑はされず、其の心の動かざること山の如く、其の行の淨きこと蓮花の如くならば、萬法に咎なく天下に敵なし、常に佛を信ずるが故に手の舞ひ足の踏む所にも無量の歡喜を抱き、常に道を信ずるが故に、寢たり起たりする上にも、永久無限の大善根を積むことが出來る。『水鳥の往くも返るも跡絶えてされども道は忘れざりけり』終日說いて口に咎なく、終日行うて身に咎なきに至らねばならぬ。

併し此の境界に達するには、是非とも信仰の養ひと坐禪の力を借らねばならぬ。信仰は佛法に入るの門戶にして、而して、實に佛法の堂奧に於ける安住處である。坐禪もまた佛道に達するの要術にして、而して、實に佛位に上るも猶ほ廢すべからざる佛の威儀である。坐禪というても普通人の行ふこと能はざるものと思うてはならぬ。苟もその志だにあらば、男子でも女子でも、上智の人でも、下愚の人でも、誰れにでも行ふことが出來る。講釋を聞くとむづかしいやうに觀ぜられるが、實際行つて見れば極めて簡單な方法である。

その方法には結跏趺坐と半跏趺坐との二樣がある。結跏趺坐とは兩方の足を組み合せることで、卽ち先づ右の足を左の腟の上に安じ、次に左の足を右の腟の上に安するのである。此の方法は初學の人や婦人の方などには苦痛を感ずることがあるので、別に半跏趺坐の儀がある。是れは左の足を右の腟の上に安ず

るのみである。眞言宗などには結跏趺坐は如來の坐法、半跏趺坐は菩薩の坐法であるなどといふ說も行はれて居るが、我が宗ではさういふ區別はつけぬ。要するに結跏は正式な坐法で、半跏は簡易の坐法である。

次に手は左右の掌を重ねて足を組み合せた中部に安じ、兩方の大拇指の頭を相拄ふる樣にする。姿勢は平直にし、脊梁骨を眞直にして前後左右に傾斜せず、腹部に氣を充たして鼻より靜かに呼吸をするのである。さうして、心頭を調へて萬緣を遮斷し、一切の妄想を放擲して寂照不動の狀態となるのである。所謂『氣海丹田』に神氣を充たし、身心一如の大安靜に住するのである。

兩坐法ともに出來にくい人は、平生の坐り方に依つて、姿勢を正しくし呼吸を調整すれば、稍や禪的態度に擬することも出來る。私は之を平坐法と稱して居る。西洋人には絕對に坐れぬといふ者がある。斯る人は椅子に腰を掛けたなりで、禪の威儀に擬すれば、やはり一種の三昧力を現ずる。米國の桑港などには之を實行して居る者がある。

次に禪機を錬ることが大切である。是れは師家の指南に依らねばならぬ。禪定と信仰とは決して各別のものではない。客觀的に對象を求めて道に入るのが信仰で、主觀的に標準を立てゝ道に入るのが坐禪であるから、此の兩者は遂に一に歸すべきものである。道に入り了りなば、我が身は道の身で、我が心は道の心となる。こゝに非常なる滿足と安心と快樂と歡喜とを感ずるものであるから、此の身の運動と此の心

の作用そのまゝが三昧であり、佛法であり、解脱である。故に心迷へば佛法も世法となり、心悟れば世法も佛法となる。孝順は至道の法といふも、治生産業皆な正法ぞと説くのも皆な此の意である。

實業と禪

一

初めて御目に懸りますが、私は只今紹介を頂きました鶴見の總持寺に住職を致し居る新井石禪でございます。まだ年月も淺いのでありまして、皆樣方に御交際を願ふやうな機會も今日まではなかつたのであります。幸ひにして今晩はお邪魔に伺ひまして、暫時のお話を申上げる考でございます。『實業と禪』と云ふ演題でありますが、實業と云ふものは申す迄もなく、私どもは全く門外漢である。實業家の方々にも、大分多數の御懇意を願つて居りますけれども、實業の知識に至つては全く幼稚である。否、幼稚と云ふよりも全く知らないのであります。隨つて『實業と禪』と云ふやうな演題を揭ぐると云ふことは、頗る僭越の嫌ひがありますけれども、宗教の方面から實業道德に關するお話をして見たいと思ふのであります。

總て此の佛教は、種々の點に於て世の中の誤解を受けて居ります。或は佛教は厭世教であるとか、禁慾主義であるとかいうて、毛嫌ひする向もありますけれども、佛教其物の精神は禁慾本位にもあらず、ま

た厭世主義にもあらず、一言にして言へば、人類の向上を圖られたのが釋尊の教である。
其の釋尊の精神を傳ふべく、古今の禪僧が禪と云ふ方面から非常に研究をして今日に至つたのが、日本に行はれて居る禪宗であります。禪宗は依り所とする經典を立てないのが特色になつて居る。他の宗派には依り所の經典があります。華嚴經を土臺として華嚴宗があり、三部經を土臺として淨土宗及び淨土眞宗があり、法華經を所依として天台宗及び日蓮宗が現はれて居る。然るに禪宗は依り所の經典を少しも立てないのである。何故かと云ふと、佛教の經文は、悉く釋尊の精神の現はれでありまして、外面から見ると非常に隔りがあるけれども、內面から眺めて見る時に於ては、皆な佛の精神の發露である。佛の精神を究めて行く時に於ては、佛教の全體が即ち法寶で佛教の財產である。佛教の全體を以て自己の心地上の財產と爲し、さうして、佛の精神を目前に實現して行くと云ふのが禪の目的になつて居ります。殊に佛教は固より人生と懸け離れたものではない。即ち、今日現實の世界と云ふものに毫も懸け離れた佛教はないのであります。

人生の向上を圖つて行かうと云ふのが釋尊の精神でありまして、廣い意味から申すと、佛教はやはり實業の一であらうと思ふ。即ち、人生生活に必須の方面を授けられたのでありますから、廣い意味から申してやはり實業の一部である。今日では主に經濟的方面に實業と云ふ名前が付けられて居るが、商工業は勿論、苟も實際に人生必須の事業にたづさはる人々は、之を總稱して實業家と申すことが出來ます。

併し佛敎の如きは、從前は甚だ宣傳を誤つて、其の方法に於て種々の缺點があつたのであります。德川時代から今日に至つても、やはり其の缺點は多少免れませぬ。吾々は不肖ながら幾分か其の缺點を匡正せんと試みて居るのでありますけれども、未だ充分に佛敎の精神が、本當に實現して居らぬやうな狀態であります。何故かと云ふと、敎義の宣傳も、事實上の運動も、人生生活と云ふものに多少懸け離れて居るやうな觀がある。其處へ行くと、私は基督敎に感心をして居る。昨年、米國へ參つて基督の信者にも接しましたが、「宗敎と云ふものは何うしても無ければならない、宗敎がなくて何うして生きて居られますか」是れは基督の信者が一齊に言ふ所であります。宗敎が無くて何うして生きて居られませう、宗敎は何物にも代へられぬ我々の生命の源であるといつてゐます。誠に徹底して居る。所が佛敎の方は其處までに往つて居らぬ。甚しきに至ると佛敎不用論を唱へる方がある。是れは佛敎の罪にあらずして、佛敎の宣傳其の宜しきを得ないからである。

佛敎本來の目的から見ると、佛敎は人生生活に離るべからざる關係を有つて居る。寧ろ人生生活の基礎となつて行くべきものは卽ち佛敎であるから、此の意味から申すと佛敎はやはり實業であると思ひます。若し人生生活に懸け離れた佛敎であつたならば、それは實業でなくて虛業であります。從前は虛業式佛敎が看板になつて居つたやうな形であるが、今日からは全く人生から離るべからざるものとして、佛敎の宣傳をしなければならぬと思ひます。

二

印度に和默と云ふ王があつた。此の王が非常に親孝行で、母親が大病に罹つて何うしても醫師の力を以て之を治療することが殆ど不可能である。其處で宗教に便つたのである。所謂婆羅門教に依つたのであります。婆羅門教は隨分立派な哲學的の宗教的要素を有つて居るが、一面には迷信の甚しい教である。迷信家の布教師であつたと見えて、和默王に向つて『此の病を治するには、百匹の畜生を集め、一人の幼兒と共に之を殺し、その血を以て天を祭る、さすればその功德に依つて病氣全快疑なし』と婆羅門教の僧侶が申した。王は其の婆羅門教を妄信して居つたのであるから、其の教へを守つて、百匹の動物を集めることを命じ、國民の中から一人の兒童を徵發して、さうして東門より祭壇に向つて進まうとする際に、其の話を聞かれた釋尊は慨嘆あそばされて、東門外に於て國王に面會して、諄々と其の迷信なることを諭され、一種の偈を作つてお渡しになつた。

『欲レ得二穀食一將レ行二耕種一』食糧を拵へて置くには農業を盛んにせよ、『欲レ得二大富一將レ行二布施一』布施と云ふのは施しを布くと云ふことであつて、非常に善い事であります。廣く施しを布くと云ふのが卽ち布施であります。博愛慈惠これが大なる富を造つて行く第一の要素である。眞に道德を守つて眞に慈善の心を備へ、道德的活動をして行くことから眞正なる富が得らるる。『欲レ得二長命一將レ行二大慈一』眞に

壽命を保たうと思つたら宜しく大慈悲心を起して公共の利益を圖れ、支那の儒教に『仁者は壽なり』と云つたのはやはり此の意味と思ひます。博愛公共の念に處して公益を圖つて行くと云ふことは、壽命長久の基である。

佛教に於て生命を三通りに說いて居る。第一には肉體の生命、人生僅五十年、縱令百歳の壽命を保つて見ても何時かは死ぬ。考へて見ると人間の生命は夢の如きものである。八十歳以上の人は容易に世の中には無い。して見ると、肉體の生命は極めて短い、限りあるものである。

所が第二の生命、即ち道德的生命は無限である。所謂道德の爲に盡して行く、社會の爲に盡して行く、國家の爲に盡して行く、其の人の行ふ所の道德的命數は永久に亘つて滅しない。これは日本に於ても、支那に於ても、西洋に於ても變りはないであらうと思ひます。米國等に於て、祖先崇拜の觀念の無い土地であつても、ワシントンとか、リンコルンであるとかに對しては、眞に神を代表した人の如くに、國民が尊敬を拂つて居る。さうして今日に至つても、ワシントンやリンコルンの精神がやはり米國人の頭をどのくらゐ支配して居るか知れぬ。日本に於ても楠公の如きは然うであります。日清・日露の戰爭にどのくらゐ楠公が軍人の頭に宿つて働いたか分らぬのであります。斯の如きことは數千年の後に至つても、其の人の精神は決して滅しない。道德的生命を備へた人が眞の長命であります。

居る永遠の大生命を有してゐることを信じて、其處に宗教的安心の根柢を定めて居るのである、之を宗教的生命と申します。以上申述べた如く、釋尊は斯く三通りの生命を我々に示されてある。併し、何れにしても價値のある生命でなくてはならぬ。價値のある生命と云ふものは道德的活動の力に依つて、眞心から博愛公共、即ち公利公益を圖つて行く所以のものである。

『欲レ得ニ智慧一將レ行ニ學問一』學問を致さなければ眞の智慧は得られない。是れは論ずるまでもないことであります。釋尊は此の四句の偈文を以て和默をお諭しになつた。『お前さんは全く誤つて居る。動物や人間の生命を殺して、母親の病氣を救はうと思ふのは誤りである。迷信を以て利益を得ようと思ふのは大なる誤解である』と諄々とお諭しになつた。そこで和默と云ふ國王は、飜然として迷ひの夢が覺め、釋尊の教諭に恥ぢて弟子となつたといふ。斯の如く佛教は精神活動に重きを置いて居りますから、精神的方面から、皆様方の多少御參考になるべき修養談を試みたいと思ふのである。

三

それには、私は六然主義と云ふものが大層面白いと思つて、自分でも之を標準にして修養をしようと思つて居るのであります。此れは勝海舟翁が能く人々に示され、自分も座右の箴と爲されたものである。其

の六然を擧ぐれば、

自處超然。　處人藹然。　無事澄然。　有事嶄然。　得意淡然。　失意泰然。

と云ふのであります。此の六然主義は非常に要領を得た言葉であると思ふ。

其の中の第一の『自ら處するに超然』と云ふのは、最も禪の本領に入つて居る。自分が自分の身を守つて行く上に於ては超然主義を採れ、超然と云ふのは佛敎の語で言へば解脫と云ふことであります。解脫と云へば世の中を離れたことのやうに思ふ。昔、解脫上人と云ふのがあつた。笠置の山に入つて二十年下らぬで居つた。此等を眞の解脫生活のやうにいふ人がありますが、大乘佛敎の眞意から言へば、さういふことを解脫と言ふのでない。それは小解脫である。積極的の大解脫は、人生の眞只中にあつて、羈絆や束縛に累はされないのがそれである、所謂囚はれざる生活である。人間が安心して世を渉るのには何うしても、金錢の中にあつて金錢の爲に囚はれない。虛僞の中にあつて虛僞の爲に囚はれない、佛敎で云ふ金剛不壞の大安心を得て居ねばならぬ。是の心境が超然である。

人は如何なる人でも、外界の虛僞に囚はれ易い性質を有つて居ります。どんな立派な方でも囚はれ易い。或は眼に物を見る、耳に聲を聽く、見る色の爲に囚はれる。善根を行ひますると善根に囚はれる。それが爲に種々の精神的弊害が生じて來る。或は善に誇り、自ら德を誇つて行くと云ふのは旣に囚は

達磨大師は此の立場に於て梁の武帝を接得した。達磨が支那に參つたのは百二十歲ぐらゐであらうと推測いたします。新潟縣の堀の內に病院を立てゝ居る院長が、達磨が大好きであります、『達磨の佛敎を御研究になりますか』と聞きましたところ、『達磨は百二十歲になつて支那まで來た健康體である、理想的人物だと思ふ、大好きだ』と云ふことであつた。お醫者樣だけに達磨の長生きに惚れ込んで居られる。其の達磨が印度から支那へ百二十歲の高齡を以て三年間かゝつてやつて來た。梁の武帝は支那に於て有名な、佛心天子と言はれるくらゐ佛敎には熱烈なる信者であつた、國賓の禮を以て達磨を待遇した。

武帝は劈頭第一に『朕は天子の位に卽いてより以來無數の寺を建て堂塔を建てゝ頗る佛敎の宣布に努力したが、一體どのくらゐの功德があるか』と、功德の多少を質問した。つまり、帝も達磨の證明を得て安心しようと云ふ考であつたと見える。達磨は度胸のある人で『總て功德なし』と答へた。梁の武帝も之には眼を圓くして驚いた。『何を以て功德なしと云ふや』、『此れは是れ人天の小果有漏の因』多少の功德があつても大乘佛敎の上からは問題にならぬ。僅かな小果報である、有漏である。立派な賢君だと言はれても、所謂人間としての賢君で、有漏の賢君である、卽ち世間的である。俗界を離るゝことは出來ない、と隨分思切つたことを言はれた。梁の武帝も癪に障つたから、鋒先を轉じて『さらば佛敎の第一義は何處にあるか』と云ふと、達磨は『廓然無聖』と答へた。覺れば凡夫もない佛もない、迷も無い悟も無い、この『無』こそは佛敎の本領である。併し武帝には、これが分らない。そこで『朕に對する者は誰ぞ』貴方

は何者だとやつた。達磨は『不識』知らないと答へた。皆さんも御承知の、繪に描いた達磨樣は眼が大きくて妙な顔ですが、小兒が見ても怖がらない愛嬌のある顔で、軍人や實業家には持つて來い、嚴然侵すべからざる威嚴があつて、さうして、非常に愛嬌があつて小兒でも懷くのであります。

これが併し、達磨大師の武帝に對する非常な大慈悲の教訓であります。『貴方は佛教の爲に努力し、佛教擴張に非常の盡力をして居られるが、自分が立派な寺を建て、功德を得ようと云ふ考であつたならば、其の行ふ所は如何やうにあつても、貴方の目的は利己主義だ。それでは佛教の功德とは云へない。功德があつても小なる功德である。大なる天下國家を救ふ功德ではない。佛法の眞意は己を捨てた所にある』斯う云ふ意味を示して達磨大師は極端な大慈を垂れたのであります。

人は誰でも、超然主義でありたいものであります。楠正成が禪に參じた時に『至善を兵とせよ』と言はれた。至善とは卽ち最高の道德であります。最高の道德の上に戰術を講じ武略を講じて往かなければならぬ。既に道德を以て兵と爲すことになつて參ると、全く己と云ふものを捨てゝ掛る。軍人にして軍人と云ふことも忘れて了つて居る。偉大なる道德を以て自己の使命と爲し、自己の本心と爲して行くは、卽ち超然主義であります。

小さい我々は己の爲に支配され易いから、禪などに於て足を組み手を組んで精神を平らかにして、凡ゆる外界の境遇から切離して、自分が所謂天上天下唯我獨尊になつて往くことが必要である。つまり超然道

德で、超然たる安心を得、さうして、超然主義の上から百尺竿頭に一步を進めて、始めて眞の活動が出來るのであります。

四

北條泰時は古今の賢君と云はれて居る。此の泰時を濟度したのは栂尾の明惠上人で、此の人は支那へ往つて、支那から茶を携へて來て、九州から栂尾、宇治の方面へまで茶を植付けた先祖であります。此の上人が寡慾主義を以て北條泰時を說得した。泰時は深く之れに感じて寡慾主義を守り、寡慾主義に依つて北條の天下を治めたのであります。

其の明惠上人が松茸の好きな人で、松茸好きと云ふ評判が立つた。或人が上人を招待して松茸の御馳走、非常に念を入れた御馳走でおひらも皿も全部松茸、味の好い松茸、香の好い松茸、凡ゆる松茸を集め、熱心な料理を造つて上人に供養した。上人はそれを頂戴し、大變に悅んで寺に歸つた。弟子たちが『今日はさぞ御滿足でございましたらう。貴方樣に差上げたいと云ふので諸方面から名物の松茸を取寄せ、非常に注意を拂つてお料理をいたすとの事、施主も大層に滿足でありませう』、それを聞いて上人は非常に嘆息せられ、何か憂ふる色あるが如く、靜に立つて衣を着、袈裟を掛けて本堂へ往き、佛樣にお辭儀をし、『誠に相濟みませぬ、私が松茸好きと云ふ評判を立てられて、只だ私の腹に一時の快を取らんが爲

に、澤山な金を使ひ澤山な手數を費して人樣に非常に迷惑を掛けた。これも私が松茸好きと云ふ評判があればこそ、私が松茸に執着すればこそだ。佛の弟子として松茸に執着するとは誠に恥しい、どうぞお許しを願ひたい』と、涙を流して佛樣の前にお詫をして、一生松茸を斷つて了つた。此の傳記を讀んで感じました、我々も斯う云ふ形に依つて自分の嗜慾を矯正したいものだと思つたことがあります。併し、古でも今日でも、皆樣方の中にも、さう云ふ修養を積んで居らるゝお方も多々あらうと思ひますが、全く物に囚はれぬと云ふ人は、必ず其の精神の上に於て落着き場所が出來る。

英國の有名なゴルドン將軍は、青年時代に支那へ行つて長髮賊を平らげ、大變な勳功があつた。けれども少しも功に誇ると云ふ考がない。或時、長髮賊の亂を平げた記錄を見ると、大層自分の事を賞めて書いてある。それを見て非常に憤つて、後世の歷史家を誤らしむるものだと云ふので、到頭其の記錄を引裂いてしまつた、と云ふやう傑い識見を有して ゐた人であつた。併し非常に子供を可愛がる。子供は天の使ひだ、子供に接して居ると自分の精神が自ら淸らかになる、子供は『我王』だと云つて子供を非常に愛した。

或時、大富豪から招待を受けた。何等かの意味を以て招待したのでありませう。ゴルドンはそれを謝絕した。さうして『私は貴方から御招待を受けぬでも困りませぬ。私を招待する金を貧民に施して貰ひたい』と云つて斷つた。また或時、ロンドンの市街を歩いて居る中に貧民窟に入つた。其の中に病人が居つ

て苦んで居ると云ふことを聞きまして、其の家を通過するに忍びない。そこで其の家に立寄つて自分の財を傾けて彼に施した。患者は非常に悦んで『貴方は一體何方からお入來になりました、誰方でございます』と云つた時に、ゴルドンは『俺は遣はされたる者である』と答へた。『誰方から遣はされたか』と云つたら『俺は神より遣はされたる者だ、神樣のお使に來たのだから名前を名乘る必要はない。私が進げたのではない、神樣が下さつたのだ』と云つて其の家を去つた。此れが佛教で云ふ超然主義である。

超然は決して人生に反對したのでなく、人生の中にあつて人生に囚はれない、確乎たる精神の獨立を保つて行くのを超然と云ふ。家庭は人間が裸體になるところであるが、精神的に本當に裸體になるのは卽ち宗教に入つたときだと思ふ。團欒たる家庭へ歸れば、軍人方も軍服を脫いでしまふ。實業家も算盤を片付けてしまふ。法律家も法律に離れてしまふ。本當の赤裸々になつて、家庭の人になりますに依つて、八十歲の老人と三歲の孫とが一緒に笑つて樂む。家庭は裸體の樂園である。宗教は精神の裸體卽ち身心脫落の家鄕である、名譽も無く、利益も無い。況んや損得と云ふものは無い。そこには唯だ凡ゆる外界を飛越えた宗教的安心と云ふものがある。是れは、世の中に離れたのでなく、却つて世の中にあつて堂々と獨立の根柢を造つて行く、卽ち自處超然と云ふのである。

江戶時代、淺草に村田了阿と云ふ人があつた。煙管を造つて身代を拵へた、村田張と云うて有名な煙管はこの人の作つたものです。此の人が老人になつて了庵と名乘つて、佛教の信者となり頭を剃り衣を着て

居つた。子息に後を讓つて下谷へ隱居したが、村田の隱居だからどんなにか立派な別莊に住んで居るかと思ふと、三百棚に住んで居る。『御隱居えらい處に居るではないか』と云ふと

世は安き法の道とてあのくたら三百だなに墨染の袖

後に淺草觀音の境内に移つたが、なか〳〵面白い人物である。古史に精しい所から、諸大名や何かゝら頻に招かれる。それを五月蠅がつて、自分の玄關口に、紙に大きな文字で書いた歌を張つた。

三ぜんの飯を二ぜんにするとても五ぜん〳〵と諂ふはいや

當世風でないかも知れませぬが、其の氣品が面白い。どのやうな立派な地位になつても其の地位に囚はれず、どのやうな悲境に陷つても悲境に囚はれずと云ふ、人間は山の如き不動の精神を養つて行くと云ふことが、全く活動の根柢となつて行く、是れが自處超然であります。

五

『人に處するに靄然』人に對しては靄然として宛も春風の如く、彼の佐藤一齋の語にも『春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む』とあります。秋の霜のやうになつて、凛然として自ら肅むことは秋霜烈日の如く、人に接して春風駘蕩の如く、如何なる者に接しても、妄りに人の感情を害しない。言葉の使ひ方でも人に向つては愛嬌を以てすることが大事である。

上杉鷹山公などがやはりさうである。公は徳川諸大名の内でも有名な人でありますが、鷹山公の傳を讀んで感心したことがあります。公は世の疲弊の狀態を見て、自ら儉約の模範を示さなければならぬと云ふので、食物は一汁一菜を超ゆべからず、衣類は必ず綿服とお定めになつて、自分から模範を示した。どんな食物に向つても叱言などを言つたことがない。

或時、奧樣、若殿と一緒に御飯を喰べて居る。お汁を喰べて見ると唇の痛いやうな鹹い汁であつたが、それを默つて喰べて居られる。奧樣も驚いたが若殿は更に驚いた。流石の御父さんも今度は何とか言ふだらうと思つて居たが、何とも言はない。堪らなかつたと見えて『御母樣は鹹いものがお好きですか』とやつた。御母樣は挨拶に當惑した。『ナニ好きと云ふ譯ではないけれども』と不得要領の挨拶、それを鷹山公が聞かれて『コレ〳〵御身達は御飯中に、其の樣な不謹愼千萬なことを言ふものでない。忠義深い料理人が喰べられぬやうなものを出す氣遣はない。然るに御飯中に其の樣なことを言ふと、何やら此の食物が氣に入らぬやうに當つて、料理番に對して氣の毒である。以後氣を付けるが宜いぞ』。仕方がないから、奧樣も若殿も眼をつぶつて喰べた。お給仕の役人が驚いて臺所へ行つて話をすると、向ふでは非常に驚いた。お毒見を忘れたと云ふ。粗忽しい料理番であつたと見える。

お大名の料理人として、お毒見を忘れることは非常の失態であるから、表向になると免職は言ふまでもない、どのやうな處罰を受けるかも知れぬ。戰々兢々として堪へられぬ恐れを懷き、お詫をしようと云ふ

考からお目通りを願ふと、早速お許しになつた。お許しになつたのでお腹立のないことだけは分つた。お目通りへ出てマゴ〱して居ると、鷹山公お察しが宜いから『其の方たちは此の暑さにも拘らず、非常に忠義の心を以て予の爲に盡してくれるので、いつも御飯を結構に好味しく喰べられる、殊に午のお汁などは格別である。是より後は末長く勤めてくれよ』と仰せられた。我々どもなら遠慮するに及ばぬが、お大名が『今日のお汁は鹹かつた注意しろ』と云つたら重役は捨置けませぬ。今日の言葉で言へば馘首される。それを『結構であつた、末長く勤めよ』と云ふ一言、非常に慈愛の含まれた言葉である。其の時の有難さ悦ばしさは例へやうがない。彼の役人は思はず涙に咽んで御前を引下つたが、それから後は一生涯、殿の方へ足を向けて寝なかつた。是れ春風を以て人に接すると云ふのでありませう。

併し、今日の時代は議論の時代であるから、或る場合に依つて春風でいかぬこともあるか知れませぬが、とにかく如何なる人に向つても、慈愛の心の中に春風を帯びると云ふ情感を以て人に接することは、我々の世に處する上の標準として大切であらうと思ふ。

六

次は事無ければ澄然、水の坦々として澄み湛へて居る如く、裏も表もなく、内外玲瓏である。無事の時は、一點も心の中に障碍や滞りもない。誠に澄みわたつた水の如く、我心秋月の如く碧潭清うして皎潔

たり、ちやうど秋の水の湛へて居るやうである。斯う云ふ心持を持ちたい。殊に實業に從事して居るお方などは、複雜な事務に當り、複雜な仕事をして居らつしやるから、仕事が一段落を告げて、御自分の座布團に坐つた狀態は、澄みわたつた秋の空の如く、何等心に滯ることがないと云ふ境涯になつたならば、非常に愉快を感ずるであらうと思ふ。

今日は社會が複雜になつて來た爲に、種々の事故が生ずる。或は他國の壓迫を受け、或は生活上の困難を來し、或は自分の希望が段々大きくなつてくる、今日の青年諸君を形容して見ると、福助のやうなもので頭が大きい。さうして手足はそれに釣合はない。實行する力は伴はぬが理想だけは大きい。それで、事毎に自分の意に滿たないと云ふやうな所から、終には自分の頭をかき挘つて、狂的狀態になつて電信柱の上へ飛上つたりする。甚しきに至ると、前途有望な青年が一氣の怒りに乘じて恩人を斬殺したりする。今日の社會狀態を見ると皆な神經過敏症に取付かれて居るやうであります。澄みわたつた澄然が乏しい。國民として、澄みわたつた八面玲瓏の、坦々たる精神を養つて行く必要があらうと思ふ。卽ち精神修養法である。

大隈侯は五ヶ條の口傳を以て長壽の法とした。第一に怒るな、第二に愚痴を言ふな、第三に過去を忘れよ。第四に將來に望みを置け、第五に人の爲に善を爲せと云ふ、要するに精神養生に基く長生主義であります。

越後の良寛上人は澄然たる生活をした。米が五合あれば何にも要らないと云ふので、草菴を五合菴と稱した。秋になつても『焚くほどは風がもてくる落葉かな』と濟して居る。せつかく信者から造つてくれた布子を盜まれた、寒いのに着る物がないと云ふ始末である。氣の毒に思つて門前の者が見舞をすると、上人平氣な顏をして『盜人に取殘されし窓の月』、澄然たる精神を養つて居ります。

宗祇法師の傳を見ても面白い種々の滑稽がある。宗長と云ふ弟子を連れて宿屋へ泊つたら、お隣りの亭主がお願があると云ふ。何だと聞くと『私の家内が難產で必死の苦み、高僧と見受けてお願ひ申す、何卒御祈禱を願ひたい』、『氣の毒だな』、『どうぞお願申します』と、サッサと歸つて了つた。宗長が『貴方斷れば宜いのに』、『斷らうと思ふ内に、承諾したものと認めて歸つて了つた。どうも仕方がない、古人は歌を詠んで雨を降らしたと云ふから、歌も御祈禱の材料にならぬとも限らぬ。出掛けて歌で御祈禱をしよう』と云つて行くと、亭主『お線香か、蠟燭でも』といふ。『イヤ何にも要らぬ』病人の枕許へ來て見ると七轉八倒の苦み、何して宜いか分らぬが『摩訶般若孕み女の危篤かな』と詠むと、弟子の宗長も『一二もすんで三の紐どき』とつけた。うまく其の時オギヤアと產れた。早速宿へ逃げ歸る支度をして夜逃げ同樣に宿を立つてしまつた。

或時はまた山道を通つてゐると、盜賊が來て懷中物を皆取つた。先生平氣な顏、二丁ばかり行くと跡から追駈けて來た。『俺の貧乏を見拔いて戻してくれるのか』と云ふと、『まだお前の物で欲しい物がある、

お前の髯が欲しい』、宗祇は髯の長い男だ。『此の髯を取られては困る、何にする積りだ』と云うと、『拂子に賣る積りだ』、『俺は歌を作るのに一番大切だ、これは堪忍して貰ひたい』、『ナニお前は歌を作る人か』、宗祇はそこで『我が爲に拂子ばかりは許せかし浮世の塵をはき捨るまで』と歌つて、これで漸く免れたと云ふ話がある。とにかく澄然の修養が積んで居つた。澄みわたつた天空快濶の心、神佛と相交つて行くと云ふやうな心を以て行くのが無事澄然である。

事有れば嶄然、一朝事が有つて、何か仕事に取掛るときに嶄然として頭角を現はす、怒れる牛が角を振立つて進むが如く、何物をも悉く打破つて進むと云ふ勇氣を有たなければならない。それが有事嶄然で佛教で申せば勇猛精進と云ふことであります。我々が世の中に處して何事をやるにも、非常の勇氣を以て進んで行く、進んで止まないと云ふ勇猛の力を有つて居なければならない。如何なる艱難に出會つても、萬難を突破して行くと云ふ勇氣がなければならない。

彼の山中鹿之助は非常な勇士で、三十幾歳かで亡くなつたが、出雲の國へ行くと、今日でも崇拜して居ります。北辰妙見を信仰して居つたが、『我に七難を授け給へ』と願つた。七難を授けてくれ、自分の體力がどの位の抵抗力があるものか、自分の實力を試驗して行くから、凡ゆる災難を下して貰ひたいと願つたほどの奮闘主義の男であつて、艱難は汝を玉にす、何處までも、凡ゆる艱難に打勝つて生涯を送つて見たいのが山中鹿之助幸盛の心であつた。

實業に從事して居る人は勇猛の精神がなければならない、眞劍勝負である。私ども宗教家も隨分骨が折れます、寒い思ひもし、暑い思ひもし、心身の疲勞を厭はず活動して行かなければならぬが、實業家諸君の働き振と宗教家の働き振とは大變に違ふ。宗教家のはだま本當の眞劍勝負とは言はれぬ。其處へ往くと實業家諸君の働きは實に眞劍勝負である。或る場合に於ては、死を賭して進んで行くと云ふ勇氣もなければならぬと思ふ。併し、人間が進んで行くと其處に樂みがある。

昨年、私が米國から歸る時分に、森村と云ふ老人と一緒に船へ乘つた。森村と云ふ老人は太平洋を渡航すること七十八回目である。四十年間、米國と日本との間を往復して居ると云ふ。これには私も驚いた。近頃は名古屋に製陶工場を開いて居り、紐育附近にも自分の住居があつて、西洋の婦人を妻にして居る人でありますが、航行が何よりの樂みである。荒浪が來ても臆しない、餘り平和よりは荒れた方が面白いと云ふ。それが六十八歳の老人だから其の勇氣に感服した。ちやうど天長節を船中で祝ふと云ふので、朝日新聞社の杉村君が幹事となつて船中で遙拜式を遣る。何か話をするやうにと云ふので、私が話をする、平岩愃保君がお話をする、六十八歳の老人がお話をして天長節を勤めて、非常に愉快に感じたことがありました。人間は勇氣があると六十八歳になつても、太平洋を横斷して往くことが何よりの樂みだと云ふ元氣が出る。

七

得意には淡然、自分が名譽や利益を得た得意の時代が來ると、成功をしたからと云つて成功に誇つたりする。それが爲に精神的に弱點を生じて、或は驕る心が起り、或は高慢の念が起り、或は侈奢に流れると云ふことになる。得意は自分の身心を傷ける因となる。得意の場合に於ては、淡然と水の如くにして少しも頓着をしない。得意に安んじない。成功をしても尙ほ成功せざる如く、富んでも尙ほ富まざるが如く、安んじても尙ほ安んぜざるが如く、それに誇らぬと云ふのが淡然である。

達磨大師に就て、支那の宏智禪師の作つた偈の中に『得は鼻を犯すにあらずして斧を揮ひ、失は首を廻らさずして甑を墮す』と云ふ句がある。達磨大師は得失の境遇の爲に心を變じない人であつたことを、巧みに言ひ現はしたのであります。

支那に大工の名人があつた。或る普請をして居つた時に、左官の名人があつた、其の左官の鼻の先に泥が付いた。大工に向つて言ふのに『貴方は斧を持つては天下の名人である、如何でせう私の鼻の泥を斧を以て切落して下さいませぬか』、『宜しい、やりませう』と斧を大上段に振被つて、風を起し唸りを立てて鼻の泥を取つた。泥は綺麗に落ちて了つたが鼻には少しも傷が付かない。名人は得意の時にでも鼻に傷を付けるやうなことをしない。然るに人はとかく得意の時代に失敗を招ぐ、得意の時代が却て禍を產み

出す母となる場合が澤山あります。自分が成功したからと云つて、成功に甘んじて、それが爲に増長するとか、または傲慢に流れるとか、侈奢に流れるのは己を滅す因になる。

私は曾て東京感化院の院長に就て收容兒童の話を聞きましたが、それに據ると、東京感化院に入る兒童は長男より末子が多い。何故かと云ふと、想像であらうけれども、長男を育てる時代には、お父さんもお母さんもまだ働き盛りであるから、比較的注意も行屆くが、末子を育てる時分には、お父さんも大概成功して年も相當に長じて居るから、是れ以上働くのは馬鹿々々しいと云ふので、旦那さんは別莊歩きをしたり、また妾狂ひをもしたりする。さうすると、奥さんの方でも負けぬ氣になつて芝居狂ひを始める。さう云ふ時代に育つた子に、感化院の厄介になるものが餘計あるといふ。子供が不良になるのは父母の放縱に起因することも、或は有るかも知れぬと思ふ。私ども自分の身を顧みましても、多少自分が世間に認めらるゝやうな位地に上つた時分には、警戒して居なければならぬと思ふのであります。

勝海舟翁などは淡然たる方であつた。あの方が初め子爵になつた。後には伯爵になつて沒せられましたが、幕臣として第一に子爵になつたのはあの人である。幕臣として子爵に任ぜられたのは非常の光榮だと云ふので皆お祝ひに出たく勝翁には餘り有難くない。尤も、あゝ云ふ勤王家でありますから、子爵を賜はると云ふ陛下の大御心は深く感激は致すが、爵位其の物は有難いとも感じない。然るに他の者は只だ爵位を有難がる、翁苦々しく思つたか

今までは人並の身と思ひしに五尺に足らぬ子爵なりとは

と詠じた。やはり其處に淡然たる所がある。どうしても、我々は、淡然たる精神を養つて置くと云ふことが、得意の時代には最も必要であらうと思ふ。

失意には泰然、世の中は『人間萬事塞翁が馬』であります。善いことばかりはない。皆樣方もさう云ふことは實驗して居らつしやることゝ思ふ。景氣が好いと云へば惡いこともある。物價が高いことがあれば安いこともある。食物も好いことがあれば惡いこともある。此の世の中はアルプスの嶮峻を越えるやうなもので、人生實に行路難である。それを實地に踏破して行くのが實業であるから、得意の時代があると同時に失意の場合があるに相違ない。

支那の塞上の老翁が、飼つて居た村一番の馬と言はれた良い馬に逃げられた。村の者が御氣の毒だと見舞をすると『御心配なさるな、惡い後には好い事がある』と平氣な顔、彼の馬は二三日過ぎて戻つて來たが、一匹の馬を連れて二匹になつて歸つて來た。『お目出度う貴方は運が好い』、『好い後には惡いことがあるものだ』、二匹の馬になつたと云ふので、息子たちが夢中になつて乘り廻して居ると、總領息子が馬から落ちて足を一本折つて了つた。『大變なお怪我でお氣の毒樣』、『ナニ惡いことの後には好いことがある』、其の内に近邊に戰が始まつた。負戰であつたから、多くの青年は戰爭の爲に身を犧牲にして了つた。塞翁の息子は足がない爲に、殘されて長生をしたと云ふ。

前の偈に『失は首を廻らさずして甑を墮す』といふのは、支那の漢の時代に某と云ふ非常な才子があつて、その才子が水瓶を背中に負つて向ふに行つた。繩が緩んで居つたものと見えて、水瓶は大地へ落ちて割れて了つた。それを知らぬ顔して向ふへ行く。傍に居つた者が『おまへ水瓶が落ちて割れたぢやないか、なぜ振返つて見ない』、『振返つたつて割れた物は仕方がない』。それを傍らで眺めて居た人が、是はどうも奇人である。一風變つた人物である、見所があると云ふので、其の者を取立てた所が、果して相當の人物になつたと云ふ話がある。思ひ切りの良いこと、お互が失意の時代には、是だけの運命と諦めて悲観もしなければ落膽もしない。そこで新に機軸を出して、更に奮闘の態度を取つて進んで行く。所謂新に自分の運命を開拓して行かうと云ふ勇氣がなければならない。動もすれば、人はさう云ふ場合に非常に失望をする。禪宗等に於てはさういふことのない様に、健全なる精神を養はしめることに力を盡して居ります。人間は失意の時代になると、失望の餘り、非常に人生を悲観して了つて、其の結果、他を恨んだり憎んだり世の中を呪うたり、さうして、自分は益々卑屈因循の氣分になつてしまふ。甚しきになると、精神にまで狂ひを生ずるやうなことが間々あるものです。今日の世の中には隨分さう云ふお話を聞きます。立派な學問知識の勝れた人、立派な實業家、名譽ある位地に在る方が、非常に失望の餘り、つひ精神の上に一種の缺陷を來して、悲慘な最後を遂ぐるやうなことが隨分ある。非常に同情すべきではあるが、つまり

[illegible]思はれるのであります。

八

日蓮上人は、そこへ行くと勇氣がある。龍の口の遭難、由比ヶ濱から馬に乘せて、彼處で日蓮の首を斬らうとした。其の時に大勢の弟子や信者が跡を追駈けて來た。日蓮の之に對する態度はどうであつた。『決して一同は嘆くな、人間と云ふものは今世の一代ではない、過去もあれば未來もある。我々は過去に何に產れたであらう、恐らくは今日よりもモツと墮落したものに產れてゐたらうと思ふ。人間に產れた經歷があるとしたならば、どんな死に方をしても同じだ。大蛇に呑まれて生命を捨てる者もある、然るに今日の日蓮は此の醜い首を以て法華經と云ふ結構な寶と取り代へて行く、宗教の爲め眞理の爲め生命を捨るのだ。決して泣いてくれるな』と一同を慰め、龍の口へ曳かれて參つて荒筵の上へ据付られた。刀を振被つて首を斬らうとした時に、矢來の外に大勢の者が居つて、思はず聲を揚げて號泣した。其の時、日蓮は靜に目を開いて、四方の者をジロジロと眺め『不覺なる殿原かな、此れ程の悅びを笑へよかし』と云つた。此の凜然たる勇氣には役人も實に驚いた。併し、捨置く譯に往かぬから、今や一刀兩斷、首を斬らうとする際に赦免狀が到來した。特使が飛んで來て、危き處を助けられて佐渡へ流されたが、其の時の日蓮の態度は、大山前に崩るゝと雖も少しも頭を廻らさぬと云ふほどの大勇氣であつた。渾身是膽と云ふやうな勇氣であつたのである。

支那の程明道は宋の學者である。或時海を渡つた。船は浪に飜弄されて、船中の者は泣くやら騒ぐやら、活きて居るやうな顏色をして居る者が一人もない。其の中に程明道だけは天命を諦めて居つた。あたりを見ると、船頭は平氣な顔をして舵取をして居る。是はえらいわいと見ると、船頭の傍に一人の坊さんが鼾をかいて寢て居る。是には驚いた。其の內は幸ひにして風が靜まつて浪も穩やかになつて、九死に一生を得て蘇生した心持であるが、一般の客はまだ頭が上らぬと云ふ始末である。程明道は船頭に向つて『私は學者である、聖賢の道を學んで深く天命を諦めてゐる、それ故に斯る場合に於ても自分の心は動かなんだのであるが、お前は學問もない船頭であるが、どうして泰然として活動が出來た』、『私は水陸同一であります』と答へた。『船が轉覆しても船底に捉まつて居れば、決して生命に別狀はない。私は船中にあること尙ほ陸地にある如くでありますから、何とも思ひませぬ。何とも思はぬから自由に活動が出來ます』、『成程』。今度は坊さんに向つて『お前さんは一體どう云ふ所信があつて泰然たる態度を保つことが出來るのだ』と聞くと、和尙さん眼を擦りながら『私の所信は無心であります。己を忘れて居るから水中でも何とも思ひませぬ。此の風波の中に居りましても私は立派な座敷の中に居ると同一の考を持て居ります』と云ふので、禪と云ふものは斯くまでに我々の精神を落着かしめる者か、と感心したと云ふお話があります。

なか〱、言ふべくして、到底行ふことは出來ない。風波の中に居つて眠つて居たのは、造り事かどうか

當にはなりませぬが、併し、船中のことは暫く措いて、此の風波の如き、狂瀾怒濤の如き人生に處して、失意の時代に於て、自分の精神の上に於て、或は悲觀したり、或は怨恨の情に驅られたり、或は自分の精神を妄りに攪亂して了つて、失望落膽の結果、病的精神になると云ふことがあつては、自分の救ふべからざる一大損害であるからして、我々は、泰平の時代に亂を忘れず、安きにあつて危きを忘れず、富んで而して貧しきを忘れざる如く、平日に於て泰然たる精神を養ふことが非常に必要である。

此が六然、卽ち自處超然、處人靄然、無事澄然、有事斬然、得意淡然、失意泰然の修養であります。

九

斯の如き六然主義に依つて、お互が精神を養つて行くには、根本として一種の信念を造ることが、信念涵養上の必須條件であらうと思ふ。近來、信念と云ふものは何やら世の中と懸離れたことのやうに、多くの人に考へられて居つたのが、今日に於ては、全く信念は我々の人生に處する上に於て、缺くべからざる人間精神の力であると云ふやうなことを、一般の方が認められて、所謂宗教的信念を養つて行くと云ふやうな點に於ては、非常に注意を拂つて來るやうになつたのは、誠に興味ある現象であると思ふてゐる次第であります。

其の信念と云ふ問題に至ると、宗旨々々に依つて多少說く所の趣きを異にして居るが、禪の上から一言

申上げると、第一に自己を信ずる、『我は是れ佛なり』と信ずる、『我は是れ眞理なり』と信ずる、『我は道德の結晶なり』、『我は眞理の自體である』と信ずる。眞理と云ふも、道德と云ふも、決して他にあらずして我にあると云ふことを、能く究めて行くと、我は小なる我にあらず、眞理である。天地は皆な眞理の姿である。人間が電氣を發見したと云ふが、天地間の電氣は發明しない以前にあつたのだ。其の電氣を發明したのは、電氣其の物の天地間に於ける偉大なる力を人間が發見したに過ぎない。無いものを發見したのでなく、有るものを發見したに過ぎない。其の他總て科學の知識、哲學の知識と云ふものも、宇宙天地の間に存在して居るのである。

昨日までは暑いと思つたのが、秋風が吹いて來る、桐一葉落ちて天下の秋を知ると云ふ光景になる。其の内に一兩月經つと、非常に冷氣を增して、チラ〳〵白い物が降ると云うやうな、此の天地の大勢力は如何なる者にも不可抗の力を有つて居る。枯木のやうになつたのが春になると一樣に春霞をたなびかせる。此の天地の偉大なる勇氣の一分を備へたのが人間の勇氣、天地はものゝ本體であります。水火相助ける、草木國土に至るまでも互に相助けて萬物が發育して行く、我々も天地の惠みに助けられて生きて行くことが出來る。天地は慈悲體であります、一週間の斷食をすることは出來るけれども、一日空氣を吸はずに居ることは出來ない。一日も水氣のない、一日も火の氣のない體を以て生きて行くことは出來ない。お互は天地の惠みに依つて働いて居ると同一に、一本の草でも、一掬の水でも、悉く天地の慈悲に依つて發育し

て行くのであります。

天地の博愛主義は自然に、人間の同情心ともなつて行くのである。同情から言ふと天地國家が一の佛である。我も亦た佛の一體であるから、自己を考へた時に於ては、自己の內に大なる自由もあり、大なる慈悲もある。我は佛なりと信じても却々佛の如き働きは現はれにくい。佛様が時々妙な風になつて了ふ。愚痴を言ふまいと思つても遠慮なく出て來る。腹を立つまいと思つても遠慮なく出て來る。慾を起すまいと思つても利己主義の慾望が顏を出す。明治天皇が非常にお嘆になつて

　　ともすればあらぬ方にとふみ迷ひ敎へがたきは人の道なり

　　われとわが心をりをりかへりみよしらず〳〵も迷ふことあり

學問が出來ると、學問が邪魔になつて一の病的になり易い。誰やらの言葉に『物は置き所に依つていかぬ。學問も腹の下に置くのは宜い。鼻の先に學問がブラ下ると下味噌のやうに臭い』というてある。佛をして自分の佛たらしめんと欲するには、お互に一種の標本が必要である。其の標本が信仰の對照となる佛であります。單に標本となすのみならず、佛は生きて居る人格であるから、日月の如く我々を照して下さる。それをお互に信仰の上から認めて行くと、恰も親の傍に居るが如き感じがありますから、明けても暮れても有難く感ずる。其の時は己を捨てゝしまつて、只だ佛の渇仰の念になつて了ふ。之を他の宗門では他力と云つて居ります。

禪宗では第一に自分は佛なりと信ぜしめる。さすれば、お手本となすべき御本尊と我々との間に、自然と感應して、互に光と光と相合するが如く、合せ鏡の如くに、佛の御心に我々の精神が一致する所に、始めて信仰上に於ける一の成績が擧る。即ち信仰上に於ける成果を見ることが出來る。之を禪宗では感應道交と申します。他力にもあらず、自力にもあらず、自他一致した所が即ち信仰の歸着點である。

此の信念を基礎として行けば、我々は自然と六然主義に向つて精神を養ひ、且つ精神の向上發展を圖つて行くことが出來ようと思ふのであります。玆に於て、始めて健全なる我々人類の向上を圖ることが出來る。人類向上を主眼として行くことが、釋尊の只一種の哲學とか未來の遠方の敎とかといふのでない。我我の手の舞ひ足の踏む所、また算盤をはじいて實業に從事する現實生活の上に、佛敎の大精神を發揮して往くのが、即ち禪の目的になつて居ります。

人生と解脱

一

先年、老衲は、彼の西比利亞各地に轉戰し赫々たる武勳を顯はして凱旋せられた第三師團の野砲隊へ慰問に參りました。生憎、其の時は雨天で、降る雨は刄の如く、吹く風は劍のやうに、肌身を劈く寒さでありました。老衲は自動車を降りて、隊長の方にお目にかゝり、殘る隈なく御慰問を申上げました。其の時、隊長の申さるゝには『この厚き御慰問を部下へもお傳へしたいが、其には何か修養になる御法話を拜聽させて頂きたい』とのことで御座いました。ところが狹い營舍で、多數の人を一堂に會することが出來ない。從つて聽く方は、此の寒い雨中に立たなければならぬのを御氣の毒に感じましたから、其の事を申上げると、隊長は儼として『イエ尊い尊い法話を拜聽するのに、雨中に立つぐらゐは何でもありませぬ。積雪丈餘の西比利亞に氷結せる泥濘を物ともせず、飢餓と寒威とを忍び、人や先き吾れや先きと名譽の戰死を競ひしほどの吾々軍人にとつて、雨中に立つ位は何の苦もありませぬ。況んや、心を安じ氣を寛うして法話を拜聽するに、何の厭ひがありましやう』と。老衲も此の言葉を聞きて非常に感激しました。

凡そ人の覺悟といふものは實に偉大なもので、今此れが普通の方のように、內地に居りまして飽食暖衣、寒暑に其の處を異にし『暇な』というては友達訪問『氣が腐る』というては芝居見物、かういふ方々に、此の雨中に立つて法話を聞けというたら、何と言はれることでしやう。『衣食足つて禮節を知るだ。馬鹿々々しい。寒い雨の中に說教なんか聞いて居られるか』ぐらゐに斥けられるだらうと思ひます。身は千辛萬苦を甞めつゝ、貴い自己の生命までも投出し、異國の鬼となるを期したる其の人々が、雨中に此の法話を聞かんとする、其の心掛は、實に尊いとも、美しいとも、譬へやうのない心掛けである。實に其の儘が賢聖とも、佛作とも佛行ともいへると思ひます。

同じ樂みでも、凡夫の希望する樂と、賢人の希望する樂みとは非常に溝渠があると思ひます。『雨中に立つて御說教を聞くよりも、氣を寛うして煙草でも喫みながら、面白可笑しく休む方がよい、成らうことなら溫い室に火鉢でも抱へて、寒空を外に熱い酒でも傾けるが尙ほ更らよい』と斯樣に感官の歡樂に耽り、五根の對境に向ひて、自己の貪婪飽くなき情を恣にし、若し自分の思ひのまゝになれば、其を無上の樂みとして希ふ。また、人間の目的も其處にありとして、其を現實にせんとするが凡夫の常であります。

然し、身體を溫かにして、一杯の酒で口を樂しますのは、單に五感の一時の快樂に過ぎない。一本の煙草を燻らし、三十分四十分雜談に時を過し、此の身體の休息を計るのと、雨の中に立ちて三十分四十分の

說教を聽問するのと、何程此の身體に苦の差がありませう。況して、積雪の西比利亞に生命を賭して來た身體を思へば、三十分四十分雨中に立つくらゐは何でもない。斯う覺悟して法話を聽かうと心掛ける軍人は、單なる感官の歡樂に眼もくれず、五感の對境にも心せず、寧ろ其等の苦痛や不滿の中に喜んで身を置き、その苦痛の中から樂しみを見出す、これが賢人の樂みであります。

二

吾が敎祖大聖釋迦牟尼世尊はいかゞでありますか、御身は五大印度の中央、迦毘羅國の皇太子とお生れになり、父君淨飯王や養母の愛は一方ならず、多くの臣下や女官たちに侍かれ、寒暑雨の宮殿を異にし、衣服は錦繡を重ね百味の飲食は口に飽き、學問は當時の所有名師に隨ひ、欲するまゝに學びて其の蘊奧を究められ、其の御誕生より御成年に至るまで、何一つとして御身に儘ならぬものは無く、御意に添はぬものとては無つた。然るに、其等は却て苦の因と思召され、何とかして、不自由な、我儘の利かぬ所に身を處して見たいと思召し、御年十九、遂に夜中に城を逃れ出でられ、檀特山に入り、阿囉々・迦囉々の二仙人に仕へられた。

嘗ては一國の皇太子であらせられた御身も、今は身に木の葉を纏ひて衣となし、晝は柴を採り水を搬びて終夜眠られず、あらゆる困苦を嘗めて修學せられたるが、尙も此の二仙に滿足することを得ずして他處

に移り、日に一麻一米を食して六年の苦行をなされた。けれども、心眼明かなる世尊は、當時行はれた苦行が成道の原因にはならぬ、また自分の苦行が成道の因となつて、後生の衆生を誑かす誤解を起させる基因となつてはならぬと思され、其の苦行を捨てゝ尼連禪河に入り、水浴をなし、體を清めて身心を爽快にし、信仰厚き婦人難陀より、お粥に乳を交えたる乳糜の供養を受け、吉祥草といふ柔き草を敷いて金剛座と爲し、降魔成道の儀式を擧げられた。そして、成道の後二十一日間、端坐して自受用法樂に住し、金剛座より立ちて出山せられた。此が出山の釋迦であります。

斯樣に釋尊は、其の御出家より成正覺まで十二年間、精神的にも、肉體的にも、聞くだに戰慄とする苦行をば續けあそばされたのであります。加之、千百の天魔波旬は御修行を妨げたり、また自らは法の爲にと肉身を捨て給ひしことも再三に止まりませぬ。而も、釋尊は此の苦行の中にありても、少しも心を寛め給はず、世間の誘惑に打ち勝ち、十二年間懈怠の心なく、勇往邁進不自在を追求なされたのであります。斯樣に釋尊が不自由を求められた結果はと申しますと、佛の正覺を成じ、其の源泉は溢れて四十九年の說法となり、八萬四千の法門となつて、過去三千年間幾億の人の安心を決定し、今尙ほ、洋の東西を問はず、世界幾億萬の人の信仰對象となつて、崇敬せられる大聖世尊となられたのであります。

是といふのも、釋尊が不自由を求めて樂みとされたからである。十二年間の苦行も撓ますこと能はず、佛果菩提を成するに至らしめたのである。釋尊の此の殷鑑に照しましても、吾々は不自由を覓め、進んで

其の境に投じ、奮闘努力することが大切である。政治家であれ、實業家であれ、軍人であれ、教育家であれ、宗教家であれ、各々其の職を完うし、國家の爲め一般人の爲めに盡すが人の人たるの務である、徒に食に飽き安きを偷むのは人の價値を無みするものと云はなければなりませぬ。

三

英國にジョンソンといふ人があります。今からちやうど百年程前の人で、有名な小說家であるが、自分の母親が亡くなつた時、貧乏で葬式を出す事が出來なかつた。夫れで一夜作りに『ラセラス傳』といふのを書いた。而して夫れを世の中に發表すると、非常に評判が好く澤山賣れたので、其の利益を以て立派な御葬式を出したと云ふ奇特な人である。

其の『ラセラス傳』の筋書はといふのに、阿弗利加のアビシニヤ州では、皇太子が未だ立太子式を擧げさせられぬ前に、極樂城を拵へて、其の中に皇太子を幽閉する習慣になつて居る。『ラセラス』皇太子も、其の國の習慣や皇室の規則に依りて極樂城に幽閉される事となつた。で、妹のメリーと家庭敎師一人と三人で極樂城の人となつた。城の四方は斷崖絕壁に圍まれて居るが、一度び極樂城に入れば、暑からず寒からず、四季百花爛漫として咲き亂れ、其の上、御馳走は山海の珍味で少しも不自由なく、心の欲するままに愉快を盡くして往く事が出來る。眞に極樂城の名に背かぬ。併し、出口は僅一方しかない。其も鐵の

扉で閉されて居る。普通に考へたら、さういふところなら、多少窮屈な點があつても、定めし樂しいことであらうと思ふ、ラセラスも初めは無我夢中で極樂の樂しみに醉うて居られたが、然し、何もかも自分の思ふ通りになり、餘りに樂過ぎるので、果ては其に飽いて、少し汗を出して見たくなり、少しは手足も使つて見たくなつた。また不味い物も食べて見たいやうな分別も起つて來た。さうなると極樂も一向樂しくないから、ラセラス皇太子は、漸く鬱々として陰氣になつて了つた。終日、書齋に立籠つて、ボンヤリ机に凭れて居られるので、家庭敎師は心配して『殿下には御尊體に惡い處でもございますか』と申上げると、『イヤ別に惡くはない』と言はれる。『極樂城には何一つ御不足はないはずでありますが、何か御不足がございますか』と伺ふと、其の時の皇太子の御言葉に『予は不足なきを不足とす』と仰せになつた。これが筋の大體であります。古への詩にも『歡樂極まりて哀情多し』とありますが、此の意味を云ふのでありませう。

凡夫は此の世の中に生活して、衣食に滿足が出來ないとか、住居が不足であるとか、また、衣食や住居に滿足しても金が滿足でないとか、金は在つても名譽が思ふまゝに得られないとか、名譽が得られても家内が不和で滿足が得られぬ、家内は和合しても夭死するとか、とかくに自分に不滿足なところがありがちです。思ふ通りにならぬ間は、世間は苦勞なものである。あれが善ければこれが惡いし、一方滿足すれば他方が思ふやうにならぬと云うて、不足を列べ苦を喞つものである。然らばラセラス皇太子のやうに、何も

かも滿足し、我心の儘になれば、此れで滿足だとか此れで足れりとして居るかといふに、決してさうではない。『不足なきを不足とす』といふ工合で不足を喞つ、人間といふものは、誠に何とも名けやうのない我儘者であります。是が人間の淺ましい常態なのであります。

飜つて、賢人とか佛とか云はれる、偉大な人格を所有せる方は如何であるかと申しますと、やはりそこには不滿缺陷もありませうけれども、然し、賢人とか佛とか云はれる方は、御自分の深い修養や堅き鍛練が出來て、尠しも動かぬ安心といふものが確立してお居でになりますから、逆なることもそのまゝ順なることに變へる力を具へて居られます。

四

佛教の言に『隨處に主となる』といふがありますが、何事に出遇ひましても、如何なる場合に於きましても、自分が其の主人公となりまして、萬境をば自分の心で制御する力、これが賢人や佛には備へられて居ります。卑近な例で申しますれば、書物を讀みましても書物に讀まれない、金錢に使はれないで金錢を使ふ、酒に呑まれないで酒を呑む、衣食に不自由しても衣食から自由にせられない此の力であります。されば、何んな苦しい、生命に拘はる苦境に陷つても其の志を變せず、その苦を樂に轉じ逆を順に轉じまするから、苦中にありながら何の苦痛も感じない。苦痛なきのみではなく、卻つてそれを樂しむ餘裕があ

るのであります。經に『衆生は迷ふが故に物の爲に使はれ、佛は悟るが故に能く物を使ふ』とありますが、此の端的を述べたのであります。

何人にも知られて居りまする熊谷直實、後に出家して熊谷蓮生坊、此の方はもと武人だけありまして、出家はしても、初めの間は誠に氣が粗かつたのです。師の法然御坊が、他宗の御方と議論なさるために都へ御出達になつた。其の時、熊谷もお伴を仰せ付けられました。上人は何の御氣も着かずお連れになりましたが、ふと熊谷が大變に懐を膨まして居るのを御覧になり『蓮生坊、其の懐は何んだ』と御尋ねになると、『私はまだ法門には熟達して居りませぬ。若し師の御坊が問答にお負けになつても、其の仇を討つことが出來ませぬ。其ですから腕力で仇を討ちたいと思ひまして鉞の頭を持つて參りました』と答へたとは、大原問答に記してある有名な話です。

この蓮生坊、或時、小僧さんと問答をした。ところで大の蓮生坊が、お小僧にサン〳〵言ひ捲られてしまひました。其の上、お小僧さん年が若いものだから、いろ〳〵嘲笑したり揶揄たりした。さあ蓮生坊蟲が治まらない。何とかして復讐してやりたいが、とても及ばぬ。其のまゝにするのは倘更口惜しい。遂に意を決して『今一度議論して、若し勝てなかつたら、お小僧の首を刎ね、自分も其の場で自殺をする』といふ覺悟で、小刀を懐中して、いざ出掛けやうとすると、上人がお呼びになりました。熊谷も行かぬ譯にはゆきませぬので、お伺ひに出ますと、上人は莞爾して『何時ぞやお題目を書いてくれと云ふ頼みであつ

たが遂忘れて居た、今日は書いて進ぜるから用意をなさい』と申されました。『今日は喧嘩に出掛けるのです、其のやうなことはまた後で』と、口の先まで出たが言はれないで、『今日は少々用事が御座いますから、明日にお願ひをします』申上げると、上人一向にお聞入れがない。何でも今日書くとの仰せ、今日に限つて師の坊も無理を仰せらるゝかなと思ひましたが、言葉に背くことも出來ないので、澁々其の用意をいたしました。

そこで上人は筆を揮つて立派に南無阿彌陀佛のお題目が書かれたが、さて二字目の無の字の下に點がない、熊谷も不審に思つて『師の坊、無の字の下に點が御座いませぬ』、『あゝ其は無くてよいのじや』、『でも點がないと字になりませぬ。私も一生の御寶物といたしますのですから、字が間違つて居りましては心持が惡う御座います。是非御直し願ひたう御座います』と申上げたが、仲々にお聞入れが無かつた。其では點の無い譯を敎へ遣さうと、師の坊は向直つて『其の點は御身の懷中に在るだらうがの、利劍卽彌陀の名號』其の利劍は現在御坊の懷にあるであらうと、そこで蓮生坊は其の荒々しき心を誡め、御法門を拜聽して、心から師の坊の德に感涙したと傳へられて居ります。かゝる荒武者も、師の德によりて、

　古の鎧にかはる紙子には、風の射る矢も通らざりけり

といふ、立派な境界に入ることを得たのであります。

熊谷直實は、權勢時めく源右府賴朝の股肱の臣として、君の寵遇もまためでたく、名を旗頭とまで謳は

れた身の、世に云ふ不足は何一つとして無かつたのでありませうが、一度世を遁れて不自由を冀つた賜として、かゝる大安樂の境地に遊化することを得られたのであります。

五

先年御遷化になられました永平寺の森田悟由禪師も、八十歳に至るまで應請接化にお遑く、年中席暖かならずと云ふ有様でありました。其のお出掛けの時には『歸りは箱か甕かも知らぬが頼むよ』と仰せになつて御出達になられたのであります。また總持寺の石川素童禪師も七十九歳の御高齢でありましたが、恒に御巡化にお暇もなく、其ばかりか御巡化からお歸山になれば、少しの御休息もなく、お山の事務を御覽になられました。『お寒い中だけでも、暫溫い地方へ御避寒なされたらば』と申し上げましたら、『あゝまた直に巡錫らなくてはならぬからの、此の間に濟ませることは皆な處置しないと、皆が困るからの』と、仰せられまして其の不自由をば御氣に留められず、非常に御滿足で居られるやうで御座いました。

森田大禪師も石川大禪師も皆米壽の御齢に垂んとする方々であります。普通の方なれば、やれ鎌倉、やれ小田原、やれ房州と、暑ければ涼しい土地へ、寒ければ暖い土地へと出掛けるのであるのに、法の爲め國の爲めとは申しながら、年中御寛ぎなさる暇もなく、外目からは誠に恐れ多いと思はれるのでありますが、一向にお心にも掛けられず、日々に不自由を求めて活動あそばされたのであります。其れといふの

も、先程も申上ました通り、人には計られない大なる覺悟を得させられ、常に其處に安住せられのでありますから、非常な不自由、困難、錯雜の中にお居でになつても、其の困苦の爲めに束縛を受けられませぬ。從て、不自由もなく、不滿もなく、心を平坦に保つことができて、所謂隨處に主となられ、困苦は其の儘に遊化三昧となり、其の困憊錯雜を樂しく裁決することを得て、困苦も遂に犯すに術なく、全く其の痕を絶ち萬境悉く光風霽月となる。而して、人の厭ふ不自由は、却て自由を産む源として求むる所のものとなるのであります。

古賢も娑婆は忍土なりと仰せられました。凡て人にして忍といふことなく、常に外物外境を追究して居りますれば、長い歳月、阿僧祇劫を經ても滿足は得られませぬ。古歌にも『世の中は一つかなへば又一つ、三つ四つ五つ六つかしの世や』とあります。此の『一つかなへば又一つ』といふが人の通性、凡夫の常で、恰かも御者なき駻馬の如く、これを恣にすれば其の駐る處を知らないのであります。かく進んで退くことを知りませぬと、其處に人々お互に矛盾を生じ撞着を來し、はては、爭ひが起つて滿足は何時までも得られませぬでありますから、自分に滿足を得、爭を止めて矛盾を取除くやうにいたしますには、不自由な、そして困苦に思はれる此の世の中や物事をば其の儘に、己が其の主人公となりて、其の間に自由を見出し、苦を樂に轉ずるの外はないのであります。畢竟、不自由を求めて其の中から快樂をも自由をも求むれば、始めて其處に自分の滿足と歡喜とが味はへるものであります。

六

さて斯様に不自由の中に自由を見出し、苦をば其の儘に樂みと轉じ、世智辛き世間を幸福な世間に、四角な浮世を圓く過すには、如何なる覺悟で修養を爲したならば宜しいのでありませうか、其の覺悟を示したのは七福神であります。何人が作つたものかは知りませぬが、善く考へてあると思ひます。

先にも一寸申上ましたやうに、この娑婆は忍土でありますことは、遺教經にも『忍の德たること持戒、苦行も及ばざる所』と申されてあります。之を七福神に表はしますと布袋和尚であります。この人は支那唐朝の人でありまして、常に大きな布袋を背に負ひ、善いものでも惡いものでも、好くものでも好かない物でも、美しいもの醜いもの、何でも此の中へ入れて持つて歩く。子供が大變に好きで、食時が來れば其の袋の中から取り出して、子供等を集めて一緒に食べる。その行動を見ても、一向に馬鹿か悧巧か見當がつかぬ。後に人の家の軒下に死んで居つたが、其の時の遺偈が立派なもので、其から察すると、彌勒菩薩の化身のやうであつたと傳へられて居ります。內心何の不足なく、無邪氣な子供を友とし、自然を思ふ儘に愛して自己滿足を表はしたのが、和尚のニコ〳〵顏であります。あの便々たる腹と大布袋には、善惡、邪正、賢愚利鈍、貴賤貧富を其の中に藏めて、順に居て喜ばず逆に處して怒らず、悠々たる態度は實に偉大なものであります。

さて內に此の忍德があつて、それが外部に表はれると人に忤らはぬ、即ち柔和を示すこと丶なる。是が辨財天であります。柔和な方が話しをすると、話にも何處かに親みがあつて、打切棒でなく愛想がよくなります。であるから交際にもよく、老人などにも至極滿足を與へます。其ばかりではなく、柔和は忍耐を其の本質といたしますから、假令人が難題を持つて來やうとも、それを愛想よく柳に風と受流す、圓く治まる。

然らば內に忍耐ありて外に柔和を表はして居れば、それで宜いかと申しますと、それでは怯弱に流れるからいけない。人には剛健の氣がなくてはならぬ。國家にも其の氣象が乏しければ他國の侵略を防ぐことも出來ない。飽くまで正義を主張する意氣が無くてはならぬ。學問でも、商法でも、進んでやる勇氣がなくては眞に其の目的を達することは出來ぬ。此が形に表はれたのが毘沙門天王であります。その身を甲冑で堅め、手に鉾を採つた嚴めしき姿は、如何なる障害をも破碎せねば已まぬ勢を示して居ります。併し、如何なる障害をも打破り、如何なることにも進んで止まぬといふ勇氣は、その障害の中に處しながらも少しも束縛を受けず、却つて障害の主人となる力量を具へて居なければ、必ず其れに勝つたとは言はれませぬ。角力の好きな方が角力を見てお居でになると、あの寒い風の間を何の苦もなくイソ〳〵と喜んで歩いて行かれる。寒い風といふ障害をば制御し、自ら寒い風の主人となり、何の苦をも感ぜず、喜び勇んで行かれる。苦勞を苦勞とせず、却つて樂として進まれるのであります。釋尊が三大阿僧祇の御修行も十二

年の御苦行も、釋尊御自身としては、其が最大の樂み無限の安樂であつたのであります。私どもにしましても、苦行を苦とせず寧ろ安樂行と觀じてゆく時、如何なる勞苦も、混亂錯雜も、必ず見事に打破ることが出來るのであります。是が眞に毘沙門の德の表はれたのであります。

次に大黑天は、是は印度の神樣で摩訶迦羅天と申します。頭に頂く頭巾は『上な見そ頭巾』と申しまして『世の中はあれ欲しこれ欲しほしだらけ下見て暮せほしはなきもの』で、下のみを見て、常に足ることを知り、而して己れに授かれる田畑土地を大切にし、一粒のお米も一文のお錢をも無駄にせず貯へ、所要の時には何の惜氣もなく此れを用ふる、此が大黑天の德であります。その手にせる槌は活動の相を表はし『此の槌は寶打出す槌でなし、なまくらものゝ頭打つ槌』、農家の方であれば、祖先の田地を大切にして懸命に之を耕し、商家の方であれば、其の營業を熱心にして、些の油斷なく努力し活動して、始めて俵も札も其の小槌から打出すことが出來るのであります。

此の大黑樣に對をなすのは惠比壽樣です。吾々の此の世の中は譬へると恰も海のやうなものです。汪洋渺茫として自分の思ふ所に驀直に行けます。然し、其れには風もあり波もあつて、爲めに便利なこともあれば命を落すこともあります。愉快も得られる替りに、また非常な困難も覺悟をしなくてはなりませぬ。海には眞珠や珊瑚の樣な人の珍重する立派な寶も藏して居れば、また腐爛した人肉や魚肉も浮べて居ます。此の色々な要素を含んで居る大海原に乘出して、あらゆる方向に活動し、風波を恐れず、苦樂に心を奪はれ

さて、かやうに情意の修養は出來ても、其れを指導する指南車が無くてはならぬ。勿論、人は情意が必要であります。人の美しい心のあるのも、一度決したならば岩をも通すといふ勇敢な心のあるのも、一に此の情意によるのであります。而して、此を善用すれば此に萬物の靈長たる人間となり、此を惡用すれば禽獸にも劣れるものとなります。さて、これは善いこれは惡いと判斷して善惡を定め、而して其の情意をば善い方へ向けるやうに仕向けるのは、此の知識である。智慧である。故に、一方、情意の修練が必要であると同時に、其の修練された情意を一層有效ならしめるには、知識の發達練磨が極めて必要であります。この智慧を表現したものが福祿壽であります。長い頭は其の知識の發達を表はし、其の圓頂は知識の圓滿を示して居ります。勿論、今日では生活の競爭があり、知識が進歩して、何物も一人で知ることは出來ませぬ。することが皆な專門的になつて居ります。人間の滿足を得るには知識が廣くなければなりませぬ。昔の人の云へるやうに『行は方なるべし智は圓なるべし』といふのでなくてはなりませぬ。宗教家は宗教の事ばかり識つて居れば其でよいとは申されませぬ。教育家は教育の事ばかりを知つて居ればよいでは、知識が圓であるとは云へぬ。政治家でも、法律家でも、教育家でも、宗教家でも、其の專門の事に精通することの肝要なのは云ふまでもなく、お互に他の領分をも研究して知識の圓滿を計らなくてはなりませぬ。此の知識の圓滿を表はしたのが福祿壽であります。

最後に壽老人は、人には寛容したところが無くてはいけませぬ、其のユッタリした心持は智識や情意が何程訓練せられても、其の態度の悠々といふことは得られませぬ。事物の道理を悉く究め盡し、人情といふものを深く洞察し、其に從つて萬事を裁決して行く、所謂人の見て立派な手腕のある人物であると云はれる人でも、イザ自分の大事とか、また己れの生命にも關はる場合には、腰が動搖して思はず不覺を取り、自分を汚すのみならず、後の世までも後指を指されるといふ人は、古今に亘つて誠に乏しくないのであります。此の世の中に生活し活動して、朝夕に身心を勞しながらも、併も其の奥底にドッシリと動かぬ處がなければなりませぬ。

七

前にも申した通り、世の中に居りながら其の束縛を受けず、總ゆる對境の主人となることが出來ないから、あつたら不始末の結果を招くのであります。それといふも畢竟は、人生に居りながら人生の解脱が出來ないからであります。然し、此の解脱といふことは、昔からよく問題となつて、此の爲に苦心した人も隨分澤山にありますが、誠に誤解せられ易すかつたのであります。解脱といふと、此の人生を飛び越えて、人生以外の、一般世俗から飛び離れた處に自分を置くといふやうに考へられ、それで、一度其處に

支那の古代に有名な堯帝といふ方がありました。其の皇帝は大層英明な天子であらせられまして、自分の御子様がありましても、『天下は吾物でない、人民の天下である、然れば何人でも、天下を安く治め、人民の幸福を増す力量のある人が天下の主となるべきだ、吾子は其の器にあらず』とて、其の頃天下に有名であつた舜といふ方に、御位をお譲りになつたといふ偉い皇帝でありました。此の皇帝の時代に、許由といふ有徳な仙人で修行をして居る者がありました。堯帝は、未だ舜帝を得なかつた時と見えまして、或時、此の方を宮中にお召しになりまして『是非、私の代りに天下を治めて頂きたい』と申された。すると、許由は其を聞きまして、驚いて山中に逃げ返り、溪へ下つて頻りに耳を洗つて居りました。それを見た友人の巣父といふが理由を尋ねますと、許由は堯帝の仰せを繰返して『今日は斯かる汚らはしい事を聽いたから、今、耳を消毒する所だ。天下を譲らうなどゝいふ不潔なことを耳に入れて如何にも汚はしい、氣色が惡くてならぬ』と申しました。巣父も許由の友人だけありまして『お前の汚れた耳を洗つた水が下へ流れて來たに違ひない。それとは知らずに、今、私は川下で牛に水を飲ませて居た。大方牛の腸が汚れたであらう、大變なことをした』といひて、かの住居を川上へ引越して了つたといふことであります。

是を水戸の黄門光圀卿が評されまして『耳を洗ふ心の水は清けれど、流れを汲まむ世を思ふ身は』と詠ぜられました。許由や巣父の心は清いに違ひありませぬが、たゞ『清い』といふことに執着した。これ

が人生を無視した小解脫で、解脫の眞意を採り違へたと申すべきであります。天下を治むる身がかゝる態度であつたならば、一般の人を如何に治むることが出來ますか『流れを汲まむ世を思ふ身』とは、流石は光圀卿の活眼であります。

淨土の法門に、往相還相といふことがあります。名號を唱へて極樂往生を遂げるのが往相であるが、一度成佛したならば、その極樂に着せずして再び世の中に還つて來る、これを還相と申します。此の還相までを具備しなくては、眞に成佛したとは申されませぬ。禪宗でも、悟りの一方にのみ偏して居るのを深く誡め、悟りの境界から出でゝ悟りの妙用を世間に活用するのでなければ、眞の大悟とは申しませぬ。佛をば自覺々他の方だと申しますのも此の意味であります。何程智慧や情意が發達し訓練せられゐても、また何程世の中が理解せられて居ても、解脫が出來て居りませぬと其の束縛を免れることは出來ませぬ。從つて自由といふものがなく、何時も我が對境に向つて齷齪して、常に動いて安住不動といふことがなく、ユツタリした態度を表はすことが出來ませぬ。この德を顯はしましたのが壽老人であります。

人間には此のユツタリした、安住不動といふことが一番大切で、神經の過敏ほど人命を傷ふものはありませぬ。同じ人でも、小說家や藝術家といふやうな方は、誠に短命のやうであります。恒に神經をイライラといたしまして、少しも此の安住といふことが出來ないからではないかと思ひます。心に束縛がない

に安じて、物事を樂しんで見ることも出來て來る。それが人間には非常に養生になつて、自ら長壽を保つことが出來るやうになる。眞白き長髯、笑ましげなる顏は、能く是を表はして居ります。此の七福神は、形こそ七つの福の神に分けてありますが、これは福の神となる七つの仕方とも、また圓滿な人間となる七つの方法とも見られませう。

私どもは、此の七つの德を以て進みますれば、何時の時代にも大なる成功疑ひなく、如何なる境界に處しても如何なる大困難に遭遇しても、自ら其の主人公となりて其れに縛せられず、却て其の不自由や勞苦をば遊化三昧と化し、其れに安住して其れを樂みとすることが出來る。是れがとりもなほさず其の儘に佛作佛行であり、個人として大なる幸福を將來し、國家にとりても國力の發展、充實、興隆の基となり、家庭にも、國家にも、眞の七福神が舞樂を奏して、家內安全、國家安康、世界太平を祝福することゝ存じます。それには人々の修行、心掛、所謂覺悟といふものが肝要のことゝ思ひます。

佛教的安心の基礎

一

宗教の目的は、一言にいへば、安心獲得に在りと云ふことが出來やう。尤も其の安心は、一時的であつたり不合理であつたりしてはならぬ。即ち最高の理想に立脚したる永遠の大安心で無ければならぬ。元來、此の世の中は、多くの場合不安に包まれて居る。生命の不安もあり、境遇の不安もあり、生活の不安あり、災厄の不安あり、如何なる人と雖も、恐く不安の無きはあるまい。

法華經には『三界不安、猶ほ火宅の如し』と說かれた。三界とは欲界・色界・無色界の三種の世界だが、要するに凡夫の世界のことである。此の世界の不安なることは、猶ほ大厦の火を失したる如くにヂリヂリと燒けて來る、即ち無常の火だ。無常の火力には如何なる人も敵し難い。月に叢雲、花に風、榮枯盛衰、變遷して暫くも定まること無く、健康に誇りし人も一朝にして病に斃れ、富貴を恃みし人も暫時の間に赤貧の身となることもある。之に反して、孤兒と呼ばれ浪人と嘲けられし者が忽ちに顯官の椅子に就くこともあり、貧乏人と笑はれし者が數年を出ですして大富豪となることもある。人生の徑路は、宛然、廻

燈籠の如き觀がある。

諸行は實に無常にして、萬物一として常住なるものは無い。吉凶禍福は皆な原因結果の法則に支配せられて居るので、一事一物も偶然發生するものでは無いが、僅々五十年、百年の短かき範圍から眺むれば、實に憑み難き世相といはねばならぬ。故に、富貴なればとて油斷が出來ず、健康なればとて安心が出來ぬ。況や境遇の變化と周圍の事情とは、時々刻々に吾々を刺戟して、常に不安を感ぜしめて居る。

支那唐朝の詩星白樂天が杭州の牧たりし時、鳥窠の道林禪師を訪はれた。折しも禪師は門前の老松の上に端坐して居つた。如何にも危險な住處であつたから、白樂天は思はず『危險々々』と叫んだ。すると、禪師は『山僧よりは貴殿の方が一層危險ならずや』と答へた。白樂天は『某は一州の知事として幾百里の江山を鎭し、而して今は大地の上に立てり何の危きことかあるべき』といひし時、禪師は『薪火相交はり識情停らず、危からざるを得んや』と喝破した。如何にも痛切なる警語であつた。山ほど積んだ薪でも、マッチ一本の火に觸るれば、忽ちにして一片の烟となつて消え失せる。

吾々お互の身は、恰も火に接近した薪も同然で、何時如何なる變動を來すか知れたものでは無い。殊に、地位の高い人ほど一層油斷はならぬ。行政上、一歩を誤まれば一州の民を苦しむることゝなる。敎育上、一令を誤まれば幾千萬の子弟を惑はしむることゝなる。上に事ふるに道を以てせざれば其の地位を盡すこと能はず、下を御するに宜きを得ざれば其の地位を保つこと能はず、實に是れほど危いことはある

まじ、而して、凡夫の悲しさには、識情停まらず、即ち十分に宗教的安心が出來て居らぬから、是非得失に支配せられて、泣たり、笑つたり、腹を立てたり、喜んだり、一日の間、一刻の中にも、精神が常に動搖して、多くは煩悶の種となつて行く有樣である。

殊に、生命欲の旺盛なる人類に在りては、死といふ事實、及び死後の狀態、即ち未來の問題に就ても、甚だしき不安を感じて居るのは當然である。玆に人ありて途中にマゴ〱して居たとする、『貴君は何處から來られましたか』、『存じません』、『何處へ行かれます』、『それも存じません』、『それでは何をして居られるのですか』、『こゝに居りますから、かうして居るのです』これでは全く迷兒である。吾々お互は此の世に存在して居るものゝ、生れて來た原因も分らず、死しての後の結果も分らず、只だ生れたから活きて居る、生きて居るから食べねばならぬ、着ねばならぬ、いつ死ぬるやら分らぬが、死ねばそれぎりといふのでは、所謂『冥きより出でゝ冥きに入る』ので、全然、迷兒の狀態である。

そして、その活きて居る間も極めて短かい、人生七十古來稀れなり、我が國民の平均年齡は四十歳にも達せぬと聞ては、如何にも人生の果敢なさが感ぜられる。實をいへば明日の事すら憑みにはならぬ。『明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは』の歌なども、正しく目前に現はれたる事實であるから、吾々が今後の事を誓約するのも、畢竟、ツモリとダラウとで假定するのである。『明日の命は大丈夫ですか』、『大丈夫です』、『きつと大丈夫ですか―きつと、、、と問はれると、ちよつと答ふるに躊躇せざるを得な

い、その時は、多くはツモリとダラウで答へる。今日も丈夫であるから明日も丈夫なツモリ、今日は斯く達者であるから明日も達者ダラウと思ふ。此のツモリとダラウで五年、十年、二十年の後をも期待するのである。此の無常觀は決して寂しい悲觀的な意味とのみ思うてはならぬ。

承陽大師は『無常觀を以て發菩提心となし、無常を觀ずる時は、我見私慾に囚はれず、光陰を惜み時間を重んじ、且つ泡沫の如き聲や色に惑はされぬぞ』と仰せられた。卍山禪師は青年の頃、得度の師より『少年易レ老學難レ成、一寸光陰不レ可レ輕、未レ覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲』の古詩を與へられ、此の詩を以て座右の銘とし、修行を勵み大功を收められた。

是の如く、人生憑み難く、境遇の變遷は常に不安を與へ、その不安の結果、貪欲を增進して意外な罪を造つたり、瞋恚の焰を揚げて恨みを結んだり、愚痴に囚はれて煩悶に陷つたりするから、益々不安に不安を重ねることゝなる。此の不安を一掃して、眞に能く安心を得れば、貧苦の中に在りても能く天眞の樂みを得、辛勞の中に處しても能く平和の安きを感じ、如何なる時、如何なる處でも、常に大安心に住することが出來る。是れこそ最大の幸福であらうと思ふ。

二

安心を得べき基礎觀念を凡そ三通に分けてお話して見やうと思ふ。此の三通りは決して別々の方法では

無く、佛教信者としての安心法は、自から此の三通りが備はらねばならぬことゝ思ふ。

ゝ先づ第一には因緣觀より得たる安心である。此の因緣觀は、佛教に於ては最も大切なる觀法で、此の觀法に依りて、死の問題も、又、生の問題も解決せらるゝのである。因は原因で、緣は其の原因を助くるものであるから助緣ともいふ。凡そ何事でも、數多の原因が相依て始めて結果を見るもので、單一なる原因では生起の力を現はすことは出來ぬ。米の如きも、種米は主因であるが、種米を蓄へて居ては苗は生えぬ、實も結ばぬ。種米を播くべき田地や之を長養すべき日光・空氣・雨露等が要る、これは皆な助緣である。因と緣とが和合して始て米を作ることが出來る。

人間の行爲に就て見ても、一の事業を起さうといふ決意が原因で、その事業に着手すべき諸種の準備が助緣である。惡い方でいへば物を盜まうといふ不心得が原因で、盜むべき品物や機會が助緣である。善事も惡事も皆な因緣和合に依らざるは無い。之を大にしては天地間に於ける有ゆる現象、小にしては一身一家の榮枯盛衰、悉く因緣生の姿である。

佛教に於ては、此の因果の眞理を常に道德的・敎訓的に力說して居る。彼の十來說の如きも、如何にも趣味深き敎訓である。卽ち『富貴は慈悲より來る』、『福德は善根より來る』此の善根は公共の利益に關する事業である。『無病は信心より來る』信念ある者は精神が健全であるから身體も健全となる。『愛敬は忍

『高位は禮拜より來る』禮拜とは謙讓の德である『短命は殺生より來る』人を呪へば穴二つの意である『病身は不淨より來る』身體の不潔のみでなく、精神の不潔も亦た身體を損ずること夥しい、『貧窮は慳貪より來る』情けを知らぬ者は孤立無援の身となる。情けは人の爲めならず、欲深き者は却て困窮に陷る、『患盲は破戒より來る』患盲は生れ附の不具者、破戒とは規律を守らぬこと、不規律の者は不具の身となる。以上の十來說は原因の重なるものを擧げて、原因結果の狀態を示されたものであるが、此の意を推擴めて考ふれば、人間の吉凶禍福も其の由來する所を明らむることが出來る。

或人は此の十來に倣ひ、善惡因果經に據りて別に十來を錄した。それは『端正は忍辱の中より來る』堪忍に富める者は眞の美人となる。『醜陋は瞋恚の中より來る』どんな美人でも怒り狂うては醜く陋し、『下賤は憍慢の中より來る』人を見下す者は人に見下さる。『耳聾は不聞の中より來る』善き敎へを聞かざる者は耳の德と效用とを失ふ。『瘖瘂は謗法の中より來る』眞理を誹り、正論に背く者は舌の德と效力とを失ふ、『愚鈍は不學の中より來る』學ばざれば智能を啓發することが出來ぬ。『根具は持戒の中より來る』六根具足するは規律を守れるが爲めである。『長命は不殺の中より來る』仁者は壽し。『子あるは放生の中より來る』生物を憐みて之を助くる者は良き子を有す。『子なきは殺生の中より來る』妄りに殺生する者は子孫斷絕す。凡そ原因あれば必ず結果を生ずるが故に、涅槃經には『善男子よ、善因より善果を生ずことを知り、惡因より惡果を生ずることを知りて惡因を遠離せよ』と仰せられた。

只善因にせよ惡因にせよ、結果を現はす時期に三通りあることを知らねばならぬ。是を三時業と稱して居る。一には順現報受、是れは此の世で作りし善惡の業が此の世の中に結果を現はすこと、二には順次生受、此の世でなせし行爲が來世に至りて結果を現はすこと、三には順後次受、此の世での行爲が次の又次の世、即ち第三生以後に結果を現はすこと、今、假りに、今年を現在とし、來年を未來とすれば、今年種を蒔て年内に實を結ぶ米や豆の如きは順現報受、今年種を下して來年に實を結ぶ麥の如きは順次生受、桃栗三年柿八年の如きは順後次受である。

此の因果の原則に照して、現に受けつゝある果報を眺むれば、貧富・苦樂・吉凶・禍福も皆な既往若くは過去世に其の原因があるので、畢竟、自業自得である。世には、仁者にして短命なるあり、正直にして不仕合なるあり、勤勉家にして困窮なるあり、信仰家にして不幸に悲むあり、此等は皆な過去世の因緣に依るものである。之に反して、生れながら尊貴なるあり、格別の技倆なくして成功するあり、善人ならずして昇進するあり、德行なくして名聲を博するあり、此等も亦た宿因の致す所である。此の道理をよくよく觀察したならば、何事にも諦らめがついて、悲しい事、苦しい事、難儀な事に出逢うても、妄りに人を恨み世を呪ふことなく、皆な宿世以來の因緣と明らめて、其の心を安んずることが出來る。且つ此の因緣觀よりして、次の如き麗はしき思想を産み出すことゝなる。

一　幸福なる人ならば、宿福、即ち前世に於ける善根が因となり、父母等の恩惠が緣となつて、此の幸

福なる果報を得たるを喜び、驕らず、高貢らず、増長せず、油斷せず、善根の種の盡きぬやうに益々善根を積み德行を勵むべきである。是を續善根と稱して居る。

一　若し不仕合であつたならば、宿緣の拙なくして罪障の最と重きことを慚愧し、その罪障の債を償ふべく益々努力し、善根功德に精進して、運命の轉換を圖るべきである。

一　吾々の心は、とかく利己的慾望に流れ易きものであるから、好きにつけ、惡しきにつけ、常に其の身を省みて懺悔の念に住し、進んで御佛の大慈悲力に歸命し、清淨無垢の心を振起すべきである。

因緣觀というても、唯だ盲目的に因緣と明らめ、なるやうにしかならぬもの、何もかも因緣であるから、自然の成行に委せるといふ樣な淺薄なる觀念ではならぬ。斯る盲目的觀念は是を因緣外道といふので、釋尊の堅く御誡しめなさるゝ所である。正しき因緣觀に依る時は、順境に處しても毫も驕る心なく、逆境に處しても更に屈する心なく、分限に安んじ、足ることを知ると同時に、益々進取的に勇猛精進し、之と同時に、信仰力に依て常に平和な堅實な精神を持し、不自由の中にも自由の心境に住し、苦惱・逼迫の間にも、前途の光明を認めて、益々清く正しく、麗はしき誠の道に向て精進することが出來る。

或る無教育な女中が、奉公して居る中に信仰の門に入つた。半歲以上も辛抱して貯蓄したお金で着物を製し、まだ一度も身に着けず大切にして行李の中に入れて置いたが、一夜、鼠の爲めに散々に喰ひ破られ

た。従前ならば、氣も狂ふ程に落膽するのであらうが、因縁の理を聞き込で居つた爲め『今までは鼠が喰つたと思ひしが俺が喰うたと思や可笑い』といふ歌を讀んだといふ話がある。此等も簡單ながら因縁觀より得たる安心の一例である。

三

次には、解脱觀より得たる安心である。解脱といふことは佛教の目的であり、殊に禪では最も解脱道を尊んで居る。

元來、解脱といふ語は、解は縛られし繩のほどけたる意、脱は牢獄の中に在りし者の脱出したる意、つまり、吾々の身心が、束縛し抑壓せられたる苦境を離れて、自由の境地に達したるをいふのである。

此の凡夫世界は、決して安樂な世界でも無く、清淨の世界でも無い。従つて吾々お互は、常に内外より色々の束縛を受けて居る。内よりの束縛とは、煩惱妄想である。貪欲の爲めに、財を漁り、色に溺れ、飲食物に心を奪はれ、徒らに虚名を貪ぼり、または安逸遊惰に耽るが如き、瞋恚の爲めに、怒り狂ひ、恨み、憎しみ、嫉み、罵りて、徒らに感情の奴隷となり、愚癡の爲に、迷執に囚はれて前後左右を顧みる批判力を失ひ、又は過ぎ去りしことを、いつまでも思ひ煩うて心を苦しむるの類である。此等は皆な内心煩惱の致す所で、繩なき繩に縛られるのである。外よりの束縛とは、境遇の壓迫、外界の脅威、其の他、愛

する者に別れるとか、病魔に惱まされるとか、生活の道に苦しむとかいふの類である。如何なる人でも大なり小なり此の二種の束縛に苦しめられぬは無い。人間の生涯は、常に此の苦痛と闘うて居る樣なもので、何れも闘の爲めに疲れ果てゝ世を終るのである。恰も滿員の汽車に乘り込んだ樣なもので、窮屈で〳〵堪らぬ。次の驛に着たならば樂にならうと思うても、降る客があるかと思へば乘り込む客は却て多きを增し、何の驛でも同じことを繰返し、漸く乘客が居らぬやうになつたと思へば、最早それが下車驛である。

古の聖賢は此の苦痛より解脫せんとして、或は深山に逃れ、幽谷に避けて淨行を修せられたのである。併し、解脫の境界は決して人生と懸離れたものでは無い。釋尊は、王城を捨てゝ苦行林に入りて六年の御修行をなされ、終に解脫道を得たまひしが、それよりは再び社會の眞只中に步みを進めて、四十九年の大傳道をあそばされた。此の大傳道は、正しく解脫三昧の大活動であらせられた。山に入りて道を修められたのは、山を出でゝ世を濟はんが爲めであつた。今日の吾々は幸にして、釋尊開示の法門に歸依することが出來たのであるから、解脫道を、客觀的に外に求めずして、主觀的に內に修めねばならぬ。解脫道を山に求め海に求め、殿堂に求めても、內に解脫を得ざれば、山も海も、殿堂も、やはり束縛より救ふことは出來ぬ。

徒然草で名高い吉田の兼好が、木曾の山水を愛し、此處こそ解脫の境ならんと思ひ、廬を霧原山に結び

て閑居したが、　或日、國守が大勢の家來を率ゐて遊獵して却々の雜沓を極めた。兼好は其の喧擾を聞きて、遂に『此處もまた浮世なりけり餘所ながら思ひしまゝの山里もがな』と詠じて鄕里に歸つた。

故に、眞の解脫は、退ては心地を鍛錬して不動の三昧に安住し、進では凡夫の欲望を超越して大道を欣求するのでなければならぬ。心地を錬るのは禪定である。一切の邪念妄想を放下して、心を不動の三昧に安住するのである。足を組み、手を組み、身を調へ、心を靜め、意識分別より生じ來る妄念を打靜めなば、自然に八風吹けども動ぜずといふ境地に達するものである。尤も、それには自分で自分を叱り飛ばすといふ至健至剛の大意志力を發動せねばならぬ。

明の洪自誠すらも『耳目見聞は外賊たり、情欲意識は內賊たり、只是主人翁惺々不昧にして中堂に獨坐すれば賊便ち化して家人となる』というて居る。人は耳や目に誘はれたり、情欲に惑はされたりするが、一心さへ堅固不動ならば、耳も目も情識も決して害を爲すものでは無い。惜い、欲い、憎い、可愛いといふ情欲が、樣々な惡業を造るのであるが、十分に自己訓練が出來さへすれば、惜いといふ心が保護の觀念となり、欲いといふ心が進步發展の基となり、憎いといふ心が內外の魔障に打克つ勇氣となり、可愛いといふ心が報恩慈悲の眞情となる。『盜人を捕へて見れば我が子なり』、『田の草を採てそのまゝ肥料かな』である。

故に、次には此等の欲望よりも一段高い大道を欣求せねばならぬ。『朝に道を聞いて夕べに死すとも可な

り』とは孔子の信念である。世に尊ぶべきは道である。人の人たる價値も道に存するのである。道の大本は唯一無二で、その道が分れて、忠とも孝とも恭儉とも博愛ともなるのである。縱ひ財富み位高く、命長く身健なるも、遂には北邙一片の烟となる空蟬の世の中であるから、道といふものが無かつたならば人間の生涯も夢幻の樣なものである。

その道の大元を究めて、運用無礙の神通力を得たまうたのが佛陀世尊である。その道の大元を佛性とも眞如とも稱して居る。道は天地の根源にして、吾人の肉體も精神も皆な道の顯現である。形の上にこそ生滅はあれ、道は常住不變である。象の上にこそ差別はあれ、道は平等一味である。凡夫は此の道の中に在りながら道を忘れて居る。佛は道を以て身とも心ともして居られる。故に道を悟る人は佛を見ることが出來、佛を見る人は道を悟ることが出來る。

道は、元來、平生に在り、吾々の全身心がソツクリ道の現はれである。『春は花夏杜鵑秋は月冬雪さえて冷しかりけり』皆な道の姿である。『峰の色溪の響もみなゝがら我が釋迦牟尼の聲と姿と』かく道を體得したならば、生といふも、死といふも、大海の上の波の如きもので、人間の盛衰消長も大空に於ける雲の樣なものである。是の如き心境に達したならば、非常な場合に處しても泰然として道を樂み、晏如として心を安んずることが出來る。

彼の祖元禪師は、支那に在りし時、元の兵に襲はれ已に命を斷れんとせし際『乾坤無㆔地卓㆓孤筇㆒喜

得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬二春風一』といふ一偈を唱られた。汝等は、吾を殺さんとするだらうが、春風を斬ても手答はあるまい、斬らうとしても斬ることは出來まい。吾には不滅の生命あり、生死の束縛は受けて居らぬぞとの見地である。元の兵も大に感じて其のまゝ退散したとある。此の祖元禪師こそ、後に我が國に歸化して、北條時宗の師となりて鎌倉圓覺寺の開山に請ぜられた人である。

又、甲州慧林寺の快川和尚は、武田家滅亡の時、織田信長の爲めに燒き殺された。和尚も一度は火を山門の樓上に避けたが、其の山門にも火がついた。膝下に集まる隨徒數十人、和尚は卓立して『諸人者、大火焔裏に向て如何が法輪を轉ぜん』此の焔々と燃え上つた火の中の佛法はどうだといふ問題が出された。實に眞劍勝負である。隨徒の者も代る〴〵一轉語を發したが、最後に和尚は大聲に『安禪何必須二山水一、滅二却心頭一火亦凉』と喝破したが、恰かも同時に樓門が焚け落ちた。和尚は笑を含んで、衆と與に火中に寂を示したといひ傳へてある。

此等は、非常な場合に於ける解脱的安心の例であるが、平時に於ける、災害や、哀傷や、損失や、不遇の場合でも、內、其の心を訓練し、外、其の道を樂しむ人は、貧苦の中にも心の富を得、不自由の中にも心の自由を得、哀別離苦の際にも永遠の生命を認め、大損害を受けたる際にも道の寶を守つて居るから、自づから動かさること山の如き大安心を得るのである。

四

次には信仰觀より得たる安心である。信仰とは、御佛を信じて之に歸依し奉ることである。每度申す通り、御佛は萬德圓滿の御身であるが、大別すれば三大德となる、一には智德、御佛は智慧の光り、覺の姿である。二には斷德、御佛は威嚴の力、解脫の姿である。三には恩德、御佛は其の全身心が大慈大悲の結晶である。されば、御佛は此の世に於ける迷の暗を照す光りであり、內外の惡魔を征伏する力であり、且つ吾々衆生を御救ひ下さる慈愛の親であらせたまふ。故に、御佛の光りに觸れ、惠みに潤ふ時は、渡りに舟を得たらん如く、暗夜に燈を得たらん如く、有り難く且つ嬉しく感ずると同時に、大安心を得ることが出來る。

物を見るには目を開て見るが、御佛を見るには目を閉ぢて見ねばならぬ。即ち御佛の實在を信じ、其の慈悲力を信じ、且つ、徹底、有り難いと信じて內觀する時は、天地宇宙に遍在する御佛の大光明をありと拜することが出來る。此の時は、吾々の全身が御佛の光明に包まれて、最早、自分といふものが無くなつて了ふ。即ち此の身が融解して御佛の光明體となるのである。此の場合、自力だの他力だのといふ名稱を附すべき餘地はない。信心發得の曉には、御佛の智慧の光に照されて、自づから迷ひの暗も晴れわたり、御佛の解脫力に化せられて、何事にも堪忍し得られる忍辱力も、道を樂み善を好みて益々向

上すべき精進力も自づと備はり、御佛の大慈悲心に抱かれて、何者にも代られぬ喜びを感ずるものである。故に、吾々の生活も、社會も、信仰に依りて淨化せられ、美化せられ、道德化せられるものである。

信仰の樂みある者は自から大安心を得られる。人生の眞只中に在りながら一切の苦惱を忘れ、一切の妄念を脫し、常に大歡喜心に住するものである。『うきなみのあるにまかせてうれしけれ慈悲のみふねに乘りし身なれば』芝居の好きな人は、暑き夏の日にも、狹苦しい芥の立つ棧敷の中に在りて、汗をタラ〳〵流し、淚までも出しながら、夜の更けるをも忘れて、猶ほ退屈もせず『もう一幕位あれば宜いが』などというて居る。卽ち暑き中に暑さを忘れ、苦しみ中で苦しいを忘れて居る。是れは、芝居なるものに絕對の興味を感ずる處より、一切の苦惱逼迫より超出して居るのである。

古人が線香を詠じた詩の中に『淸話濃時尺還短安禪倦處寸猶長』といふ句がある。面白い話をして居れば、一尺程の線香もいつの間にかともり盡して短かく感ずるが、之に反して、坐禪でもして、足が痛いとか坐り疲れたとかいふ時は、一寸計りの線香も大さう長いやうに感ずるものである。況や、御佛に歸依して信仰的趣味を感じた者は、人生に處しつゝも、朝な夕な法悅に滿ち、寢ても寤ても感謝の念に涵つて居ることが出來る。

和泉式部の愛孃小式部は優れたる才媛であり、且つ母親に孝心が深かつたが、不幸、病に罹り、十七歲

を一期として此の世を去つた。彼は臨終に臨み、母親に先だつ不幸を悲しみて『いかにせん行くべき方もおもほえず、親に先立つ道を知らねば』と詠じて息を引取た。和泉式部も悲しさ遣る方なく『小足にてたどり行くらん死出の山道知らぬとて返りこよかし』と詠じ、『埋れ木の朽ちはつべきは殘りして蕾める花のさきに散るとは』と歎いたが、逝く者は再び返らず、愁傷の涙乾かすに由なく、爲めに、深く佛門に歸して因緣の理を諦らめ、堅固なる信仰を發得して安心の境致に達した。そこで、和泉式部は『假りに來て親に仇なる世を知れと敎へて歸る子は知識なり』と詠じたとある。

豐後國速見郡總見村の妙喜尼は、信仰最も深く、能く堪忍を守つたが、或時、人ありて彼が信仰を試さうと、頭から水を打掛ても、更に怒れる色もなく『夕立に逢つたと思へば何でもありませぬ、流されざりしは幸なり、是れも佛樣の御蔭である』というて喜んでゐた。又、或人が謂れなく頭を扣いたところ、彼は『屋根の瓦が落ちたと思へば……命に別條なかりしは佛恩である』とて、益々信心を凝した。或時の如きは、誤て指を火傷したが、有り難い〳〵というて居つた。人々は笑うて何故ぞと問ふと『罪深き身は、燒死すべき程の業障あらんも知れざるに、指先ぐらゐにて濟みたるは御佛の御加護であらう』といふて、彌々法悅に浸つたといふことである。格別敎育のある尼僧でも無かつたらうに、信仰の力は是の如き安心を得ることが出來たのである。

安心の意義を、心の向け所を定めてそこに一心を安住るといふ意味に解釋する場合もあるが、今はそれでなく普通に使ふ安心の意味にて説明したのである。卽ち苦痛をも煩悶をも打忘れて心の安らかになることである。

五

承陽大師は『操行と道と符合せざれば身心未だ曾て安寧ならず、身心安寧ならざれば身心安樂ならず』と仰せられた。然れば、眞に能く心が安らかになれば、自づから樂みを感ずるもので、是を法悅とも法樂とも申すのである。元來、此の世の中を樂觀するも、悲觀するも其の人の心の持ち方一つ、卽ち人生觀の如何に依て分れる。困苦の中に於ても晏如として天命を樂しむ者もあり、榮華の中に在りながらも、常に悲觀して寂しい生活を營む人もある。

彼の蜀山人などは頗る呑氣な人であつたと見えて、彼が餘りに酒を飮んでばかり居るので、門人等は愛想をつかし、八釜しくいひ出した。そこで彼は遂に禁酒を誓ひ誓文代りに『黑金の門より堅き我が禁酒、修羅朝比奈も破れざりけり』といふ歌を作つた。門人等は喜んで翌日行て見ると、最早、酒を飮み始めて居る。呆れはてゝ之を詰ると『まあ〳〵さう小言をいうてくれるな、今日は此の通りだ』というて、歌を書いて投げ出した。手に取て讀んで見ると『我が禁酒破れ衣となりにけり、それさしてくれそれついでくれ』

とあつたので、さすがの門人衆も腹を立てられなかつた。彼は此の

心の悶を解て居る。或る神經家が、正月元旦に門松が風に吹倒されたというて非常に悲觀してゐたが、彼は之を慰めて『元日や福壽の神がきた風に果報寢てまつ又おきてまつ』と詠じたので、すつかりと氣嫌を直した。又、或人が元日に床の上に雜巾が置いてあつたのを氣に病で居るのを見て『雜巾をあて字でかけば藏に金、あちらふく〳〵こちらふく〳〵』と詠じて與へたので、主人は大に喜び、『これはめでたい來年からは雜巾を元日の御飾りに致さうか』と申したさうです。

大閤秀吉公の如き英雄でも、神經を患ふことがあるもので、或時、日頃愛せる庭前の老松が枯れかゝつたのを見て、氣嫌を損じ、毎日々々、不興顏をして頻りに疳癪を起し、近侍の士も弱り果てた。之を聞て、例の曾呂利新左衞門が御前に祗候し、一首狂歌を作つて公に呈した。それは『御秘藏の御庭の松は枯れにけり己が齡ひを君に讓りて』といふのであつた。公は、之を見るや、忽ち氣嫌を直したとある。人間といふものは、少しの心の持ち方で、苦しみもすれば樂しみもする、悲しみもすれば喜びもする、であるから、成るべく、雅量を抱き趣味を養ひ、總ての事は精々善意に解釋し、凶をも吉に轉じ、禍をも福となす樣に致したいものである。

併し、此等の事は一時的の心機轉換であるから、永久的安心は得られぬ。前に述べた如く、因緣觀に依りて人生百般の事象を諦らめ、解脫觀に依りて心を大山の安きに處し、信仰觀に依りて歡喜の生活に入り

なば、眞に能く日々是れ好日、年々是れ好年の風流を占むることが出來る。是れが本當の大安心である。此の大安心は自然に道德的活動を起し、慈悲的光輝を發揚するものである。なぜならば、安心決定の時、本心の德が現はれるから、因緣觀よりしては、人間のみならず、動物までも無緣の者とは思はず、益々善き因緣を結ばんことを心懸るやうになる。又、解脫觀よりしては、佛性本具の智・斷・恩の三德が益々光りを放ち、信仰觀よりしては、天地萬物、見る物、聞く物の上に佛の御心を拜し、朝々佛を抱て起き、夜々佛を抱て眠るといふ境界に住する、世に是ほどの幸福が他にあらうか、世に是程の樂みが外にあらうか。『唯心の淨土』といふも、此の大安心の功德莊嚴に名けたものである。

支那禪門の初祖達磨大師の御弟子、二祖慧可大師が達磨に問て、『我が爲めに安心の法門を與へたまへ』と懇請せし時、達磨は『心を持ち來れ、汝が爲めに安心せしめん』といはれた。慧可は是に於て大疑團を起し、心の穿鑿に工夫を凝らした。だが、如何程探しても心の在處は分らぬ、『櫻木を打割り見れば何もなし花の種とや何をいふらん』畢竟、空寂である。

盤珪禪師の話にも、一僧ありて『私は短氣で腹立ち易く、爲めに、常に失敗が多くて困ります、どうか此の短氣を改むる法があらば敎へて戴きたい』といふと、盤珪は『それはさぞ困るであらう、いつ頃から短氣を始めた』、『是れは親讓りで、持て生れた厄介物です』、『さうかそれは猶更難儀であらう、いかにも短氣を改むる法を敎へて進ぜやう、とにかく、そこで一度短氣を起して見られよ』、『今は起りません』、

『だが生れながらの持参とあらば、何處かに藏れて居るであらう、よく體内を探して御覧』、『いくら探しても只今は、そんなものは有りません』、『それでは親譲りだなどゝいふは、甚だ親への難題といふものぢや、畢竟空ではないか、その空なることをよく〳〵返照して見よ、短氣も癇癪も煙の如く消え失せるであらうぞ』というて、接得せられたといふのであります。

慧可も心の本源を尋ね〳〵て遂に人法倶に空なることを徹證し『心を求むるに終に不可得』と答へた。時に達磨は『汝が爲めに安心せしめ畢れり』徹底空なりと觀ずれば、そこに眞實の大安心があるぞといはれた。是を禪門では不可得安心というて大切なる公案の一つになつて居る。要するに、前の三觀を安心の基礎として修養すれば、終には不可得大安心の妙境に達するのである。

無我の生活

一

釋迦牟尼如來が御說きあそばされた諸經の中に『辨意經』といふのがありますが、何時か餘暇を見てこれを和譯し、廣く頒布したいと思うております。この辨意經の中に『五行』といふことをお示し下されてあります。その御趣旨は、今日、敎育勅語や戊申詔書の御精神にも契うて、お互が道德を修めてゆく上に最も適切な御誡めであります。されば、以下その概要を敷衍致しますから、お互日常生活の上の規範に資せられたいものであります。

第一は、布施貧窮である、菩薩六度の行願の中にも布施が其の最初に設けられてあります。卽ち貧しい人に施しをするの意です。然し、ここに一言申して置きたいことは、貧しいといふにも幾通もある。麁末な家に起臥し、三度の食も事缺き、着る衣服にも不自由をなすといふ如きもあります。然れども世の中は、形の上のものばかりで貧富を定める譯にはゆきませぬ。財に乏しいのを財貧といひ、財産があつても、とかく佛の道とか信仰の心に乏しいなぞは、法に乏しいので法貧といふ。

『富貴にして信を起すこと難し』といふことがある。兩三年前、衲が岩崎邸へ參つた時、色々と世間咄の次で、令室が『妾は寒い時分になると外出する氣にはなれませぬ』と云はれた。『何故ですか』と聞くと、『餘りに室内の設備が行き届いてゐるために、戸外の空氣に觸れると寒冒に侵される憂ひがある』とのことでした。何樣、北海道などの汽車で、車内は蒸氣が通つて七十度の温度は保つてゐますが、窓外は寒威肌も裂くばかりの氷點以下で、外へ出ると、温度の急激な變化で風邪をひくことがある。岩崎の令室も御座敷が餘りよく温度を保たせてあるので外へ出ると風邪をひく。そこで衲は『御身分がよいのは幸福の不幸です』と申したことがあります。外出されるのにも自動車や馬車の世話も懸るし、自然、外出が厭になり、せつかくのお寺參りも疎かになり、信仰の心も從つて薄らぐのである。凡そ幸福の一面には斯樣な不幸が裏附けられてをるものであります。

二

財貧・法貧の外に智貧といふのがある。これは智識に貧乏なのである。今日教育が盛んになつて一般に人智は進歩してゐるが、以前は殆んど人文未發で、偶に書物でも讀てゐると青表紙なぞといはれ、衲なぞも説教本を覗いてゐると、談義本を繙てゐるなどと云はれたものです。禪宗では學問することを黑豆勘定と云ひます。とにかく今日、七十歳位の御年輩で教育のある方は異數です。教育のある方は大抵は連中

で琢磨された方々です。

ある家の二階で兄弟二人が騒いでゐたので、父が叱ると、長子の曰く『今、弟の馬鹿が、空の星が欲いというて竹竿を二三本も繼で叩き落さうとしてゐる』といふ。父は『そんなものが落ちる譯はない、天にあるんだもの』といふと、次子は『そんなら星は一體何んだい』ときくと、父は『ありや雨の穴だよ』と教へたといふ。親馬鹿、子馬鹿、揃ひも揃つた三人無智の話である。

また或る無教育の母が、臺灣にある伜から至急の手紙を受取つた。然れど文字知らぬ母の情けなさには、手紙を持つてお寺の和尚さんの許へ驅けつけるその道途、洋服を着た男に出會うたのを幸に、母は早速手紙を出して讀むで貰うと、洋服先生暫く手紙を展げて見詰めて居たが、何思うたかポロリ〳〵と双眼から涙を零した。母の方ではこれはテッキリ伜の危篤だと思つて、さめ〴〵と泣き出し『どうでございます』と質くと、先生はただ默つて居るばかり、そこへちやうど魚賣の男が通りかゝり、老母と洋服の對手とを七分三分に見較べて凝乎としてゐたが、やがて鉢卷の手拭を額にあてゝ泣き出し、三人ワイ〳〵大聲あげて泣いてゐる。と、恰もそこを學校の先生が通りかゝつて、不審に思ひながら『一體どうしたといふのです』と訊くと『伜が危篤だと云ふ手紙を讀んで頂いて泣いてゐます』と老母は答へた。洋服の先生はときくと『立派な風裝をしてゐますが、字にかけては點切見えませぬ。先刻から何處かに假名でもあるまいかと搜して見ましたが、ちよつとも見つかりません。あゝ親の存命中に勉强しなかつた酬いを今ぞ知る、それ

がためにこの老母の要求にも應じられないと思へば、涙が零れました』と答へた。さて最後に魚屋の泣いてるのをきくと、『此の間、儂の倅が病氣で死んぢやつたんだけれど、忙しいので泣く暇がなかつたから、今お接伴に泣いたのさ』と、三人が三人異つた泣き方をしたといふ。手紙は倅の病も全快したといふ通知であつた。これらも三人馬鹿の標本で、卽ち智貧といふのです。その他學問は出來るが世間に暗愚な人もある。また學問は優れてゐるが道德のない人もある。これを道貧と云ふ。

佛は斯樣にいろ〳〵と吾等衆生の爲に懇切にお說き下され、財に乏しい人には財を獲るの道を示され、精神上安心の乏しい人には信仰をお說き下され、地位のない人には地位を求められる道を敎へられ、身體の虛弱な人には健康法を敎へられ、衞生醫術をお說き下されました。これらが施しであります。いかなる人でも施與は受けねばなりません。財は澤山あつても體が弱いといふたやうに、佛のお眼から衆生を見たまへば、齊しく百人が百人まで貧窮は免れないものです。故にお互は、須らく佛に就てこの大なる布施を受け、人格の高い人から道德を受けねばならぬ。同時にまたお互は身分相應に布施を行じてゆくことが肝要である。

三

凡そ布施には三種の樣式があります。最下等の施は『施して後に悔ゆ』といふのです。『あの人が勸め

にきたから澁々承諾したもの〻、遂若干か取られた』とか、また、中にはふんだくられたといふ物騷な言葉を用ふる人もあります。かうなると、一體、與へたのか盜まれたのか見界がつかなくなります。施して後に悔ゆる樣では、いけませぬ。第二は『施して後に報酬を思ふ』といふのである。卽ち條件づきの施で、結局、價値のないものです。眞の施は『施して後に樂しむ』といふのでなければなりません。お寺の賽錢箱にも喜捨箱とかいてあるが、結局、報酬を求めない、一糸半錢でも施せばそれを喜ぶ。越後長岡地方や尾張邊の言葉の中に、『あげさせて頂いた』とか『使にやらして頂いた』とかいひますが、これなぞは骨を折りながら感謝の意を籠らしてゐる言葉で、實に優美であると思ひます。

日露戰爭が始つた二月のことでした。米國の貧民街イースト、エンドから次のやうな美談が傳へられた。イースト、エンドといふ街は、東京で云へば萬年町とか鮫ヶ橋等に比ぶべき所で、世界中の金持國であるアメリカには珍らしい程の貧民街である。日本領事の內田さんは開戰に關聯して毎日々々忙しかつた。ある日のこと、領事館の玄關に、身裝の卑しい七十歲あまりの婆さんが訪れて、是非領事にお目に懸りたいといふのであつた。館員の面々は一樣に『この取り込みに、困つた婆さんだ、多分寄附を願ひにきたのであらう』ぐらひに思つて、致方なしに澁々應接へ通した。內田領事は老婆に對して、『私が領事の內田です。何か急用ですか、實は忙しくてならぬが』と、もどかしげである。老婆は『まことにお忙しい處を御邪魔して濟みません』、領事は矢つぎ早に『さて御用の趣は』ときくと、『實はその事に就きまし

て、戰地へ赴かれた遺族の方々の爲めに幾分なりとも寄附をして、慰藉と救濟をいたしたいと思ひます、些少なれどもお取扱ひは願はれますまいか』といふ老婆の言に、領事はちよつと驚いたまゝ『一弗でも二弗でも御思召は直ちに本國へ送達致しませう』と答へた。老婆は非常に滿足氣な色を顏に漂はして、やおら穢いポケツトへ手を入れ、領事の前に千弗の紙幣を出した。領事も餘りの意外さに驚いたが、また思ひ直して、米國では屢々貴族が貧民に扮してよくこんな狂言をするから『まあ、どうか二階へ、こゝではあまりに麁末ですから』と急に待遇を變へた。再び老婆はポケツトに手を入れました。そして千弗の紙幣をもう一枚、都合二千弗の出征者遺族への寄附をしたのでありました。領事も益々氣が氣ならず『一體、お名前は何と仰せらるゝか』と尋ねると、名などを申す程の者ではございません。罪深き自分としては何か世のためになることをと考へ、去年から少しづゝ貯金して預けて置たのがこれだけになりました。この金が東洋の平和、人道のために利するところとなりますれば滿足でございます。名だけは御免を蒙ります』と、サツサと出て往つた。後姿を暫し眺めて居た領事は、不思議に耐えられたいのでボーイに後を随けさせたが、イーストエンドの貧民窟の狹い小路へ這入つたきり、かの老婆の姿を見失つて了つた。而して二千弗は恤兵金無名の第一筆に登錄されました。このことを內田領事の滯米中の美談として話されたものでした。

　また、施に趣味を持つた施がある。佛樣の施はこれです。觀音菩薩が三十三身にも身を現じて、

衆生濟度の救世海の如き施をなされてゐます。お互はこの布施の志を養ひ、これを實行するに於て、眞に道德の實踐者になり得るのである。

四

第二は持戒不惡である。これは戒を持して惡せずといふので、つまり修身といふことになる。『守るとは身を守るこそ守るなり身を守らずば神も守らず』といふ歌の意の如く、神も佛も均しく、信仰し參詣なさる當所に身を守るところがあります。よく世間で禁酒をしたり煙草を斷つといふ人は、必ず何か固い心願を持して居るもので、この心願がある以上は、きつとそこに感應の力が備はつて來るものです。

伊達騷動の松前鐵之助といふ人は、お家の禍祅を取鎭めた功勳者であつた。かの有名な淺岡も死し、最後に殘されたのが鐵之助で、この人一生涯笑ふといふことをしなかつた。鶴千代が四代の殿となつて系圖の切れなかつたのも、一は鐵之助などの忠臣があつたからです。そこで鶴千代君も常に『爺や、爺や』と鐵之助を慕つて居られた。殿は彼が些も笑はないのを不審に思つて、何とかして笑はせやうと、茶番狂言などを設けても、大勢は笑ひころげてゐるに鐵之助一人は苦い顏して、鍾鬼の面に青筋立てゝ少しも笑ひ顏を見せない。何うして笑はないのであらう。それは鐵之助が死ぬる七十歳の時、さしも御家の柱ともなつた豪傑の身體も衰へた。殿は特にその枕邊に見舞はられて、『汝は大忠臣ぢや、今日、伊達家のあるは全

く汝の力ぢや、氣を丈夫に持つて是非治つてくれ』と仰せらるゝ下から『穢いこの部屋へお越し下され、かゝる有り難い御諚を賜はるは勿體ない、御高恩は死すとも忘れまじ、某の病は到底治りませぬ、鐵之助が最後のお願ひ、何卒惡臣ばらをお近づけなされぬやう、而して五十四郡の殿として御仁政をお布きあそばせ』と言上する。殿も『今生の別れに何か申し置くことはないか』と言はれると、『何もございませんが、たゞ一つこの世の思ひ出に、一度ぎり笑つて死したうございます』、『何と申す生前笑ふことの嫌ひな汝が笑ひたいとな』、『さればにて候、御家騷動の時は惡人はびこり、主家は恰も風前の燈火、これをお救ひしなければならぬと神明に賴り、鹽竈明神に祈誓をいたしました。それは一生笑ふまいといふ願をかけ、今日までたゞの一度も笑うたことがありませぬ。屢々笑ひたい時があつても我慢をして參りました』殿はこれを聞かれて、なるほど、鐵之助の心懸としてはかくあるべしと思はれ、『汝が笑ひたいと思つた時にはいかに我慢をしたか』と尋ねられると、『失禮ながら、これを御覽あそばせ、このとほり膝が紫色になつて居ます。可笑しくなると力一ぱい鐵扇で推しました。これ程にしてまでも神の誓を破らずにすみました。その感應あつてかお家の騷動も治り萬代不易、私の生命も最早今明日の中に迫つております、せめては此の世の名殘にたつた一度笑つて死にたうございます』と、殿も思はず双眼に淚を湛えられ、『かゝることゝは知らなかつた。たゞ無愛想な奴ぢやと思ひ、かくまでに大忠臣を苦しめたとは露知らなかつた。神になり代つて今赦すから遠慮なく笑へ』、『ありがたうございます』と云ひながら、力なき淋い笑を養へ

切つた顏にたゞよはして、やがて合掌して安らかな念佛三昧に入り、大往生を遂げた。麻の如く亂れたる伊達家の騷亂を、未前に防ぎたる大忠臣の末後は、正に安樂な死であつた。

さて、この鐵之助の持したやうな誓ひは、隨分無理な點もないではないが、尊いところはその形式よりも精神です。人は精神に何か守る所がなければならぬ。腹を立てまいと誓ふこともよい。朝起きすることもよい。太田錦城でしたか『太陽の昇らぬ前に起きること、御飯を半ぜんづつ控へること、この二行が毎日行はれたならば聖人になれる』というてゐる。一寸考へて見ると、これしきの事がと思はれるが、さてこれを三百六十五日續けて往くとなると、なか〳〵大難です。お互ひは精神の中に何か、大なり小なり守る所が無ければなりませぬ。この守る心があると、自分の精神の上に堪忍の力が增してくるものです。同時にまた、そこに佛の偉大なる力が加へられるものです。佛や神にどんなに强い力があつても、肝心の此方にそれを受け入れるだけの力がなくては何等の感應も得られない。

五

第三は忍辱不亂といふので、お互の精神が亂れぬことであります。凡そ人は、腹を立てる必要があれば腹も立てねばならぬが、往々、立てなくてもよいやうな時に腹を立てるのはよろしくない。子供を敎育する上にも單に甘い一方ではいけない。時として團十郞をきめ込まねばならぬ。癇癪は佛樣にもあります。

十一面觀世音の頭上には十の面があつて、一方は愛嬌のある面相のがあり、一方は怖ろしい面のがある。不動様や道了薩埵は所謂大憤怒の怖ろしい相で、あれは降魔の姿です。併し、かやうに外部は怖ろしい降魔の形相であるが、内部には柔和の情が流れてゐることを知らねばなりません。故に、一寸腹立てたら一丈の柔和を持たねばならぬ。御馳走でも、單に甘い物づくめでは料理にならぬ。ピリツとする辛味のあるカラシも混ぜる必要がある。即ち味の調理法です。

人は稍ともすると神經が過敏になつて萬事に屈托する場合が多い。例へば、めでたい霜月十五日、袴着の祝ひの朝、門前に襤褸の法衣に腐れ珠數がかけてあつたのを、主人は緣起が惡いと痛く氣にしてゐたのである。歌人が門前に貼紙して『けさひろふころも霜月十五日、この子のとしは珠數のかずほど』と緣起を祝つた。また元日の朝、戸外でわい〳〵と泣いてるのを聞いた主人は、不吉だと神經に病むだので、歌人は『大黑に貧乏神がおひ出され、門の外にてわい〳〵と泣く』というたやうに、何事に對してもお互は精神を亂してはならぬ。昭憲皇太后の御製にも

事に觸れ身はいかほどにくだくとも　心はゆたにあらまほしけれ

この『心はゆたに』なる平和の精神にならねばなりませぬ。この平和の精神を築き上げるものは所謂忍辱の堪忍が基をなすものである。

六

第四は精進勸化といふのである。勉強は自己のため國のため衆生を利せんためである。

ある寺の小僧さんが毎夕、和尚さんの命令で豆腐を買ひにゆく、その都度、門前の人々が『小僧さん何處へ行く』と尋ねる、『町へ行く』、『町は何處へ』と尋ねると『豆腐屋へゆく』、『豆腐屋へ何しにゆく』、『豆腐買ひにゆく』と調戯はれるやうな事が毎日でした。小僧さん寺へ歸つて、和尚さんに、なんとかこれによい答はないかときくと、今度『何處にゆく』と問はれたら『西方へ』と答へてやれ、『西方は何處へ』と訊かれたら『極樂へ』と、それから『極樂へ何しに』と、次を敎へやうとしたところには、もう小僧さん早呑込みに飛び出して了つた。案の定、門前で問はれたから、和尚さんに敎つた通りやつてのけた。門前の人々も『今日は大分小賢しくなつたわい』と感心し、最後に『極樂へ何しにゆく』といつた、この一句に小僧はまごついた。ままよとばかり、小僧は『豆腐買ひにゆく』と答へて了つたといふ話がありますが、お互はこれであります。

學問も敎育も悉く、結局は、國家のため、家のため、先祖のためといふのが結論になるのであります。目的を忘れてゐてはなりませぬ。さればお互は御恩報謝の念を忘れず、高祖の所謂『日々の行持これ報謝の正道なるべし』を體してゆくのが、いゝのです。さうでないと自らが自らに罰を與へることになる

のです。佛は決して罰を與へるものではありません。

七

第五は報孝盡忠で、孝の道を盡し忠の行を盡すといふことになるのです。佛の何の敎にも必ず忠孝の精神は含まれて居るが、最も著しくあげられてゐるのは、この辨意經の中のこの誡である。而して孝行の意味も忠義の意味も廣くなつてゐる。卽ち

一切の男子は皆わが父なり、一切の女子は皆わが母なり

と、同胞は兄弟であり、人の親はわが親である。その親を愛するものは人を憎まず、他の親でも愛し敬ふの觀念があります。これは三世因果に當れば

六つの道遠近まよふともがらはわが父ぞかしわが母ぞかし

の高祖の御歌の通り、遠方の衆生でも、近くの衆生でも、無量劫の間に生き更り死に更りて、幾百萬幾千萬の兄弟があるかも知れない。故に、吾が宗の讀經の後の回向文に

願はくは此の功德を以て普く一切に及ぼし、吾等と衆生と皆な倶に佛道を成ぜんことを

とある。この功德を、一般の人類なり一般の衆生なりに及ぼさねばならぬ。而して、この上に大信念があれば、自然に無我の行に合し、人のために盡したからというて恩をきせる所はない。かくありて初めて、

佛教の大精神たる眞に無我的の道德に入ることが出來るのである。悉く佛の道に合體し、佛の廣大無邊な德に合當するのです。けれど、無我というても、決して無神經の意とは異ひます。無我は萬德の源泉、眞人の基調であります。

八

九州博多聖福寺は臨濟の禪刹で、榮西禪師の開闢道場であります。同寺の仙厓和尚といふのは極めて無我的修養の積まれた方で『今一休』とまで贊へられた高德の方であつた。書畫も非常に秀でたもので、ある人が何かお芽出たいことを屛風に書いて下さいと和尚に願ふと、仙厓和尚、早速、筆をとつて

「爺死ね親死ね子死ね孫死ね」

と死の事をかゝれた。信者は異な思ひをした。併し、門松は冥途の旅の一里塚だ、死が順當に來るのは、人生何よりお芽出度いことではないか。『子が先に死んで、後に親が死ぬやうでは、人間の最大不幸ぢや』と敎へられたのは有名な話です。三十五萬石の大名黑田侯は、日頃から和尚を信愛して居ました。侯は生來牡丹が好きで、若し過つて、牡丹畠へでも足を踏み入れて花を害ふやうな場合があつたら、用捨なくお手打くらゐは朝飯前であつた。ある雨の晩に、和尚はこつそりその畠に忍び込むで、片端から牡丹を切つて了つた。この物音に驚いて士が出ると、豈に計らむや、和尚であつたので、詰問すると、和尚は平然たるも

ので『今日こそは積年の悪魔を拂つた、それがために術の生命一つ縋つくらゐは覺悟の上じや』と益々泰然自若、侯もこの和尚の行に感嘆したといふ。博多はその頃相應に開けて居た所で、非常に賑やかでした。ために和尚會下の雲水の中にも、量見を間違へて道樂をするものもあつて、和尚は常にこれを憂ひて居たが、何とかして嚴重に監督して、大過なきやうにしたいと思はれた。ある晩、和尚が塀垣の周圍を點檢に廻られると、門には番人があつて容易に雲水の出入は出來ぬが、塀際に都合よく枝の垂れた一本の松があつて、その枝から塀外へ雲水が傳つて出入する形跡のあるのを知つた。案の定そこには一個の踏臺があつた。和尚考へるに『若い人々だから無理もない話ぢやが、今が大切な時何とか感化してやらう』と、寧ろその心事を憐まれて暫は思案に暮れてゐた。すると塀外に人の足音、話聲がする、それは遊びに出た二人の雲水が戻つてきたのであつた。外に垂れた松の枝に二つの手が懸つたかと思ふと、塀に足がかゝつた。仙崖和尚考へるに、若しこゝで聲を懸ると、彼等は面目無さに逃げるであらう。というて、自分が身を隱せば彼等若き雲水の身のためにならぬ。滅多な眞似はできぬ。稍々考へたが、まゝよと塀下の踏臺を推しやり、和尚自ら踏臺になつて踞むで了つた。和尚の頭の上へ、雲水の足がペタリと載るかのらぬか『オイ何だか氣味の惡いほど温い踏臺ぢや』と云ひながら、雲水は塀内へ飛び下りた途端に、踏臺の仙崖和尚もろともに倒れた。雲水は不審さうに踏臺の傍へ行くと黑い影『誰だい』と訊く、『仙崖ぢや』、まだ雲水には合點がゆかぬ。再びきくと『仙崖ぢや〳〵』、近づいて見れば果して和尚、二雲水は今となつ

て、愧ち入つて逃げ場を失つた。大地に平俯して詫びた。すると和尚は『低聲に低聲に、衲は汝等を憎いと思へば決して踏臺なんぞにやならぬ。凡夫の身の淺ましさで遊蕩心が起るのも無理はない。けれど一刻千金の時を惜まで徒らに五欲六塵の巷に馳走することこそ氣の毒なれ、光陰箭よりも迅やかなり身命は露よりも脆し、なんとかして覺醒させたい。強ち汝等の罪でもない、罪はこの仙崖にあるのぢや、どうか勘辨してくれ』と、却つて和尚は雲水に詫びた。而して、何事にも忍耐し志を正うしてつとめてくれと、道樂僧を拜むだといふことです。仙崖和尚に拜まれた雲水こそ、實に三十棒を與へられたよりも倘ほ辛かつたことであらう。一家庭にあつて主人が雇人女中に對する上にも、この仙崖和尚の無我になつて、他の罪過も『衲が惡いのぢや』を應用したならば、最も仲の惡いと稱せられる嫁姑の間も融和し、圓滿なる家庭が建設されるのであります。凡そ人の到達すべき修養の極致は、この無我にならなくてはならぬ。無我は要するに一念發露の信仰心であります。

以上の五ケ條は佛の說かれた敎でありますが、その土臺は無我といふ信仰がなければなりませぬ。無我の信仰があつて始めて五ケ條が完全に實行し得られるのです。さすればお互は、この五大行をば無我の信條として、日々座右銘として實行したならば、即ち自己にとつては功德の莊嚴となり、子々孫々へは陰德の善根となつて、菩提を圓滿にする所以となるのであります。

先づ隗より始めよ

一

今晩は皆様お出で下さるのに、雨天でありまして、御難儀であつたらうと思ひます。夫れにも拘らず多數御來會被下まして、本會の總裁として私は深く感謝の意を表するものであります。尙ほ今晩は多少時間も移つて居り、私も本日は名古屋に出まして、先刻此方へ驅け付けた次第であります。隨つて、お話申上げる腹案も充分に整理が付いて居らぬ樣な次第であります。極めて簡單に、演題の趣旨に就てお話申上まして、御清聽を仰ぎたいと思ひます。

國民精神作興に關する御大詔は、申上げるまでもなく、教育の勅語・戊申の御詔書と倂せて、實に國民の三大寶典であらうと思ふのであります。中に就て、教育の勅語と戊申の詔書とは實に國民の向ふべき道を、坦々として大道を踏むが如く、穩に御示し下されてある樣に感ぜられます。獨り昨年の十一月御煥發になりました御大詔は、特に時弊を御指摘になり、浮華放縱の弊を生じ輕佻詭激の風をなす、實に國家の爲に憂ふ可き事であるに由つて、飽くまでも此の時弊を矯めて健全なる發達を遂げんければならぬと

云ふ御趣旨、殊更に放縦を指摘して御示し下されたと云ふのは、非常に深き思召が存在するであらうと拜察するのであります。

是は昨晩から今晩にかけて、各講師が諄々と御話になつた如く、實に現代は種々の境の上に於て缺陷を來しまして、國家の前途容易ならぬ時機であらうと察するのであります。此の際に於て、此の詔勅を拜した吾々は、國民一致して健實なる思想を養ひ、剛健なる精神を訓練すると云ふ事に、大々的努力を以て勉めなければならぬであらうと思ふのであります。斯くの如き事は、宗教家のみの任務に非ず、教育家のみの任務に非ず、政治家のみの任務に非ず、官憲のみの任務に非ず、國民全體が相一致して、大詔を深く徹底するに努めなければならぬであらうと思ふ。

既に先般、總理大臣が、宗教家及び教化團體を請待せられまして、國民思想善導に對しての懇篤なる御話があつたのであります。私も佛教各宗派の一人として、お招きに應じてお話を承つた一人であります。然し清浦總理大臣は、獨り宗教家及び教化團にのみ此のお話をなされたのに非ずして、地方長官を始め、司法官にせよ、警察官にせよ、機會ある毎に總ゆる人々に向つて、此の思想問題を提唱せられてある様に、新聞紙にも報道されて居ります。私は好い思召であらうと考へて共鳴したのであります。何故かと言ふと、此の詔書を深く、徹底すると云ふ事を計る問題は、全く政治を超越し、經濟を超越した、絶對性[illegible]のであるので、假令、内閣に如何なる變動があらうとも、經濟上に於て種々の變遷

があらうとも、此の御大詔の御精神に至つては、實に萬代不易の寶典として、吾々は之を各自に努めて行かなければならぬ事であらうと思ふ。

然るに、世の新聞紙等を拜見しますと、清浦首相の宗敎家及び敎化團の請待に就ては、大部分嘲笑を以て迎へてゐる様に見受けられるのは、多少遺憾に感じられたのであります。『清浦總理大臣は思想問題を提唱する資格が無い。現在の宗敎家及び敎化團體の如きが、國民の思想を善導するなど〻云ふ様な事は生意氣である。宜しく善導者を善導しなければならぬ』と云ふ様な批評が、多數の新聞の上に現れて居つた様に見受けられます。吾々宗敎家に取つては好い警告であると思つて、或る意味に於て難有く其の批評を感じたのであります。然し、爾う云ふ批評をなすべき事柄ではあるまいと思ふので、實に宗敎家のみの任務に非ず、敎育家のみの任務に非ず、國民總動員で以て思想の訓練を計り、剛健な精神を養つて行くと云ふのは、其の國民の事業、國民の本分、國民の義務として、爲すべき事であらうと思ふのであります。隨つて、國民の上に一日の長ある者は、後進の士に向つて宜しく善導の手段を施し、善導と言ふと何か生意氣に聽へるか知れませんが、精神上に於ける、努めて有益なるお友達となるべく計つて行く様にして、相互に戒め、相互に敎へ、相互に手を取つて、御詔書の精神の貫徹を計つて行くと云ふ事は、吾々國民として實に最も重大なる務であらうと思ふのであります。

此の意味に於て、今晩お集り下された皆様方の如き、必ず國民思想善導と云ふ點に於ては大なる信念を

懐いて、努めて思想の善導、思想の訓練と云ふ事に御力をお盡し願ひたいと思ふ。或は家庭の主人公、或は家庭の主婦は、御自分の子弟に對してゞも、自分に隷屬してゐるところの雇人に對してゞも、常に此の大詔の精神に基いて思想の訓練を計つて下さつたならば、非常に効果のある事だらうと思ひます。

二

昨年は御承知の如き、思掛ない大震火災が關東に突發して、十數萬の生命を傷け、幾十億の財貨を蕩盡するに至つて、震災のみならず、火災が之に伴つた爲に、有史以來、未曾有と稱する大慘狀を呈したのであります。私などもやはり遭難者の一人である。東京と横濱との中間の鶴見に寺があります。やはり震災は極めて激烈であつた。東京以上であつたのであります。

夫れで東京からお見舞に來て下すつた方は、本山の倒壞を見て非常に驚いた。『よもや是程ではあるまいと思つた』と云つて驚ろかれた。横濱方面から來た方は其の反對で、『豫想したよりは輕くて好かつた』と云つて居りました。東京の方と横濱の方との觀察が夫れだけ違つてゐる樣に思はれます。即ち、東京は震災の程度は餘程輕つた。横濱はずつと激しかつたのである。横濱は九月一日の中に、殆んど横濱全市を燒拂つたのである。東京は二日若くは三日に亘つて、大火災が漸く鎭火を見るに至つたのであります。東京には本所の被服廠の慘事がありましたから、實に言語に絕した悲しい場面が現れて居りますが、若しあれ

が無かつたならば、横濱に比較して、東京の方が餘程災難の程度が輕かつたらうと思ひます。

而して、地震に就て私の感じたのは、如何なる建築物が倒れて居つたかと云ふに、大體、之を三通りに分ける事が出來る。第一は地盤が不堅固である、地形が不完全である、爾う云ふ建築物が倒壞してゐる。次には建築物の中心力がない、即ち柱の樣なものが確かりして居らぬ、中心の勢力が薄弱であると云ふ樣な建築物が無慘な最後を遂げて居る。次には建築物全體の調和の取れない。即ち不調和である。例へば屋根が重過ぎてゐるとか壁の方が不完全であるとか、一方の柱が非常に細過ぎてをつたと言ふ樣な、建築上の全體の權衡と調和を缺いてゐる物が倒れた。洋式の建築でも惡い建築は一と搖りに搖り潰されてゐる。地盤が堅固であつて地形が充分に固められ、建築の中心力が鞏固であつて全體の調和が取れてゐる樣な物は、震災の爲に餘り甚だしい損害は無かつたのであります。

此の點から推測つて見て、吾々の國民精神と云ふものを養ふ上に於ても、之に類して居るであらうと思ふ。お互の精神の地盤、精神の地形は何であるかといふに、信念であらうと思ふのであります。火に入つても燒けず、水に入つても溺れぬと云ふ大なる信念、是が精神の地形となつて、其の上に精神の中心力、即ち大黒柱となつてゐるものは何であるかと言ふに理想である。健實なる理想、高遠なる理想の確立してゐる者は、恒久的の目的が一定してゐるから事に當つて迷はない。若し理想の無い方向の定らぬと云ふ樣な人でありますと、恰も萍の如く常に時代の潮流に動かされ、或ひは外來の思想の爲に動されて、自分一個と

しては勿論、更に國民としての根據地までも倒壊する樣な、無慘な最後を遂げなければならぬ。

夫れから第三の弱點は、精神の不統一、精神の不調和、つまり修養力の足らない、精神内部の調和を失つてゐることである。例へば、吾々が意志と感情との調和が取れないと、充分に事柄を知つて居つても、其の知つてゐる事柄に就て實行する事が出來ない。感情の爲に昧される。

吾人の人格に差等あり。下等な人格は、其の善を善として行ふ能はず、惡を惡として之を去る能はず。善惡の判斷力はありましても、理智は明晰であるけれども、感情の爲に支配されて其の理智の眼が昧む。第二の人は、努めて善を行ひ努めて惡を去る。進んで最高の人格者は惡を去り惡を忘れ、善を行つて善を忘れてゐる。面白い言葉である。つまり道徳的習慣、道徳が一種の習慣を爲して、無意識に惡に遠さかつて、無意識に善を行ふ。惡を去つても惡を去つたと云ふ感じもない、善を行つても善を行つたと云ふ感じもない、心の欲する所に從つて矩を踰えずと云ふのが最高の人格者であります。

惡を惡として去る能はず、善を善として行ふ事の出來ないと云ふのは、吾々の理智と云ふものと、情意の働きと云ふものとが衝突してゐる、矛盾してゐる、統一を缺いてゐるのであります。

今日お互が精神界を見渡しますところ、信念の缺乏、理想の不確立、統一を缺く精神と云ふ樣な事が人格といふ建築物を脆弱にしまして、所謂剛健性を失ひ、精神が非常に薄弱になり、瑣細な事にも動搖し易く、迷ひ易いやうになつてゐる。夫れで、吾々は此の國民精神作興の御大詔を拜するに至りまして、何處

までも己に省て、健實なる信念を養ひ、鞏固なる理想を確立し、精神修養に努めて、其の統一調和を計つて行くと云ふ事を心掛てゐなければならぬと思ふのであります。

三

私は『先づ隗より始めよ』と云ふ題を掲げて置きました。これは易經の中に『恐懼修省、先づ隗より始めよ』と有る言葉である。震災若くは天災、地震の爲に天地が動く、其の際に當つて君子は恐懼修省すと云ふ事が孔子の教であります。苟も君子たる人は、或ひは之を天譴と見るも可し、或ひは之を天罰と見るも可し、而して、益々天變地異に對して、戰々兢々として恐れを抱いて、吾々は自己に省み、自己の缺點を能く認めて、爾うして將來健實なる發達を計つて行くと云ふことになつて行けば、今日の災難は將來の幸福の門戸を開く基となる。爾う云ふ意味に於て精しいことを説かれてあります。

易經に『震亨、震來虩々笑言啞啞』とあります。虩々は非常に恐れる、天地が非常に震動する際に非常に驚くことで、笑言啞々は其の驚いた後に、自ら修省して遂に其の驚きが笑ひとなることです、何處までも恐懼修省の力を以て行くと、笑言啞々で笑つて災難の物語をして、さうして愉快に將來の幸福の門戸に進んで行く事になるであらうと云ふ樣に、私は觀たのであります。

修省は即ち修養して自から省み、而して、省て更に修養の力を進めることである。今日の此の時代は種々

の缺陥がある、社會の上に於ては種々の弱點がある。此の缺點や弱點に對しても、お互は先づ自から己を省みて、自分の足元を振り返つて見たいと思ふ。他に向つて種々の攻撃をすることは、今日は却々熾んである。甲、乙、丙、丁、互に攻撃を仕合つてゐる形であります。他の缺點を擧げて攻撃する事は好いけれども、先づ夫れよりも先に、自分が退いて自分の足元を一つ考へて行きたいと思ふ。修省と云ふ事は非常に大切であらうと思ひます。

今日の世の中を見ると、先づ著しく世上に現はれた社會相は、第一には政局の紛糾でありませう。政治問題に就て種々の紛糾錯雜は、實に吾々門外漢でありましても國家の現在及び將來に對して、憂慮に堪へぬ様な感じがする。夫れから國民生活の問題に就ても幾多の非難を感ぜられる。社會問題、勞働問題の如き、農村問題の如き、各種の問題に向つて未だ完全なる根本的解決を見ると云ふに至らぬ。國民としては如何なる人でも、是等の點に於て大いに注意を拂つて行かなければならぬ事であらうと思ふ。然しながら、我々は恐懼修省と云ふ事に於て己を修め、而して『先づ隗より始めよ』と云ふ事に致したいと思ふ。

昔、支那の春秋戰國の時代に、燕の昭王が臣下に名士を集めたいと云ふ際に、自分の臣下の中の郭隗と云ふ人があり、眞に人物を求められるなら『先づ隗より始めよ』と自ら推薦したので、昭王も尤であると首肯いて、郭隗を第一に取り立て、夫れに役を授け位を進め、待遇を好くして天下の名士を集めたと云ふ話がある。夫れが即ち『隗より始めよ』といふ故事であります。其の如く近い所から一つ改善の策を

講じて、先づ自分の足元から改善の策を講じて行く事にしなければいかぬと思ひます。
夫れには第一に人格の向上を圖る、國民としての人格の向上を計る。國民的人格の向上、是れが最も國家の信用を高め品位を高める所以であらうと思ふ。國民としての人格が段々劣等になり、低劣になると云ふ様な事であつては、國家の信用を博する事は出來ず、國家の品位を高める事は出來ない。銘々各個の人格の向上を計つて行くに、萬事、倫理的道德的に處理して行く覺悟を持たなければならぬ。
孔子の言葉に、『君子も亦利害を説く、小人も亦義理を説く』と云ふ事があります。利害問題と云ふ事は君子も離れる事は出來ない。經濟問題は如何なる人でも離れる事は出來ない。殊に今日に至つては、吾々宗教家の如き者でも、常に利害と云ふ事に心を置かなければならぬ。利害得失を度外してやる事を許さない。君子も利害を説くけれども、其の利害は義理を標準としてゐる。義の存する所は、よしんば害があると雖も夫れに從ふ、義の存せざる所は、利ありと雖も夫れを顧みない。小人も亦義理を説く、小人と言はれる様な人でもやはり理窟は上手だ。理窟は上手だけれども、理窟の元は利害である。君子とは本末差異がある。君子は義理を元として利害を談ずるのである。小人は利害を元としないで義理を行ふのである。今日の世の中は、利害の方が元で義理がお供と云ふ様な感じがする。先づ自分が利害打算的に目的を立てて、此の目的を貫徹するには何う云ふ理窟が好いであらうと、理窟は何時でもお供になる。
淨土眞宗の或る人のお話でありますが、或る信者が上人に向つて、「私も貴下の御教化に會つて此の頃

は常念佛を致します。御飯を頂くにも念佛、水を飲むにも念佛、算盤を彈くにも念佛を唱へて居ります。これなら極樂往生は疑ひないでありませう』と聞きました。處が上人は『成程、お前さんの信仰は進んで結構だが、もう一息だ』といはれた。褒られると思つた處が、まだ褒られない。もう一息だと言はれた。まだ卒業が出來ない。其處で『何故でありますか、私は如何なる場合でも念佛を唱へてゐるけれども、もう一息と云ふならば、何うすれば好いのでありますか』、『お前のは、自分が御飯を喰べ、自分が算盤を彈く、其の後から阿彌陀樣がお供をするといふ風になつてゐる、夫れではいけない。お念佛を唱へながら御飯を喰べる、お念佛を唱へながら算盤を彈ぢくに至らなければ、信仰生活とは言へない』、と言はれたと云ふ事であります。

四

次には、吾々個人としても、家庭としても、禮儀のある人となる、規律の正しい人となつて行きたいと思ふ。國民としての禮儀、個人としての規律、此の規律が甚だ亂れて、禮儀と云ふものゝ確立がなくては、決して人格の向上は出來ない。遺憾ながら、日本國民は甚だ禮儀の乏しい國民であつて、不規律な國民であると云ふ事を、具眼の士は申して居ります。だから、日本では公園などへ行つても『樹木折り取る可らず』などゝ書いてある立札をよく見ます。西洋では公德心が發達してゐるから、爾う云う必要はない

と云ふ話を聴いて居ります。

先年、亞米利加へ行つた時に、ナイヤガラの公園を見ました。さうすると、やはり公園に『樹木折り取る可らず』と書いてある。私は讀めぬけれども通辯の人が敎へてくれた、『さうするとやはり此所でも必要があると見えるな』と言ふと、其の人が、西洋人が腰掛てゐる處へ行つて何だか話をして居つたが、私の處へ來て、『彼は馬鹿々々しい事を言つて居ります』、『何だ』と言ふと、『亞米利加人は負惜みを言ふ。此の邊の公園で樹木折り取る可らずと注意書をするのは、亞米利加人の外に、東洋人等も見えますから、夫れで樹木折り取る可らずと云ふ立札をしてあると言つて居ります。人を馬鹿にしてゐる』と云ふ事であつた。

然しとにかく、社會的禮儀と云ふものに就ては、日本人は未だ充分に訓練が屆いて居らぬ、習慣が着いてゐない、慥かに公德と云ふ考は乏しい。布哇も見ましたが、米國でも布哇でも好い習慣を守つてゐるのは、何う云ふ方法で敎育したかと言ふと、幼稚園時代から敎へて、日曜學校と云ふ樣な機關に於て少年等にも公德の事を敎へる。色々の奬勵法を設けて敎へて行く。三ツ子の魂百までで、夫れが習慣となつて、大人になつても公德心が盛んである。

佛蘭西の元帥が、一昨年日本に參りました時に、國賓の禮を以て待遇せられたが、其の方が佛蘭西へ歸つてから、日本を評した其の事が新聞に出て居ります。『日本人は、文明の域に達するにはまだ距離がある

様に思ふ。何故かと言ふと、東京の大都會を通つて見ても、道路に向つて平氣で唾を吐いてゐる。道路に唾を吐いてゐる様な國民は本當の文明國民と言はれない』と云ふ事が書いてありまして、淺はかな批評ではありますけれども、一人か二人の唾を吐いた者があつたのでせう。夫れを見ての批評でありませうが、其の一人や二人が唾を吐いても、日本は文明國と云ふ事は出來ないと、云ふやうな事を言はれるのであります。

夫れで銘々の家庭に於て、個人としても、規律を正しくし禮儀を守る様にしなければならぬ。日本の家庭では、家長たる御主人が家庭の規律の標本になつてゐる。御主人が朝寢であると朝寢な家庭が出來てしまふ。御主人が夜深しをすると夜深しの家庭が出來てしまふ。御主人が料理好みをすると贅澤な家庭が現はれて來る。御主人の平常の嗜好や習慣や特性が家庭の標本になつて居りますから、隨分、御主人は確かりした事を行はなければなりません。各家庭に於ては家風と云ふものがありますが、家庭の上などに於ても、何となく尊嚴にして侵す可らざる、一種の規律を保つて行く様になりたいと思ひます。

個人としては尙更の事、綱紀肅正問題が政府の政綱の一つになつてゐるのみならず、各政黨政派に於ても、綱紀肅正と云ふ事を絶叫しないお方はない。然し、綱紀肅正と云ふ事を計つて行かうとするには、先づ個人々々が本當に禮儀を守り、規律正しくしなくてはならぬ、彼の帝國議會等に於ける、議員諸君の一部のお方の態度の如きは、實に恥入る様に感ぜられるのであります。匹夫野人と雖も敢へてしない様な言

葉使ひや態度をやる、鐵拳を振り廻す、押合ひをする、叩合ひをする、之で議會氣分になつたなど〻新聞に出て居る。實に恥かしく感ずるのであります。

元の時代に胡石塘と云ふ相當の學者がある。自分では高く止つて、治國平天下の材を以て任じてゐる。吾は大宰相の器であると言つて居る。其の風聞が餘り高いので、元の太宗がお呼出しになつた。時に胡石塘は喜で、自分は一世一代の事で、今日の拜謁の場所に於て、自分の申上げる事が陛下の御採用になれば、一躍して大宰相の任に當る晴れの舞臺であると云ふので、充分支度をして太宗の前に進んだのであります。餘り心配をし過ぎて、冠を斜に被つた。つまり此方へ持つて來たり、彼方へやつてみたりして、餘り心配し過ぎたから、遂には夫が天子の前へ出るまでに斜になつた。自分はそれを知らない。太宗は夫れを御覽になつて、『卿は何の學を修むるか』とお問になつた。胡石塘は得意然として『治國平天下の學を修めました』と答へた。すると太宗はお笑ひになつて『自家の冠すら正す事能はず、況んや天下國家をや』と言はれた。自分の冠でさへ滿足に被れない奴が何うして、天下を治める事が出來るかと云ふのであります。吾々は社會を改善して行かうと云ふならば、言語動作、總てに於て、禮儀の正しい規律のある國民として行きたいと思ふ。

五

次には品性の向上であります。吾々には高尚なる品性、本能的の慾情と云ふものを飛び越えた一つの品性がなければならぬ。戀愛とか性慾とか云ふ様な事を先に立てゝ、さうして自分の自然性の滿足を圖つて夫れに自分が誇つてゐると云ふ様な考へでは、到底、品性を正しくすると云ふ事は出來ない。品性を正しくするには忍耐が必要である。お腹が空いてもひもじうないと云ふ、其の性を忍ぶと云ふ力が無ければ、品性の向上を圖ると云ふ事は出來ない。品性の高い者は雅量に富んでゐます。日本人は雅量に乏しいと云ふ評判を受けてゐる。癇癪が強い、我慢が強い等と云はれてゐる。國民は、ドツシリと落着いた雅量を有してゐなければならぬと思ふ。

亞米利加のグランド將軍は煙草の好きな人で、米國大統領でありました頃、汽車に乘ると煙草が吸へないから、汽車の一室を借切つて、さうして旅行をした。自分の借切つた一室なら自由行動が執れる、自分に隨從してゐる者と、自分とが借切つた室內で煙草を吸つてゐる。さうすると、其の借切車を知らないで、三人許りの普通の女が這入つて來て、グランド將軍の前に席を構へた。さうして邊り憚らず喋り出した。喋り出して居つて、ひよつと、グランド將軍を見ると、煙草を吸つてゐる。そこで其の婦人は、『喫煙だけは御遠慮して貰ひたい』と御注意を與へた。

尤も亞米利加の汽車では喫煙は出來ない。況んや婦人が居れば尚ほ出來ない。婦人が乘つて居ると、汽車ばかりではない。婦人の前には、婦人の承諾を得なければ喫煙が出來ない事になつてゐる相です。夫れ

のみならず、婦人が一人でも居ると、男子は脫帽をする。さうして婦人は知らぬ顏をしてゐる。何うも亞米利加の婦人方は非常に權威がある。私等も彼の地に參つたとき脫帽しなければ惡いかと思つて脫帽したが、私だけは脫帽せぬ方が好いと注意されて、大笑をした事があります。

さうして、一人の婦人が、グランド將軍とは知らないから、喫煙だけは御遠慮を願ひたいと言つて、グランド將軍を、『婦人の前で無禮であらう』と云ふ風に詰つたのであります。グランド將軍は知らない振をして默つて、吸ひかけた煙草を、窓を開いて、外にポンと投出してしまつた。少しも、婦人に向つて抵抗もしなければ、嫌な顏もしない。隨員は苦々しい顏をして見て居りました。そして次の驛に參りますと車掌が這入つて來て、見れば貸切りの室の中に見知らぬ婦人が乘つて居る。そこで車掌が婦人に向つて、『貴女方はグランド將軍を知つてお這入りになつたのですか』と尋ねると、婦人は『知りません』と答へた。『これは貸切りの箱であつて、此所に御座るのはグランド大統領であります』。婦人達は喫驚仰天して、頭を下げて逃げる樣にして室を出てしまつた。其の後に至つても、グランド將軍は婦人の批評等はしなかつた。生意氣な婦人であるとか、亂暴な婦人であるとか云ふ事を、一口も言はなかつた。殆んど忘れたもの丶樣であります。隨員も其の雅量には恐れ入つたと云ふ事であります。日本人も其の樣な雅量を持ちたい。

夫れから次には趣味の向上、人は趣味に生きると云ふ位でありまして、人には必ず面白味と云ふものが

なければならぬ。之が爲に娯樂機關と云ふものが必要なのであります。然し、なるべく面白味と云ふものには、高尚なるものを選んで、努めて高尚なる趣味を養つて行くと云ふ事は、國民としての大切な事であります。

夫れから敬愛の徳であります。云ふまでもなく、ものを尊敬し、ものを愛することで、所謂相愛共敬であります。世の中は相互に愛し合つて、相互ひに尊敬し合つてこそ、社會は圓滿に治まるのである。先刻、高島先生が、鮮人に對する非常に興味のあるお話がありましたが、本當に眞の眞心を以て愛する上に於ては、實に僅かの愛を以て多くの人を動かすと云ふ程の力がある。また、愛するには必ず敬意を生じなければならぬ。尊敬と云ふことが伴つて行かなければ眞の愛情を表はす事は出來ない。尊敬の念の無い愛情と云ふものは、其の愛情が汚れ易い。劣情に陥り易い。また、愛情の無い尊敬は非常に窮屈になる。人間味と云ふものが無くなる。愛と敬と云ふものは、交互錯綜して始めて本當の人間の美はしい精神を發露する事が出來るのであります。

斯くの如くして、銘々各個に人格の向上を計り、明治天皇の教育の御勅語に『朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ』と仰せられて、我が大君と吾々臣民との間には、犯すべからざる階段があつて、君臣の義と云ふものは實に一毫末と雖も、混亂する事を許さぬけれども、精神、道徳と云ふ方面から見ると、畏多くも天皇陛下の御修めあそばす御精神と、吾々の修める道徳的精神とは咸な一にし

て成な其の徳を一にすると云ふ、其の點に於て實に平等であります。畏多くも天皇陛下の大御心と、吾々臣民の誠心と、合せ鏡の如く合體して、君臣一體となつて其の徳を修めて行く事が出來ると云ふのが、吾々の精神道徳の力であります。

六

精神の威力と云ふものは實に偉い。地震に就て私が聽いた話でありますが、私の古い友人に、福地滋と云ふ醫學博士で婦人科の先生がある。東京の芝區田村町に福地病院と云ふのを建てゝ居りまして、大分技術も好いので評判が高い。其の先生が、地震後、私の所へ參つての話であります。ちやうど八月に房州へ御夫人と子供衆を避暑に遣つた。自分は土曜日から日曜日に掛けて房州に行く事に決めて居りました。九月一日は土曜日ですから、其の土曜日の朝、大手術を行つて、手術が濟んでから午前十時に病院を出て、急いで兩國へ參りまして、兩國から汽車に乘りました。汽車に乘つて約二十分餘りも乘つたと思ふと、或る鐵橋に掛つた時に大地震に遭ひました。驛員が奔走してゐると思ふと、汽車の進行が止りました。後へ戻る事も不可能であります。東京も大騷動の樣であると云ふ事で、福地先生驚いて汽車から飛び降りてレールを傳つて夢中になつて東京へ歸つて來ました。約三時間餘りを經て、自分の宅へ漸やく驅け付けた。能く三時間位で驅け付けたと思ひました。未だ火災等は甚だしく擴らない時でありますか

ら、本所も無事通過して、芝の田村町に歸つた。

病院の外の通りは廣いから、外に天幕を張て患者を避難させてあつた。其の樣子を見て『ア、よかつた、病院は幸ひに、多少は破損を來したが、患者は一人殘らず外へ救ひ出したと言ふ事で』少しは安心も致しますと火事が起つた。『此の火事は何うだらう』と心配してゐる。『此の火事は大抵此處までは來ない、此所は大丈夫でせう、其の內に消されませう』と言ふが、とにかく萬一の事を慮ばかつて、避難所を選擇しなければならぬので、取敢ず芝中學を萬一の場合に避難所として『此所へ來るから賴む』と言つて、其の承諾を得て居りますと、其の夕刻に至つて火が段々接近して參りました。火の勢も非常に強く、此の鹽梅では危ふいと、看護人たちが共に努力して、病人を芝中學に運びました。道程は七、八町もあります。途中は絡繹として、蟻の這ひ出づる隙もない場合に、幸に皆な病人だと言つて避けてくれて、芝中學に避難した。中學の校庭で、其の晩は露天して一夜を明した。其の中に又あの邊まで火が來ました。また危ぶないと云ふので、更に第二の避難所へ避難した。

處が、九月一日に腹を立割つて大手術を行つた患者が、地震の爲に非常に驚き、その上に避難をさせ、また、七八町も隔たつた芝中學に移し、更にまた避難をしたから、何う云ふ風に變化するかと心配致しましたが、何等の變調も呈さない。白金町の方に福地氏所有の舊宅がありますが、幸に其所だけは無事であらうから、其處へ避難をした。患者等の收容して、取敢ず大急ぎで假普請等を始めたのであります。處

が、精神力の偉大なる事を感じたのは、夫れ程の災害に會つて、大手術を行つた程の患者、其の他でも、病院に這入る位の人ですから、相當に重い人がありましたが、其の病人が一人も障りがない。のみならず、大手術の後には三週間の間は外に出さぬと云ふのが病院の規則であります。之は道理上治療の上に於て三週間は動かせない。三週間の後に始めて家へ歸る事を許す。處が、大手術を行つた人は十九日目に全快して家へ歸つた。是は神佛の加護と言はれて居るが、何とも學術の上に於ては判斷のつかない成績であります。要するに精神力と言はなければならぬ。精神の力の偉大なる事を私は感じたのですと言つて、福地先生が私に話しました。

吾々お互ひに斯くの如き精神を持つて居る。此の精神を充分に訓練し、此の精神を充分に養ひ、さうして銘々各個に人格の向上を計り、夫れと同時に、吾々は自分の爲すべき本務を遂行する。勤儉力行は言ふまでもなく、其の業を樂しみ、而して忍耐力を養ひ、また外部に於ては、人との協調を計り和合で行かなければならぬ。和合の德を有つてゐなければ、家庭も、社會も、雜然として收拾すべからざるものになります。銘々各個に和合主義、協調主義を執つて行きたい。各階級を通じて、常に和合を目的となし協調を本分となして各々其の業を樂しみ、而して勤儉力行、互に敬愛の德を發揮して行つたならば、今日の社會と言ふものは、總ての問題が自から解決が着くであらうと思ふのであります。

夫れで私は、「恐懼修省、先づ隗より始めよ」で此の大震災に際しても、大いに吾々は戰々兢々として

恐を爲して修省の力を起し、又お互ひに精神の上に於ても、常に此の震災の如く、信念の立場が不健全であり、吾々の理想の力が不健全であり、精神の統一力が不充分であると云ふ事を感じたならば、『先づ隗より始めよ』で、銘々自身が精神の缺陷を補うて、さうして、眞に剛健なる精神を養うて行つたならば、一人の剛健なる精神が其の人の人格を進め、一切の幸福を齎らすのみならず、家庭に於ては家庭の寶、社會に於ては社會の光明となつて社會を照すのであります。私は、唯今は國民反省の時代である。反省を最も必要とする時代であらうと思ふ。政治家にせよ、實業家にせよ、宗教家にせよ、教育家にせよ、不平を徒らに並べてゐる時代ではない。退いて自から省み、宗教家としての本分を充分に全うしてゐるか何うか、教育家としての教育上に於ける缺陷と云ふものを認めてゐるか何うか、先づ他を罵るよりも、自己を罵つて、恐懼修省して、先づ隗より始め、而して、其の德を新にして行つたなれば、必ずや眞に御大詔の目的を達しまする事が出來るかと思ひます。修養會の精神も夫れにあると思ひます。

斯く雨天にも拘らず皆樣がお集り下さいまして、講演をお聽き下さいますると云ふ事は、修養會に多大の御同情がある事と考へます。皆樣と共に國民精神の剛健を圖りたい、皆樣と共同一致して國民總動員の下に御大詔の御聖旨を奉戴して、さうして之を徹底せしめたいと考へます。時間も移りましたから是で止めて置きます。

向上の一路

一

私は初めて皆様に御目にかゝるのであります。今朝總持寺を出かけまする際、今夕こちらへ伺ふと云ふことを役寮の者に話しますると、役寮の者の申しますには、三越さんと總持寺とは御縁が甚だ深い。嘗て此の御店の御建築の際、恰も總持寺に於ては梵鐘建立の資を集める事業がありました。大釣鐘を造るため東京市内を托鉢致した。其の際、第一番に當御店の御供養を頂き、晝飯の饗應にあづかり、そして地鎭祭を勤めたのでありました。其の後にも、總持寺として種々な品物を御注文申上げ、いつも御厄介になつて居る、大層に御縁の深い御店であると云ふ話を聞いて參つて、非常に嬉しい感じが致しました。殊に私は不粹の人間で、在京中と雖も餘り外に出ない。こちらの御店へも一度も伺つたことがない。是非一度御伺ひしたいと考へて居りましたが、幸ひ今夕御招きを頂いて、一場の御話をすると云ふ機會を得たのは、私として光榮の至りに思ふのであります。殊に、世界的に名譽あり、實力の備はつて居る御店に於て、晝となく夜となく活動なされる皆様に對して御話をすることを猶更ら有難く感じて

居る。初めて伺つた事であるから、何う云ふ御話をしてよいか考へがつかぬが『向上の一路』と云ふ題で御話を申上げませう。

向上の一路とは向上發展の途である。今日は個人としても、社會としても、國家としても、また實業其他凡ての方面に於ても、向上發展をなすべき機運に向つて居る。誠に向上に努むべき時代でありますが、殊に當商店の如き、日本全國は申すに及ばず、世界を通じて名譽を擔うて居る御店である、同じ品物でもこちらの商品に信用を置いて居るといふのは、非常に心嬉しいことで、三歳の童子と雖も、今日其の名を知らぬ者全國に一人もないと云ふ、さう云ふ此の御店に勤めて居られる方々は、同じ從業員と云うても、非常に名譽の事と思はれます。從つて其の責任の點に於ても最も重大でなければならないと思はれる。當商店の發展、當商店の凡ての經營は、或る意味に於て日本の國家を代表して行く程の力があると思ふ。從つて其の店に働く方々は、常に國家と云ふ事を腦裡に入れ、國民全體の精神を精神として當商店に於て御勤めになるならば、其の勤めはとりも直さず國家的のものであると云へまする。

今日は、申すまでもなく、我が日本の世界に於ける位置は、或點に於ては非常に名譽ある地位にあり、また或點に於ては誠に困難なる局に當つて居るのであります。現在の情勢は、政治上に於ても、行政、或は財政の整理が叫ばれ、綱紀の肅正が唱へられて居る。而して此の事は、國家の綱紀を肅正せなければならぬほど不安の狀態に立つて居ると見なければならず、行政、財政の點に於ても、まだ不整理の狀態に

あるがため、これが整理を行はなければならぬのであると思はれます。國民の生活問題の點に至つては更らに焦眉の急として考究すべき問題となつて居ります。此の際に當つて、國民として、これに對して大なる覺悟を以て進まなければなりませぬ。現に重大なる責任を帶び、而かも將來に充分の希望に充ちて居る皆樣は、進んでは發展し、退いては己れを守る、進退宜しきに協つて行けば、皆樣は何れも其の天職を完うすることが出來ると思ひます。

私は電車に乘つて街頭を通る際、能く考へることがあるが、電車が交通整理で揭げられた信號によつて、或は止まり或は進む、卽ち進む力があり、止まる力があつて、始めて交通の整理ができる。今日の我我の一代に進み行く徑路も其の通りで、我々は一面大いに進むところあると同時に、また一面には大に守るところがなければならない。進むことを知つて守ることを知らなければ、遂には衝突は免がれないのであります。守るばかりで進むことがなければ進步はない、必ず一面に於て進む力、一方に於て守る力がなければならないのであります。

有名なるアメリカのワナメーカー氏は「精神の安全地帶」と云ふことを云うたが、今日の世の中に於て、人間の一代は、例へば海の中に船を浮べて進むと同樣で、狂瀾怒濤、暴風烈風のさかまくあり、殊に暗礁と云ふものが至る所に橫はつて居る。而かもそれを切拔けることは容易の業でない。それを安全に進んで行くところの、人間の安全地帶と云ふものがそこになければならない。人間がいかなる逆境困難に

も打勝つ安全地帯は何んぞやと云ふに、ワナメーカー氏はこれに對して『特色づけろ』と云ふ敎訓を與へて居ります。人間を特色づけると云ふのは眞の安全地帯であつて、自分が何か他人に勝れた能力を持つと云ふことである。尤も、不良性を帶びたことゝか、法律・道德に外れた事、自然の道理に背いた事ではいけない。公明正大の途に於て、何かの特色をつけなければならない、何か一種の特色を持つと云ふことは、人間ばかりでなく、いかなる社會、いかなる國家に於ても、技能に堪能であり、人に勝れて勉强であり、誠實誠意に學問をして知能を進めて居る人は、必ず何か其の人に特色がつくものであつて、これが自分の安全地帯である。

越後の名士河合繼之助は維新の混亂の際の人であるが、此の人の言葉に、『無ければならぬ人となるか、有つてはならぬ人となれ』と云ふのがある。つまりあの人が居らんでは困ると云ふ人になれ、と云ふのであつて、有つてはならんといふのは惡い者になれと云ふのだから、今日、平和の天地に於ては、あつてはならん人となつては仕方がない。

世界の各國でも、何れも其の國の特色がある。獨逸は知識を重んじ、佛蘭西は名譽を尊重し、英國は人格を貴び、アメリカは實用を重んずる、各々其の特色が違ふ。一人の人物を採用する場合に於ても、獨逸はいかなる知識を有するかを第一に問ひ、佛はいかなる經歷、いかなる名譽を有するかと聞き、英は人格品性がどうかと聞く、卽ち知識よりも品性である。然るに、アメリカは先づ何ができるかと手腕を第一に

尋ねる。即ちアメリカではいかなる事でも、これを實際化して現實に實行すると云ふのが其の氣風で誠に油断のならない國であります。

これと同じやうに我々人間も、何か一つの特色を持たねばならぬのである。而して、日本の國民の向上の一路に就いては、一昨年の十一月畏くも御大詔を賜はり、國民に剛健質實の氣風を養へと仰せられた。少くとも日本國民は剛健質實の上に向上の一路を打開して行きたいのであります。健全にして強いと云ふ言葉は、昔から偉い人を大丈夫と云ひ、しつかりした品物を大丈夫と云ふが、さう云ふやうに、しつかりしたことを云ふので、いかに高い考へを以ても、いはゆる精神を鍛へると云ふ事がなく、即ち剛健性がなければそれを完うすることは出來ない。剛健は即ち一切活動の根源となり、運命の基礎となるものである。

然らばいかにして剛健性を養成すべきか、これに就いて支那の孔子が『我れ未だ剛者を見ず』と云はれたことがある。その時、或人が孔子に對し『申棖は如何』と問うた。これは孔子の弟子の申棖を指したので、此の人はいかなる困難にも打勝つ人であつたから、申棖は如何、剛者ではないかと問うた。然るに孔子は『棖や欲あり、いづくんぞ剛なるを得ん』と答へた。即ち彼は欲が深く、利己心が強い人物であるから剛者とは云へない。換言すれば、道徳性の進んだ人でなければ剛者とは云はれぬと云ふのである。實にこれは名言であると思ふ。御詔書を拜見すると、始から終まで、天皇の御教訓は精神道徳を中心と

されてある。

理想的に剛健なる人になるのには如何にすべきであるか、これにはまづ七通りの力を養ひたいと思ふのであります。私は個人としても、また團體としても、いかなる點に於ても、此の七つの力を備へなければならぬと思ふのであります。幸ひ皆樣は有爲の方々で、終身、此の商店に勤められる人もあらうし、また、他日、獨立して業務を經營せられる方もあらうが、どうか此の七つの力を養つて、努めて剛健の人となつて頂きたい。

二

先づ第一には肉體の力である。卽ち體力の健全を計ることとである。私もかく老體で、殊に近年は種々病を覺えるやうになつた。これは今までの活動の過ぎた爲めか、また、體力の不充分の爲めか、とかく思ふ通り活動が出來ず、常に自ら耻入つて居る次第であります。皆樣も能く體力に注意して、いかなる困難にも堪へ得るやう、體力の剛健を期して頂きたい。

體力の剛健を期する上に於て、そこに止まる力と、進む力との二つがある。卽ち退いては病を受けない、疾病に犯されない、惡疫を防禦する、此の種の注意は、體力を養ふ上に於て消極的の方面であつて、更らに積極的には、體力を旺盛にし、健全に身體の機能を發達させる、而して、それと同時に精神的の養

生がまた甚だ大切であります。

私の身體は、昨年一昨年來、屢々病に惱まされたが、それでも常に諸方を巡回し、今度こそ死んで歸るかと思ふが、どうにかかうにか生きて歸つて來る、死にもしない、不思議の身體である。『これには何か心の養生法があるか』と、能く醫者に聞かれるが、自分でも聊か精神的に養生の考へがある。自分どもは食物其他の養生法は出來ない、さう云ふものは自分の氣に入つたやうには行かない。鶴見の本山に行つても、白い御飯が一番の御馳走なのである。此の病態を維持するのは、心の養生の力である。心の養生は何ぞと云へば、まづ五箇條を以てこれを鍛へるのである。これは未成品ではあるが、大體其の御話をすると、

第一　腹を立てぬこと
第二　愚痴を起さぬこと
第三　能く諦めること
第四　愉快なる心を持つこと
第五　いかなる場合にも悲觀せぬこと

第一、第二は申すまでもない、第三の能く諦めることゝ云ふのは、一昨年の大震災の時のやうに、非常な悲慘な運命に陷つた方も玆に御在りであらうが、これを天なり命なりと諦らめて、更らに第二の運命の

開拓を計ることである。いつまでも一つ事をくやしがつて居ては、結局愚痴に陷る。併し、諦らめる事は必要であるが、これを惡く諦める、價値のない諦めをするのはいけない。佛教では因緣〻〻〻〻と云ふ諦め方がある。病氣、それは因緣だ、損をした、それは因緣だ、かう云ふやうに、何もかも因緣〻〻〻〻と云ふのは、所謂因緣外道である。一面にはよく諦めると同時に、深く禍の由つて來る原因を研究して、將來いかにして運命を開拓すべきかと、理想に向つて進むのが眞の諦め方である。唯だ運命だ因緣だと云ふのは、田舍の御婆さんの諦め方である。何時までもくよ〱しては、自らを改善して活動進歩せしめることが出來ないのであります。

第四の精神を愉快にする、愉快なる心を持つと云ふことは、殊に商業に從事する方〻に於ては、愉快なる心を持つことが商賣上にも影響すること甚大で、いかやうに苦しい時、どんなに辛い時でも、容貌態度にこれを現はさない、これが愛敬の本、體を養ふ土臺となつて行く。而して、愉快の人が最後の勝ちを制するのであります。

私は常に思ふ、二十年許り以前、芝に居りました時、二人の車夫が居た。一人は金公、一人は庄公と云つたが、金公は常に機嫌のよい男で、いつ見ても嫌やな挨拶をしたことがない。夏の頃、非常な暑い日に『今日は暑いな』と云ふと『ナニ夏らしくてよい』と答へる。雨が降つても、風が吹いても、其の通りいつでも結構だと云ふ。乘つて居る人も誠に愉快に感ぜられる。今日では其の人は立派な人間になつて居

るが、それに引換へ、庄公は全く反對で、『暑い』と云へば『骨がとけさうです』と云ひ、『さむい』と云へば『命が縮まる』と云ひ、雨が降れば『やりきれない』と泣言を云ふ。

恐らく諸君の内には、そんな『やり切れません』などと云ふ人は一人もありますまいが、極暑極寒の際と雖も愉快の氣象で事に當り、困難に堪へて仕事をすると云ふ心を養成したい。さうすると『くたびれ』を感ずる度合が少なく、くたびれても滿足を得られる。

第五は、いかなる場合にも悲觀せぬ事。これは青年の人々に、特に此の觀念を養つて頂きたいと思ふ。人間は『七轉び八起き』と云ふ程で、非常に失敗する事がある。謂はれなくして憎みを受ける事もある。さう云ふ場合にも決して悲觀をしない。誠意を以て働いてお叱りを受ける事がある。近頃は神經過敏な悲觀論者が甚だ殖えて來た。而して悲觀の結果、神經衰弱者が増し、年々歳々自殺者が多くなつたと云ふことは、國家の爲め甚だ遺憾の事と思ふ。人はいかなる場合にも決して悲觀してはならない。

永井柳太郎氏の御話であつたが、『かの震災の當時、御自身の家は非常な打撃はなかつたが、一週間程は靴を穿いた儘で、あちらこちらの友人故舊の爲めに奔走して、種々困難を味つた。それが今日になつては甚だ幸福であつたと思ふ』と云はれた。まづ第一に、震災の御蔭げで一週間も靴をぬがずに活動し、三四日も野宿をしてそれに堪へた。つまりかう云ふ困難に堪へ得られると云ふ試驗に卒業した譯である。今一つは、南京米の握飯を有難く頂いた經驗である。若し此の體驗さへ此の後失はなければ、人間一代、決

して困ると云ふことはない。三四日野宿しても自分の身が無事であつたことは有難い、野宿をすると云ふ忍耐精力を繼續すれば、一代の間にどれ程の幸福を生み出すか分らない。

いかなる場合も悲觀してはならない。禍を轉じて福となす、常に此の考へでなければならない。釋尊は『病は衆生の良藥』なりと説かれた。即ち病氣は藥だと云ふのである。事業の困難は即ち病氣で、此の病氣が自分の爲めには大なる藥となる。これが自分の一路を發見する大良藥となるのであります。

以上斯の如き養生法によつて、精神的に身體の健康を計つて行きたいと思ふのであります。

三

人間の向上に要する七力の中の第二の力は富の力である。皆様は富と云ふ事に就いて、絶えず研究され、努力され、活動されて居るが、これも止まる方面と進む方面とに分けて云へば、止まる方は節約である。これが富をつくる基礎であります。そして更らに進んで、勉め勵みて努力をする。

淺野總一郎翁は、現に七十八歳の老齡で盛んに活動をせられて居るが、今年の春も、一月元旦の晩から九州方面に旅行せられ、去る九日に歸られたと云ふが、其の九日の間に一日も宿屋と云ふものには泊まらない。いつでも汽車の中が宿屋で、謂はゞ九日の間に十八日の努力をしたのに當るのである『稼ぐに追付く貧乏なし』と云ふのを實地に示されたものである。彼の人の十八番の歌に『六十七十鼻たれ小僧人の

盛りは八九十』と云ふのがあるが、其の位の勇氣と努力を以て進めば、或る程度まで自ら目的を達成する
ことが出來やう。古歌に『爲せばなる爲さねば成らぬなに事も成らぬは己が爲さぬなりけり』と云ふのが
あるが、『成らぬ』は己れが努力の足りないからで、かくては成らずに終つて了ふ。併し、勉強して富を作
るにも、それの内に自ら守るところがなければならない。

アメリカのギブソン氏、これは一代の間に成功して、森林王と云はれる程の山の持主となつた人である
が、『いかにして富を得べきか』と云ふ問に對して、ギブソンは三ケ條の心得を以てこれに答へたのであ
ります。

其の第一には酒を飲まぬこと、此れは青年の方々には失禮であるが、是非御願したい。男子が世に立つ
て失敗するには必ず酒色が付いて居る。ギブソンの第一條は、酒を飲むな、品行を亂すな、盛んに節約
をせよと云ふにある。

第二には骨身を惜まず働くこと、假令、他人の仕事でも最善の力を盡くせと云ふにある。私どもの若
い時に、よく『貴樣だちはよい加減でいかぬ、それでは人間はやくざになる』と云はれたが、やくざな
者は人の仕事をよい加減にやる。自分の誠心誠意を充分に續けなければ眞に仕事を完うすることは出來
ない。自分の技能や。信用を現はすことは出來ない。いかなる事にも最善の努力を盡せよと云ふにある。

第三に萬事を神に御委せすること、此れはいかに愉快に働いても、猶ほ不足に思ふ心が出て來る、から

云ふ時には、これを運命と諦めて、凡てを神に御委せし、假令、失敗しても精神的に苦みを感じないやうにし、これだけの運命と諦めて、失敗に打勝つて、どこまでも最善の努力を續ける。これが富を得る最善の方法である。

以上はギブソン氏の趣旨であるが、誠に妙味ある言葉と思ふ。かくして我々は努力して行かねばならぬ。日本に於ては即今、國民の生活を安定にすると云ふ事が重大な問題で、富力の増進は個人、國家共に力を協はせて進まなければならぬ所であります。

四

それから向上に要する七つの力の第三は智力であります。人間の智力は文化の母、文明の源である。これにも二通りあつて、守る知識とは、己れを知り職分を知るのを云ふのである。佛教ではこれを根本智と云ひ、禪宗の悟りと云ふのも、畢竟、この智を極めることである。退いて己れを知ると同時に、進んでは社會百般の眞理に通じ、所謂今日の科學を究めるこれが、活動の智識で佛教では後得智といふ。

明治以前の學問は、己れを知る己れを守ると云ふ方面のみに力を入れ、進んで百般の事柄を究めると云ふ方面は、甚だ幼稚であつた。即ち身を修め家を齊ふと云ふ修身の方に重きを置いたが、今日に於ては、百科の學術に通曉しなければならぬ時代となつた。今日、文明の餘澤によつて、これらの智識を日々夜々

得ることの出來るのは、誠に幸福であると云はなければならない。『田舍の勉强は都の書寢』と云ふ程で、見るもの聞くもの何れも智識の材料たらぬものはない。而して、これが發達を計ると同時に、またこれを守るところがなければならない。

今日は、學問が甚だ盛んになつたに連れて、動もすれば道德性が低下し、人間が氣儘になつたのは誠に情けない。智識が向上しても人情輕薄となり人心不安となるのは、學問に對して誠に申譯のない次第であります。今の學問は概して廣いが、併し、其の廣いが爲めに締りがない。廣いのは結構だが、締りがなくなつたのは、學問といふものに精神を統一する力を缺いて居るからである。お互ひに廣く學ぶと同時に、退いて己れを究めることが甚だ大切であると思ふ。

此の點に就いて、私共の平素研究して居ることを詳しく申上げると、興味あるものであるが、それは玆には暫く措きます。

五

それから次が第四に德の力、卽ち道德の力であります。凡て經濟の問題でも道德が其の基礎をなすものである。澁澤榮一子爵が、『今日の日本は金も殖え產業も發達したが、其の下には人情道德の土臺がなければならぬ』と云はれた。孔子の言葉に、『君子もまた利害を說く』と云ふのがある。利害は利己に基くが、

これは道德を基礎として說かなければならぬ。何等修養のない人でも道德を說くが、其の道德は利害から打算して道德を說くので、眞の君子たる者は、道德を土臺として其の上に利害を建設し、道に卽して利に就く、お互ひは事業を發展し富の力を高める上にかうして行きたいものであります。

アメリカに參つた際、ワナメーカーの百貨店を訪問し、店に這入つて其の店の規則を伺つたが、甚だ簡單な言葉で妙味のあるものがあつた。卽ち『店の繁榮より御客の便利を計れ』とか、『店の利益よりも信用を大切にせよ』とか、『賣手の心にならんで買手の心になれ』とか、『商品を賣らずとも親切を維持せよ』とか種々あるが、假令、個人で事業を起しても、商店を開いても、此の見識で經營すれば信用身に備はる。卽ち、道德の力を有して居るものは、自然それが御客に影響して來るのである。

西洋人が日本人を評して、『日本人は個人的には常識があるが、集團的には非常識である』と云ふ。私の聞いた話に、神戶にある大きな料理店に、或る團體が宴會の申込をしたところ、料理店で云ふには『一人前ならこれ〳〵、何十人何百人となるならこれ〳〵割增をしてくれ』と云ふに對し、團體の方では『一人二人行くより、一度に何十人行く方が當然割引があるべきだ、割增とは逆ではないか』と云ふと、料理店の云ふことが面白い。『御一人御二人同志なら間違はないが、何十人何百人となると損害が多い。ナイフを袂に入れる、盃を持つて行く、三人五人ならとにかく、三十人、五十人となると眼が離せない』と云ふ事であつた。こちらの御店などでも、承る所によると、相當の中流階級の御婦人などで、法外なごまかし

をする者もあると云ふ話で、萬引とか千引とか云ふのがあるさうだが、これも一人々々となればやらんが混雜するとやる。つまり私德よりも公德が乏しいと云ふに原因して居る。

此の頃こそ東京には大火事はないが、昔し明治十四五年頃は、絶えず大火があつたもので、其の時分、火事場に行くと、邪魔になるほど大勢の人が居る。大部分は見物人で、中には非常に興味を以て火事を見て居る者がある。『江戸の花』だとか、田舍へ歸へる記念に見て行くとか、甚だしいのは『惜しい哉、もう消えた』などと云ふ者さへある。火災ほど恐ろしいものはない。然るに、それに興味を以て見物すると云ふのは、最早人間性ではなくて、獸的のものであると云へる。恐らく其の火難の中に友人や親戚が一人でもあれば、命を捨てゝも助けるであらうが、唯々無關係であると云ふ所で、それに興味を持つのであらう。

人と云ふものは西哲カントの言葉の如く、動物性・人間性・人格性の三つがある。動物性とは、唯今申した如きもの、或は自分の衣食住の爲めに屢々爭ふ如きはそれで、着たい、喰ひたいとか、色慾の途を漁ると云ふのが此の性である。人間性とは、我々が社會生活を營む上に現はれてゐる、卽ち社會の御陰、社會の爲めに生きて居るのであると云ふ所から、社會と云ふ上に義務の觀念を持つて進んで行く、卽ち義務と權利と並立して進んで行く、これが人間性である。所が此の義務と權利を相對的に併立せしめず、神聖の誠の心から世に盡くして行く、道德の命令、神の命令に從つて行く、これが人格性である。先きに申

上げた火事の興味は、即ち動物性であつて、何人にも此の性はあるものである。活動寫眞を見ても平和な繪看板は少ない。崖の上から飛び下りる所とか、刀を突きさして居るやうな恐ろしい畫をかく、これでないと人が興味を持たない。喧嘩は恐ろしい事である、併し、人は喧嘩を見たがる。涙の出るやうな悲しい事を面白がる。此の特性があるから、我々はよほど道徳の訓練が必要で、種々の方面に向つて訓練せぬと、動もすれば反道徳となる。

佛教は忠孝の意義を説くが、特に孝の一字を以て道徳の基とする。釋尊は『孝順は至道の法なり』と説かれた。而して、此の孝に就いて私は七つの説明を加へられて居る。即ち、

第一、父母は形骸の親、即ち體の親である。これに報ゆるに孝を以てす。第二、君主は國民の親、これに報ゆるに忠を以てす。第三、師匠、先輩は知識の親、これに報ゆるに順を以てす。第四、社會は生活の親、これに報ゆるに義を以てす。第五、天地は萬物の親、これに報ゆるに誠を以てす。第六、眞理は人道の親、これに報ゆるに敬を以てす。第七、佛徳は安心の親、これに報ゆるに信を以てす。

と云ふのであります。

日本に於て私徳が發達しながら、公徳に缺點あることは遺憾の事で、皆様と共に國民の公徳を高めることに努めたいのであります。

六

次に第五が勇氣であります。どんな志があつても、體力が充分であつても、勇氣がなければ役に立たない。勇氣とは何か、これにも止まるところと、進むところがある。消極的には己れに打克ち感情に打克つことである。　我々の生活には屢々感情に制せられる場合が多い。十人が八九人、百人が九十人まで、これを守らなかつた爲め、腹を立てた爲めに、交際の情義を破ることがあり、仕事の上に不滿足を來たします。短氣を出さず、不當の事があつてもこれに耐へる、憤怒に眼がくらんで腹を立てると云ふことをしない、これが勇氣である。而して、これは臆病であつては出來ないことである。

鎌倉圓覺寺の祖元禪師を師として參禪した北條時宗は、忽必烈の軍を鏖しにした英傑であつたが、若い時には甚だ臆病であつた。祖元を請待して、まづ第一に怯弱を救つてくれと願つた。そして禪師に向つて『人心の憂患は怯弱の心を脫するを最なりとす、いかんか脫すべけん』と、其の時、祖元は『脫すること最も易し、須らく怯弱の來所を閉づべし』と答へた。時宗は『然らば怯弱はいづれの所よりか來る』と問ふに對し、祖元は直ちに『時宗より來る、時宗を放擲せよ』と喝破した。即ち貧賤も犯す能はず、富貴も淫する能はず、威武權勢も屈する能はざる自由獨立の大勇猛心は、要するに己れを捨てなければ得られない。己れを捨てると云ふことが此の根柢となるのであります。

明治天皇は英明の君に在ましたが、御在世中、或年、甚だ暑さが酷しかつた。御側の者は玉體に障りあつてはならんと、陛下に御避暑を御勸め申上げた。所が陛下は稍あつて、一首の御製を賜はつた。

あつしとも云はれざりけりにえかへる水田に立てる賤を思へば

即ち、家根の下に居て暑いと云はれるかとの御意で、御側の者も恐入つて引下つた。また、或年、御避寒を御勸め申した事があつた。陛下は直ちに『寒さには凡ての人が避寒をするか』と御下問になつた。避寒をするものは何れ上流の何百人かの人達に過ぎない。『朕は多數に從はん』と唯だ一口仰せあつたと云ふ事である。明治天皇は御體格も御肥滿あらせられて、暑さには殊に御苦しくあらせられたらうが、

まつりごと出でゝ聽く間はかくばかりあつき日としも思はざりしを

と仰せられた。己れに打克つ此の勇氣で勇往邁進して、そこに眞の勇氣が現はれるのであります。内に於て己れに打克つ力があれば、此の力が漸次に外に頭角を現はし來つて、百難不屈の偉大なる精神の力となつて來る。

乃木將軍は幼少の頃非常な泣虫で、三四歳の頃は殆ど泣いてばかり居た。それで『泣人』と云ふ名前を付けられて居たが、父親の嚴格なる敎育と、玉木文之進の適切なる薫陶とが相俟つて偉大なる豪傑を作り上げた。幼年の時代、萩の明倫館から十五六里もある鄕里に歸るときなど、草鞋の二三足も切れる程の石山道であつた。そこで、大將は自分で下駄を作つて、石道を歩いても大丈夫のものとし、これを名づけて

萬年下駄と稱へた。朝暗い中から此の厚い下駄をはいて、惡い道を歩いて來る。人が『骨が折れるだらう』と云ふと『いや家から板の間續きだ』と答へた。萬年下駄をはいて十五六里の道を歩いて、板の間續きだと云つて居た勇氣は、力山を拔き氣世を蓋ふの概がある。即ち艱難を艱難とせず、大事業を大事業と見ず、大局高處よりこれを達觀することによつて、大なる度量が現はれて來る、之れが眞の勇氣であります。

吾々はかう云ふ勇氣を養つて、進んでいかなる艱難にも堪へ、よつて以て日本の光輝を發揚することに努めなければなりません。

第六には和合の力であります。即ち一致結合の力、協調協同の力がなければ何事も成功することは出來ない。此の大商店が順調に發達するには、上は重役より下は店員に至るまで、互に相愛し相扶け、協調の心を以て、何百人が一心同體に働けば、どんな大商店でも立派に運轉して行くことができる。地主と小作との間も此の協調ができなければ、兩方とも損である。小作も困難であり地主も苦しい、双方何も殘らない。唯殘るものは思想の惡化ばかりである。私 は地方に參つても常に地主の方に御話をする。地主の方は溫情、眞の溫情を以て小作人に對さなければならない。眞の溫情はよく人を感化する力のあるものである。

和合と云ふことは眞に平和の基礎である。尙ほ進んでは何事にも大局に眼をつけ、公利公益を忘れず、

努めて永遠の計をなさなければならない。

當商店の如きは先刻申上げた如く、世界的に名譽ある商店であるから、玆に働かれる皆様は、必ず協調、和合、結束して世界的に模範を示すやうにして頂きたいと考へる。

七

第七には信の力であります。これは宗教上の御話でありますが、當今、宗教的信念の必要と云ふことは、一般の人に了解されるやうになつた。どうしても、人間生活の土臺として、我々は神靈の實在を信ずると云ふところまで進まねばならぬ。

明治天皇は崩御あらせられても御神靈は御かくれにはならない。現に明治神宮の元日の参拜者は十萬を以て數へられ、また常にも参拜者の絶えることがない。耳に聞えず目に見えずとも、神靈の實在を信ずることは向上の信念の一つであります。これと同時に、神佛の照覽と云ふことを知らなければならぬ。人は聞かねど神靈は常にこれをみそなはす、かくれてやつても、よい事をすれば天地はこれを認める、惡い事はいつしかは知れずには置かぬ、と云ふ事を道徳的に信じて行く、これは大切な觀念であると思ふ。宗教的信念のある人は、自分の分限に安んじ、自らの立派な天地を開拓する。

アメリカのシカゴの養老院にアーノルド、カウル孃と云ふ監督が居る。此の人は猶太系の人で、養老院

の事業に甚だ興味を持つて居た。ちやうど私が訪問したのが大正十年十月三日で、其の日は猶太暦の一月元日に當り、元日の御祝ひをして、禁酒國のアメリカで顔を赤くして、何れも盛装をして居つた。此のカウル孃が、孃と云つても四十歳以上であつたが、一間一間に院内を案内してくれた。私は今着て居る此の法衣の姿で人々に挨拶したが、孃はどうか皆の者に握手してくれと云はれた。院内の人達と孃との親しさ、殊に年寄りと孃との親しさは傍の見る目も喜ばしい程で、恰かも自分の親か姉妹が來たやうななつかしさを持つて居た。案内された後で、茶を飲みながら、『親切の有様を見せて頂いて愉快であつた』と述べたところが、カウル孃はかう申された。『私が斯うして行くのは、何物にもかへられない、いかなる名譽よりも、最上の幸福と思ひます』と挨拶された。自分が唯だ樂むばかりでなく最上の幸福で、かう云ふ人達の兄弟、親子となつて世話をすることが、天から授かつた勤めであり、これが最上の幸福であると、日々夜々神に感謝する所であると申された。

　またシカゴに在る百貨店マーシヤルフイールドに於ても、一人の事務員が案内をしてくれた。非常に忙しい中を案内してくれたが、それがいかにも叮嚀で、陳列の機械などは一々それを動かして見せ、また新柄の女の服なども一々手に取つて示してくれた。それがいつもニコ〲して笑ひを含んで居るので、いかにも心持ちがよい。『大層御手数をかけた』と禮を云うたら『外國の方にかうして説明を致すのは、誠に我々の幸福である』と云つて喜んで居られた。當商店などは時々外國人が來られるし、また宮殿下も御出で

になるから、其れ以上に親切にして居られることと思ふ。併し、其の親切の中には、單に店の信用を望むと云ふ事の外に、何物か絶對的な或るものがあると思はれる。親切な紹介のうちには、我が眞心とでも云はふか、言葉にのせしれず筆に寫されない情操が、其の間に動くのを見受けられるのであります。

また石川縣の知事長氏が先日訪問せられ、初めて御目にかゝつたが、氏は昨年赴任後、間もなく大演習があつて、九日間、攝政宮殿下の御滯在があつた。氏の云ふには『自分の一世一代の任務であるから、何卒無事に勤めたい』とそれのみ案じて、夢も安らかには結ばれなかつた。それで神佛に祈請し、一面には役人・警官・市民に向つて告示もし、また親の墓に詣でゝ冥助を祈つた。父親の墓に詣つて『重大の任務を負うて居るが、充分の御勤めが出來るやうに』神靈にお賴みした。有難いことには一點の故障もなく、天氣都合も、殿下の御出まし御歸りの時には、不思議に晴れ渡つた。大部分の奉迎者は何れも手を合せて殿下をおがみ、内には感極つて泣く者さへあつた。宮内省の方もこれを見て甚だ感激したが、此れは一つには、此の地方には佛教が盛んであつたことも與つて力がある。御滯在中、三十分間、縣狀を申上げた際にも、二十分間は行政・産業等に就いて申上げ、あと十分間は北陸道の國民全體に亘り、人心及び宗教狀態を申上げたと云ふ御話であつた。から云ふ風に、宗教的信念も人間生活上道徳上に働きかけ、精神活動の基礎となり、力となつてこそ、始めて宗教的の信念と云ふことができるのであります。

人間には幸あり不幸あり、人によつて種々の運命があり、また人生には種々の計らざる出來事もある。

此の錯雜なる人世に於て、何物にも動かされざる精神を持す[illegible]
とは難かしいことと思ひます。

以上七つの力を概括すれば、まづ體力を養ひ、生活を豐富にし、人の厄介にならず、進んで、產業の發達を計り、更らに知識、道德、勇氣等心の力、續いては信念の力を養ふ、此の七つの力を基礎として運用すれば始めて剛健なる精神を得らるべく、何れの方面に對しても、進退ともに剛健の力を養ふことができます。皆樣は將來有爲の方々で國家の寶、實業界の中心となるべき人だちでありますから、益々剛健性を養ひ、理想的の鍛錬をなして向上の一路、光明の前途を打開されることを期待致したいのであります。

大乘的精進

一

今日の我國の狀態は種々の點に於て、不安に堪へないやうに感ぜらるゝのであります。

私は東京附近に居りますが、東京の市内に於てすら、女の子を持つた方などは夕刻になると注意する、獨りで東京市内を歩るかせることが甚だ危險であると云ふのである。若い娘さんなどは日中でも、獨りでの外出は頗る警戒を要するといふ有樣であります。多くの人が絕え間なく往復して居り、電車は數限りなく走つて居る、然ういふ繁華な巷、しかも帝都でありながら、年の若い娘さんなどが單獨の外出が出來かねると云ふことは、非常に悲慘なることゝ言はなければなりません。是れ社會に不良分子が繁殖したからであります。

また學問の弊害と云ふお話しもありましたが、これも痛感される事實であります。私が昨年新潟縣の保倉と云ふところに參りました時、その村の村長や助役の方のお話しであつたが、「この邊には小作問題と云ふやうな難かしい爭議はないが、耕作をする人間が少ないので、手不足であるために、十分に所有地を

耕やすことが出來ない。相當に働ける者は工場に行き、或は東京に走る。一般に農業を厭ふやうになつて來た。それが爲めに、相當に田地を有つて居りながら、現在の田地すらも充分に耕作が出來かねる。耕作する人夫に困難である。そして女にせよ男にせよ、相當の教育を受けた者ほど多くは農業を嫌ふ。男子にして中學校でも卒業させると云ふと、家に歸つても農業をいやがる、女子にしても高等女學校でも卒業させると云ふと、家庭に働くことを非常に厭ふといふやうな狀態になる。學問と云ふものは、果してよいものか惡いものかと云ふことを疑はせらるゝ』と云ふ話しであつた。地方に行きますと、私どもは然ういふことをよく耳にするのであります。學問があるが爲めに反つて働くことを厭ふ、教育を受けさしたが爲めに反つて自分の家庭を困難に陷しいれる、と云ふやうなことになつて居るのであります。

また私がアメリカに參りました時に、非常に悲しく感じたことがありました。桑港に日本の墓地があります。私は日本人の居留地に行きし時は、到る處、日本人の墓だけは、必ず參詣して追弔の回向を致しました。そこで、桑港の墓地にて暫く事務所に休んで居りますと、正面に葬式の寫眞が掲げてある。その寫眞を見ると最近の寫眞である。その寫眞には賭博撲滅期成同盟會幹事何某葬儀と云ふ文字が書いてある。賭博を撲滅する會と云ふのであります。

カリホルニヤ州には日本人が七八萬も働いて居る。重もに農業に從事して居ります。そして、相當に成功して居る人も少なからずあります。年々歳々非常に働いてお金も取るが、先づ第一の缺點と云ふもの

は、賭博の爲めに財産を失ひ自分の利益を皆な減殺される。七八萬の加州に居る日本人が、賭博のために支那人やヨーロッパ人に取られる金が、一年に三百萬弗と云ふ數に上ると聞く。かくの如き現狀では、日本人が何の位働いても、働く後から皆な賭博をしては外國人に取られてしまふ。これでは不可ないと云ふのでこの會が出來た。そしてその某幹事がこの會の宣傳演說に出かけました處、在留日本人の、我が同胞の賭博を好む人の爲めに暗殺された、と云ふ話しを聞いて非常に驚きました。

私は豫て賭博流行の事を聞きましたから、只今布哇の布教監督をして居る、時の隨行員駒形善敎氏に、賭博の現狀を見て來る工夫はないかと相談せしに、氏はその樣子を聞き合せて、自ら視察に參りました。卽ち支那人の常設館に行つたのであります。常設館の模樣は、報告を聞いて一層驚いたのであるが、門前には米國の巡査が立番をして居つたさうです。その巡査に中に入ることを承諾して貰ひたいと云ふと、種々の事を尋ねられたが、最後に名刺を出して『私は日本人である。賭博の實際の光景を見て參考に致したい。尙ほ私は宗敎家であります』と申した。宗敎家と云ふところに安心したと見えて、入場を許した。ところが、そこには誰れも居らぬ。再び進んで次の戶を開けますと、此處にも誰も居らぬ。三回目に進んで行きますと、其處が賭場で、いろ〳〵の注意書がしてある。手帳を出して書留めて居ると、支那人の恐ろしい顏色の奴が出て來て、咎める樣な樣子であつたから、早速名刺を出して『私どもは決して皆樣の行動を偵察に來たものでない。布哇在留の宗敎家である。宗敎家としてこの賭場の現狀を

見たい。なるべく精細に見たいと云ふ考へで、茲に入つて來たものであるから、怪しい者でない。惡しからず承諾をして貰ひたい』と云ふと、日本人がやつて來て『君達のお出でになる場所でない、このまゝでお歸りを願ひたい。吾々は斯う云ふことを元來は好のむものでないが、支那人の爲めに我が同胞が金を取られることは少なからぬ。それで吾々が幾分でもそれを取戻さうとして、仲間に入つて居る。つまり愛國心から入つて居るのである。どうか、その邊は能々諒解をして貰ひたい』と云ふ話しであつた。そこで、そこ〳〵に逃げて歸つて來たと申して居りました。後でだん〳〵と聞いて見ると、十五ヶ所位も賭博の常設館があると申すことです。日本人の經營して居る賭博場も四五館ある、と云ふやうな報告をしてくれた人もあつて、私は實に驚いた。これではせつかく働いても、其の幾分は空く水泡に歸することとなるのであります。

また内地に於ても、せつかく教育を施しても、教育を受けた者が産業の振興を妨げたり、知識の進むにつれて反つて犯罪者が殖えるといふは、何といふなさけないことでありませう。併し、然う云ふやうな傾向が社會の一面にあるのです。御承知の通り、年々智能犯が殖える傾向ありと聞く、詐欺とか恐喝と云ふやうな犯罪が、歳毎に增加して居ると云ふ現狀である。誠に慨かはしいことである。然しながら、是れは勿論、教育そのものゝ罪ではないが、教育その他に多少の缺陷ありと認むべき理由があります。今後益々教育の完全に努めて、國民知識の向上を圖つて行かなければならぬ。それには國民の精神に堅忍不拔の根

據を作つて行くと云ふことが、最も大切であると思ひます。

私が申すまでもないことであるが、天皇陛下が一昨年十一月に煥發したまひし御詔勅に『國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニアリ』と云ふことを劈頭第一に御諭しあそばされたのであります。あの比較的長い御詔書は、從來の多くの御詔書の中で、最も痛切に時弊を指摘したまふたものと拜察致します。教育勅語でも、戊申詔書でも、其の他の詔勅を拜しても、一昨年の御詔書の如くに時弊を指摘して御戒めになつたものは、極めて稀れであります。『輓近學術益開ケ人智日ニ進ム、然レドモ浮華放縱ノ習漸ク萠シ輕佻詭激ノ風モ亦生ズ』誠に有難い、また誠に痛切なる御言葉であります。今日は非常に國家の文運が進歩發達したけれども、一面に於ては浮華放縱の弊が追々と募り、輕佻詭激の風も亦隨つて其の度を加へ來つて居る。今に於てこの時弊を革めずんば、明治天皇の御欽定あらせたまひし皇謨も失墜するかと思はれる、と云ふ非常に恐懼感激に堪へない御仰せであります。斯う云ふ御詔書を拜するに就ても、總ての方面に我が國民精神が剛健性を缺いて居ると云ふことは、事實上明らかであります。故に此の際に、この剛健性を十分發揮して行くと云ふことは最大急務であるが、其の剛健性といふは佛教主義の上から申しますと、大乘的精神と云ふことであると思ひます。

佛教は御承知の如く、大體に於て、小乘・大乘と區別して居りますが、小乘は所謂原始佛教で、大乘はその一層發達した教理であります。小乘と云ふものは猶ほ今日の小中學校の如く、大乘と云ふのは高等大學校の教育の如きものであります。小中學の教育があつて始めて高等大學校の教育に進むことが出來るのである。高等大學校の教育を受けるには必らず、小學校中學校の教育を受けなければならぬと云ふことは申すまでもない。外面的に見ると、大乘と小乘とは相違があるが、内面的に見る時は自然の順序をなして居るのである。小乘の教理は決して排斥すべきものでない。小乘は大乘に進むべき道程である。小乘は自調解脱の法で、自己と云ふものを中心として解脱を求むる修養法であります。如何に修養の功が進んでも、自分だけの解脱を目的としては利他の活動を缺で居るから、人を救ひ、世を救ひ、國家を救ふと云ふことが出來ない。山の中に入つて世の交渉を絶つて修養して居つては、その人格は如何程高潔であつても世を德化する妙用がないから、社會的國家的には床の間の飾り物同樣で、畢竟無用の長物である。併しながら、眞に能く慈悲方便の妙用を發揮して大乘的活動を試みるやうになるには、一旦は是非、自己を訓練し自己の人格を養うて、其の剛健性を鍊磨して行くのが修養の順序である。かくして最も完全なる大乘的人格が出來ると云ふのであります。

御承知の通り、佛教には羅漢樣と云ふのがあります。羅漢樣の像と云ふものは皆樣も珍重なさいますが、其の風貌がなんとなく脱俗して居る。羅漢の像は全く脱俗の姿である。この脱俗的の境地に眞の剛健

的大精神が存するのである。故に、眞に大乘的精神を得やうと云ふには、どうしても一度は羅漢的境地に進まなくてはならぬ。羅漢の境涯に進むと云ふことは自己を守ると云ふことである。『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』といふ自信が無ければならぬ。今日の吾々は、五欲六塵の巷に迷ひ、或は權勢名譽の奴隷になり、或は利益の爲めに左右せられて居る。縱ひ高尙な人といはれる人でありましても、之を神佛の目から御覽になつたなら、やはり完全とは申されぬ。或は衣食の爲めに捉はれ、また色欲の爲めに縛せらる。よしや立派な紳士でありましても、群衆の中に交ると存外反道德な行爲に涉ることがある。

元來は、惡いことをする樣な事をしない人でも、大勢の中に入ると、群衆心理に支配されて、無責任の行動を敢てする、畢竟、自己を守ると云ふことを忘れて、惡戯をするやうになり易いものであります。さういふことが全然なくなつて、自己を守ると云ふ力が常に充實するに至つて、始めて大乘精神と云ふものは現はれるのであります。

國家を守ると云ふことは保守的であります。然し、國家を守ると云ふことが國家興隆の根本力となるのであります。國家を充分に保護して行かなければ、國家を繁榮にすることも國際的にも完全なる活動は出來ない。自分一身を治め得ぬ者には國家社會を敎化するの權威が無い、堅實に保守が出來るとき、初めて立派な進取的活動が出來るのであります。

私は今日の日本の一大缺點は、權威ある人格に乏しいと云ふことであらうと思ひます。人物がないの

ではない、人物がありましても社會に認められて居らぬ。今日の政府の當路者にも立派な人がある。されど、十分にその人格の長處が紹介されて居らぬ。その人の弱點缺點のみが傳へられて居る。現今の社會は所有る人物に對して、長處善處を無視して弱點缺點のみを傳播して居る。その宣傳機關は議會である。議會にかゝつては大臣もたまらない。恐い顔をするとライオンと云ふ名前をつける。丸々と肥つて居ると達磨と云ふ名まへをつける。若しもその人に何か弱點のあるのを見附け出したら早速攻撃の材料とする、併しその人の長所美點を擧げると云ふことはしない。また渾名をつけるにも、長所美點を取つてつけると云ふことはない。すべてが嘲笑的で、また遊戯的である。然ういふ狀態でありますから、本當に權威ある、心服すべき敬慕すべき人格に乏しい。生きた教科書に乏しい。

先刻も高島先生より『皆樣が個々各自にムツソリニーになつて貰ひたい』と云ふお話しがありましたが、佛教の上からいへば、皆樣が卽ち佛になつて頂かなければならぬと思ふ。それでなければ、本當に國家を救濟すると云ふことは難しい。自分を作りあげて行くのが、やがて人をつくつて行き、社會の文化を建設するところの土臺である。

足ることを知ると云ふやうな言葉は、近頃の青年方は嫌ふ。分限に滿足して居つては發達することが出來ぬ、故に不知足でなければ不可ないと云ふて居る。是れも一應の理はあるが、自分の分限を顧みて、與へられたる職分に對して忠實に勤め勵むことは、決して現在に執着し現狀に拘泥するものではない。不完

言葉であります。吾々は境遇のために縛られ、欲望のために縛られて居る。此等總ての束縛を脱して、最も剛健なる精神を發揮したのが佛敎の解脫であります。世の中には、放縱と自由とをはき違ひて、規律禮節を無視して、自由を得やうとする者がある。親の干渉を受けるのもいま〱しい、法律の干渉を受けるのもいやだ、國家の干渉を受けるのも厄介だ、此等の干渉を排斥して、自己の意思の赴くまゝに行動をして、是を自由なりと思うて居る。それは自由では無く放縱である、我儘生活である、乞食根性である。

或人が、乞食の生活をして居る者を憐んで、大勢の乞食を說諭して自分の家に連れ來り、破れた汚たない着物を新しい物に更へさせ、食事をも與へて相當の給金をくれる約束をなして、外庭などを掃除するやうな役目を言ひつけた。すると、乞食は大層喜んで、非常に有難がつて居つたが、十日許りもたつと何やら不平らしい顏をして『もとの乞食の方が却てよい』と云ふやうなことを口々に言うて居る。その言ひ分を聞くと、彼等は曰く『乞食をして居ると、人の軒端に立つて餘り物などを貰て、他のお力を受けるのであるから、時には御飯にもありつけない時がある。從つて着物も着られないこともある。今は御邸に居るから、三度〱御飯も滿足に頂かれ、サツパリした奇麗な着物も着せられて、誠に結構であるが、どうも窮屈で困る。それは初めの中こそ大層結構でありました、また御馳走も有り難く感じましたが、どうも窮屈でたまらぬやうな氣がして參りました。朝は六時、晝は十二時、晩は六時と食事の時間も定つて居つて、その間には喰ふことが出來ない。それに、何んだかんだと責任のある仕事を仕なくてはならぬ。然る

に乞食をして居ると、それは御飯の喰べられない時もあるけれども、一日に四度も五度も喰べられることもある。起きたい時には起き、寢たい時には寢る、この方が自由で氣樂であります』と云ふたさうな。斯う云ふ放縱主義の自由では困まつたものです。

大乘佛教の自由、即ち解脫と云ふものに至つては、自然の規律を重んじて毫も昧まさぬ。殊に禪宗などは、見識の高い宗旨でありますから、威儀作法には十分重きを置いて居ります。格式禮法は頗る嚴格にして、師家に對する禮あり、長者に對する禮あり、人に接する禮あり、また自分の子弟に接するにも禮あり、君に對する禮の如きは言ふ迄も無い。各々その自然の法則に從つて禮儀作法を嚴守するを以て、其の進退行動は極めて綿密である。之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らざるは禮である。故に、禮は人爲の法の如くなるも、天地自然の法則に隨ふたものである。君に對し、親に對する忠孝の道の如きも、自然の法といふべきである。此の自然の法に從つて行きさへすれば、長く平和を保つことが出來る。若し法則に背きては、決して安全を永久に保つことは出來ない。故に大乘佛教の所謂自由主義は、秩序を尊重する上の自由主義である。

次に大乘佛教は偉大なる博愛主義であります。輕重を誤らず緩急を失せざる秩序整然たる博愛主義であります。愛は感情であるから、動もすれば公平を失し輕重を誤り易い。戀愛と云ふもの丶如きは特に然うであります。青年の如きは往々に戀愛に捉はれて、前後の情勢も理性の判斷も打忘れて、一身を誤るに至

る。自然の本能とは言ひながら、それが爲めに親を泣かせ親族を泣かせ、多くの人々に迷惑をかけると云ふやうなことは、愛が一方に偏して、輕重本末を辨へない盲目になるからである。現代の男女關係の如き、多くは盲動的愛着に流れ易い。此等はよく〳〵注意しなければなるまいと思ふ。近頃は殊に戀愛關係などが非常に亂雜になつて參つたやうに考へられる。愛國心と云ふものも愛の發露であります。父母の愛念も、子弟の友情も皆な愛の活動です。佛は慈悲の權化である。慈悲は博愛心が與樂拔苦の妙用を發するのである。吾々は佛の精神を體得し、輕重を誤らず本末を正うして、合理的に眞正の愛情を發揮して行かねばならぬ。これが大乘の敎へであります。釋尊は『一切の衆生は皆我子なり』と仰つたが、慈悲の妙用を發するに當りては、自然にその輕重本末、緩急順序を誤らぬ樣にせねばならぬ。

支那の話しでありますが、親孝行の仕方を敎へられた者があつた。親孝行とはどんなことか、先づ親の體を大切にして、親に害を加ふる樣な者は極力征伏せねばならぬと聞いて、早速その心持で親孝行を始めた。或時のこと、夏の頃で、お爺さんの禿げた頭に大きな蚊が飛んで來て止まつた。そして頻りに頭の血を吸つて居る。それを見た息子は『おのれ、大切な親の頭の血を吸ふとは怪しからぬ奴だ』と云ふので、大きな斧を以てその蚊に斬りつけた。が蚊は逃げてしまつてお爺さんの頭は二つになつた、と云ふやうな滑稽な話しがあります。輕重大小と云ふことを誤つた愛と云ふものは、却て非常なる罪惡となるので

佛教の慈悲博愛は、人を愛し、動物を愛し、草木水火をも愛し、天地萬物に與樂拔苦の愛念を傾注するのであるが、其の間、自ら本末輕重を誤らず、極めて秩序的に實行すべきである。佛の眼中には敵も味方もありません。所謂平等大悲でありますが、秩序を無視されたものではありませぬ。

四

次に大乘は無我主義であります。宇宙間に於ける萬有諸法は皆な因緣假和合の法にして、常一主宰の我體を認めませぬ。此の無我の大原理を基礎として、道德も行持も總て無我觀に出發して居ります。この無我は決して空寂なものではない。要するに、一つの大信念を基礎として活動する無我であります。故に、最も氣高い一の大信念を有して居るから小我を超越して居ります。信念を有たないものは小我見に捕はれます。佛陀の大精神の中に自己の全身を投げ込んで小さな凡夫迷妄の我見を打捨て、大なる眞理海中に自己を融合し去つたものが無我主義である。

次に大乘佛教は平和主義であります。佛教の平和觀は事なかれ主義ではありませぬ。生存競爭は是認して居りますが、それが慈悲博愛と無我より發するもので無ければなりませぬ。故に侵略的意志は微塵もありませぬ。眞の平和を實現するには、我見と云ふものを捨てゝしまつて、眞實無我にならなければ平和の支持者となることは出來ませぬ。家庭に於ても、家庭の平和を保つには、親子夫婦が互に小我を振り立つて居て

は、一家爭亂の本となる。平和の家庭は無我主義でなければならぬ。青年の時代から斯う云ふ修養に努めて頂きたいと思ふ。この信念を以て家庭を圓滿にやつて行きたい。この精神がやがて社會の平和をも實現して行く力を持つて來る。この心を閑却して、殊更に攪亂を釀すと云ふやうな人は、どうしても平和の世界を得ることは永久に難かしい。

例へば學校などに於ても、謂れなき爭議を起し、自らその主動者になると云ふやうな人の生涯を眺めて見ますと、その人が多少人の上に立つと云ふ場合には、必らず何處からか平和を攪亂する者が出て來る。私どもの雲水時代のことを考へて見ても、三十人、五十人集つて修行して居ると、中にはいろ〳〵の小言を言ひ出して、味噌汁がまづいとか、待遇がひどいとか、何とか彼とか言ひ出しては騷動を始める者がある。然う云ふ人は、自分が五人十人の人の上に立つてその人達を敎育すると云ふやうな場合には、きつとその會中が穩かに治まらないものです。然う云ふことを私は實見して居るので、因果の關係の昧ますべからざることを痛感します。

責任を重んじ規律を正し、慈愛を傾け信念を養ひ、その上で自分の理想を實現するに於て、自由の天地を打開すると云ふのであつたならば、その人は必らず、綽々然として餘裕ある廣い世界に處して行くことが出來るものであります。かくありてこそ、所謂天地の間に獨立獨歩して行くことが出來るのであります。

なして能く寛仁の大量を養ひ　妄りに憎惡の念に驅られず我が子供を愛する如く衆を愛する樣になります。人間はとかく感情に束縛されやすいものであります。親子の仲、嫁と姑の仲でも、訓鍊なき淺はかなる感情に支配されると、讎敵のやうな間柄となる。嫌な人だといふ感情に囚はれると、それに支配されて、よしや好い事があつてもやはり氣に入らない。どんな御馳走をしてくれても旨く感じないやうになるものです。之に反して、氣に入つた人に接すれは、格別御馳走がなくても旨く喰はれるものであるが、氣に入らないところに至れば、結構な待遇をして貰つても少しも嬉しく感じない。何事もさうであります。吾々が坐禪をして居る場合も、退屈の念が生ずると、一寸ほどの線香がなか〳〵とほらない。汽車などでも、電車などでも、ボンヤリ待つて居ると、十五分位でもなか〳〵時間がはかどらない。欠伸ばかり出る。若しも友達などと面白い話でもして居ると、一時間ぐらゐは何時の間にか立つてしまふ。時間に長短なし自分の精神から長短を感ずるのである。時間も空間も皆な精神の中に籠つて居るとも言ふことが出來ます。であるから、吾々は努めて自分の心境を淨らかにして一點の妄執もないやうに錬磨し、そして、どこまでも規律を嚴守し、理智の判斷を誤らずして慈悲博愛の德相を發揮するやうにして行かなければ、大乘的活動は難かしい。

五

無我の境に住する時は我痴我見と我慢我愛とを離れる。我痴我見などに捉はれますと益々妄想邪欲に奔り、それが爲めに、共産主義などいふことが絶對の眞理でもあるかのやうに思ふやうになり、爲めに君國をも忘れ社會の秩序をも顧みず、甚だしきに至つては君も親も打忘れて、聞くも恐ろしい思想を抱くやうになり、果ては親をも殺し良人をも殺すと云ふやうな大罪惡を起すに至る。斯う云ふことは日本の風致の爲めに、絶對に戒め制せねばなるまいと思はれます。無我の境に入りて我痴我愛、我慢我見を離れますれば、自ら脱俗的の境涯に入ることが出來る。脱俗と云うても世の中をはなれて棲むと云ふ意味ではない。胸中廓落として事物の爲めに轉ぜられず、光風霽月の境涯を作り出す脱俗の境致です。眞純なる信仰の如きやはり一種の脱俗であります。

東京に長瀬鳳輔と稱する人があります。常に青年の指導などに當つて居られる御方のやうでありまして、前年まで參謀本部に勤めて居られたさうです。先年の夏、越前の永平寺に於て福井縣の主催で開催したる、青年會の幹部講習の講師として出張せられました。東京を出發して福井に參りますと、縣廳から自動車で迎かへに來てくれるはずであつたが、故障があつた爲めに役人が一人出張して居つて、電車に乘せてくれた。永平寺驛で電車を降りると、最早日暮れになつた。そこから永平寺まで、一里半の處を人力車に乘ることになつて居るが、日が暮れたので一人の俥夫も居ない。初めての土地の事でもあり、長瀬君は非常に縣廳の處置を憤慨したが、仕方がないので、名刺を出して驛長に相談をすると、驛長は大層

の毒がつて、漸く一人の俥夫を見つけ出してくれた。それがヨボ〳〵のお爺さんである。しかも極く舊式な人力車を持つて來た。仕方がないからそれに乘ると、坂道だから思ふやうに行かない。長瀨君は益々腹を立てゝ『いま〳〵しい、何れ何んとか小言を言つてやらう、福井に行つたら知事公に一つ談判してやらふ』と思ふて、胸がムカ〳〵して居つた。

漸く京田と云ふところまで行くと、山と山との間から皎々たる明月が現はれた。傍には音樂の如き響をなして清流が流れて居る、山には千古の老杉が繁茂して居る、その大自然の雄大にして清爽たる光景に接して見ると、何も彼も打忘れ、たゞ〳〵月に見惚れてしまつた。同時に自分を振返つて見ますと、今が今まで人力車が惡いと言つては腹を立て、遲いと云つては腹を立てゝ居つたことが耻かしくなつた。あの山月の光景を眺め、自然の雄大なる風致に接したる瞬間に『嗚呼、人間と云ふものは淺間しいものだ』とつく〴〵感ぜられた。殊に是の如き大自然の風光は東京などではとても見られない。水あり、山あり、また月ありで、實にこの大自然美は畫にもかけず歌にもつくされず、全く言語に絕して居る。この景色に對すると自ら己れの精神は淨めれるやうに思はれた。そしていよ〳〵永平寺に着ますると、山門の境致、杉影溪聲、一として心境を洗はざるはない。

翌朝のこと、本堂に出ますと朝の御勤めがあります。大衆が五十七佛の御名を唱へ、導師は中央で九度禮拜いたします。即ち釋尊からの名號を讀上げるのであります。それを見まして長瀨君は非常に感激

した。五十七佛と云ふのは、吾々で申すと祖先である。その祖先の名を一々叮重に讀み上げて、九たびも禮拜する。何といふ情誼の篤い眞情の籠つた儀式であらう。忠君愛國の精神も、敬神崇祖の觀念も、かういふ風でなければ本物とは言はれぬ。其の宗敎的尊嚴さは、本山に來て初めて之を知ることが出來たと云うて、暫くの間感涙に咽んだと云ふことであります。そして、その日、早速、講堂に於て青年に向ひ、昨晩の事、今の感激の談等を演べて一般に示されたと云ふことを聞きましたが、長瀨君の感激は一種の無我境に入つたのである。故に、腹を立てたり愚痴をこぼしたりした從來の小我見は霜の如くに消えて了うたのである。吾々は、斯う云ふ無我の境涯に入るの修養がありたいと思ふ。

岡山縣出身の前代議士たる福井三郎君は私の知己であります。岡山縣は犬養氏の勢力旺盛の地でありますが、氏は政友會から出馬して見事に當選した人であります。しかも運動費などは一向に使はなんださうです。氏は當選祝ひの代りに、妻君と相談をして西國巡禮をすることにした。同志の者五六人と出立するに當り、巡禮中は何んなことがあつても、腹を立てざる事、汽車は已むを得ない限りは三等に乘る事、と云ふやうな約束をして出發せられました。ところが、一番御報謝を貰ふことが困つたさうです。

志しある人が施すと云ふものを斷ることも出來ない。何やらきまりが惡くて弱つたと云ふお話しでした。妻君などは、御報謝をくれさうなところは、要心して近寄らないやうにしたなどと云ふ笑草もあつたらしい。

畝傍驛で汽車に乘る時、非常の人込みで始末に行かぬ爲め、二等に乘らうと云ふので二等切符を買つた。そして、今、二等車に片足をかけやうとすると、驛夫が來てこの車は君達の乘るところではないと呶鳴つた。氏は非常に面白からず感じて、驛長に談判してやらふかとも思つた。その內に汽車は發車してしまつた。如何にも腹が立ち且つ殘念に思つたが、其の時、觀音參りをする志に省みて、驛長に談判することも見合せ、靜かに切符を驛員に示した處、驛員も非常に恐縮して謝つたが、氏はおとなしくたゞ笑つて居つた。後で考へると我が身ながら、よく辛抱が出來た忍耐が出來たとつく〴〵嬉しく思ひ、好き修養をしたと有り難く感じたというて居られました。『政治家たらむ者は一度は西國巡禮をすべし、それでなければ、本當に地方の民情も知れず、また自己の修養も出來ぬと思ふ』と云ふて居られたが、是の如き心境がやはり無我の現はれである。

無我と云うても、木石の如く無心になつてしまふのではない、馬鹿の心になるのでもない。我痴我見、我慢我愛と云ふ迷執を離れたので、此の時始めて吾々の具有する本心の功德が現はれて來る。かくの如き狀態が大乘的生活とも云はれるのである。此の生活を實現すべく修習することゝ、此の生活に基きて慈悲博愛の大活動を起し、世界的平和の出現に務むることゝを大乘的精進と申します。自制と利他との二途に向て進取の氣象を發揮し、間斷なく奮勵し、正しく進み、健全に進み、忠實に進み行くことが眞の精進であります。

家憲の妙德

一

國家には必ず國家の憲法といふものが無ければならぬ。縱ひ憲法が無いにしても、その國に相當したる法律が無ければならぬ。若し法律が無い國があるとすれば、その國は未だ國としての資格を備へて居るものとは認められぬ。

抑も憲法なるものは、其の國の性質に依りて、夫々の相違あることは言ふまでも無いが、我國の憲法は、天皇陛下が皇祖皇宗の御遺訓に基づきて、君臣の權利義務を明らかにし、所有政治法律の根本を御定め下され、以て現在及將來の臣民に對し、千秋不磨の大典となされたものであります。法律は其の時代々々に應じて變改することもあるが、其の精神目的は、國民の權利を保護し、社會の安寧秩序を保ち、而して國家の進步發達を圖る爲めに設けられたるものであります。之を大別すれば民法・商法・民事訴訟法・刑事訴訟法・刑法等となる。憲法が根で法律が幹で、其の他の制度諸規則の枝葉が生じて來るのである。此の國憲國法があつてこそ、國民を統一し國政を施行して、一般の權利を保護し其の幸福を增進せしむる

とが出來るのであります。故に、國には一日も法律を缺くことはならぬ。法律なきの國は暗黒世界も同然であります。

其の國家を組成する所の要素は家である。故に家は正しく國の一分體であつて、親子夫婦兄弟等の家族は皆家を以て根據地とするのであります。殊に我國の如きは、理想的の家族制度の國でありますから、家には戶主といふ者があつて特別なる家長權を有し、その戶主を中心として家族全體が集合し、互に異身同體の關係を爲して居る。つまり、家は小なる國家にして國家は大なる家といふ樣な姿になつて居る。さすれば、國家に國憲國法のあるが如く、家にも家憲といふものが必要であることは勿論であらうと思ふ。故に昔しから、大勢の家族を有して居る大家になると、往々、家法とか掟とか稱する一種の家憲または家訓とかいふものが製せられてあるが、小人數の家には、大概は無い方が多いやうであります。夫故に、主として主人の意見が不文法となつて、一家の紀律を作つて居るといふ有樣になつて居る。これも決して惡いとは申されぬが、人には各々僻する所があるものであるから、主人たる者の意見や行狀が立派に行き屆いて居れば宜いが、萬一、主人たる者の心得が惡るかつたり、其の命令や指揮が其の當を得なんだりすると、紀律の中心が亂れて了ふからして、とても一家の道德を圓滿に修むることは出來ぬ。

古人が、「人、其の子の惡しきを知ること無く、其の苗の大なるを知ること無し」といふた通り、すべて慾目で見ると、自分の子は惡るくとも惡いとは氣が付かず、却て他人を恨むやうな事になるものである。

萬事萬端が其の僻する所に迷ふに依て、總ての命令や指揮が自然權衡を失ふ樣な事になります。是れがつまり家庭紊亂の基となる。それのみならず、家憲家法が無いと、一家の主人の言行が善惡ともに自づから家族の標準となるのみであつて、主人その人の依遵すべき標準といふものは無い事となる。從つて主人を監督する者は一つもない譯である。故に、主人が若し不品行なれば其の不品行が家族の手本となり、主人が短氣なれば其の短氣が家族の目標となるといふ鹽梅になります。そんな事では、とても一等國民としての理想的家庭を作ることは出來ませぬ。

故に、主人も、家族も、召使も、皆な一樣に必ず守るべき一家の憲法を製作して置くことが最も必要であります。一家の憲法が定まつてあれば、其の憲法が總ての行動の基礎と爲つて行くからして、主人が家族を敎訓したり若しくは警誡したりする場合も、主人自身が言ふのでは無い、つまり一家の憲法に言はせるといふ譯になる。故に、其の言ふ所が規律もあり節制もあり根據もありて、自づから神聖なるものとなるものです。

されば司馬溫公は、先づ主人なる者の心得を示して『凡そ家長と爲りては、必ず禮法を謹守して以て群子弟及び家衆を御し、之に分つに職を以てし、之に授くるに事を以てし、而して其の成功を責め財用の節を制し、入るを量りて以て出づることを爲し、家の有無に稱ひ、以て上下の衣食及び吉凶の費を給し、皆な品節ありて均一ならざる莫く、冗費を裁省し、[illegible]奢華を禁止し、常に須く稍や贏

餘を存じて、以て不慮に備ふべし』といひ、宋の張思叔に座右の銘として『凡そ語は必ず忠信、凡そ行は必ず篤敬、飲食は必ず愼節、字畫は必ず楷正、容貌は必ず端莊、衣冠は必ず肅整、歩履は必ず安詳、居處は必ず正靜、事を作すには必ず始めに謀り、言を出すには必ず行を顧み、常德は必ず固く持ち、然諾は必ず重く應じ、善を見ては己れより出づるが如くし、惡を見ては己れ病むが如くせよ』といふてある。是れ亦た一種の家訓とも見るべきものであります。

二

近年は全國到る處、官民一致して、地方改良とか社會改善とかいふ事を奬勵もし經營もして居る有様である。物質的文明の著るしく進歩するに連れ、地方の缺點や社會の弱點を痛切に感ずる樣になつて來た爲めである。併し、社會の健全となるも不健全となるも、其の源は家庭の善惡に在るものと謂はねばならぬ。

例せば、犯罪の中にて最も恐るべき謀殺、故殺といふ樣な重罪は、多くは家庭の不和より起つて居ると申すことである。明治三十九年の調査に依ると全國（但し朝鮮を除く）で、人殺しの罪人が一年に五百九十三人ある。其の内、貪慾に依るのが男六人、女六人、姦通に基くのが男十七人、女八人、失戀・嫉妬・放蕩が男百十九人、女八人、怨恨・報仇で男百四十八人、女二人、而して一番多いのが、家内の不和と親

族利益上の爭ひとで、是は男九十一人、女百五十二人、總計二百四十三人、卽ち全罪人の半數に近いとある。其の他種々の因由に依るもの男二十七人、女四人、因由の不明なのが男三人、女二人といふ内容になつて居るさうである。細かに原因の原因を調べて見たならば、失戀とか、放蕩とか、怨恨とかいふものゝ中にも、家庭の不紀律や惡習慣に基因するものが多いかと思はれる。右は三十九年度の統計であるが、それ以後に至りては、一層、犯罪者の數が增加して居るは勿論、その犯罪の内容に至りては、大概同じ狀態になつて居るやうであります。

東洋時論といへる雜誌に依ると、全國に於ける在監人の員數が、最近一兩年間に夥しく增加して來たさうです。三十八年末の在監人員は五萬三千三人、三十九年は五萬三千九百八十一人、四十年は五萬三千七百三十五人で、何れも五萬人臺であつたのが、四十二年三月には六萬六百八十四人に上り、四十三年三月には七萬三千二百九十九人となつて居るといふことです。此等も盡く家庭の不健全なる結果であるとばかり判斷はせられまいが、家庭の不取締といふ事が重なる原因の一であるには相違ない。

東京感化院に收容せられて居る不良少年及不良青年は、總數五六十名もあつて、其の年齡は七八歲から二十歲までゞあるさうである。而して、一人一ケ年の費用は、大概十五圓から三十圓位まではかゝるといふから、此の費用の出せる家庭は、先づ中產以上の生活をして居らるゝに相違ない。此等の惡青年の大

は、父母共に交際にも營業にも一生懸命であるから、家庭が頗る健實であるが、二男三男の生育する時代になると、最早、大體の成功を見た頃であるから、父母共に氣も緩み我儘も出で、横着な父などは、そろ／＼別莊道樂や外妾狂ひを始める樣になつて、家庭が自然不取締に陷いるが爲めであらうといふことです。

此の外に、不良少年と名くる惡い子供が段々増加して、四五年前の調べに依ると、愛知縣・愛媛縣・茨城縣・靜岡縣などには千二百人以上もあつたとのこと、其の種類を分けて見ると、物を盜む者、懶けて何事もせぬ者、無暗に亂暴する者、始終ウロ／＼して世の中に漂泊して居る者などであるさうです。此等の外に、少し油斷すると直ぐ不良少年の仲間に這入さうな、危險な子供も隨分少なくはあるまいと思ふ。かういふ者が段々天下に横行する樣になつたならば、社會の幸福を失墜し國家の安寧を妨害することは幾許であるか知れませぬ。故に、社會を改善せんと欲せば、先づ以て家庭の改善を圖るのが先決問題であります。

大學には『古の明德を明らかにせんと欲する者は先づ其の國を治め、其の國を治めんと欲する者は先づ其の家を齊ふ、其の家を齊へんと欲する者は先づ其の身を修む、其の身を修めんと欲する者は先づ其の心を正うす、其の心を正うせんと欲する者は先づ其の意を誠にす』云々とあるが、身を修むるといふより以下は、家を齊ふる上に缺くべからざる道であるから、即ち家憲の骨子であります。然れば、國を治め

天下を平かにするのも、其の本はといへば一家の圓滿に待たねばならぬ。併し、家憲といふても決して難きを人に強ゆるといふ樣な事はいかぬ。所謂『平常心是れ道』で、十人が十人、百人が百人、之を守り得べく行なひ得べき掟で無ければなりませぬ。心學教訓には下の如き事を示してある。

家內繁昌の妙藥法――一、正直、篤實を合せて百匁。一、忠孝、身を粉にして百匁。一、儉約、質素にして一斤。一、五常、仁義禮智信を能々選り別け五兩。一、堪忍、五兩。以上の藥、調合に念入れ、每日朝起して慈悲の袋に入れ、あしき友を除き、水一生を入れ案じ用ゆべし。驕奢たるをよくよくすまし、費を省き用ゆべし。禁物は色と酒と慾、其の外差合なし。是れ延壽長久の良藥なり、用ひて其の功能を知るべし。

德川家康公が家憲として敎訓せられたるものは左の如くである。

一　先づ己れが好む處をさけ己れが嫌ふ處を各々務むべき事

一　老を助け幼を恤む事

一　眞の神を忘れず心を琢磨して怠るべからざる事

一　本夫外を守り本妻內を守る天下の通義なり

一　世の業を營むは吾身に灸をすえるが如し、自分の業の苦みを以て始て飢の苦みを忘る。灸の熱さを苦まざれば病起りて反て之に同じき苦みをなすべし。

山岡鐵舟居士の家訓と稱するものも、なか〳〵親切に出來て居る。卽ち

一、虛言いふべからず候。二、君の御恩は忘るべからず候。三、父母の御恩は忘るべからず候。四、師の御恩は忘るべからず候。五、人の御恩は忘るべからず候。六、神佛並に長者を粗末にすべからず候。七、幼者を侮るべからず候。八、己に快からざる事は他人に求むべからず候。九、腹を立つは道にあらず候。十、何事も不幸を喜ぶべからず候。十一、力の及ぶ限りは善き方に盡すべく候。十二、他を顧みずして自分の善き事ばかりすべからず候。十三、食する度に稼穡の艱難を思ふべし草木土石にても粗末にすべからず候。十四、殊更に着物をかざり或は上べをつくらふ者は心濁りあるものと心得べく候。十五、禮儀を亂るべからず候。十六、何時何人に接するも客人に接する樣に心得べく候。十七、己れの知らざる事は何人にもならふべく候。十八、名利の爲に學問技藝すべからず候。十九、人には凡て能不能あり一樣に人を棄て或は笑ふべからず候。

二十、己れの善行を誇り顏に人に知らしむべからず候。凡て我心に恥ぢざるやう務むべく候。

此等の家訓は獨り家庭の好教訓たるのみならず、之れに遵がひ行く時は、社會を改善することも決して難事ではあるまいと思ひます。

三

近代の人々や現今の方々の實行せられ、若しくは實行しつゝある家憲の一斑を、參考までに紹介して見やうと思ふ。先づ二宮尊徳翁の家訓は斯うである。

父母の根元は天地の命令に在り、身體の根元は父母の生育に在り、子孫の相續は夫婦の丹精に在り、父母の富貴は先祖の勤功に在り、吾身の富貴は父母の積善に在り、子孫の富貴は自己の勤勞に在り、身命の長養は衣食住の三に在り、衣食住の三は田畠山林に在り、田畠山林は人民の勤耕に在り、今年の衣食は昨年の產業に在り、來年の衣食は今年の艱難に在り、年々歳々報德を忘るべからず(原漢文)

また曾て文部大臣となり、明治廿八年に歿せられた井上毅氏の家憲は

一、早起門戶を開て室の內外を掃へ。一、食は必ず同時に案に就く、偃臥する勿れ、高く歌謠を吟ずる勿れ。一、賓客を待たば必ず須らく恭敬すべし。一、夜九時を過ぎなば灯を滅して寢に就け、閑話を講じて人の睡を妨ぐる勿れ。一、汎く交はる勿れ、有無相通ずるを要せず。一、病を忍んで告げざる勿れ。一、言語は鄙俗を遠けよ。一、衣褌は須く淨潔にすべし、自ら濯ふて他人を勞せされ。

(原漢文)

明治三十二年に九十九歳で逝れた、尾州の產で植物學の大家たりし伊藤圭介翁の家訓は、

一、神を敬し、二、上を尊み、三、御布告を守り、四、親に孝行、五、主人に忠義正直、六、師恩を忘れず、七、人に交るには眞實溫和にして虛言をいはず、八、早く起て職業を精出し、九、家內睦じ

く耐忍慈悲を專らとし、十、大酒大食を戒しめ、十一、儉約養生して身體を強壯ならしめ、家の繁榮を樂しむべし。十二、此の戒を毎朝一度づゝ唱ふべし。これ我家の遺訓にして生涯の祈禱なり。

大阪の富豪として有名なる、鴻池善右衞門氏の家憲といふを聞くに、

一、一家協力して事業に從事すること。二、質素儉約を旨とすること。三、飲酒を愼むこと。四、投機業に從事せざること。五、子弟の教育には尤も注意すべきこと。六、世に才幹を求めて家業を取らすること。七、公共事業に力を盡すこと。八、雇人には親族同樣の取扱をなすこと。

鴻池家では、今でも番頭以下には皆な綿服をのみ着けしめ、業務の後では、子弟雇人までも廣間に集まりて、雇教師より修身の講話を聞き、主人と雖も、家憲は絶待的に遵守して居られるさうである。

出羽の酒田の本間家は、國内に於ても類ひ稀なるほど嚴格なる家風であるさうだが、其の家憲は、

一、皇室を尊崇し神佛を信仰すること。二、慈善を旨とし陰德を重んずること。三、國家地方郷里の爲めには全力を竭すこと。四、質素を守り勤儉の美德を發揮すること。五、教育は文武兩道を勵み忠孝を專らにすること。六、富豪の者と緣組を許さざること。七、當主又は嗣子は相續の前後必ず全國を巡回すること。八、飲酒を謹み蓄妾を許さゞること。九、事務は一家一門にて分擔經營すること。十、投機事業に從事するを許さゞること。

といふのである。而して、同家は此の家憲を恪守するに於て、頗る綿密を極めて居るさうである。其の

一斑を擧げて見れば、先年、英照皇太后御崩御の際の如き、主人を始め、隱居光美氏より嗣子に至るまで、白無紋の羽織を着け黑の袴を穿き、四門を閉鎖し一室に閉籠りて正坐忌服し、國民喪の三十日間は、一度も門を出でなんださうである。神佛への寄附金は毎年千圓を豫算し、且つ、酒田町内の各宗寺院へは殘らず、毎年佛供米數俵づゝを納むることが定りになつて居る。明治二十七年十月の大震災には、愛子一人燒死を遂げ、土藏共の外にて五十餘棟を失ひたるも、罹災窮民には衣服食物を施し、翌日は、獨力にて慈善病院を設けて負傷者を救療し、米粥を施すこと六ケ月餘の久しきに及んださうである。光美といひし御隱居は、子弟や小作人を奬勵する爲め、一般農夫と同樣の服裝をして耕作せられたこともあると聞て居る。冠婚祝祭の外は、當主でも一日二合以上の酒を飮むことがならぬ。一族中の男子は、二十五歲以上になるまでは酒と烟草とを用ゐさせぬ。此の他、感心すべき事が澤山あることを聞て居ります。

東京神田松屋呉服店の家憲は、

一、行狀を愼むこと。二、家業に從事すること。三、生活を儉約にすること。四、投機冒險の業を禁ずること。五、子弟の教育を重んずること。六、兄弟の友睦を全うすること。七、飮酒を愼むこと。

松屋にては家族一般日常の心得として、左の如き額面を掲げてある。

油斷大敵

今日一日の事

一、今日一日三つの御恩を忘れず不足言ふまじき事。

一、今日一日決して腹を立つまじき事。

一、今日一日虚言を言はず無理なる事を爲すまじき事。

一、今日一日人の惡きを言はず我が善きを言ふまじき事。

一、今日一日の存命を歡び家業を大切に勉むべき事。

右は唯今日一日の愼みにて候。

我意我慢愚痴我まゝぞ地獄なる堪忍すれば今日も極樂

東京池の端守田治兵衛、卽ち寶丹老人の家憲はかうである。

一、仇は恩で報ずべし。二、人のあしきは先づわが惡しきと思へ。三、禍福は皆わが行ひより來ると知るべし。四、後悔ある時はこれにかはるの善を行ふべし。五、艱難より來る所の安樂ならざれば甘んずること勿れ。六、天然の樂みを自ら求めて樂むこと勿れ。七、己れ正直にして人を疑ふこと勿れ。八、人に欺かるゝとも人を欺くこと勿れ。九、心は活潑にして常に鬱すること勿れ。十、全家の和合を以て富貴の基ゐとなす。

人生禍福皆品行にあり、誠實勉強する事、懼るゝ勿れ、既往の非を挽回するに今日の良心を以てす、

自治積善、私欲を去り是非を決斷す、心朗に鏡の如し。

明治辛卯立春丁卯良旦　　靜松園長祿翁謹識

靜松園とは寶丹老人の號である。此の外、名家の家憲多々あるも、今は略することゝ致します。

四

前に述べたる如く、家憲の作り方は、或は規則風に書くもあり、教訓風に作れるものあり、またその條件も、家庭の狀態に依りて、多少の加減は無ければなるまいと思はれるが、何れにしても、左の數則は必ず加へることゝせねばなるまいと思ふ。

一、忠孝の道を守ること。二、神佛を敬ひ信ずること。三、和合を主とすること。四、勤儉力行すること。五、正直と忍耐とを守ること。六、全家の幸福を期すること。七、公德を重んじ慈善を心懸くること。

或人は家憲の公則として、左の十四ヶ條を列記せられた。

一、家族は道理と人情とによりて親睦じく進退すること。二、國法に基きて進退すること。三、萬事一家の協議を遂げて爲すこと。四、人々各々の負擔せる分任を盡すこと。五、家族は萬事表裏あるべからざること。六、家に相當せるものを選ぶこと。七、財は入るを量りて出づるを量るべきこと。

八、萬古得難き大富は足ることを知るにあり。九、利益を圖らんよりは人に利益を圖らるゝ勿れ。十、家のうち宗教の爭を起さゞること。十一、德を本とし、經驗を第二とし、智識と權威とを第三とすべし。十二、社會の進歩することに全精神を捧ぐること。十三、德義を家の土臺となし、智識と政略を以て建物と爲すべし。十四、時間を貴びて空費せざること。

またフランクリンは、英國の片田舍に鍛冶職を業とせる、身分賤しき家に生れながらも、遂には米國獨立の開祖と仰がるゝ程の偉勳を建てた人である。氏は常に十三條の德目を定めて、之を守つたと申すことである。その十三條とは、節制・沈默・順序・確志・節儉・勤勉・誠實・正義・溫和・清潔・深沈・貞節・謙遜である。此の外、氏の格言と稱するものには、なか〳〵立派な敎へがあります。其の中の一部分を擧ぐれば、

一、世に敵なし。一、職業を有するは財產を有するなり。一、德は人を造る。一、己れの爲めに己れに克て。一、德は人に求め瑕瑾は自己に求めよ。一、富は之を有する人の富に非ず用ゐる者の富なり。一、若うして老いたる者は若き老人なり。一、此の世に於ける最高の問題は、吾は如何なる善行を世になし得るやにあり。

此等は何れも家憲を實行する上の好敎訓である。

ブラヲンといへる人の家憲には、

一、勤勞を勤め分陰を惜み才智を長ずるは資本を求むるの根本なり。一、節儉を尙び、財產の多少に拘らず一年の入るを量りて出づるを節し亂用すべからず。一、何物に係らず用にならざるものを求むる勿れ。一、志を立つるは今にすべし必ず次日ありといふ勿れ。一、己れの心に常に快樂を滿してなすべし。一、一圓の金を惜むよりは一錢を浪費すべからず。

この家訓の中にも慥かに處生の秘訣はあります。

凡て日常の心得となるべきものは、高尙悠遠の言はいらぬ。朝な夕なに行ひ得らるべき標準が大事である。一寸とした格言などでも、之を善く應用する時は生涯の寶ともなる。永井尙政公は『油斷大敵』の四文字を以て治政の秘訣となし、北條泰時公は明慧上人より『寡欲』の二字を敎へられて、天下を靜謐にする根柢とせられた。『唇をなめる人と人をすかし見る人と吠えぬ犬とに用心せよ』、『金員を濫りに貸す時は貸したる金と共に其人を失ふ』、『食物少くして死する者少く、食物を喰ひ過ぎて死する者多し』、『身代限りは一厘を忽にするより起る、財布重くなるも心を輕くする勿れ、財布と心は一處に重くすべし』、『一回約束を變ずれば一生涯の不幸を生む』といふが如きは、頗る好い警誡である。また『身に溫度を求めんとせば火に至るよりも仕事場に至るべし』、『金と智識を持たぬ人は口に善き言語を持つべし』、『利德を貪らんよりは寧ろ冗費を省くべし』、『他人に依賴するの心あるは家產を亡ぼすの劒なり』、『道近しと雖も行かされば至らず、事小なりと雖も爲さゞれば成らず』といふが如きは、吾々の志氣を鼓舞する

の薬石となります。

五

一休和尚が嘗て攝州住吉に參詣せられし時、圖らずも明神の社前に於て葬式の行列を見られた。そこで住吉とは申せども此の樣子を見ると、やはり無常の火に燒かれて居る火宅の住居であると思召し、『來て見れば爰も火宅の宿なるになど住吉と人はいふらん』といふ歌を詠れた。すると或人が之に答へて『よしあしと思ふ心をふりすてゝたゞ何とくすめばすみよし』と詠んだとある。よしあしと思ふ心を振捨てゝといふは、己れの我見我慢を打捨てゝ、自然の法則に從がひ聖賢の道に打ち任せることである。聖賢の道というても別に變つたことではない。卽ち忠孝の二道に基き、仁義の德を明らかにし、以て身を修め家を齊ふることがその根本であります。

維摩經には『佛土を淨めんと欲せば先づ其の心を淨むべし、其の心淨きに從つて國土淨し』と仰せられてある。佛の御淨土を得やうと思ふたならば、先づ以て其の心を御淨土にせねばならぬ。心の御淨土といふは、心の中に淨かなる信念を抱き、一點も煩惱邪見の穢れを存せさることであります。心が御淨土になれば自づと家庭も御淨土になるべきはずのものである。家庭の御淨土といふは、家内一同が互に麗はしき信念を持して親切を盡し、互に品行を愼しみ、互に職務を勵み、互に幸福を進むることであります。家内の

者が氣嫌よくニコ〳〵して居る時は、不味い物も甘く戴かれるものです。家内中が親切を盡し合へば骨の折れる事も樂に出來るものである。親は子を扶け子は親を翼け、夫は妻を助け妻は夫を祐くる時は、平和と幸福とは求めずとも得られるものであります。かくする時は、縱ひ九尺二間の裏店に住んで居ても、其の心持は悠然として御淨土の樂しみを得るものである。併し、家庭をして淨土たらしめんには家憲を恪守せねばならぬ。

大阪鴻池十代目の善右衞門氏が、或日、心齋橋で氣に入つた道具を見つけ、三百五十圓で之を求めたるも、懷中に三十圓程しか無かつた。そこで、我家まで代價を取りに來てくれよと約束して歸りたれば、間も無く道具屋の亭主が金を貰ひに來た。すると、鴻池の番頭は之に承諾を與へずして『檀那樣へ每月御分配申上る金額が定つて居から、該金額以外のお金は支拂ふことは出來ません』と斷つた。主人も大に弱りまして、番頭さんに賴みて、『來月分の內から差引て宜いから、支拂つてくれ』といはれしも、番頭さんは『家法に違ふから』といふので、遂に承諾せなんだといふことです。これらは餘りに窮屈過るやうであるが、こゝに家憲の森嚴なる美風が現はれて、御家の萬代不易なる事が窺はれます。

德川家康公はなか〳〵嚴格な御方であつたが、常に『忍』の一字を以て百行の原動力として居られた。故に公の忍字訓なるものが遺つて居る。卽ち、

世に大丈夫と稱せらるゝもの、忍の一字を能くす。卽ち私慾を制するなり。喜怒憂思恐驚皆已れに

出づ、これに溺れざる是れ忍なり。我れ未だ大丈夫ならずと雖も、忍の字を持する久し。我が子孫我れを慕はゞ五典九經の外、忍の一字を守るべし。

とある。また公の遺訓として人の皆な能く知る所の、

人の一生は重荷を負ふて遠き道を往くが如し、必ず急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし、心に望み起らば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、物好は末の歎きと思ひ、いかりは敵と思へ、勝つ事ばかりを知て負くることを知らざれば害其身に至る。唯だ己れを責めて人を責るな。何事も及ばざるは過ぎたるに勝れり。

といふが如きも、やはり堪忍の數へであります。駿府に在せし時、侍臣の一人が茶宇の袴を着けたるを見て、『驕奢は亂の階なり』とて、遂に其の者の目通りを遠けられた。また平生の衣服は主に洗濯した物を召されたから、公の室なる英勝院が『新らしき衣服を召されよ』と乞たる時『府中及び京都大阪に在る絹布は數へ切れぬほとあるから、我は一日に百疋の絹を用ゆることも出來る、さりながら、民の疾苦をも思はずして、徒らに驕に耽らば、とても天下を治むることは出來まじきぞ』といはれたさうである。

此の種のお話しを一々演べて居りましては、際限も無きことであるが、要するに、親とか子とかいふ個人の集合したのが家庭でありますから、家庭の平和は取りも直さず個人の平和、家庭の幸福は取りも直さず個人の幸福である。而して、國家といふものは家庭の集合を以て基礎とするのであるから、家庭の統

一、整齊、安寧、福利は取りも直さず、國家の統一と整齊と安寧と福利とを進むる所以であります。故に吾々は、國家及家庭の責任を貴とび、出來得るならば、銘々各自に家憲を制定して一家の道德を增進し、家庭の間に於て、清淨にして且つ愉快なる御淨土を實現して貰ひたいものであります。

六

予は曾て信徒の需めに應じ、家憲十二則を製して與へたことがある。未だ以て完全とは言ふ能はざるも、聊か參考の一端とならうかと思うて、諸君の一覽に供して見よう。

家憲

一　每朝神前に敬禮し佛前及び先祖の靈前に禮拜すべき事。
一　每夕御國と父母と神佛との御恩を忘れまじき事。
一　家內和合して互に相扶け相補ひ機嫌好く立振舞ふべき事。
一　時間は寶の中の寶と心得て業務を勉强し一刻なりとも無益に過すまじき事。
一　堪忍を守りて荒々しき言葉又は動作あるべからざる事。
一　萬事を節儉して一紙半錢たりとも粗略に致すまじき事。
一　約束を重んじて聊かのことも違背すまじき事。

一　博奕に類することと又は他の嫌疑を招くの恐れあることを愼んでなすまじき事。

一　衛生に注意して飮食を濫りにせず努めて身體衣服又は居室を清潔にすべき事。

一　業務の暇には佛の敎へを聞き聖賢の道を學びて己れの德性を養ふべき事。

一　一家の名譽を重んじて常に其の幸福と安寧とを心懸くべき事。

一　愛敬を旨とし他人の迷惑するが如きことは斷じてなすまじき事。

右の條々家內一同堅く之を遵守して苟にも違犯あるべからず。

以　上

一年の計は元日に在り、一月の計は朔日に在り、一日の計は晨朝にありとも申しますから、先づ晨朝の勤めとしては、面を洗ひ手を淨めたならば、直さま神棚に向つて敬禮し、次に御佛壇に向つて佛前に禮拜し、御先祖の位牌に敬禮する樣に致したい。どんな忙がしい家庭でも、此の位の勤めの出來ぬはずがない。縱や五十人百人の番頭や小僧を使うて居る大家でも、此だけは一般に行はしむるやうな習慣を付けたいと思ひます。何故ならば神を敬うは愛國盡忠の基礎、佛を禮するは二世安樂の源泉、先祖に奉ずるは修身齊家の大本となるからであります。

次には報恩の觀念を養ふことが必要である。我等の身體は誰の御陰で、出生し成長し且つ安穩に生活することが出來るのであるかと云へば、皆な是れ恩分の賜です。其の恩分を佛敎では、國王と父母と衆生と

三寶との四恩に說いてある。衆生恩とは兄弟・妻子・朋友・親戚は云ふに及ばず、進んでは我が國民を始めとして、世界の人類、乃至、蠢動含靈をも包含して、盡く我れに恩分ありと觀ずるのが、佛敎々理の最も甚深なる所以であります。此の事は追て述ぶることゝ致しませう。三寶の恩とは、佛・法・僧の三寶で、つまり佛の御恩を指したものであります。右の內、衆生恩のことは後の箇條中に含んでありますから、今は他の三恩に神樣を加へて『朝夕御國と父母と神佛との御恩を忘れまじきこと』というたのである。我が國體が世界萬國の中で、比類なき精華を有して居るといふも、此の三つの御恩に報ずるを以て道德の基礎として居るからであります。

彼の源の實朝が『山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心われあらめやも』と詠じ、楠公が『身のために君を思へば二心君の爲には身をも思はじ』と詠じ、本居翁が『天の下國おほけれど神ろぎの生なしませる大やしま國』と詠み、紀の朝雄が『草も木も我が大君の國ならばいづくか鬼の住家なるべき』と詠みけるも、皆な君國の恩惠を讃美したのである。

また源の定信が『たらちねの深き惠みを思ひ知る霜夜の鶴の聲を聞くにも』と詠じ、本居翁が『父母は我が家の神我が神と心づくしていつけ人の子』と詠じけるは、皆な父母の慈恩を頌したものである。

また後醍醐天皇の御製に『みな人の心もみがけ千早振神のかゞみの曇るときなく』と宣ひ、昭憲皇太后の御製に『人しれず思ふ心のよしあしを照しわくらん天地の神』と宣ひ、承陽大師が『うれしくも釋迦

のみのりにあふひ草かけても外の道をふまめや』と詠ぜられ、また『草の菴にねてもさめても申すこと南無釋迦牟尼佛あはれみたまへ』と詠まれけるも、皆な神佛の洪徳を稱揚せられたものであります。此の報恩的觀念が、やがて堅牢不壞なる信仰をも生み出すのである。

七

次は家内和合といふことを忘れてはならぬ。古歌に『家内中なかのよいのが寶船こゝろやすやす世を渡るなり』とある通り、和合の德は、家庭を組織するの大本、快樂を生むの母、幸福を求むるの資であります。戊申の御詔書に『上下心を一にして』と仰せ下されたのも、皆な和合が大切であるからである。親は喜んで其の子を愛し、子は喜んで其の親に事へ、兄は弟を扶け弟は兄を敬ひ、夫は妻を愛し妻は夫に順がひ、相互に機嫌よく扶け合ひ補ひ合うて行く時は、何事も成らざるは無く、何物も樂しみの種とならざるは無いものです。仲好くして居れば不味物でも旨く食べられるが、睨みつくらをして居るやうでは、山海の珍味ありとも、決して美味く戴けるものではありませぬ。

次には時間を惜む習慣をつけたいものである。古人も『尺璧も寶に非ず寸陰是れ惜む』というて、世の中の寶は時間に過ぎたるものは無い。學問は大切であるが、時間が無ければ勉むることが出來ぬ。御馳走を喫べたいと思うても、時間が無ければ食べられぬ。故に西哲の格言にも『光陰は産業なり』とか、『光

陰は無上の寶なり、之を無益に費すは是また無上の賜りなり』ともいうてある。されば古人が『時のある時に時を得よ』といひし如く、一秒時の間と雖も、之を空しうせざるやう深く注意せねばなりませぬ。陶淵明は『盛年重ねて來らず一日再び晨なり難し』と云つてゐる、『けふといふ其の今日の日を働いてけふの仕事をあすに延すな』の勤勉力さへあれば、事として成就せざるは無い。戊申の詔書に『自彊息まざるべし』と仰せられしも此處の事である。

然るに、我國一般の狀態を眺むれば、遺憾ながら時間を輕んずるの風習があるやうに思はれます。人と面會した時でも、肝心なる要件には容易に移らんで、長々と無用の挨拶をして居る。集會等の場合にも、時間の約束に大變な懸値が付せられてゐる。また談話を爲るにも、口上ばかり長くして要領を得ぬことが多い。甚だしきは、隱居でもなされると、其の日を暮すことに困難して、遊び友達を探し廻してゐる。實に暢氣千萬なものである。

『金を蓄めて何をする』と聞けば、『氣に入つた遊びをして樂に暮したいから』と答へ、『勉强の目的は』と問へば、『働かんでも食はれるやうになりたい爲めだ』と答ふる人が多い。『極樂へ何しに行く』と尋ぬれば、『極樂は旨い物を食べたり、寢たい時に寢て起きたい時に起き、借金取も來ねば寒さ熱さの苦しみもないから、行きたいのだ』と言ふ人も隨分少なくない。何れもとんだ量見違ひであります。佛の淨土は懶惰者の集會所ではない。人の邪魔ばかりして遊んで居るなら、死んだ方が餘程增しである。

釋尊は御涅槃のみぎりに於て『汝等比丘、若し勤めて精進すれば事として難きもの無し、汝等當さに勤めて精進すべし。譬へば少水の常に流るゝ時は乃ち能く石を穿つが如し』と仰せられ、華嚴經には『菩薩は衆の行を修めて怠ること無く、勇猛の勢力能く制伏せざるものなく、能く一切の智門を滿足す』と御示し下されてある。釋尊は、出家せられてより以來、未だ嘗て偃臥せず。また脇を牀につけ背を倚せしこと無しといはれてある。日本曹洞宗高祖承陽大師は支那天童山に在りて、三年間修行中、偃臥して眠られしこと無し。支那唐の趙州禪師は、六十餘歲にして初て行脚の途に上り、破草鞋を穿ちて四百餘州を遍參し、終に禪門屈指の高僧となられた。是れ皆は光陰を重んじて勉強努力せられた勝躅であります。

八

第五には堪忍を守ることが大切である。『一忍以て百勇を支ふべく一靜以て百動を制すべし』とは蘇老泉の名言ならずや。堪忍する人は胸が寬く心操が柔しき故、言葉使ひから立居振舞までが、落着いて物柔かであるから間違ひはない。堪忍を守れぬ者は萬事が荒〳〵しくなるから、徒らに人の感情を害し物事が亂暴に流れ、自然に一家和合の根柢を破るものである。されば釋尊も、忍辱經には『忍の寶たる終始安きを獲』とも、『忍を懷いて慈を行へば世々怨み無し』とも仰せられてある。『踏まれても根強く忍ぶ福壽草やがて花咲く春を持ちけり』といふ歌の如く、『堪忍は成功の母、無事長久の基』短慮は功を成す所以でない。

第六には儉約の德が大事である。驕奢の心は家を破り節儉の心は其の身を存す。北條義時は大逆の人であつたが、其の子泰時が儉約を保たれた爲めに、北條家は九代も續いたが、高時の代となりて豪奢を極めた爲めに忽ちに滅亡しました。紀之國屋文左衞門は一代に天下の富豪となつたが、儉約を忘れた爲めに、晩年には乞食同樣の姿となりました。德川三百年の昇平も其の根柢は仁政と儉約に在りと謂はねばならぬ。されば戊申の御詔書には『勤儉産を治め』と御示し下されてあります。儉約と吝嗇と間違へてはなりませぬ。吝嗇とは利己一方の慾張で、同情の無い邪見の業である。之に反して、儉約は物事を大切にして一紙半錢たりとも無益に之を費さず、能く蓄へて有用の時に備ふるの德であります。釋尊の如きは、悉達太子といふ貴き御身を有ちながら、一度王位を捨てゝ出家したまふや、三衣一鉢の外は一物をも求めたまはず、迦葉尊者は五天竺有數の富豪の家に生れながら、日中一食、樹下一宿の行を積ませられ、支那の藥山禪師は大布を以て衣と爲し、自分自ら髪を剃り食を辨じ、百味の飲食が前に列なると雖も其の食を易へられなんだとあります。日本曹洞宗の高祖承陽大師は一生涯黑衣を被され、後嵯峨上皇より紫衣を賜りしも御着用はあらせなんだと申すことです。何れも儉約の好き手本ではありませんか。

第七には約束を重んずるの德を守らねばなりませぬ。戊申の御詔書にも『惟れ信惟れ義』とある。『惟れ信』といふのは約束を踐むことです。平生の口約束を始め、金錢の貸借、品物の賣買、其の他何事に依ら

ず、一旦約束したる事は必ず之を履行するのが信用の本
印形を押し保證人を附しても、猶ほ裁判所の御厄介になるが如きは、最早、人間の御仲間ではありませぬ。文明國民の大恥辱です。その代り輕々しく約束をしてはなりませぬ。よく〱履行が出來るか否かを考へてから約束する。一旦約束したならば必ず正直に之を履行して、聊かなる事も違背せぬ。是れぞ人間の人間たる美德であります。

九

第八には世の嫌疑を避くることに注意せねばなりませぬ。縦や惡い事を致さぬにせよ。人の疑ひを受くるやうな事をすれば、それがやがて自己の德操を傷くることゝもなります。殊に一家内の中にて、聊かでも疑ひを挾むが如きは、決して平和を持つ所以の道ではない。『李下の冠、瓜田の履』の誡めは暫くも忘れてはならぬ。故に佛の戒法にも、他の譏りを招ぎ他の嫌疑を受くるが如き行爲は嚴重に誡められてあります。

第九には衞生上に關する注意を怠らないやうにせねばならぬ。經にも『無病は第一の利』とあつて、無病健全は幸福の源である。如何なる英雄豪傑でも、一旦病に侵さるれば萬事盡く休するの外はない。諺に謂ふ『命あつての物種』で、忠孝の道も仁義の行ひも此の身あればこそである。一人の病は一家の

不幸を招き、一家の不幸は一村の迷惑を招く、其の病の如何に依りては、子々孫々にまででも祟りを爲しま す。されば我等は尋常衛生に注意して、身體衣服居室等に至るまで十分淸淨ならしめて、飲食物の如きは自ら之を節し、萬事萬端に用心して自他の健康を圖らねばなりませぬ。

或人の語に『養生の人は食物と飲物とを選び、勉强の人は朝寐と晝寐を戒む』とあり、また『衣を着くること既に久しければ卽ち垢膩を免れず、須く勤めて洗滌を要すべし。破れ綻ぶれば則ち之を補綴して完潔にせよ、また居室も庭中も常に掃除して潔くすべし、斯の如くすれば氣を養ひ心を潔くす。暗く穢はしければ心氣の養ひとならず』とある。此等はお互に注意しあうて、銘々の健康を全うすることが肝要です。

第十には業務の閑散の時を利用して、佛樣の御敎や聖人賢人の敎訓等を聞き、精神を修養して道德を明らかにせねばなりませぬ。宗敎は精神の食物です。また精神上の衛生法です。お互の心といふものは、緣に觸れ境に對して種々樣々に作用を現はし、忽ちにして善心、忽ちにして惡心、一日の中一時の間にも千變萬化す。故に弘法大師は『惡しとも善ともいかに云ひ果てん折々かはる人の心を』と詠ぜられ、源信僧都は『我心池水にこそ似たりけれ濁り澄むこと定めなくして』と詠れてある。而して、善と惡と、悟と迷とを比較して見ますと、どうも迷の方に赴き易く惡念の方が萌し易い。古人もそれを『迷はじと思ひなが

剛不動の地に安住せしむるには、是非とも佛様の御教に依らねばなりませぬ。

元來、佛教の根柢はといへば、涅槃經に『諸の惡は作す莫れ衆の善は奉行せよ、自ら其の意を淨らかにす是れ諸佛の教なり』とあるが如く、惡を離れ善に進み、其の精神を淸らかにして、神の御心、佛の御德に一致せしむるのが佛教の本領です。惡の極端なる結果は地獄で、善の最上なる果報が佛様であります。されば成佛といふは、智慧道德の圓滿したる最高の境界に名けたものであるから、苟も人間と生れ眞の道を修めんと欲する者は、齊しく成佛を以て最終の目的とせねばなりませぬ。

それを、佛教は年寄の聞くものと思うたり、女子供の信ずるものと思うたりしては、大間違ひである。故に高祖大師も『佛法といふは萬象森羅なり』と仰せられて、宇宙の大道を通じ天地の公德を明らかにせられたが佛教であるから、苟も道を守り德を修めんと欲する者は、老若男女に拘はらず、等しく佛陀の恩德に歸依し奉らねばなりませぬ。

一〇

第十一には自他の幸福を增進するの心懸が大切である。戊申の御詔書には「朕は爰に益々國交を修め友義を惇し、列國と與に永く其の慶に賴らんことを期す」と仰せ下されてある通り、文明國民たる者は常に世界を以て朋友となし、四海を以て兄弟となし、相互に共同的の幸福を圖るの襟度がなければなりませ

ぬ。況てや、一家内は一つの身體と同然で、一人の不幸は一家の不幸となり、一家の不利は一人の不利であります。故に、親子も兄弟も、夫婦も主從も、互に心を合せ誠を運んで、一家内全體の名譽を重んじ、且つ全體の幸福と安寧とを心懸くることが肝要です。

世の中には事に依ると、家に居る時は默つて居りながら、外へ出ると、家の中の惡口を言ひ散らし、イヤお婆さんがどうとか、お爺さんがどうとか、嫁がかうだの聟があゝだのと、前後の考へも無く、御仲間の惡口を饒舌り立てる人があるものです。是は以ての外の心得違ひで、全く家の耻といふことを知らざる振舞であります。

論語の中に葉公が孔子に對つて、『予が國には、馬鹿正直で、何事でも隱して置けぬと云ふ性質の者がある。或時、其の父が他人の羊を攘んだことがある。すると、彼の正直息子が隱して置けぬといふので、自ら證人に立て父の罪惡を官に訴へたことがある。何んと正直な奴では無いか』と申しますと、孔子の御挨拶に、『私の方の正直といふは、それとは違ひます。「父は子の爲めに隱し子は父の爲めに隱す、直きこと其の中に在り」で、親子互に扶け合ひ濟ひ合うて、其の名譽を大切に保護することこそ、眞の人倫の道を守るに忠實なる者で、之を本當の正直者と言ひます』と仰せられたとある。是れは强ちに惡事を隱蔽せよとの教ではない。卽ち一家の名譽を重んずることの必要を示されたものであります。

最後の一ケ條は、家の內外を問はず、總て他人に對する上の心得を述べたのである。人に接するの道

は、其の時と其の場合とに依りて、駈引もあり緩急もあること故、世の中に於て一番難かしいのは交際の法であらう。併し、其の法の根元となるものは愛と敬との二つである。

愛とは人に親切を盡すこと、敬とは人を大事にして慢り傲らざること、人に親切を盡すは和合の源で、人を敬ふのは秩序禮法の本である。愛ありて、敬なければ心やすいのみで、秩序規律も立たぬことになるから、後には、相愛するの情が却て相憎むの端緒となることもある。また敬ありて愛なければ、四角四面になつて、殺風景この上もないものです。これは一家庭の内でも社會公衆に對する上でも同じことです。人と人との關係は、互に親切なる麗はしき情愛と、其の間に猥らな事のないやうに整然たる儀禮の存する所がなければならぬものであります。斯く愛と敬との二つを旨とする時は、人の迷惑するやうな事は自然と出來ぬものです。

迷惑というても、借金を踏み倒したり、先方を苦しめたりする事のみを云ふのではない、時間の約束を守らずして人に暇潰しをさせることや、公會の席上に人の驚くやうな大聲を發したり、邪魔になる處で談話をしたり、濡れ鼠の姿で電車に飛び込んで人の衣服に觸つたりする者なども、皆な迷惑を振り廻して行く連中です、殊に我國は、公徳を重んずることがまだ幼稚でありますから、道を歩きながらもハラハラする事が澤山ある。若し一點愛敬の念が起つたならば、そんな事は自づと出來ぬものであります。

以上は極々疎雜なる說明でありますが、之を敷衍して日々の心得としたならば、家庭の獨立を全うし、家庭の美果を收むる事も出來るであらうと思ひます。

修身治國の要道

一

一切藏經の中には孛經と申す御經がある。又は孛經抄とも題してあります。而して、其の内容は專ら修身治國の道を說いたのであるから、諸經の中に於ても特殊の光彩を放つて居る御經です。且つ其の緣由が頗る變つて居つて、修身治國の要道を說きし人は、釋尊が過去時代に此の世に出でゝ、孛と稱する賢者であられし時に、其の國の王に對して說いたものであります。

先づ其の因緣を述ぶれば、釋尊が舍衞の國に在して有名なる祇園精舍に住し給ひし時、其の國の王は卑先匿といふ御方であつた。然るに、婆羅門敎徒が釋尊の御化導を妨害せんが爲めに、隨分思切つた殘酷にも陋劣なる手段を取つたのである。それは同じ敎徒の女弟子、孫陀利といへる婦人の謀を用ゐ、其の女をして頻りに祇園精舍に往來せしむること約一ヶ月許りの後、其の女を殺して潛かに土中に埋め、そして女が見えぬとて特とらしく騷ぎ出し、漸く發見したといふ風に裝うて其の死骸を堀出し、此の女は釋迦の弟子の處に往來して不品行を働いたが、釋迦の弟子どもは其の非道の行を匿す爲めに、其の女を殺害し

たものであると言ひふらしたのである。世には隨分之を信ずる者があつて、釋尊の御化導の上に少からぬ障礙もあつたのである。

併し、釋尊は更に之を意に介し給はず、一週間許りを經てから阿難尊者に命じて、普く其の誣妄なることを辯明せしめられた。王は之を聞いて婆羅門教徒の振舞を疑ひ、密に秘密を探査せられた。その教徒の主領が四人あつて、其等の者どもは最近、王より何か恩賞があつた。然るに、その中の一人が、その賞品の分配に不平を抱きし結果、竟に彼等の秘密が暴露することゝなつた。そこで王は始めて彼等の奸策を確め、それ〲處分を加へ了つて、釋尊の御許に詣して、懇に御教を請はれました。其の時、釋尊は『此の度の誹謗を敢てせしは、皆な彼等の貪慾嫉妬の致す所で、過去世よりの因緣のあることである』と仰せられて、その因緣を說かれたのが此の經文である。

前にも言うた通り、此の經は過去時代の昔話でもあり、且つ專ら王道を說かれたものであるが、其の說く所を翫味すれば、是を以て佛教道德を說示せられたものとも拜することが出來る。而して、說く所が如何にも親切で、簡明で、且つ興味も甚だ深いものであります。

二

過去無數世の以前に、蒲隣奈國といふのがあつた。頗る文化の發達した豐饒の國であつた。其の國民の

中に一人の瞿曇氏梵志といふ者があつたが、學問高遠、國中第一と稱せられた。梵志は三人の子を[illegible]ちしが、三番目の子が殊に風采も良く賢德にも長じて、觀相家などは『此の御兒は聖人の相を具し給へり、必ず國師ともなるであらう』と申した位である。これが卽ち孛である。

孛は成長するに從つて其の天資の才德を發揮し、學博く、智深く、慈悲仁愛の德もまた他に優れて麗はしくあつた。父の死後に至り、二人の兄は孛の盛德を疾視し、父の財產を分與するに當りて、孛に對して甚だ殘酷の處置を取らうとした。孛は此の有樣を視て、斷然、家を出でゝ沙門となり、山中に入りて自ら修行を積み、竟に四德と四斷とを得られた。その四德とは、

　一には衆生を慈くしむこと母の子を愛するが如くす。二には世間を悲れみて解脫せしめんと欲す。三には道意を解して心常に歡喜す。四には能護と爲りて一切犯さず。

第一は常に衆生に幸福を與へんと期すること、第二は常に世間の苦惱災厄を救はんと期すること、第三は正しき道をたどりて心に滿足を得ること、第四は人類の保護者と爲りて、一切の事物に對して毫も損害を加へざることである。また左の如き四斷の德を修養せられた。

　一には貪婬を制す。二には恚怒を除く。三には痴念を去る。四には樂を得て喜ばず苦に逢うて憂へず。

實に立派な修養ではないか。卽ち、第一には貪欲と邪婬とを制し、第二には瞋恚の妄情を除き、第三に

は愚痴、煩惱を去り、第四には順境に對しても妄りに喜ばず、逆境に處しても妄りに憂へず、得失是非の紛々たる間に起つて、泰然不動の精神を堅持することである。

又、五欲を絶つ、目に色を貪らず耳に聲を貪らず鼻に香を貪らず舌に味を貪らず身に細滑を貪らず、能く智慧方便の道を以て天下を順化し、十善を行ぜしむ。父母に孝順し、師長に敬事し、諸の疑惑の者にも道德を信ぜしむ。死して生るゝことあり、善を作せば福を獲、惡を爲せば殃を受くることを知りて、道を行じて道を得、厄を憂ふる者を見ては爲めに之を解免し、疾病の者には爲に醫藥を施す。孛の敎に服する者は死して皆な天に生る。其の郡國に水旱の災異あるも、孛至れば卽ち平らぎ毒害悉く除かる。

實に堂々たる聖人ではないか、自ら欲を制し蒙を破りて自覺の大本を確立するのみならず、進んで、人を導くに道德を以てし、更に示すに因果の理を以てして健全なる信念を發起せしめ、且つ物質的の苦惱をも救ひて國家社會の公益をも施し與ふ。是れ實に仁人君子の目的である、賢聖の大理想である。

三

其の頃『安樂饒人國』といふ大國があつて、國王を藍達と名け、四人の大臣に國政を委ねて居られた。然るに、此の四大臣は何れも不正の者どもであつて、人民を苦しむることが甚しかつた。孛は大いに

之を愍み、方便を以て之を救はんと欲し、沙陀といへる道人の處に寄宿し、七日許を經てから、城内に入りて食を乞はれた。王は不圖、孛の姿を見るに、年は少けれども儀容端正にして風采閑雅、得も言はれぬ威嚴を存して居る。王は一見して敬慕の念禁ずること能はず、遂に孛に語げて、明日を期して王城に迎ふることゝなつた。翌日に至り、孛は約の如く王城に入りしかば、王は夫人と與に孛を迎へ、黃金の牀に結構なる敷物を鋪きたる座を設けしめた。孛就きて坐せんとせし時、愛犬は忽ち前んで孛の足を嘗めたとある。既にして孛は王の爲めに治國の政法を說き、遂に國師として國政を指導することゝなつた。

この時彼の四大臣は、己れの私慾を擅にすることが出來ぬ所から非常に孛を惡み、王の不在の時、夫人に對して樣々に孛の事を讒誣しました。夫人は淺智なる爲めたうとう其の讒言を信じ、巧言を以て王に孛を斥けんことを勸めこんだ。王は容易に承諾せなんだが、夫人の熱心なる讒言に欺かれて、終に孛を却くることに決心したのである。されど、明らさまに免職さすることも出來ぬに依つて、「明日孛が來たならば、禮拜をせずに只だ手を擧げて問訊し、牀は金牀を止めて木牀とし、御飯も其の品を疎末にして瓦器を以て饗するが宜い。斯く俄に冷遇せば、彼は必ず自ら退くであらう」、かやうに手筈を定めた。其の時、傍に王夫人の愛飼する賓祇といふ犬がゐた。この愛犬のみは何となく不機嫌な顏をして居つたさうである。

彌々翌朝に至り、例の如く孛が登城しけるに、彼の愛犬賓祇は只ならぬ聲して吠へて居る。而して、纔

ての待遇が全然變つて居るのを見て、聰明なる孛は、早くも彼等の謀略を看破し、斷然、退去の決心を爲したのである。すると、王はまた孛を惜むの情がムラ／＼と起り、どうしても孛を失ふに忍びずして、忽ちに孛を引留められた。其の時、孛は王に向つて『王よ、王は前には甚だ厚うして今は已に薄し、是れ予が去るべき時が來たのである。夫れ盛んなるは衰ふることあり、合會は離るゝことあり、善惡無常禍福自ら追ふ』といひ、更に語を續けて、退去する所以の理を述べられたが、其の議論は實に堂々たるものであつた。

此の時、王は次から次と樣々なることを孛に問ひ、玆に端なくも大說法が始つたのである。此の經は主として、王の問ひに對する孛の答話を錄したものであります。

四

王は此の時、孛に向つて『我國の太平にして多幸なるは皆な卿の力である。今我を棄てゝ去りなば我國は荒れはてゝ壞るゝことであらうぞ』といふと、孛は『天下に四自壞あり』自らが自らを壞ることに四つありとて曰く、

樹繁れば花果還つて其の枝を折る。虺蛇毒を含む反つて其の軀を賊ふ。輔相賢ならざれば害國家に及ぶ。人不善を爲せば死して地獄に入る。

他より來れる害は尙ほ防ぐことを得べきも、自ら其の身を害することこそ最も恐るべきものである。孛は更に古佛の說き給ひし經文を引證して曰く、

惡は心より生じ反つて以て自ら賊ふ。鐵の垢を生じて其の形を消毀するが如し。

王は益々孛を惜むの情に堪へずして、『我國に良き輔臣なし、實に卿の力を恃むこと切なり。卿若し去らば我國恐らくは危うからん』といはれると、孛は直ちに『凡そ人には四通りの自ら危うすることがあります』とて曰く。

他の家を保任す（他人の家庭を引受くること）、人の證左と爲る（證人に立つこと）、人に嫁するの妻を媒す（媒妁人たること）、邪言を聽聞す（他の誤れる言を信ずること）。

前三者は責任上頗る難事で、後の一は自ら水火に投ずるが如きものである。孛は更に經文を引いて曰く、

愚人の作行身の爲めに患を招く、快心放意（一時の快に安んじて意を放まゝにすること）後に重殃を致す。

王曰く、『卿は我が師と賴むべき勝友である。願くは我を捐て給ふな』。孛は是に於て『友には四品あることを知らざるべからず』とて、朋友論を演べて曰く、

友あり花の如し。友あり稱の如し。友あり山の如し。友あり地の如し。何をか花の如しと謂ふ、好き

時は頭に挿み萎む時は之を捐つ、富貴を見ては附き貧賤なれば則ち棄つ、是れ華友なり。何をか稱の如しといふ、物重ければ頟低く物輕ければ則ち仰ぐ、與ふること有れば則ち敬ひ、與ふること無ければ則ち慢る、是れ稱友なり。何をか山の如しと謂ふ、譬へば金山の鳥獸これに集れば毛羽光りを蒙むるが如し、貴ければ能く人を榮えしめ富樂なれば同じく歡ぶ、是れ山友なり。何をか地の如しと謂ふ百穀財寶、一切之を仰ぐ、施給養護し恩功薄からず、是れ地友なり。

花友は虛榮を以て交はるもの、稱友は利益を以て交はるもの、何れも賴みにならぬ損友である。山友は金山の光輝ありて之に住する鳥獸も自づと羽毛を美しうするが如き感化の德ある益友である。地友は能く保護し能く敎導してくれる恩友である。實に興味ある朋友論ではありませんか。王は益々他の邪言を用ゐしことを悔恨しけるに、孛は『明者には四の不用なるものがある』とて、

邪僞の友。佞諂（口先だけで實意なきこと）の臣。妖孽（意地惡く邪念强きもの）の妻。不幸の子。

此の四つは全く不用の者なりとて、更に經を引きて曰く、

邪友は人を壞る。佞臣は朝を亂る。孽婦は家を破る。惡子は親を危うす。

五

王は大いに悔て、何とぞ舊好を念うて相與に愛厚し、今後は必ず仲を好くして相交らん事を請はれた。

時に孛は、十種の徳ある者に非ざれば、眞實の愛厚者とはいはれぬとて、乃ち說いて曰く、

遠く別れて忘れず(一)。相見て歡喜す(二)。美味相呼ぶ(三)。過言あるも之を忍ぶ(四)。善を聞いては歡を加へ(五)。惡を見ては忠諫す(六)。爲し難きを能く爲す(七)。私を相傳へず(八)。卽ち妄りに他の私事を吹聽せざること、急事は爲めに解く(九)。卽ち他の急難を助くること。貧賤なるも棄てず(十)。

孛は更に經文を引證して曰く、

惡を化して善に從ひ、切瑳するに法を以てす、忠正に誨へ勵まし、義、友道に合ふ。

王は大いに歎息して、四大臣の不善なる、遂に卿を恚らしめて我を喜はさるに至らしむ。卽ち卿をして我を疎外せしむることを致すといひければ、孛は『凡そ疎外すべきものに八通りあり』とて說て曰く。

相見て色變ず(一)。眄睞邪視す(二)。與に語るに應へず(三)。是を說き非を言ふ(四)。卽ち妄りに他を批評すること。衰ふるを聞いて之を快とす(五)。盛大なるを聞いて喜ばず(六)。人の善を毀る(七)。人の惡を成す(八)。

更に經の文を引いて曰く、

卒に鬪うて人を殺す、尙ほ原すべきあり(感情の勃發より生ずる罪過の原諒すべき點あるをいふ)、毒を懷いて陰に謀る、是の意親しみ難し。

王は益々哀惜に堪へず『嗚呼、吾れ不明にして人の善惡を別つこと能はず、遂に惡人に誤らるゝことの殘念さよ』といはれければ、孛は『凡そ不明ならざる人には十事を具足せざるべからず』とて、爲めに說いて曰く、

賢愚を別ち(一)。貴賤を識り(二)。貧富を知り(三)。難易に適ふ(四)。(事の難易を辨へてそれに適當なる處置を施すこと)。廢立を明らかにす(五)。(褒貶賞罰に對して公明正大なること)。任ずる所を審にす(六)。(適材を適處に登庸すること)。國に入りて俗を知る(七)。(其の國の事情に通ずること)。窮して歸する所を知る(八)。(困難に當りて前途の方針を確立すること)。博聞多識(九)。宿命に達す(十)。(宿命は過去の生活をいふ、茲では既往の因緣に精通すること)。

又。經を引いて曰く、

緩急友を別つ(友を擇ぶに誤りなきこと)。戰鬪勇を見る。論議明を知る。穀貴仁を識る。(穀貴は位貴く財豐かなるをいふ)。而して能く仁慈に富むは眞人なり。

王曰く、『吾れ卿を得てより、國家は爲めに中外とも恬安、卽ち太平なることを得たり』。時に孛は『凡そ恬安を得るの法に八事あり』とて說いて曰く、

父の財を得(一)。善き業あり(二)。學ぶ所成る(三)。賢善を友とす(四)。婦貞良なり(五)。子孝悲なり(六)。奴婢順なり(七)。能く惡に遠かる(八)。

更に經文を引證して曰く、

　生れて而して財あり、友の賢なるを得て快なり、諸惡犯すこと無く、福祐ありて快なり。

六

王曰く『聖人の言は誠に快からざる無し』、時に孛は『凡そ快よしと稱するものに八あり』とて說を作して曰く、

賢と與に事に從ふ(一)。聖人に諮ふことを得(二)。性仁和を體す(三)。事業日に新たなり(四)。忿は能く自ら禁ず(五)。慮は能く患へを防ぐ(六)。道法と相親しむ(七)。友相欺かず(八)。

更に經を引いて曰く、

佛の興ること有るは快、經の道を演ぶるは快、衆聚まり和するは快、和なれば則ち常に安し。

王曰く、『卿は、常に能く他の諫めを聞きたまふに、今は何故に吾が留むるに從はさるや』と、此の時、孛は『諫むべからさるに十事あり』とて、說いて曰く、

慳貪(一)。色を好む(二)。朦朧(三)。(意志薄弱にして信念なきもの)。急暴(四)。(思想狂躁にして心意の定まらさるもの)。抵突(五)。(抵はヲカス、突はツク、我見強くして常に衝突を事とするもの)。疲極(六)。(無氣力)。憍恣(七)。(我が儘)。喜鬪(八)。(喧嘩好き)。專愚(九)。(白痴に類するもの)。小

人(十)。(性質の邪曲なるもの)。

以上の十事は、諫むるもの多くは其の功なきをいふ。然れども、化導の方面からいへば、此等の者と雖も力の及ぶ限り教へ導くべきは勿論である。孛は經を引いて曰く、

専愚に法語するは、聾と與に談ずるが如し、化し難きの人は、諫め曉すべからず。

此の時、王は歎息して『我が如きは憍恣(我儘そだち)にして、第一、色を遠ざくること能はず、卿の如きは無爲の境界に達せられたる者、また我れが如き俗物と語ふことあらざるか』と恨めしげに言はれけるに、孛は『凡そ與に語らざるものに十種あり』とて、

傲慢(一)。(語を容るゝの量なきもの)。魯鈍(二)。(語を解せざるもの)。憂怖(三)。(憂怖の甚しき者には漫りに法を說くべからず)。喜預(四)。(預は悅豫なり、他の歡樂に耽り居る時に輕々しく語るべからず)。羞慚(五)。(語を聞いて甚だしく羞づる者)。吃叨(六)。仇恨(七)。(怨讎の念を懷く者)。凍餓(八)。(飢渴に苦しめる者には先づ煖と食とを與へよ)。事務(九)。(職務に急がはしき者に語りして其の事務を妨ぐべからず)。禪思(十)。(坐禪して冥想に耽る者に語りして其の觀想を害すべからず)。

と說き、更に經を引いて曰く、

能く行ずれば說くも可なり、能はざれば空しく語ること勿れ、虛僞にして誠信なきは、明哲の顧みざる所。

要するに、無益の語と空論を戒めたものである。王はよく〳〵夫人の邪念と毒舌とに懲りしものと見え、『其の心惡しくして姿美はしき婦人は、辭令のみ巧みなり、此等の惡婦は得て品行の惡しき者なり。其の不貞を知るには如何にせば可ならん』といはれけるに、孛は之に答へて、『婦人の姦邪を知るの法は十事を以て見るべし』とて、

頭亂れ髻傾く(一)。(頭髪のだらし無き者は多婬なり)。色變りて汗を流す(二)。(良人に對して顏色を變へ汗を流す者は、內心に愧づることあるの徵證なり)。高聲に言ひ笑ふ(三)。(是れ心操の堅實ならざるを知るべし)。視線端しからず(四)。(横目を使ひ、若くは目付のキヨロ〳〵する者)。他の寶飾を受く(五)。(他人より髪や頸や手を飾る物を貰うて頻りに喜ぶ者)。垣牆を闚ひ看る(六)。(頻りに他人の秘密を見たがり聞たがる者)。坐所に安んぜず(七)。(何となく落着の無い者)。數々隣室に至る(八)。(漫りに外出を好む者)。好んで出でゝ野遊す(九)。(遊山好き)。喜んで婬女に通ず(十)。(婬猥なる婦人と交際する者)。

と說き、更に經を引いて曰く、

婦女信じ難し、利口は人を惑はす、是を以て高士は遠ざけて親ます。

此等は佛敎に於ける婦人觀の全面ではない。婦人の短處と病處とを指彈せられたのである。王は悔恨禁じ難く『人情の近く處、親しく婦人を信じて其の惡しきを知らず』といはれければ、孛は『人の親信す

べからざることに十事あり』とて、

主君の厚うする處(一)。(主君の特寵ある者)。婦人の親む處(二)。身の强健を恃む(三)。財産あるを恃む(四)。大水の漬す處(五)。故き屋危き牆(六)。蛟龍の居する處(七)。蛟較の顯官(裁判)。宿惡の人(九)。(曾て惡事を爲せし者)、毒害の蟲(十)。

を擧げた實に何れも親信し難きものである。孛は更に經を引いて曰く、

酒に醉はずと謂ひ、醉うて亂れずと謂ふ、君厚く、婦愛す、皆信を保ち難し。

酒を飮んで吾れは醉はずと謂ふ者、醉うても亂れぬと誇る者、何れも當にはならぬ。君寵ある臣と婦人に愛せらるゝ人とは容易に信ずることは出來ぬ。此の時、王は『卿の言はるゝ通り、余は愛執の爲めに邪見の淵に沈めり、是れ甚だ疾むべきことゝ思ひて、自ら恥ぢ入る次第である』といはれけるに、孛は『凡そ疾むべきことに五種あり』とて、

麁口人を傷ぶる(一)。讒賊鬪ひを喜む(二)。(人を苦しめて爭ひを好むもの)。譙譊媚ず(三)。(譙譊は人を呵り罵ること。媚ずは愛敬のなきこと)。嫉妬呪咀(四)。兩舌面り欺く(五)。(二枚舌を使うて人を欺き惑すもの)。

此の五者は、何れも疾惡すべきものです。孛は更に經を引いて曰く、

勞を人に施して而も祐を蒙らんと欲す、殃ひ其の軀に及び、自ら構へて怨を廣うす。

人を苦しめて已れのみ天祐を蒙らんとするは謬れるの甚だしきもの、故に却て殃禍を招きて怨恨の範圍を廣くするのみである。

七

王は一歩を進めて『如何なる行爲が人に愛敬を受くべきや』と問はれけるに、孛は五事を以て答へたり。乃ち、

柔和にして能く忍ぶ(一)。謹んで信あり(二)。敏(實行に敏活なること)にして口少し(三)。言と行と相副ふ(四)。交は久うして益々厚し(五)。

此の五德を修めなば誰人か愛敬を得ざらん。孛は更に經を引いて曰く、

身を愛することを知る者は、守る所を愼護せよ、志尙高遠、學正うして昧からず。

王は前に反して『如何なる者が人の爲めに慢ぜらるゝや』と問ひけるに、孛は『人の慢を受くる者に五種あり』とて、

鬚長くして慢す(一)。(尊大に構へて威張る者)。衣服不淨(二)。(身形の餘りに醜き者)。空うして志思なし(三)。(空想のみを描いて實行の意志なき者)。媥態無禮(四)。(無作法者)。調戯不節(五)。(不眞面で愼みなき者)。

と說き、更に經を引いて曰く、

意を攝して正しきに從ふこと、馬を調御するが如くせよ、憍慢の習なければ、天人に敬はる。

此の時、王は孛の留任を悃望して『共に精舍に還られたし』と請はれけるに、孛は『交際すべからざる者に十種あり』と說き、左の十目を擧げたり。

惡師(一)。邪友(二)。(聖を蔑にす)(三)。(聖人を侮蔑する者)。反論(四)。(正論に反對する者)。婬佚(五)。(色に溺れる者)。嗜酒(六)。(飮酒に耽る者)。隱弊の長者(七)。(貧乏して居ながら富豪らしく表面を飾る者)。反覆なきの子(八)。(父母の恩を復すことを知らざる不幸の子)。婦女の不節(九)。(婬婦)。婢妾の莊飾(十)。(卑しき下女などの令孃らしく飾り立てゝ居る者)。

如何にも此等は親交すべからざる者どもである。孛は更に經を引いて曰く、

遠く惡人を避け、婬荒を友とする勿れ、賢者に從ひ事へ以て明德を成す。

王は之を聞いて、悔悟すること一方ならずして『卿在れば吾れ爲めに安樂なり、卿去らば國民も亦た必ず嗟かん』といひければ、孛は『凡そ安樂には八事あり』とて曰く。

順にして師長に事ふ(一)。民を率ゆるに孝を以てす(二)。謙虛にして下に下る(三)。(謙遜にして下に對するも傲らず)。其の性を仁和にす(四)。(柔和の德)。危きを救ひ急に赴く(五)。己れを恕して人を愛す(六)。賦を薄うして用を節す(七)。(民力を養うて己れを節約す)。恨を赦し舊を念ふ(八)。(怨みを憎

まず故舊に厚し)。
是れ王者の德にして治國安民の原則たり。之を個人の上に應用するも亦た安樂の本たるべし。更に經を引いて曰く、

諸の德本を修め、慮かり而うして後に行ふ、唯だ人命を濟へば、身を終るまで安樂なり。

王は更に『吾は身を念うて須臾も忘るゝ時なし』といはれければ、孛は念力の必要なることを示さんが爲めに、『智者に十二の念あり』とて、乃ち說いて曰く、

鷄鳴には過を悔い福を作さんと念じ(一)。(晨朝の修養)。早起には親を拜し尊を禮せんと念じ(二)。(起床後、先づ神佛に敬禮し祖先に禮拜し兩親に禮辭を陳べよ)。事に臨みては當に豫め備ふべきことを念じ(三)。(萬端の準備を整へよ)。止まる所には危害を避けんことを念じ(四)。言語には當に至誠なるべきを念じ(五)。過を見ば以て忠告せんと念じ(六)。貧者には哀れみて給護せんことを念じ(七)。財あらば布施を行ぜんことを念じ(八)。飲食には時節を以てせんことを念じ(九)。人に分つには以て平均ならんことを念じ(十)。衆を御するには用て恩賜せんことを念じ(十一)。軍具は時に繕治せんことを念ず(十二)。

是れ實に好箇の觀念法である。孛は復もや經を引いて曰く、

務むる所を修治し、其の備豫を慮かれば、事業日に新たにして終に時を失はず。

八

王は非常に嘆息して『若し大なる賢者あらば卿を留むることもあらん』といはれければ、孛は『大賢には十行あり』と說いて曰く、

學問高遠(一)。經戒を犯さず(二)。(道德を實踐する者)。佛の三寶を敬ふ(三)。善を受けて忘れず(四)。慾と怒りと痴とを制す(五)。四等心を習ふ(六)。(楞伽に四等の說あるも、玆には慈悲喜捨四無量心をいふ)。好んで恩德を行ふ(七)。衆生を擾さず(八)。(衆生を苦しめず平和を害せず)。能く不義を化す(八)。善惡亂れず(十)。(智識の明了なるをいふ)。

此の十德を調和し培養して善く之を應用せば、眞に能く大賢なることを得ん。孛はまた經を引いて曰く、

明人(賢人をいふ)値ひ難し、而して不比にして有り(不比の義詳ならず、或は稀少の意味なるか)其の所生の處、族親慶を蒙る。

即ち、大賢の人は稀れに此の世に有るものなれば、容易に値ふこと難し。大賢の生ずる處は其の族親も自づから餘慶を蒙るものである。此の時、王は痛恨の情に堪へずして曰く、『我が過重し、惡人を畜養して、卿をして恚り去らしむ』と、時に孛は惡人といへる語によりて、大惡に十五あることを說きて、

殺を好む(一)。劫盜(二)。婬佚(三)。(邪婬)。詐欺(四)。諂諛(五)。虛飾(六)。佞讒(七)。(奸佞にし

[illegible]貪[illegible]（九）（貪[illegible]）放逸（十）

（放逸無慚）。酗酥（十一）。（酒狂）。妬賢（十二）。（賢者を妬みて其の德を傷くる者）。毀道（十三）。（正道を毀損して邪法を流布する者）。害聖（十四）。（聖人に危害を加ふる者）。殃罪を計らず（十五）。（因果を無視して罪惡を犯す者）。

といひ、更に經の偈を引いて曰く、

奸虐饕餮（奸佞惡虐貪りて飽くことを知らず）、良人を怨み譖り、己れの行正しからざれば、死して惡道に墮す。

王は益々悔恨して『我れ不明にして卿を辱しめ、卿をして辭意止まざらしめたるを慚愧に堪へず』とい

ひければ、孛は『凡そ慚愧すべきの心行に十通りあり』とて、

君政を曉らず（一）。臣子にして禮なし（二）。恩を受けて報ぜず（三）。過つて改むる能はず（四）。兩夫にして一妻（五）。未だ嫁せざるに懷姙す（六）。習うて成就せず（七）。人に兵杖ありて戰鬪する能はず（八）。（軍備ありて怯弱なるをいふ）。慳む人布施を覩る（九）。奴婢使ふこと能はず（十）。（是れ己れの不德と無能とを表するもの）。

といひ、更に經を引いて曰く、

世に儵し人ありて、能く慚愧を知らば、是れ誘ひ進め易きこと、良馬に策つが如し。

王は長大息して『吾、今日始て有道の者は屈し難きことを知れり』といひければ、孛は難しといへる語を捉へて、凡そ難に十二あることを說いて曰く、

任使專愚の難(一)。(他の使者となりながら愚蒙にして其の任に堪へざるは難なり)。怯弱御勇の難(二)。(己れ怯弱にして勇士を御すること難し)。仇恨共に會ふの難(三)。(怨敵と親しむこと難し)。寡聞論議の難(四)。(無知にして議論すること難し)。貧窮負債の難(五)。軍に帥將なきの難(六)。君に事へて身を終ふるの難(七)。道を學んで信ぜざるの難(八)。惡にして生天を望むの難(九)。生れて佛時に値ふの難(十)。佛法を聞くことを得るの難(十一)。行を受けて成就するの難(十二)。

是は何れも至難のことである。孛は更に經を引いて曰く、

人命得ること難し、佛時に値ふこと難し、法聞くことを得ること難し、聞いて能く行ふこと難し。

王は之を聞いて、其の言ふ所盡く金科玉條なることを大いに喜ばれた。孛は更に、人として必ず知らざるべからざることに四十五事ありとて、說を作して曰く、

其の室宅を修むること(一)。其の家內を和すること(二)。九族に親しむこと(三)。朋友に信あること(四)。學は明師に從ふこと(五)。事は必ず好く成し遂ぐること(六)。才高く智遠きこと。(必要なる智識を有することなり)(七)。宜しく守るに善を以てすること(八)。富貴にして恩を行ふこと(九)。產を

の者に妄りに財を付授せざること(十二)。善人を友として交はること(十三)。苟合して妄りに信すべからざること(十四)。公金官金の類は之を納むるに遲怠すまじきこと(十五)。賣買交易は誠を以てし誓つて他を欺かざること(十六)。己れの止住する處は先づ其の實地を視察すること(十七)。自己の位地を心得べきこと(十八)。他國に入りては必ず善人にのみ親むべきこと(十九)。己れより優勢なる人に依るべきこと(二十)。妄りに爭論すべからざること(二十一)。富める時は舊恩に報ゆべきこと(二十二)。貧しき時は非分の望を抱くまじきこと(二十三)。寶物妄りに人に示すまじきこと(二十四)。輕輕しく大事を婦女に語るまじきこと(二十五)。君と爲りては賢者を敬ひ勇士を愛し忠臣に親むべきこと(二十六)。國を治むるに清廉潔白なるべきこと(二十七)。事に趣きては必ず成功を期すべきこと(二十八)。敎化の本は孝順を以てすべきこと(二十九)。師弟の義は和敬を旨とすべきこと(三十)。師の弟子に對する必ず敎誨に努むべきこと(三十一)。醫となりては効驗を現はすべきこと(三十二)。術未熟ならば妄りに施すまじきこと(三十三)。病に罹らば必ず醫療に依るべきこと(三十四)。飲食を節すべきこと(三十五)。美食は人と共にすべきこと(三十六)。博奕を誡むべきこと、(三十七)。命令は其の力に堪ふべきこと(三十八)。貸借必ず約を履むべきこと(三十九)。萬事正しきに從ふべきこと(四十)。忠告呵責適度なるべきこと(四十一)。惡を避くるには柔順の手段を以てすべきこと(四十二)。何人に對しても忍耐を守るべきこと(四十三)。柔和なるべきこと(四十四)。道を以て身を守

り常に三業を清浄ならしむべきこと(四十五)。

九

孛は進んで、涅槃の妙道を以て王に示し、且つ生死を解脱し眞正の幸福を獲得すべきことを說き聞かせられたのである。王は如何にしても孛と別るゝに忍びずして、猶ほ別の敎へを請はれけるに、孛は、

大水の流るゝ所は城廓を立つべからざるが如く、宿惡の人は善を行はんと欲するも、其の信念堅からずんば善を爲すこと能はざるべし。されど池を穿つに、之を鑿ること止まざれば遂には泉水を得るが如く、精進不退ならば遂には善根功德を成就すべし、智者の微を見て能く其の命を全うすること、健かに泅ぐ者の能く流を渡るが如くならん。

孛は更に王の問に對して、

眞の明者は仁柔にして謹慤。溫雅にして智博きを以て、自づから衆人に仰がる。故に其の言行を觀るに心口相應し、其の坐起を省るに動靜妄ならず。

と說き示された。王は猶ほも『明者に事ふる道ありや』と問はれければ、孛は、

敬うて輕んずる莫れ。聞受せば必ず行ぜよ。且つ眞に理を體信して世事に執着せされ。安きも危きを念ぜよ。盛んなるも無常に存せよ。善者には愛を加へ。不善者には遠ざかり。仇恨ありとも惡を施さ

ず、故に、明者は柔和なるも、犯し難く弱きが如くなるも之れに勝ち難し。

と説き明かしければ、王は更に『愛敬の情を盡して明者に事へなば、寧ろ幸福あらん』と尋ねければ、孛は爲めに說いて曰く、

智者の法は、聖にして以て其の仁を行ふ。愚蒙を開導するを樂しみて人の智を成す。國を治むるには惠施を以て善と爲し、道を修むるには人を導くを以て正と爲し、國家に急難あらば則ち能く分解し、進退時を知りて怨み咎むる所なし、恩廣く施大なるも其の報を望まず、之に事ふれば福を得て身を終るまで患ひなし。王其れ疑ふこと勿れ、政治の法は道を失ふべからず、民に勸めて善を學ばしむれば國を益すること最も厚し。

十

斯くて孛は、更に數回の問答を重ねて後、遂に强て王城を辭し、鉢を托し食を乞ふ沙門の生涯に復したのである。孛は治國安民の志深く、盡忠奉公の念厚きも、時機未だ至らざるを見て此の擧に出でたものと思ふ。然るに、孛の去ると同時に、彼の四人の奸臣と妖邪なる夫人と、內外より王を惑したからたまりませぬ。忽ちの間に、國政亂れ王道塞り、人民は漸く塗炭の苦しみに陷る樣になつたのである。

時に一の師子道人なる者あり、國運の日に非なることを悲しみ、諫を盡して王に忠告を加へました。王

は始めて其の實相を知り、驚くこと一方ならず、是に於てか、道人は王に勸め寶輿に同乘して、人民疾苦の狀態を實見せしめられた。

往いて國界の邊に至りしに、忽ち數十人の處女年五六十歲許りなるが、衣服も弊壞して見る影も無く、頻りに呼嗟して行くのを見て、道人は彼の女に對し『御身等は何故に、年老て猶ほ嫁せざるや』と尋ねしに、彼等は『妾等は王家の疲弊に逢うて是の如し』と答へた。そこで道人は『そは御身等の考へ違ならん王は最尊なり、御身等の邊にまで仁德の及ばざることはよもあるまじ』と申せしが、彼等は『否、王政正しからざる爲め國は飢荒に陷り、夜は盜賊に困められ、晝は俗吏に苦しめられ、衣食供はらず、誰か復た我を娶らん』と答へた。

王また前み行くに、此度は、多くの老母の衣は形を蓋ふに至らず、身羸れ目瞑きが啼哭して行くのを見た。道人は之に向うて曰く、『御身等は何故に、かく悲み憂ふるや』答へて曰く、『國王の爲めに是の如し』、道人曰く『御身の言誤れり、老いて自ら盲目となりしに非ずや』、諸の老母曰く、『我等、夜は盜の爲めに刧かされ、晝は吏の爲めに奪はれ、遂に我等をして是の如くならしむ、王の惡しきに非ずや』。

それより彌々進みて國內の民情を調査するに、國民一個として王を怨まざるは無く、不平の聲國內に充滿す。王は且つ驚き且つ恐れて、殆んど爲す所を知らず、乃ち道人に就いて國を治め民を救ふの法を問はれた。道人は王に告げて、『爲政を知る者は、一惡人を棄てゝ以て一家を成し、一惡家を棄てゝ以て一鄕を

成す。政を知らざる者は民物所を失うて天下怨み訟ふ。故に、宜しく惡人を退け、既往を改め將來を修め、民と與に善を行はれよ』と申上げた。王は『仁政を施さんには賢宰相を要す、知らず何人か是なるや』といひけるに、道人曰く『そは急ぎて孛を請ずるに如かず、孛は仁聖なり、而して能く時を知る。國必ず安からん』。王、是に於て、使者を遣はして孛を山中より懇請することゝなつた。

十一

王の使者は孛の山房に至り、熱誠を籠めて懇請したので、孛は王の誠意に感じ、且つ民を救ふの慈悲禁ずること能はずして、遂に再び山を下りて王政を輔くるの決心を定められた。孛は途中にて死せる獮猴を見て、其の皮をもぎ取りて城外の精舍に入つた。人民は競うて歡迎し、其の喜悅は譬ふるに物なき程であつた。王は特に來りて孛に對面せられ、從前の非を謝して託するに治國安民の事を以てせられた。

然るに、四人の奸臣のみは頻りに耳語して居るのを見て、孛は喜ばずして曰く、『卿等何ぞ公談せざる』、四臣曰く『凡そ沙門たる者は生天の福を積むべきに、獮猴を殺して其の皮を取るは何ぞや』、孛諭して曰く、『卿等は自ら迷うて眞僞を別たぬのである。凡そ是非好惡は天悉く之を知る。苦樂本あり強ひて力をもてすべからず、惡を爲せば罪を追ふこと久しと雖も解けず、善を作せば福隨うて終に敗亡せず。禍福己れに在り、愚は之を遠しと謂へり、我が皮を剝ぐを以て獮猴を殺すとなして難ずるは可なり、卿等は默々と

して奸を爲して止めざるは何ぞや」と、これより四人の邪見と惡念とを指摘して、示すに正法を以てし、諭すに因果の理を以てせられたのである。時に、王と臣民とは、何れも孛の說を聞いて歡喜踊躍し、皆な正念に住する樣になつた。

孛は更に過去の因緣を擧げて曰く、『古昔、狗獵といふ王があつた。その池中に甘うして骨の少ない魚が居る。王は一人の監視人を立てゝ日に八魚を獻ぜしめた。然るに、彼の監視人は橫着者で、竊かに八魚を私したので、王は更に八人の監視を設けた。すると彼の八人が亦復た魚を盜んだので、遂に魚族が滅亡したとある。今、王が奸臣に政を委するのは彼の監視人にも似たり。王、政を爲さんと欲して賢人を用ゐされば、既に其の民を失ひ、後もまた福なからん。國を治むること正しからざれば天下をして爭奪の心あらしむ、人の產を治むるが如きも、勤めて用心せざれば財日に耗す。勇武にして戰陣を習ふ者ありとも、其の意に不平あれば其の國を弱らすものである。王と爲りて道德を敬はず、高明に事へざれば、生きては賢者歸せず、死しては神天に生ぜず、無辜を掠奪し天下をして怨訴せしめば、天災ひを下して身は令名を失ふ。國を治むるに法を以てし、政を爲すに忠良を得、長を敬し少を愛し、孝順にして善を奉ぜば、現世安吉にして、死して生天を得ん。譬へば牛の行くに、其の道直正なれば餘の牛も皆な從ふが如く、富貴にして道あり下を率ゆるに正を以てせば、遠近化に服して則ち太平を致す。君と爲りては正に明かに古を探り今に達し、動靜時を知り剛柔理を得、下を惠み民を利して布施は平均なるべし。是の如くなれば、

世々豪貴にして後に泥洹の道を得べし』、君臣、此の說を聞いて雲霧を排いて天日を望むが如き感を爲したのである。孛は王に隨つて宮に入り、直ちに四人の奸臣を廢し、國政を改新し人民を賑恤したので、國運益々發展し文化益々開張し、遂に文明の美國となつたのである。

十二

以上は過去の因緣であるが、釋尊は此の因緣を示されて後に、舍衞國王卑先匿の事に及び、乃ち曰く、『當時の孛は今の我が身なり、師子道人は阿難是れなり、藍達王は今の卑先匿是れなり、時の四大臣は今の四道人是れなり』と仰せられた。釋尊は更に諸々の弟子に示して『我れ菩薩と爲りて世々善を爲し、苦を勤め德を積み、無數刧萬民の爲めの故に、今自ら佛と成ることを得、所願皆な得たり、諸の我れに値ふ時に經法を聞かん者は、宜しく各々精進して善を爲して懈る莫れ』と宣はせられ、佛是を說き已るに、三億の人あり、道迹を踐むことを得て歡喜奉行すといふ。以上は孛經訓の大要である。此の經は本より小乘敎に屬し、殊に一種の特色を有する世間道の法門を說かれたのであるが、仔細に之を翫味する時は、此の間に自づから佛敎の妙理をも含蓄して居ることが領解さるゝであらう。

元來、修身齊家治國平天下の道、是を俗諦門といひ、安心解脫得道成佛の法是を眞諦門といふ。一は世間的道德にして他は超世間的敎法である。然れども、佛敎に於て出世間を說くは、世間を見棄てるの意味

に非ずして世間の疾苦を療せんが爲めの教である。故に世を出づるは世を救ふ所以の道にして、世を進むるには世を超ゆるの見地なかるべからず。華嚴經に『佛法と世間法と雜亂あること無し、亦た差別なし』と仰せられてある。

況や、大知見を以て之を觀れば、盡天地一法として佛法ならざるは無く、盡法界一事として佛事ならざるは無し。忠孝是れ菩薩の波羅蜜にして仁義も亦た諸佛の轉法輪である。此の大信念と大知見とを有せざれば、決して生命ある佛教を實現することは出來ぬ。然れば則ち此の孛教訓の如きも、正に是れ大乘の樞軸、禪門の行持とも謂ふべきであります。

（終）

新井石禪全集 佛教講演篇 索引

【あ】

【い】

【う】

【け】

【こ】

【さ】

【す】

【た】

【ち】

【つ】

【て】

【と】

【な】

【に】

【ぬ】

【ね】

【の】

【は】

【ひ】

【ふ】

【へ】

【ほ】

【ま】

【よ】

【ら】

【り】

【れ】

【ろ】

【わ】

昭和五年七月廿五日印刷
昭和五年七月廿九日發行



上製 新井石禪全集 第九卷

著作權者 祥雲晚成
編纂者 山田靈林
發行者 飯野政晴
東京府北豊島郡中新井一九三四番地
印刷者 加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地
印刷所 加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所內
新井石禪全集刊行會
電話 芝(43)一四八六番
振替東京四五四三二番

(製本　菊池製本所)




EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03026 7157